

ハイブリッド国際会議実証事業 事業報告書

令和5(2023)年3月

項目	記載 ページ
はじめに	
(1)本業務の背景・目的	4
(2)実証案件の選定	4
実証事業について	
(1)感染症対策	5
(2)オンライン参加者の満足度向上及び訪日促進	6
(3)リアル開催プログラム	7
アンケート分析	
(1)今後の参加形態の見通し	8
(2)新型コロナウイルスの感染拡大防止対策	9
(3)参加者満足度を向上させるためのポイント	10
(4)サステナビリティに対する参加者意識	11
実証内容	
実証事業① 第51回日本インターベンショナルラジオロジー(IVR)学会総会／ 第16回アジア環太平洋IVR学会／第14回国際IVRシンポジウム	12
実証事業② International Conference of the Learning Sciences Annual Meeting 2022	15
実証事業③ 12th International Congress on Advanced Applied Informatics	19
実証事業④ 27th Optoelectronics and Communications Conference／ International Conference on Photonics in Switching and Computing 2022	25
実証事業⑤ 第10回先端エンジンシステムにおけるモデリングと診断技術に関する国際会議	30
実証事業⑥ 第26回国際膵臓学会／第53回日本膵臓学会大会	36
実証事業⑦ 25th IUPAC International Conference on Physical Organic Chemistry	41
実証事業⑧ The 8th International Symposium on Metallomics	47
実証事業⑨ The 13th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing	53
実証事業⑩ 第29回低温物理学国際会議	56
実証事業⑪ The 12th World Conference on Computers in Education 2022	62
実証事業⑫ 第68回 国際食肉科学技術会議	67
実証事業⑬ 超低温物理学国際会議 2022	73
実証事業⑭ 第5回価値創造のためのグローバルカンファレンス	75
実証事業⑮ 第18回アルミニウム合金国際会議	77
実証事業⑯ 第22回真空に関する国際会議	84
実証事業⑰ 2022年 国際固体素子・材料カンファレンス	90
実証事業⑱ 国際シンポジウム2022”未来につなぐ湖沼の価値”	94
実証事業⑲ 第29回国際高血圧学会	96

項目	記載 ページ
実証事業⑳ 第14回新材料とデバイスの開発に向けた原子レベルキャラクリゼーションに関する国際シンポジウム	103
実証事業㉑ The 2022 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems	106
実証事業㉒ Redox Week in Sendai 2022	113
実証事業㉓ 第15回VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウム	119
実証事業㉔ The 26th Small Powertrains and Energy Systems Technology conference	124
実証事業㉕ 第9回国際ヒトマイクロバイオームコンソーシアムコンGRES2022神戸	131
実証事業㉖ 第33回太陽光発電国際会議	133
実証事業㉗ INTERNATIONAL YOUTH NUCLEAR CONGRESS 2022	140
実証事業㉘ Global Reform BnB Forum in KYOTO	142
実証事業㉙ The 4th World Congress on Endoscopic Ear Surgery	144
実証事業㉚ IEEE BIGDATA 2022	151
共通アンケート集計	
共通アンケート集計	156
おわりに	
おわりに	167

(1) 本実証事業の背景・目的

2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、世界中で人の移動や集会が制限され、参加者が一同に集まることを前提としていた国際会議の多くは中止・延期された。他方、オンラインによる国際会議も開催されたことにより、オンラインの有用性が広く認識されるきっかけとなった。2021年に入り、ワクチン接種の進展により国境を越えた往来が一部で緩和され、現地参加の国際会議が世界各地で再開した。しかしながら、国外参加者が煩雑な入国手続きや待機期間を回避するため、オンラインの有用性を求める声が今後も一定数残ることが想定される。2022年においては現地参加とオンライン参加の両方を募るハイブリッドでの開催形態の国際会議が多く予定されており、本事業では2022年6月～2022年12月の間に開催されたハイブリッド国際会議の実証を行った。

国際会議のハイブリッド開催は、開催地にとっては完全オンラインよりも現地参加者がいる分、経済波及効果が大いだが、より多くの効果を求めるにはオンライン参加者へのアプローチが課題となる。また、現地開催費用にオンライン対応の費用増加のみならず、コロナ禍においては現地参加者への感染症対策を徹底した安全な会場運営が求められ、主催者にとっては、現地参加者とオンライン参加者双方を満足させるノウハウが必要となる。

こうした背景を踏まえ、本実証事業では誘致競争力の向上を図るため、ポストコロナにおいてハイブリッド国際会議が残る可能性を探る。また、現地参加者・オンライン参加者の満足度向上及び、現地・オンライン双方の開催効果の最大化、といった課題への取組を検証する。さらに、実証期間前半はコロナ禍であり、感染症対策の徹底と対策の実証も行った。(2022年10月11日水際対策緩和)

(2) 実証案件の選定

①実証対象となる国際会議の定義

- ・日本国内にて1日以上のお会期で開催され、国内現地参加者予定者50名以上、かつ2つ以上の国/地域から50名以上の外国人がオンラインまたは実地で参加するハイブリッド国際会議
(日本国政府が単独で主催する会議、及び企業が主催する会議は対象外)

②実証期間

- ・2022年6月1日から12月末日までにその会期(オンデマンド配信期間を除く)が終了するもの

③募集

- ・一次募集：2022年4月21日～5月11日
- ・二次募集：2022年6月10日～6月28日

④選定

- ・各募集に対し選定委員会を開催。①及び②の他、③の募集要項に則り、合計30件を選定。

(1)感染症対策

2022年当初は新型コロナウイルスの感染症対策が求められ、本事業においても「安全かつ効果的なハイブリット国際会議」の実施のため、該当国際会議実施時点での国や都道府県の指針にしたがって実施することとした。また、多くの国際会議で一般社団法人日本コンベンション協会が策定した「コロナ禍におけるMICE開催のためのガイドライン」に従った対策を講じた上で、独自の取組が実施された。

一方、2022年10月11日の水際対策の緩和を始め、2022年後半より新型コロナウイルス感染症対策は段階的に緩和されている。

感染症対策として実施された特筆すべき取組※各主催者より提出された報告書より確認できた事項

	記載ページ	サーモグラフィ	二酸化炭素濃度計測	エアロゾルモニタリング	混雑状況の可視化	健康状態の追跡調査	ソーシャルディスタンス意思表示シール	看護師の派遣
実証事業①	12-14	●						
実証事業②	15-18							
実証事業③	19-24				●			
実証事業④	25-29							
実証事業⑤	30-35					●		
実証事業⑥	36-40	●	●					
実証事業⑦	41-46							
実証事業⑧	46-52	●						
実証事業⑨	53-55							
実証事業⑩	56-61	●	●			●		
実証事業⑪	62-66							
実証事業⑫	67-74					●		
実証事業⑬	73-74							
実証事業⑭	75-76						●	
実証事業⑮	77-83	●						
実証事業⑯	84-89					●		
実証事業⑰	90-93		●					
実証事業⑱	94-95							
実証事業⑲	96-102	●						
実証事業⑳	103-105							●
実証事業㉑	106-112	●						
実証事業㉒	113-118			●				●
実証事業㉓	119-123	●	●					
実証事業㉔	125-130							
実証事業㉕	131-132							
実証事業㉖	133-139							
実証事業㉗	140-151							
実証事業㉘	142-143							
実証事業㉙	144-150							
実証事業㉚	151-155							

(2) オンライン参加者の満足度向上及び訪日促進

ハイブリッド会議の実施にあたり、主催者には現地参加者のみならず、「①オンライン参加者の満足度の向上」が求められる。さらに、オンライン参加者に対する会議閉会後の「②訪日意欲を促す取組」がなされることは、地域への経済波及効果の拡大に繋がる。また、ポストコロナにおいてハイブリッドでの国際会議が実施される場合においても、上記の①及び②を視野に入れ、開催効果をより高める取組が求められる。

オンライン参加者の満足度及び訪日促進の特筆すべき取組※各主催者より提出された報告書より確認できた事項

	記載ページ	事前登録システム	電子冊子	バーチャル会場	オンライン展示会	ポスターセッション オンライン	オンライン参加 (レセプション等)	オンライン参加 (エクスカーション・ ツアー)	オンライン参加 (ワークショップ)	開催地での映像の オンライン配信	アーカイブ配信	その他(プラットフォーム)
実証事業①	12-14	●	●							●	●	
実証事業②	15-18			●				●	●	●	●	Gather/Whova/ Zoom
実証事業③	19-24	●	●				●			●	●	
実証事業④	25-29			●	●	●				●	●	Confit
実証事業⑤	30-35	●	●				●	●		●	●	
実証事業⑥	36-40	●										Zoom
実証事業⑦	41-46				●					●		
実証事業⑧	46-52		●	●		●		●			●	oVice
実証事業⑨	53-55		●	●			●					Zoom
実証事業⑩	56-61		●			●				●		Zoom
実証事業⑪	62-66	●						●		●		Vimeo
実証事業⑫	67-74		●					●				
実証事業⑬	73-74				●	●						Zoom
実証事業⑭	75-76						●	●				
実証事業⑮	77-83		●	●	●	●						Whova/Zoom
実証事業⑯	84-89	●	●			●						Zoom/Gather Town
実証事業⑰	90-93	●	●		●						●	
実証事業⑱	94-95									●		
実証事業⑲	96-102	●				●				●	●	
実証事業⑳	103-105											
実証事業㉑	106-112					●					●	Infovaya/Zoom
実証事業㉒	113-118	●	●							●		
実証事業㉓	119-123	●	●	●		●				●		
実証事業㉔	125-130		●									Zoom
実証事業㉕	131-132					●				●	●	Zoom
実証事業㉖	133-139	●	●		●							会議専用アプリ
実証事業㉗	140-151		●					●				Whova
実証事業㉘	142-143	●	●							●		
実証事業㉙	144-150	●	●							●		
実証事業㉚	151-155			●								RD Mobileアプリ /Zoom

(3)リアル開催プログラム

水際対策緩和以前においても、国際会議の主催者は現地参加者の満足度向上の為、感染症対策に十分配慮したネットワーキングなどのプログラムの実施を模索した。

また、2022年10月11日の水際対策の緩和以降、海外からの参加者の増加がみられ、よりネットワーキングなどのプログラムが実施しやすくなった。

現地での実施プログラム※各主催者より提出された報告書より確認できた事項

	記載ページ	レセプション等	エクスカージョン・ テクニカルビジット	ユニークベニュー	公開講座	文化体験
実証事業①	12-14	●			オンライン	
実証事業②	15-18		●			
実証事業③	19-24	●	●	●		
実証事業④	25-29					
実証事業⑤	30-35	●				
実証事業⑥	36-40	●		●		
実証事業⑦	41-46	●				●
実証事業⑧	46-52	●	●			
実証事業⑨	53-55	●				
実証事業⑩	56-61					
実証事業⑪	62-66					
実証事業⑫	67-74					
実証事業⑬	73-74					
実証事業⑭	75-76	●				
実証事業⑮	77-83	●				
実証事業⑯	84-89	●			●	
実証事業⑰	90-93	●				
実証事業⑱	94-95					
実証事業⑲	96-102	●			●	
実証事業⑳	103-105	●	●			
実証事業㉑	106-112		●			●
実証事業㉒	113-118	●				
実証事業㉓	119-123	●	●			
実証事業㉔	125-130	●	●			
実証事業㉕	131-132	●				
実証事業㉖	133-139	●				
実証事業㉗	140-151	●	●			
実証事業㉘	142-143	●				
実証事業㉙	144-150	●				
実証事業㉚	151-155	●				

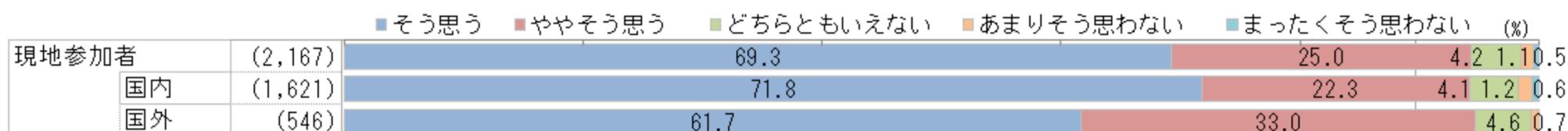
アンケートの実施

本事業の各国際会議の開催後、①会議別の個別アンケート及び、②共通アンケートを実施した。①については、「実証内容」の項の各会議の報告内容の後に記す。但し、回答率が低いもの・回収が出来なかったものに関しては記載していない。②は「共通アンケート集計」に記す。

(1) 今後の参加形態の見通し

- コロナ禍以降の開催形態は、参加者のニーズのみならず、開催目的や必要経費などの要素も踏まえて主催者が総合的に判断することになるが、Q19からハイブリッド形態による開催のニーズが高いことがわかる。
- Q20より、現地参加者は今後も現地参加、オンライン参加者は今後もオンライン参加を概ね求めており、前者はその傾向がより強いことが分かる。なお、オンライン参加者は更に①積極的選択者と②消極的選択者とに大別でき、①はオンライン参加によるメリットを重視した上で積極的にそれを選択していると言えるが、②はコロナ禍による制約等を踏まえて今回はオンライン参加を選択していると整理されることに注意を要する。つまり、現状における「浮動層」と言え、今後の参加形態の見通しという観点においては、彼らの意識と動向に注視する必要がある。コロナ禍以前より指摘されている通り、社会のデジタル化の進展とともにネットワーキングの機会としての国際会議の価値がより重んじられていくであろうという展望のもとでは、コロナ禍による制約が消失するとともに現状のオンライン参加者も②の層を中心として、現地参加を求める方向へと推移していくものと考えられる。

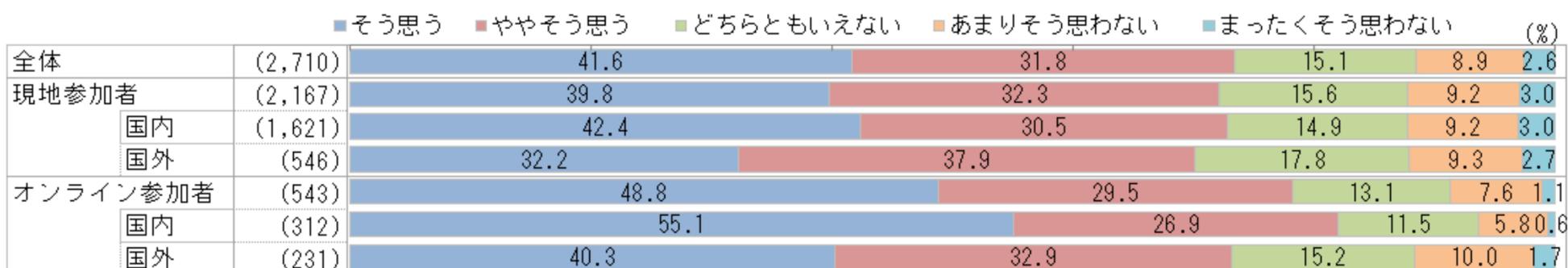
No.17 この会議への出席を通じて、【現地会場】で国際会議に参加できることの価値や意義を実感したか



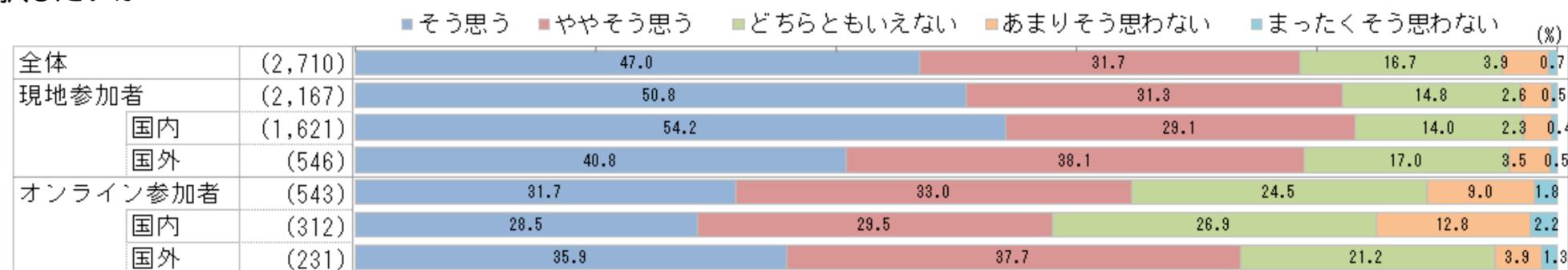
No.18 この会議への出席を通じて、【オンライン】で国際会議に参加できることの価値や意義を実感したか



No.19 新型コロナウイルス感染症の収束後も、ハイブリッド形式による開催が理想的か



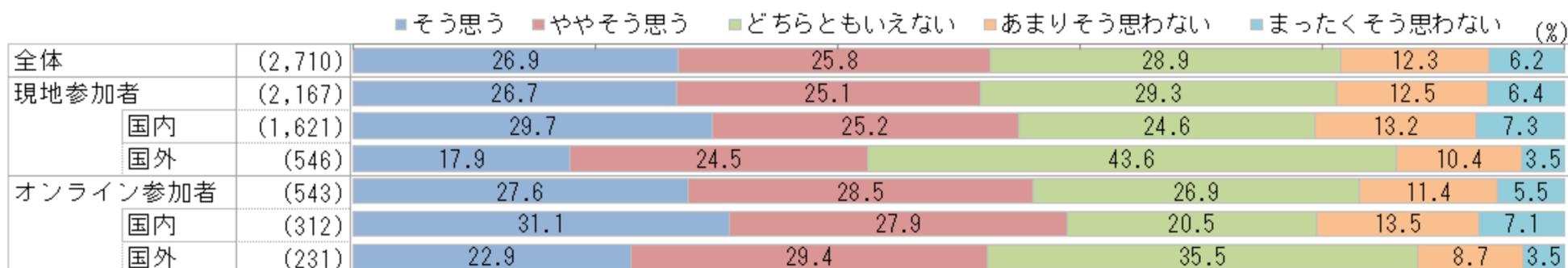
No.20 新型コロナウイルス感染症の収束後、ハイブリッド形式で開催される国際会議に現地会場での出席を積極的に選択したいか



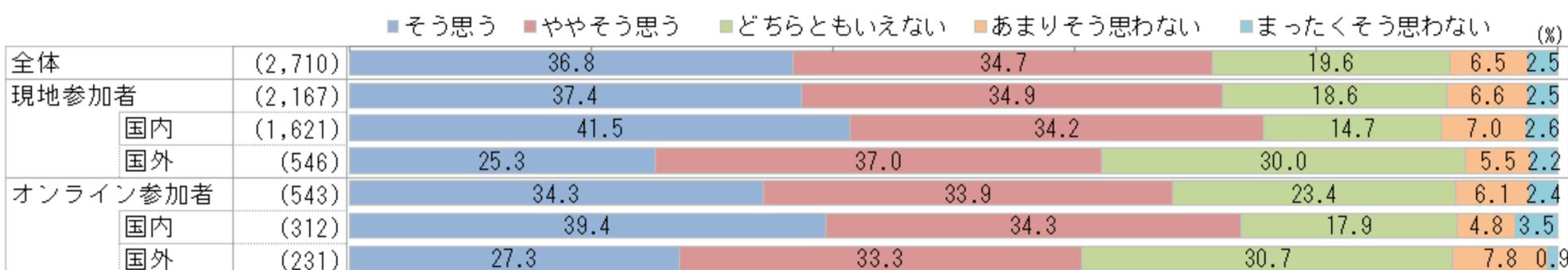
(2)新型コロナウイルスの感染拡大防止対策

- 感染症はその特性に応じて適切な拡大防止対策が異なるものであるが、コロナ禍においては政府の基本方針やそれに準拠するガイドライン等を参照し、国際会議の現場においても様々な工夫がなされた。本調査ではQ21～24で具体的に4つの工夫を例示し、それぞれの必要性に対する参加者の意識を探究したが、工夫によっても差が見られることがわかる。会場における感染拡大防止措置の検討にあたっては、参加者がどのような点に不安を抱えているかを想像し、必要十分な内容とすることが重要であると考えられる。

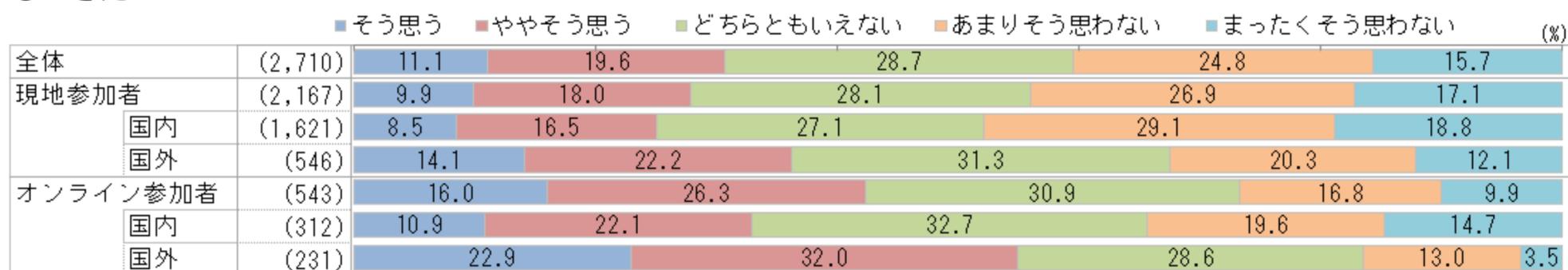
No.21 現地会場に医師や看護師が常駐することに安心感を覚えるか



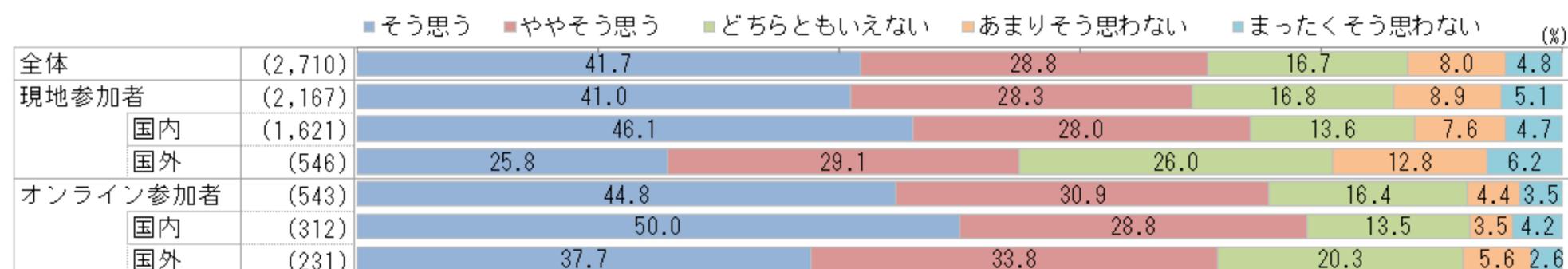
No.22 現地会場における非接触型受付システムの導入などによる、接触機会の低減に繋がる工夫の実施に安心感を覚えるか



No.23 新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてPCR検査・抗原検査の実施を求めるべきだ



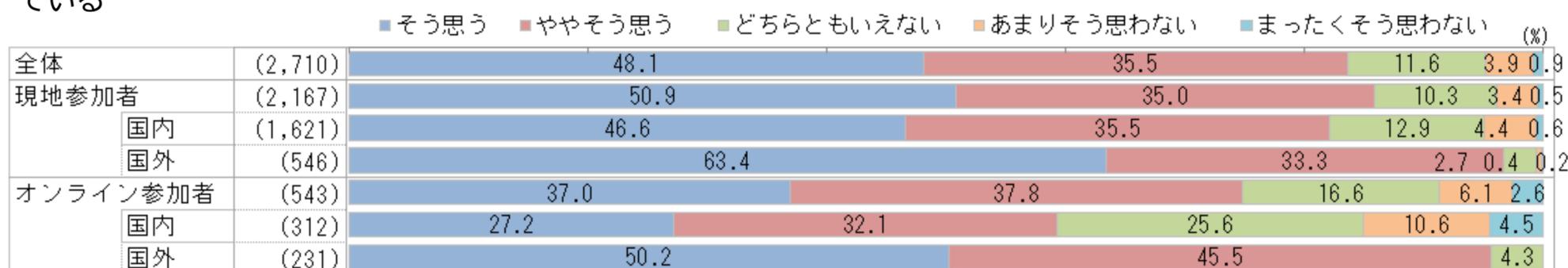
No.24 新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてマスクの着用を求めるべきだ



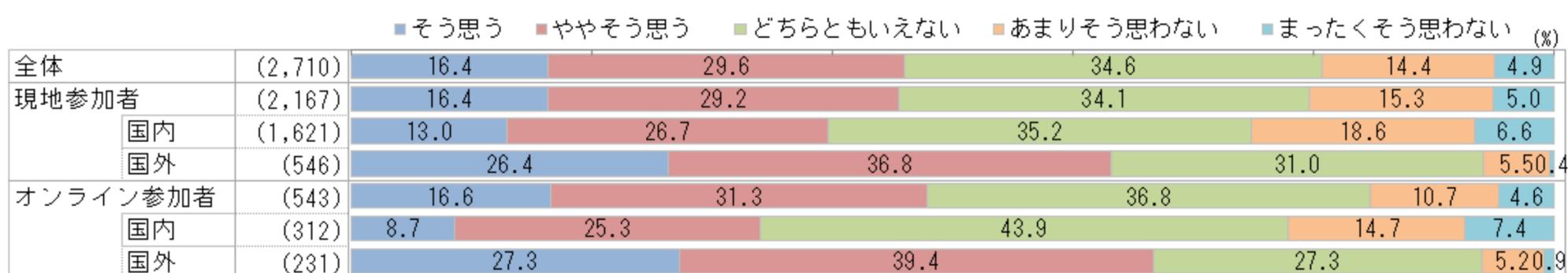
(3)参加者満足度を向上させるためのポイント

- Q25～26を比較すると、国際会議のプログラムとして参加者が重視しているのは、あくまで「他の参加者との交流機会」であることが分かる。エクスカージョンをはじめとするソーシャルプログラムについてもそうした観点において有意義な機会となるよう、今後はより一層の工夫が求められると言える。
- 現地参加者とオンライン参加者との間では、「他の出席者との交流機会」を特に重視する割合（「そう思う」と回答した割合）にやや差が見られる。オンライン参加者は、現地参加の場合と同じ交流がオンライン上で実現できることを少なくとも今日時点では必ずしも期待しておらず、他のメリット（自身のスケジュール面でより柔軟である、最新情報をインプットする上ではより効率的であるなど）を重視した上で総合的にオンライン参加を選択しているためであると推察される。このことから参加者満足度の向上においては、現地・オンラインというその参加形態ごとに概ね共通して想像されるニーズをしっかりと満たしていくことが重要であると考えられる。
- Q27からもオンライン参加者にとっての言わば「会場」であるオンラインプラットフォームの良し悪しは、その満足度向上にやはり不可欠と考えられる。コロナ禍以降、オンライン・ハイブリッド開催のためのソリューションとして様々な製品・サービスが広がりを見せているが、それ自体の操作性はもとより、プラットフォーム上でどのような体験ができるか、また主催者・事務局としてどのようなコンテンツを提供できるかが更なる満足度向上のためのポイントと言える。

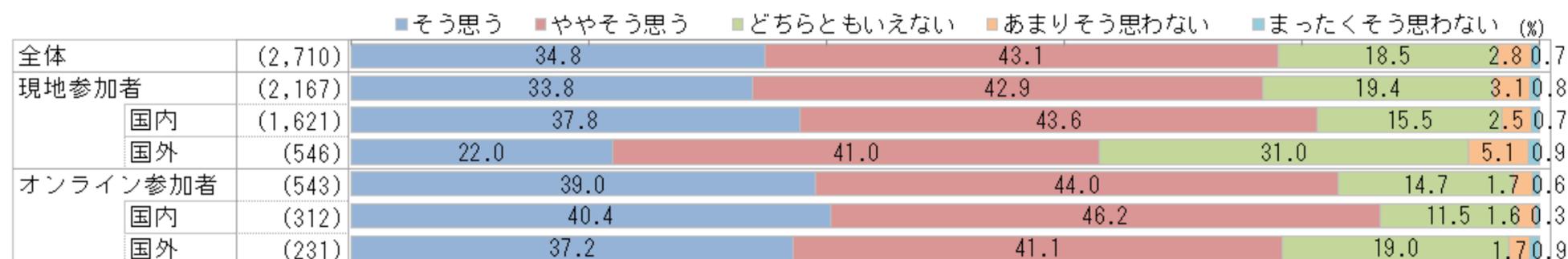
No.25 国際会議のプログラムのなかで、自身は他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)を重視している



No.26 国際会議のプログラムのなかで、自身はエクスカージョンを重視している



No.27 オンラインプラットフォームの導入は、オンライン参加者の満足度向上に寄与する取組である



No.28 開催地のPR映像の上映やオンラインツアーの実施は、参加者の満足度向上に寄与する取組である

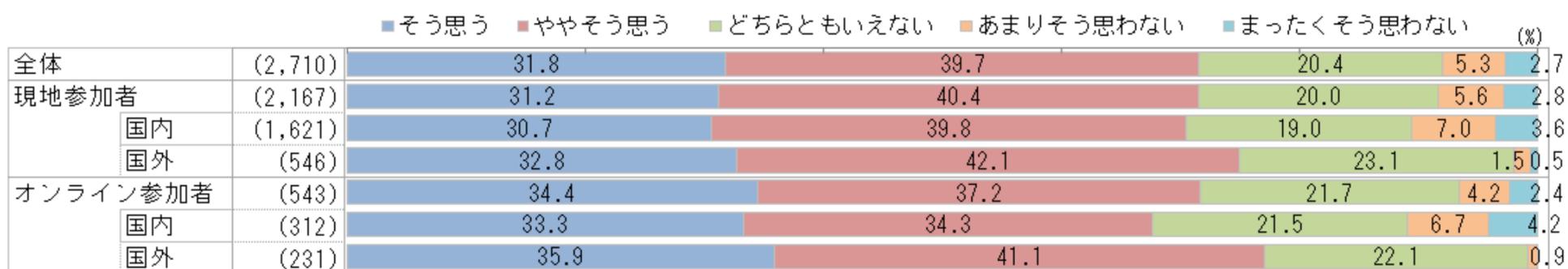


(4)サステナビリティに対する参加者意識

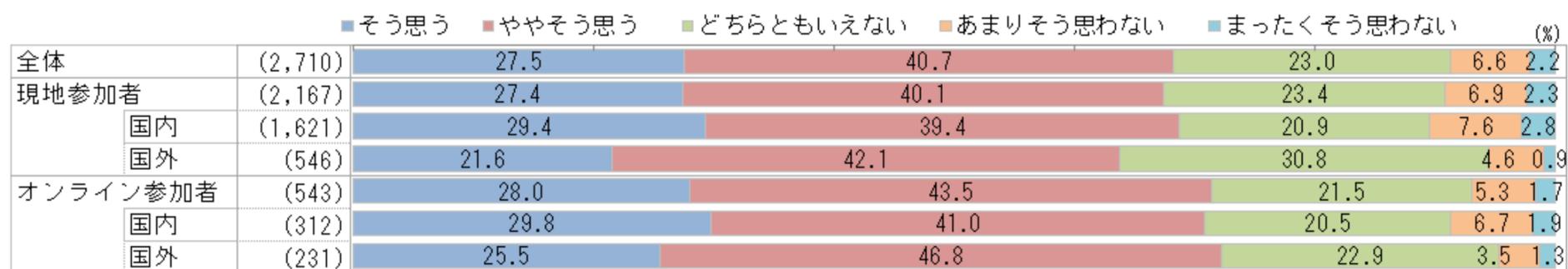
- Q29～30を踏まえると、約7割の参加者は国際会議の開催におけるサステナビリティを目指すことに対して肯定的なスタンス(「そう思う」+「ややそう思う」)であり、国内・国外参加者間でも大きな差は見られない。
- 外部調査(※)等でもサステナビリティに対する認知は、ここ数年のうちに急速に広がりを見せていると指摘される。しかしながら認知の後、それが理解や共感に留まるのか、それとも各々の実践にまで繋がっていくのかという点がこの先、注目される点である。
- 業界事業者が目指す「国際会議の開催におけるサステナビリティ」について、まずその開催に伴う環境負荷の低減に関しては参加者による理解や共感を基盤として一層、推進すべきであると言える。加えて、広義のサステナビリティ、つまり社会に寄与するソリューションとして国際会議がその開催地にもたらす価値を向上させるという方向性については、まず業界関係者がそれを念頭に置き、主催者・事務局をリードする形で推進していく必要があると考えられる。

※ 電通グループ「SDGsに関する生活者調査」SDGsの認知度(時系列)
<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2022/0427-010518.html>

No.29 今日における国際会議は、サステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだ



No.30 今日における国際会議は、市民向け公開講座等のプログラムを開催するなど、開催都市への貢献にも配慮すべきだ



【実証事業① 第51回日本インターベンショナルラジオロジー(IVR)学会総会／第16回アジア環太平洋IVR学会／第14回国際IVRシンポジウム】

主催者	一般社団法人日本インターベンショナルラジオロジー学会		
会期	6月4日～6月6日	分野	医学
主たる開催都市	神戸市	主たる会場名	神戸国際展示場1・2号館

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	771	896	1667
外国人	32	160	192
計	803	1056	1859

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	●
③	参加登録システムの導入	●
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスカーションツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	●

2)特筆すべき取組

①	参加者の事前登録システム(ワクチン接種情報の登録等)	オンライン参加登録システム(日・英対応)を運用し、参加登録情報の管理を行う。現地会場では現金等での参加登録を行わず、オンラインに統一することで、参加者とスタッフの長時間の接触を回避する。また、オンラインとすることで、自動でWEB視聴の際に必要なIDの発行が可能であり、会期中に登録をした参加者でも、ほぼ時差なく配信を視聴できるようになる。(入金まで完了した場合)
②	サーモグラフィー等の検温機器、二酸化炭素濃度測定機器等のリース	タブレットスタンド型サーモカメラ8台のリースによる、検温の実施。各設置場所には、スタッフを配置し、検温・消毒の呼びかけを行う。 設置場所: 神戸国際展示場1・2号館の3つの入口(1号館1F エントランスホール4台、1号館2F Aラウンジ2台、2号館1F コンベンションホール前ロビー2台)
③	会議冊子等の紙媒体の電子化システムの活用	プログラム・抄録集のPDFを総会ホームページで公開することにより、冊子を持ち歩く必要がなくなること、海外の参加者も内容を閲覧できるようにした。
④	開催後の広報活動	開催当日に来日された先生方のイベントでの様子の写真を中心にインスタグラムを投稿し、来日意欲を高めた。

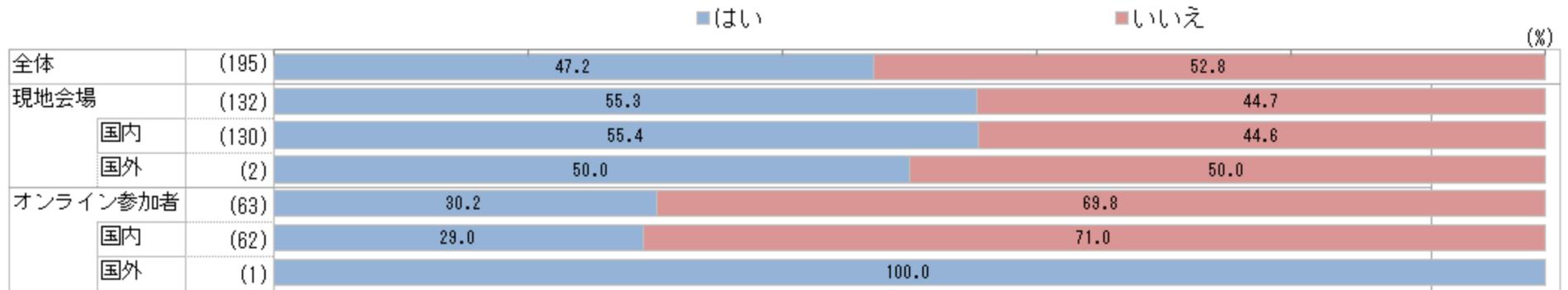


特徴ある部分を左記で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

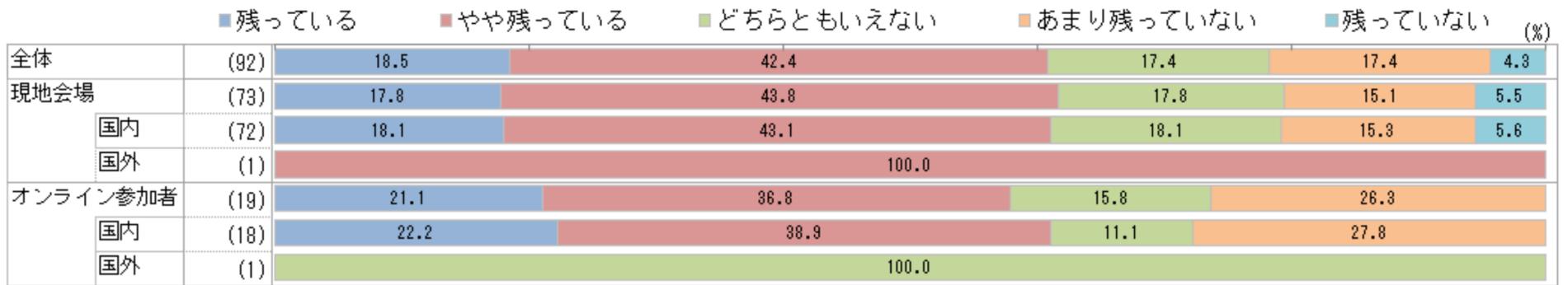
感染症対策	(1) 取組内容	<p>飲食を伴うプログラムについては、①お昼のランチョンセミナーと②会期の第1日にあたる6/4に約100名が参加する会長招宴を行った。</p> <p>①ランチョンセミナーでは、お弁当の配布時に平置きされているものを参加者自身でピックアップするように統一した。また、おおよその参加者数を把握するためチケット配布を行った。加えて、お弁当の配布台には消毒液を設置して手指の消毒を促した。</p> <p>②会長招宴は、神戸ポートピアホテル本館B1F「偕楽」の2/3スパンを用いて実施した。着席コース料理の提供、円卓1卓あたりの着席人数を4名までとして、着席者間にはアクリル板を設置した。また、特に飲料はホテルスタッフがサーブしたものが、参加者自身で注いだものしか飲めないようルール付けし、会の冒頭で司会よりご案内を行った。加えて、会場前の受付や扉前に消毒液を設置して、手指の消毒を促した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>上記取り組みにより参加者の接触と密状態を避けることができたため、安心安全に食事を提供でき、参加者にもご満足いただいた。感染症対策を行ったうえで飲食を伴うプログラムを実施する際のよい例であると考えている。</p>
	(3) 課題	<p>特に会長招宴のようなソーシャルプログラムにおいては、その中で様々な出席者の方と交流をしたいというのが通常のように思われる。しかし、感染症対策を行う以上、参加者が立ち歩くこと自体のハードルが高くなっており、自席で同じ円卓の参加者と話すことが多くなる。なお、円卓にはアクリル板が設置されているため、声が聞き取りにくいという問題が生じる。今後、感染症対策を行いながらソーシャルプログラムをコロナ前のように近づけるためには、「飲食の時間/会話の時間」とそれぞれの判断を参加者自身に委ねる必要があり、課題となりうる。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>参加者の満足度向上のためには、学会の根幹となる学術プログラムを充実させ、国内・国外の学術的な交流を実現することが重要と考えて海外学会理事からも積極的にセッション企画案や演者案などの意見を集め、プログラムに反映した。また、円滑なセッション進行のため、現地の運営スタッフと連携をうまく取れるように座長の中に必ず1名は日本人を割り当てた。加えて、海外からの一般参加者でもセッションを視聴できるよう、ライブ配信とオンデマンド配信の両方を行った。以降の訪日を促す方法としては、神戸市が作成したコマーシャルビデオをセッション間の幕間スライドで放映し、公式Instagramにも写真を投稿した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>積極的に海外からセッション案や演者案を集めたことで、非常に多くの海外演者にご登壇いただくことができ、盛んな学術的交流を実現することができた。また、日本人座長のほとんどが現地参加にご協力いただけたことで各セッション進行の軸を担っていただき、円滑に進行することができた。加えて、ライブ配信・オンデマンド配信の両方を行うことで国内・海外を問わず、学会参加のハードルを下げ、参加登録数を伸ばすことにも繋がった。</p> <p>上記コマーシャルビデオで開催地神戸の魅力伝えるとともに、公式Instagramでは主に訪日された参加者と日本人参加者が議論している様子や談笑している様子を取り扱うことで、訪日意欲の向上に繋げることができたと考えている。</p>
	(3) 課題	<p>現地でもWEBでも参加できるハイブリッド開催は、参加者のハードルを下げることに必要だが、それにより現地来場の必要がなくなることが今後の課題に思われる。解決には、訪日のインセンティブを高めることが重要である。全体懇親会を開催できる方法を模索することで交流の場を増やすことや、アフターコンベンションを参加者に向けて広報するなど、積極的に検討する必要があると考える。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>開催地である神戸市のコンベンションビューローからはAPSCVIR誘致段階から多くの情報提供をいただき、誘致成功のサービスとしてモザイク観覧車、市民広場駅での案内看板、神戸空港到着ロビーでの案内看板設置などのご提案をいただいた。PCOには、機材・会場装飾などの手配を依頼し、旅行会社に国内・海外を問わず宿泊及び交通の手配に加えて、参加登録システムの手配を依頼した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>神戸市コンベンションビューローからは、APSCVIR誘致が成功したことで上記広報サービスを提供していただくことができた。PCOとは毎月定例会議を行い、学会の方針などを決定することで開催までの準備を進め、大きなトラブルもなく開催を終えることができた。また、旅行会社は上記に加えて日本への入国規制などの情報を提供いただくとともに、訪日希望者のVISA申請サポートを行うことで、訪日希望者の利便性向上に資することができた。</p>
	(3) 課題	<p>訪日希望者の受け入れについては入国規制の緩和などが読みにくい状況であり、VISA申請に要する時間から考えて間際のタイミングとなった。このことは、COVID-19下では今後も課題に思われる。解決には、最新情報をより事前から学会ホームページなどにおいて広報することで、海外からの参加希望者に情報を届ける努力をより行うことが重要と考える。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>学術プログラムを中心に最新の情報を共有しあうことで、日本目線では海外の手法を取り入れることによるIVRの発展を目指すことに加えて、感染症対策を十分に行えば安全にハイブリッド国際会議を実施することができると証明することで、新たな国際会議の形を提案できるように努めた。また、日本IVR学会としては初めて市民公開講座を開催した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>訪日が叶わない出演者でもオンライン参加できることにより多くの海外の方にご参加いただき、日本国内のIVRをより発展させるための議論を行うことができた。また、感染症対策を行ったことで参加登録数の約半分にあたる800名ほどに現地参加いただけた。以上からも、現地参加・オンライン参加ともに安全かつ効果的な国際会議が行えたと考えている。加えて、市民公開講座ではプレス参加者にも「IVR」をアピールすることで、治療選択肢の1つとしてIVRを周知することに一助になったと考えている。</p>
	(3) 課題	<p>今回の市民公開講座は初開催ということもあり、第1回・第2回をあわせて約50名と参加者が多いとは言えない数であった。参加者を増やすために、市民にも馴染みのある他学会のホームページ上でも広報ができないか、また他学会と合同で市民公開講座を開催できないか、今回はオンラインのみであったが学会会期中に現地会場でも開催できないか、等を検討する。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>日本IVR学会では通常の国内会議であっても海外の医師を招聘し、今回のような国際学会も定期的に開催することで海外のノウハウも非常に多く取り入れている。今回はアジア環太平洋IVR学会(APSCVIR)との併催により、欧米以外にも多くの国からご参加をいただくようにした。本学会によりアジア環太平洋地域との繋がりをより深め、今後の国際学会においてもパートナーシップを継続できるように取り組んだ。</p>
	(2) 取組による成果	<p>上記「参加者の満足度向上」でも記述したように、APSCVIRからセッション企画を得たことで海外の出演者は100名を超え、最新情報の共有・討論を行うことができた。また、若手医師の国際交流を目的としたU-40セッション、国内を中心としたダイバーシティ&インクルージョンに関するセッション、さらに教育セッションを多数開催し、ノウハウの蓄積を図った。加えて、ランチョン弁当やスタッフ弁当については直前まで必要数の調整を図り、フードロス削減を目指すことができた。</p>
	(3) 課題	<p>本学会では、SDGsをメインテーマとして扱うセッション開催がなかった。今後は学会全体として取り組むべく、セッション企画を検討する予定である。</p>

【実証事業① 第51回日本インターベンショナルラジオロジー(IVR)学会総会／第16回アジア環太平洋IVR学会／第14回国際IVRシンポジウム 個別アンケート】

Q. プログラム中に上映された開催都市(神戸市)のPR映像をご覧になりましたか



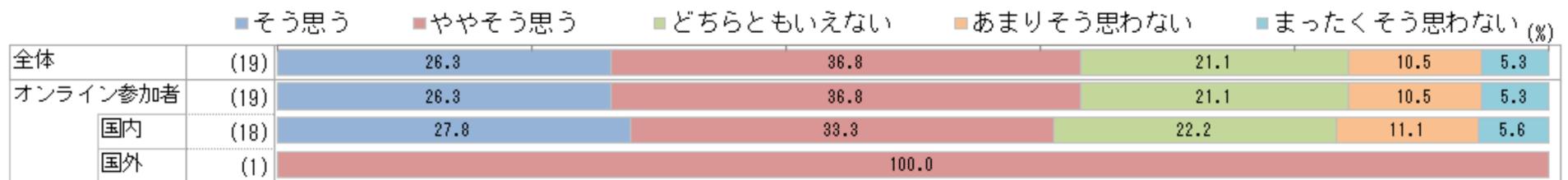
Q. その動画はどの程度、あなたの印象に残っていますか



Q. その映像は、開催都市(神戸市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



Q. その映像を見て今後、観光等の目的で開催都市(神戸市)を実際に訪れてみたいと思いましたか



【実証事業② International Conference of the Learning Sciences Annual Meeting 2022】

主催者名	国際学習科学学会 日本支部		
会期	6月6日～6月10日	分野	芸術・文化・教育
主たる開催都市	広島市	主たる会場名	広島国際会議場

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	31	26	57
外国人	3	1001	1004
計	34	1027	1061

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施 ●
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	効果的なハイブリット国際会議開催を行うために実施すること	Gatherで構築したバーチャル会場にて参加者のコミュニケーション活性化と開催地の文化紹介を兼ねたイベントを、会議の進行に合わせ参加者の要望も踏まえつつ企画・構築・実行した。
②	感染症対策	感染予防対策セットを実地参加者に毎日配布した。また、会場入口では検温ならびに手指消毒をしてもらうための機器を設置し、会場においてもこまめな除菌対策を講じた。

①



②

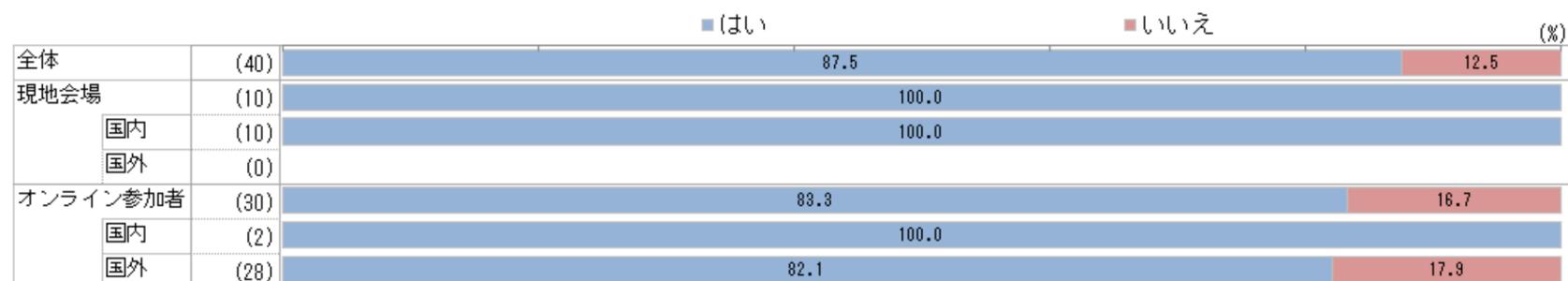


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

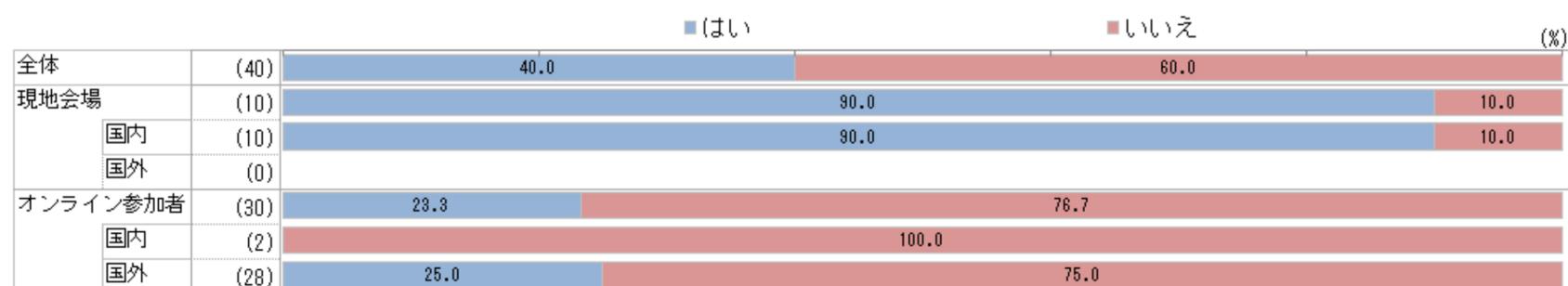
感染症対策	(1) 取組内容	感染予防対策セットを会場参加者に毎日配布した。また、会場入口では検温ならびに手指消毒をしてもらうための機器を設置するとともに、受付や会場にはパーティションを設置することで、セッションや用途ごとに仕切られた空間を作り出すことで、感染予防対策を行った。
	(2) 取組による成果	会場での参加者は上述の仕切られた空間を個々に利用することができ、好評であった。会場参加者及びスタッフの会期中ならびに会期後の感染は報告されなかった。
	(3) 課題	特になし。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	会議の時間帯をAsia-Pacific friendly、Europe-Africa friendly、Americas friendlyに分け、発表者の居住(滞在)地に合った時間帯での発表を可能にし、さらに異なる時間帯の発表も視聴できるようWhovaを用いてオンデマンド発表を実現した。また、文化紹介の一環として各時間帯の「朝」にラジオ体操を生中継した。オンラインと実地の参加者が交流できるようGatherを用いてバーチャルのイベント会場をデザインし、同期・非同期の交流を活発にした。オンライン参加者に開催地の文化を紹介する手段として、Gatherのイベント会場外に文化探索のためのフィールド「Hiroshima Experience」を構築、さらに「お好み焼きチャレンジ」と題し、広島風お好み焼きレシピ動画の公開を行い、レシピを参照しながらオンライン参加者が現地の材料で広島風お好み焼きを作るというイベントを開催した。入賞者には、学会のノベルティグッズを賞品として贈呈した。
	(2) 取組による成果	開催時間帯の工夫は、オンライン参加者の欠席が非常に少なかったことから好評であったと考えられる。ラジオ体操の生中継についても、各地で参加者がおり好評を博した。また、Gatherを用いたイベント会場や構築した「Hiroshima Experience」は多くの来場者があったことから、大変好評であったといえる。さらに「お好み焼きチャレンジ」にもさまざまな国の参加者が実際に自分が調理した広島風お好み焼きの写真をアップするなどして盛り上がりを見せた。これらのことから、この国際会議の参加者に対する広島の良いイメージは広く浸透したものと考えられる。
	(3) 課題	開催時間帯の工夫は、上述のように好評であったものの、深夜にかかるとセッションの円滑な運営のために主催者側現地スタッフに大きな負担がかかったことが課題として挙げられる。また、開催期間中の取材とコンテンツ化は時間的な余裕がなく、作業スタッフの負荷が高くなりがちであった。
開催地との連携	(1) 取組内容	広島観光コンベンションビューローと連携し、ハイブリット開催に向けた現地開催施設の選定や部屋の調整、ソーシャルイベント用の題材の検討などを行った。特に、広島伝統芸能を紹介し、現地の文化について深く理解してもらうために、神楽のパフォーマンスビデオを広島観光コンベンションビューローの紹介で入手し、学会のオープニングセレモニーでZOOMを通して参加者に披露した。また、少人数の参加者ではあったが、海外からの現地参加者を含めて、原爆ドームをはじめとした、平和学習ツアーを企画し、その内容をオンラインでも参加者に向けて配信した。
	(2) 取組による成果	企画したイベントについては、広く好評を得る反応が戻ってきており、今後の来日のインセンティブを高めることができた。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	広島市で国際会議を開催するにあたり、ソーシャルイベントとして実地で行う平和学習ワークショップを実施、その様子をオンライン公開した。観光地としての広島にも興味関心を持ってもらえるよう、食文化やその他の文化紹介エリアをGather上に「Hiroshima Experience」として構築し、市内や近隣の観光名所を取材・写真で紹介をおこなった。また、特に食文化紹介の一環として「お好み焼きチャレンジ(上述)」を実施した。
	(2) 取組による成果	平和学習ワークショップは、参加者の満足度が高かっただけでなく、オンラインコンテンツとしても公開することで、オンライン参加者がイベントにアクセスする機会を提供できた。また、講師やツアーガイドなど広島に在住する平和学習関係者と共に、学習科学研究という視点からの平和学習の考え方を議論できたのは双方にとって有意義であったものと考えられる。また、「Hiroshima experience」ならびに「お好み焼きチャレンジ」は、前出のように多くの来場者があったことや盛り上がりを見せたことから、大いに成果があったものと考えられる。
	(3) 課題	ワークショップの様子のオンライン公開が最終日となってしまったため、実施時期などの再考が必要である。
サステナビリティ	(1) 取組内容	本国際会議では、6月6日からの本会議の前にpre-conference workshopとして、“Technology in the margins: Queer and trans technologies to support reorienting toward LGBTQ2S+ solidarity”(SDGの目標5「ジェンダー」に関連)、“Centering of Living, Mattering of Lives: Methodological and Transformative Possibilities for Socially Justice STEM Education Research”(SDGの目標4「教育」)といったサステナビリティに関連するテーマを取り上げ議論を行った。また、SDGsの目標10「不平等」の観点から、諸外国の貨幣価値の違いを考慮した学会参加費の体系を取り入れ、より貧困国の研究者の参加を支援した。さらには、SDGsの目標16「平和」に関する広島ならではの学習教材を用いたワークショップも展開した。
	(2) 取組による成果	上述した規格の活動から、多くの研究者のサステナビリティに関連した価値観を共有し、それを高めていくための議論を展開することができた。また、貧困国からの参加や、若手研究者の参加が増加し、これまでで最大数の参加者が記録された。
	(3) 課題	サステナビリティを特に意識した取り組みの認知度を高めるための工夫があると、参加者に対する認知度がより一層高まるものと考えられる。

【実証事業② International Conference of the Learning Sciences Annual Meeting 2022 個別アンケート】

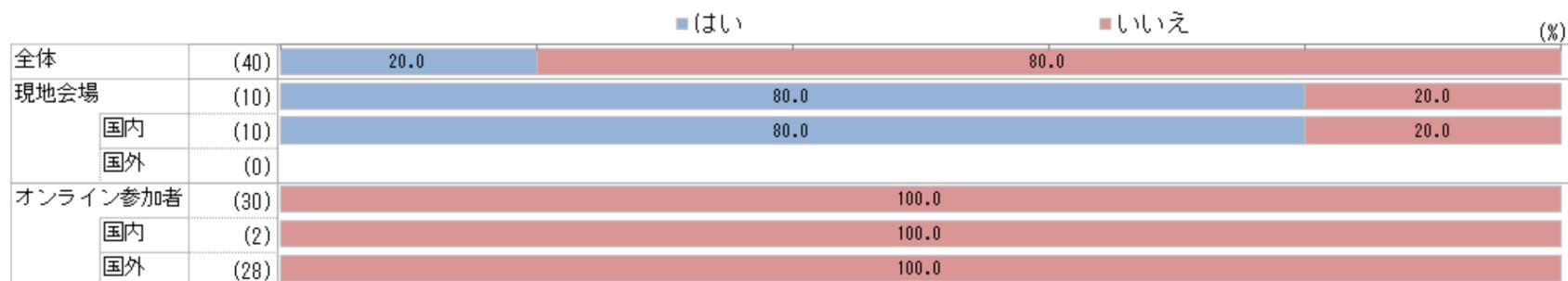
Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(Gather)にアクセスし、他の出席者とコミュニケーションをとりましたか



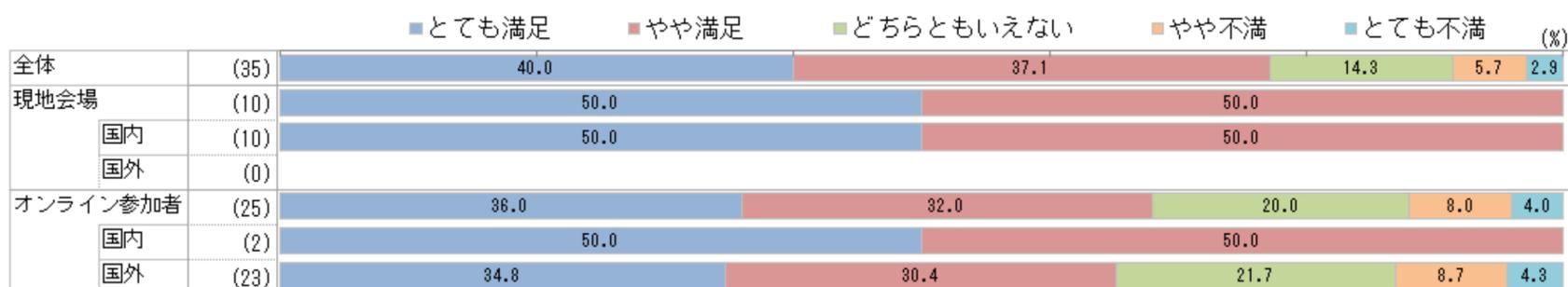
Q. バーチャル会場(Gather)で開催された、開催都市(広島市)の文化紹介を兼ねたイベントに参加しましたか



Q. バーチャル会場(Gather)で開催された、開催都市(広島市)の平和学習ワークショップに参加しましたか



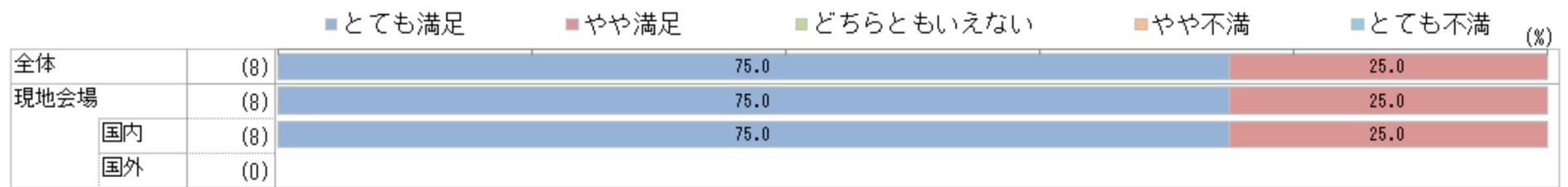
Q. バーチャル会場(Gather)における、他の参加者とのコミュニケーションについての満足度を選択してください



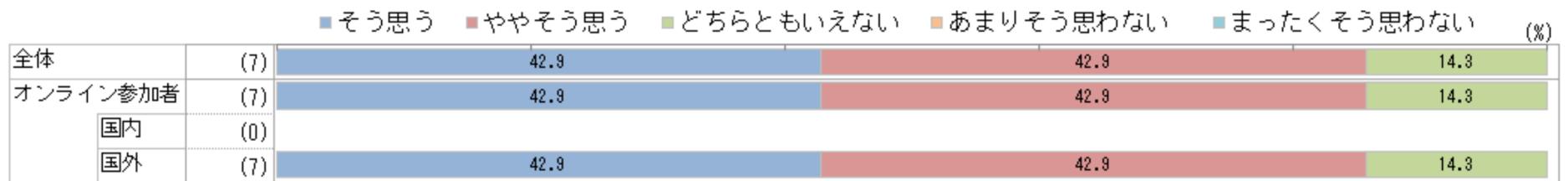
Q. バーチャル会場(Gather)における文化紹介イベントの満足度を選択してください



Q. バーチャル会場(Gather)における平和学習ワークショップの満足度を選択してください



Q. その体験を経て今後、観光等の目的で開催都市(広島市)を実際に訪れてみたいと思いましたが



【実証事業③ 12th International Congress on Advanced Applied Informatics】

主催者名	特定非営利活動法人 国際応用情報学研究機構		
会期	7月2日～7月7日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	金沢市	主たる会場名	金沢商工会議所会議室

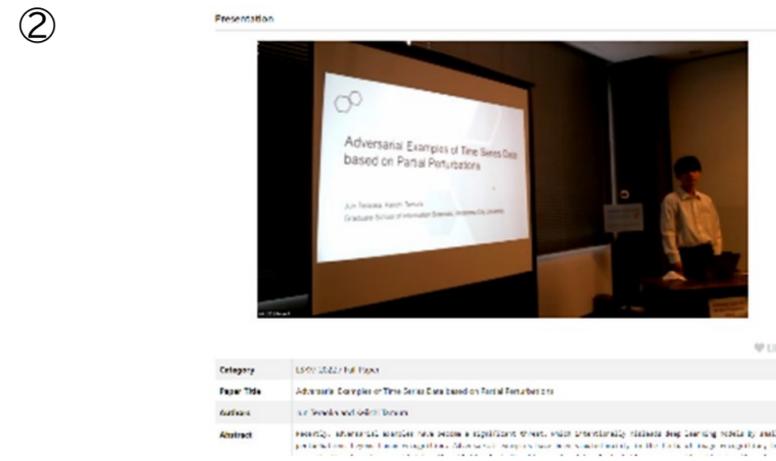
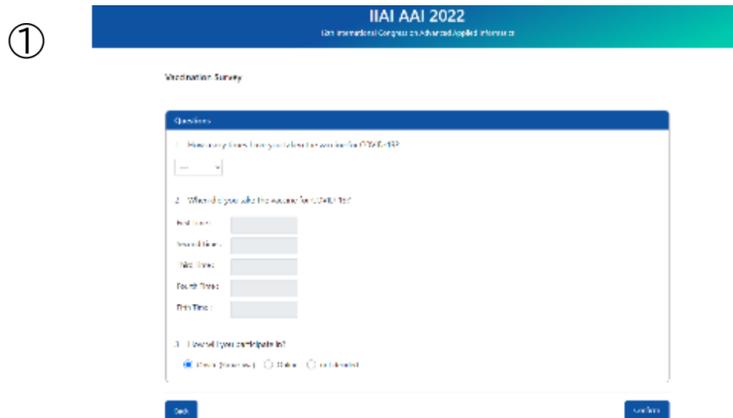
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	195	30	225
外国人	24	49	73
計	225	79	298

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施 ●
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	非接触受付や混雑状況を可視化するシステム導入	オンラインで参加チェックインができるようにし、コード提示により入場を許可。あらかじめパッキングされた配布物をセルフでピックアップしてもらい、接触機会の軽減と混雑の防止を促進した。会場に数箇所、ネットワークカメラを設置し、人流のライブ配信を提供し、混雑緩和を促進。同時にライブ配信は、オンライン参加者に臨場感を提供することを目的に、会場の様子を伝え、今後の国際会議参加意欲の向上させ、特に外国人の訪日を目指した。
②	コミュニケーションツール(チャットシステム等)	すべての講演は録画し、会期後にチャットシステムによる質疑応答も可能なストリーミング配信を行い、研究成果発表内容の共有を促進する。ストリーミング配信は、参加登録システムへの機能追加で実現するため、参加者は参加登録時のアカウントで、参加登録システムにログインして、ストリーミング配信の視聴を行った。
③	今回の開催地または次回の国内開催予定地のPR映像の製作・放映	開催地の観光情報・会議施設の紹介、会議の様子・実行委員のインタビュー及び国際会議で提供された現地の芸能や文化体験の映像を含む、複数のPR映像を製作し、会議期間後の講演のストリーミング配信に併せて、配信を行い、開催地への興味を持っていただき、次回の国際会議(日本で開催)の参加を促進する。または、家族などと共にプライベートで開催地を訪問する動機を提供できるようにした。
④	バンケット・伝統芸能の披露の実施	バンケット及びレセプションで、金沢の伝統芸能や食文化などのデモンストレーションを実施。この取組で、参加者の開催地への興味を促進し、特産品の購入や文化体験などの観光行動に資することを目的とした。



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	参加者への感染予防意識を高めるため、「マスク着用」、「手指の消毒」、「大声を出さない」、「ソーシャルディスタンスの確保」を参加者に促すことを徹底した。参加者に対して、会期前にメールで協力を要請し、会期中は会場の各所に感染防止を促す掲示物及び手指の消毒液を設置した。また、検温器を設置し、入場時の検温を実施した。接触機会軽減の対策として、受付デスクにビニールカーテンの設置、オンライン参加登録システムによる事前決済、参加者配布物のセルフピックアップを実施するプレチェックイン、紙媒体の廃止による各種ドキュメントのダウンロード、ネットワークカメラでの人流のライブ配信による混雑緩和を実施した。ソーシャルイベントでは、風通しがよく広いスペースがとれる半屋外(金沢港クルーズターミナル)や、参加者数に対して3倍の収容力がある施設(金沢ニューグランドホテル)を使用した。上記に加え、有事に備え、参加者の連絡先の取得及びワクチン接種状況の事前調査を実施した。
	(2) 取組による成果	全体的に参加者の感染予防に対する意識が高かった。マスクの着用が徹底され、ソーシャルイベントでも飲食時以外はマスクをはずすことがなかった。また、検温器も多くご利用いただき、受付では参加者が掲示物に従い列を作り、ソーシャルディスタンスが確保されていた。プレチェックインでは、現地参加希望者の半数以上の申請があり、参加者配布物のセルフピックアップで接触機会が軽減され、受付デスクの滞留時間が減少し、混雑緩和に効果を発揮した。ソーシャルイベントでは広い会場を有効に活用し、参加者はそれぞれ距離を確保しつつ、ネットワーキングを行っていた。参加者の感染予防に対する意識の高まりは、事前のメールによる案内や会場内の各所に設置した感染予防を促す掲示物により、常に感染予防を意識させる仕組みが作用したと考えられる。
	(3) 課題	感染症対策を実施するため、除菌のための道具・検温器・ネットワーク機器等、備品の購入やリースのコストが増加する。今回は、本事業や自治体の助成で、国際会議のサービスを低下させることなく、感染症対策を実施したが、それらが無い場合、他のサービスでコスト削減をする必要が発生し、国際会議のサービス低下に繋がる懸念がある。多くの会場でフリーWi-Fiを使用できるが参加者が利用する以外に、ハイブリッド開催を実現するため、多くの機器をインターネットに接続する必要がある。そのため、十分なネットワーク帯域を確保できるか、懸念があった。最終的には会場のフリーWi-Fiは参加者用とし、運営側で使用するWi-Fiは別にリースしたが、ハイブリッド開催をするためには、ネットワーク帯域は今後も課題になると考えられる。ネットワークカメラによる人流のライブ配信の視聴数が伸び悩んだ。全体の参加者の4分の1ほどが、視聴したと考えられるが、会期中もメール等でアナウンスすれば、より利用されたと考えられる。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	オンライン参加者に可能な限り、実地参加者と同等のサービスを提供できるようミーティングシステムを活用し、リアルタイムで講演の視聴・質問をできるようにした。加えて、会議後に録画した講演のストリーミング配信を行い、チャットシステムで質疑応答を可能にした。また、ネットワークカメラで会場の様子をライブ配信し、オンライン参加者に臨場感を提供した。オンライン参加者に訪日を促すため、開催地の観光情報・会議施設の紹介、会議の様子・国際会議で提供された現地の芸能や文化体験の映像を含む、複数のPR映像を製作し、会議後にストリーミング配信した。
	(2) 取組による成果	PR動画を閲覧いただいた参加者の声としては、魅力的で次回以降も会議への参加を希望する旨の意見をいただいた。
	(3) 課題	ストリーミング配信の視聴数が伸び悩んだ。会議前や会議中における、会議のストリーミング配信を周知が少なかったこと、及び会議後に150ほどの講演動画を編集する必要があり、ストリーミング配信まで2週間ほどかかり、参加者の会議に対するモチベーションが既に低下していた可能性がある。周知の徹底や、会議後の業務をより迅速に対応できるように工夫する必要がある。また、現地で録画した講演の一部に映像の乱れや音声がよく聞こえないなどがあり、収録業務の改善が必要な結果となった。性能の良い機器の購入や専門家への委託はコスト面で難しいため、実施方法を再検討する必要がある。
開催地との連携	(1) 取組内容	開催地となる公益財団法人金沢コンベンションビューローに誘致段階から、複数回の現地視察を通じて、感染症対策に優れた会議施設やレセプション会場、及びバンケット会場のご紹介いただいた。外国人参加者への伝統工芸や食文化体験プログラムや現地参加者がソーシャルイベントで安全に過ごせる施設や移動方法についても丁寧にご案内いただき、下記の通りのソーシャルイベントを実施した。レセプションは半屋外の金沢港クルーズターミナルで実施、エクスカージョンはヤマト糺パークを見学、バンケットでは獅子舞を催し物として実施した。そのほか、感染症対策グッズやパンフレットなどをご提供いただいた。
	(2) 取組による成果	いずれのソーシャルイベントも好評いただいた。特にレセプションは広い半屋外で感染症対策が実施しやすく、金沢港が一望でき、夕日も眺望できるロケーションは素晴らしく、地域に特化したご提案であった。また、ヤマト糺パークの見学では、外国人向けに英語の説明もあり、お土産が飛ぶように売られている状況であった。
	(3) 課題	上記の通り、開催地の文化や特色を活かしたソーシャルイベントを実施するには、開催地のコンベンションビューローのご協力は不可欠であったといえる。主催者だけで候補地の選定や準備を行い、限られた時間で視察を効率的に行うことが難しい。国際会議の満足度向上には、コンベンションビューロー等の行政機関によるご協力の重要性を認識させられた。

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

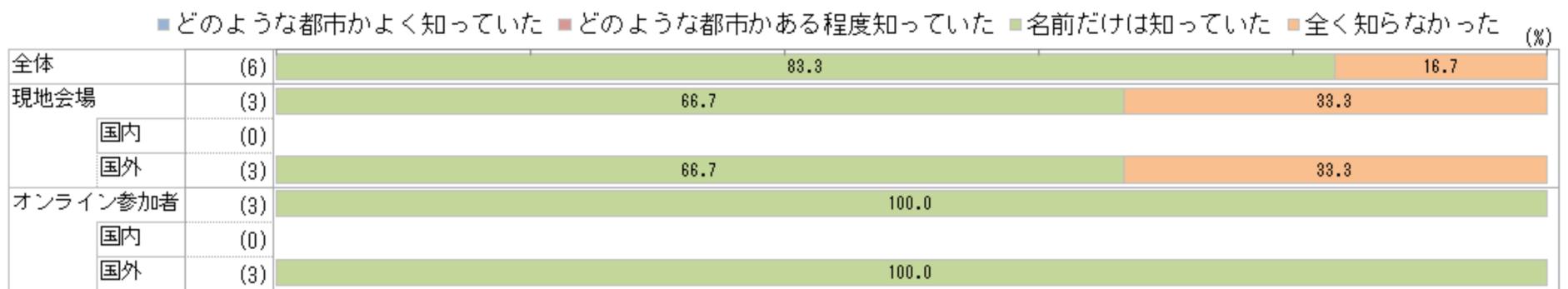
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	オンライン参加者も含めた全参加者に向けて開催地の魅力を発信し、受け入れ地域のインバウンド回復の機運を高めるため下記の取組みを実施した。会期中には、伝統芸能(獅子舞)の催し物の提供、ユニークベニューでのレセプション、ヤマト糶パークのエクスカージョンを実施した。また、会議後に開催地の観光情報・会議施設・伝統工芸・伝統芸能・食文化の紹介を含めたPR動画を製作し、ストリーミング配信を実施した。
	(2) 取組による成果	金沢港クルーズターミナルでのレセプションは、初めて国際会議で利用されるユニークベニューであり、会場からのバス移動や現地での飲食提供など、ご協力いただいた開催地の事業者にも、インバウンド回復の取組みの1つを提供できたと考える。またヤマト糶パークの見学では、外国人向けに英語による説明があったことで、お土産の購買意欲が促進され、インバウンド需要との向き合い方を考える機会を提供できたと考える。「参加者の満足度向上」に記載の通り、PR動画も好評であった。
	(3) 課題	ユニークベニューやエクスカージョンの候補地として、収容人数が課題となった。金沢市では尾山神社や金沢城公園などもユニークベニューとして利用できるが、最大で300名を想定していた本国際会議では、収容人数が不足し利用を断念した。ユニークベニューとなりえる文化的な施設は、収容人数が少ない場合が多く、それが課題となる。2020年にオープンした金沢港クルーズターミナルがなかったら、ユニークベニューでのソーシャルイベントの実施は難しかった。
サステナビリティ	(1) 取組内容	本国際会議では、様々なサステナビリティのうち、「資源の保全」、「開催地の成長」、「生産・消費」、「持続的なコンベンション誘致」に資する取組を実施した。(1)「資源の保全」として、紙媒体を配布を最小限にし、多くのドキュメントをオンラインによるダウンロードに移行し、ペーパーレスを促進した。(2)「開催地の成長」、「生産・消費」として、伝統芸能の催し物、食文化を体験するエクスカージョンの実施や、開催地の魅力を発信するPR映像を製作し、参加者に体験していただいた。(3)「持続的なコンベンション誘致」は、今後、開催地及び我が国でのウィズコロナ・ポストコロナなどに影響を受けない、国際会議誘致・開催のブランディングに資する施策を実施した。
	(2) 取組による成果	ペーパーレス化により、USB媒体でのプロシーディングや紙媒体による要旨集の配布をしなかったが、参加者から要望等もなく、ペーパーレス化が浸透していることを実感した。また、「レガシー効果の創出」でも記載の通り、開催地の魅力発信は好評であった。講演のストリーミング配信やPR動画製作など、オンラインサービスの提供が当たり前になりつつあり、今後は実地開催であっても国際会議の業務において、ITの活用・拡大が重要であることを認識した。
	(3) 課題	「開催地の成長」、「生産・消費」、「持続的なコンベンション誘致」として、エクスカージョンなど開催地の魅力を伝える取組みを実施した。実地参加者の様子は現場で観察できるが、オンライン参加者に対しては、どの程度魅力を伝えることができたか、判断することが難しかった。オンライン参加者の動機・動向を把握する手段を検討する必要がある。

【実証事業③ 12th International Congress on Advanced Applied Informatics
個別アンケート】

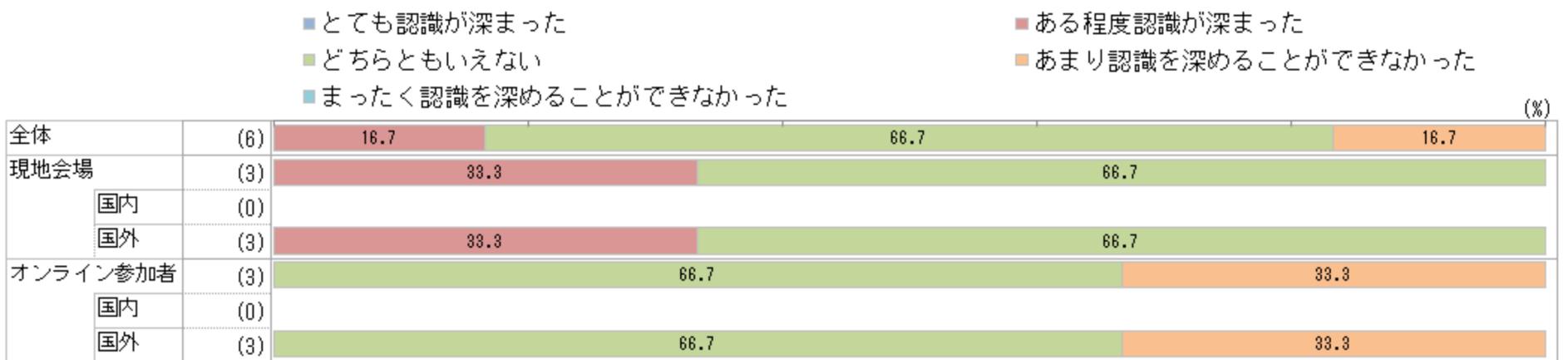
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



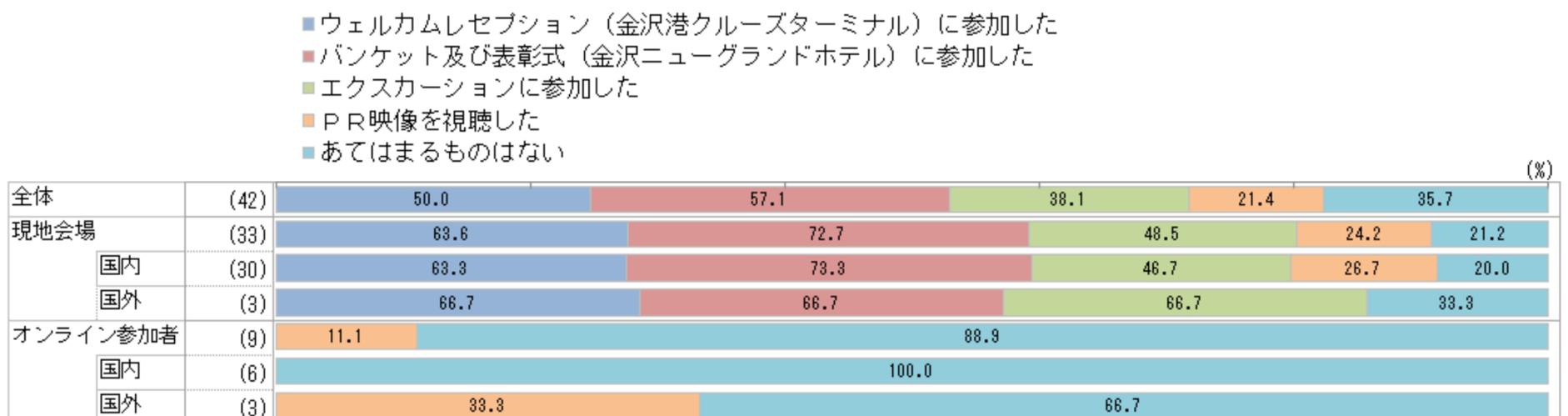
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(金沢市)のことをどれくらい知っていましたか



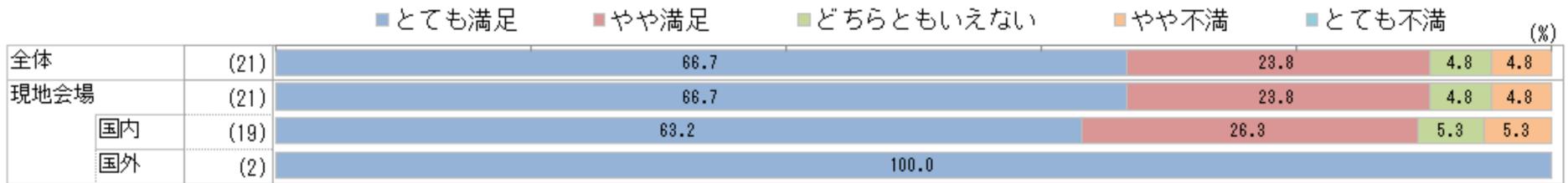
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(金沢市)への認識が深まりましたか



Q. 今回、あなたが経験したことを選択してください



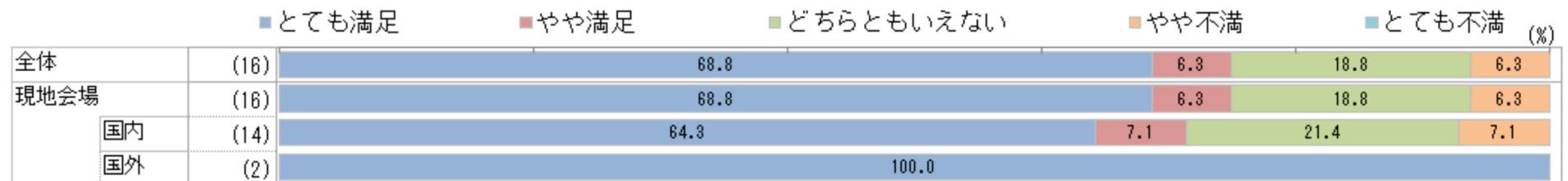
Q. 今回、あなたが経験したことに対する満足度を選択してください
 < ウェルカムレセプション(金沢港クルーズターミナル)>



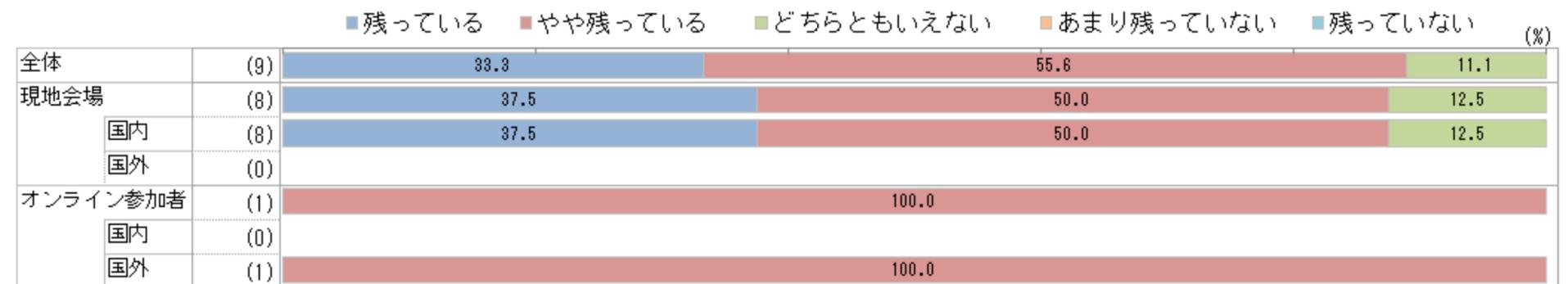
Q. 今回、あなたが経験したことに対する満足度を選択してください
 < バンケット及び表彰式(金沢ニューグランドホテル)>



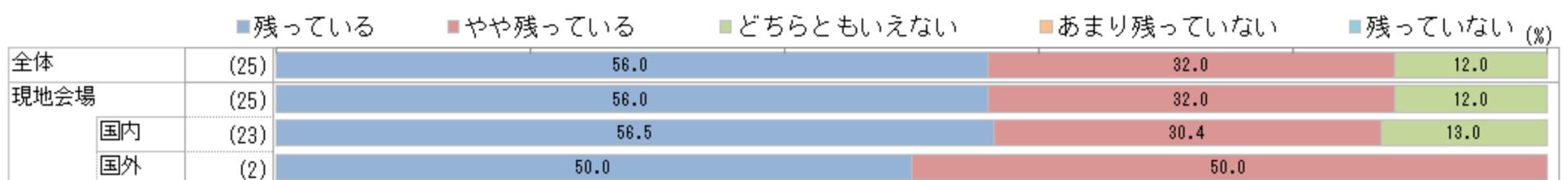
Q. 今回、あなたが経験したことに対する満足度を選択してください
 < エクスカーション >



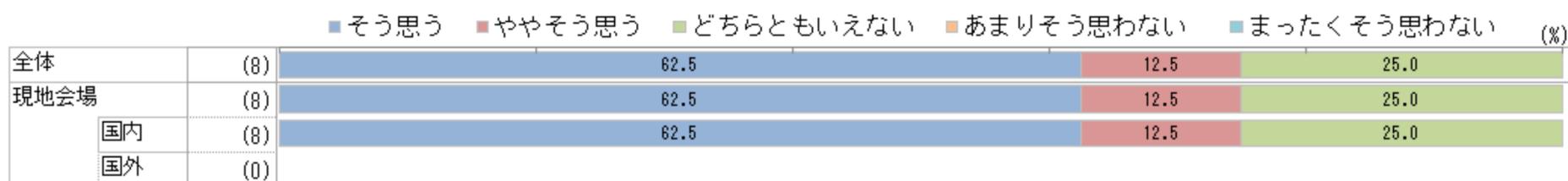
Q. 以下のものはどの程度、あなたの印象に残っていますか
 < PR映像 >



Q. 以下のものはどの程度、あなたの印象に残っていますか
 < 開催地の伝統芸能、伝統工芸や食文化のデモンストレーション >



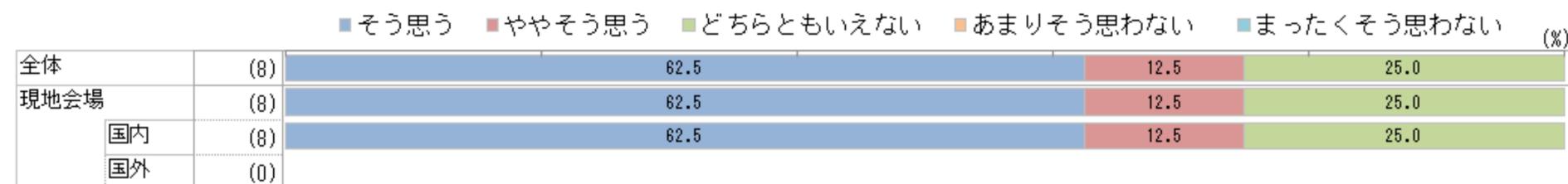
Q. 以下のものは、開催都市(金沢市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか
 <PR映像>



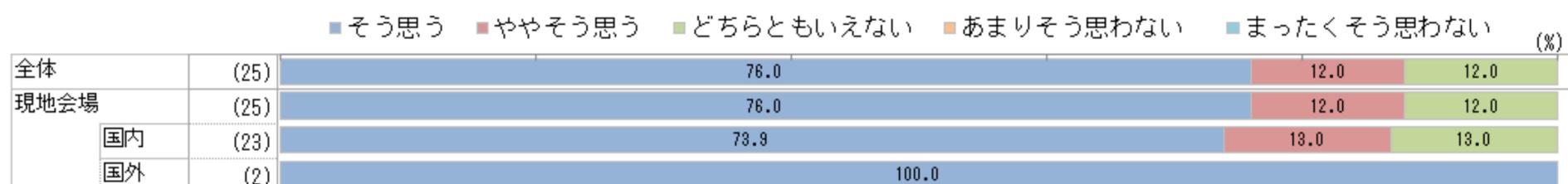
Q. 以下のものは、開催都市(金沢市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか
 <開催地の伝統芸能、伝統工芸や食文化のデモンストレーション>



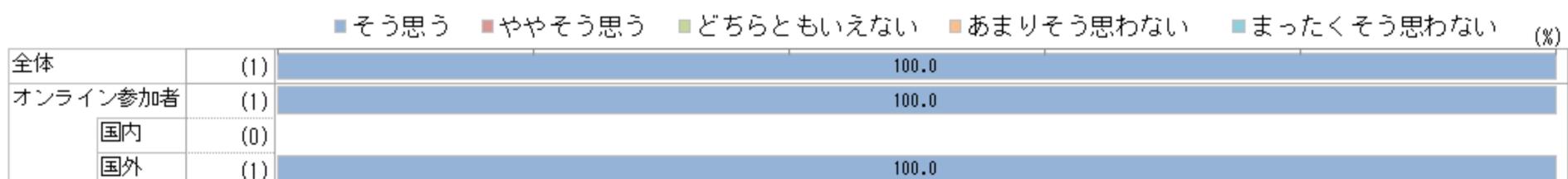
Q. 以下のものに触れて今後、観光等の目的で開催都市(金沢市)を再訪してみたいと思いましたが
 <PR映像>



Q. 以下のものに触れて今後、観光等の目的で開催都市(金沢市)を再訪してみたいと思いましたが
 <開催地の伝統芸能、伝統工芸や食文化のデモンストレーション>



Q. PR映像を見て今後、観光等の目的で開催都市(金沢市)を実際に訪れてみたいと思いましたが



【実証事業④ 27th Optoelectronics and Communications Conference/
International Conference on Photonics in Switching and Computing 2022】

主催者名	一般社団法人 電気情報通信学会		
会期	7月3日～7月6日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	富山市	主たる会場名	富山国際会議場

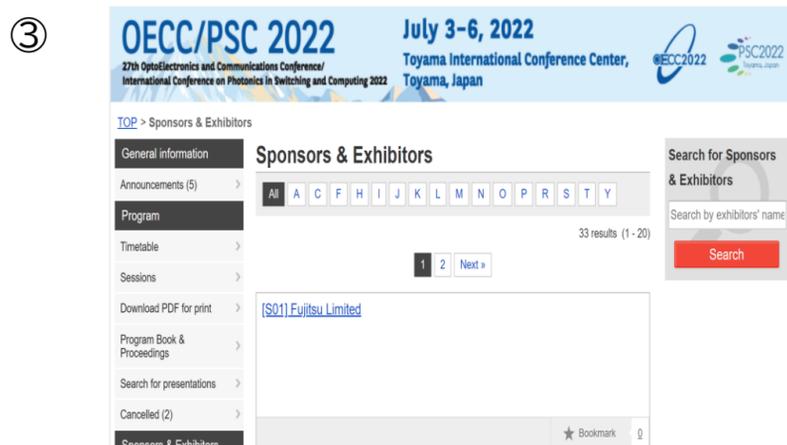
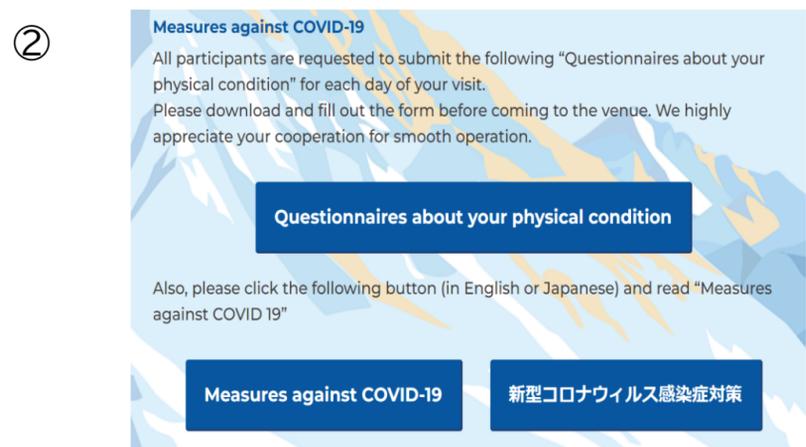
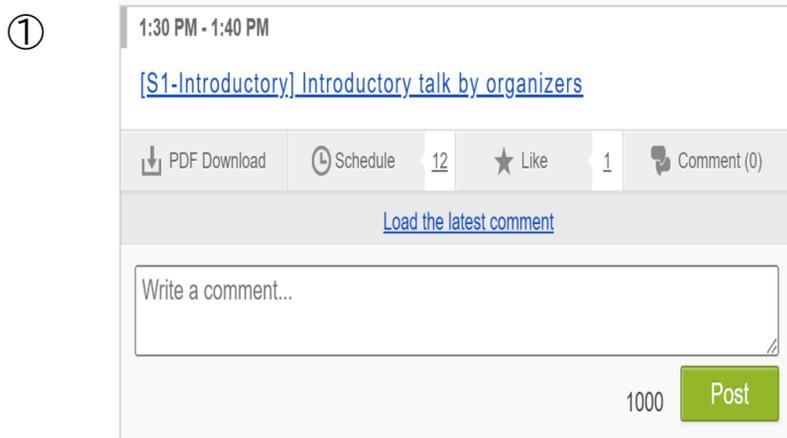
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	325	68	393
外国人	11	191	202
計	336	259	595

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスクーショントัวร์の実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	オンラインプラットフォーム	チャットシステム(参加者個別認証機能)の設定により、各参加者が個別のID・PWを用いてログインできるようにした。この機能を導入したことによって、各演題毎のコメント機能をチャットのように利用することができ、オンライン参加者も相互交流できる機会を提供することができた。
②	健康状態申告書	会期前の時点で、Webサイトに【健康状態申告書】(Questionnaires about your physical condition)を掲載し、参加者の事前ダウンロード、記入を促した。【新型コロナウイルス感染症対策】ページを日・英で設け、会期前～会期当日にかけてどのような感染症対策を実施するか、また参加者にどのような協力をお願いしたいかを明確に案内した。
③	オンライン展示会(製品紹介)	現地出展が出来ない企業、及びリモート参加者向けにバーチャルプラットフォームConfitを活用し、スポンサー・出展企業のオンライン紹介を行った。

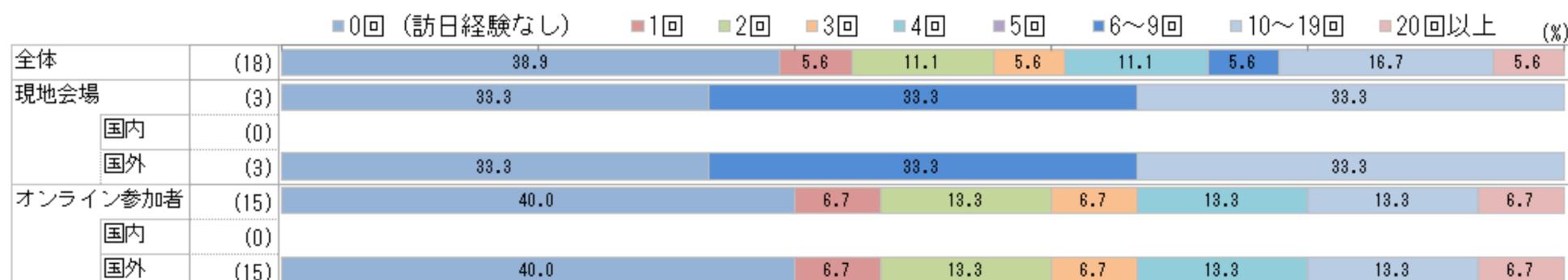


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

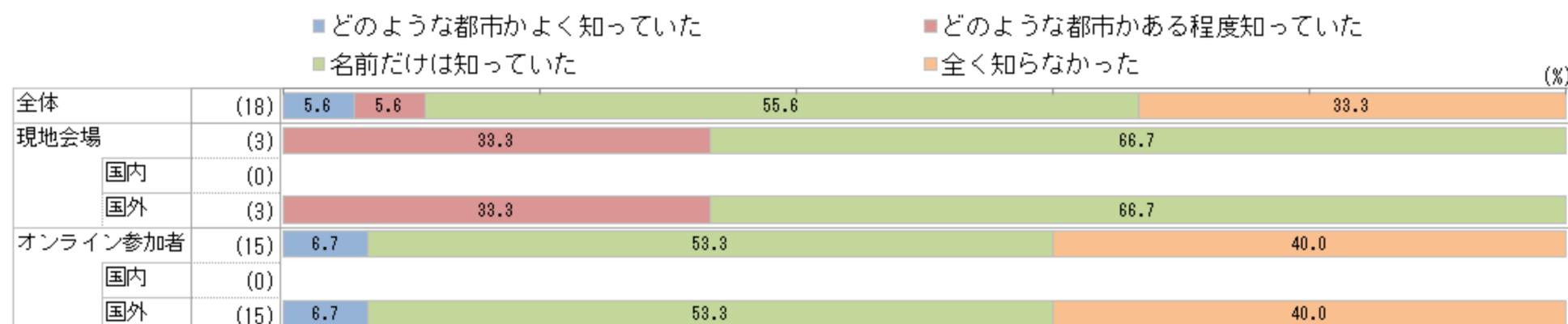
感染症対策	(1) 取組内容	<p>一般社団法人日本コンベンション協会策定の【コロナ禍におけるMICE開催のためのガイドライン】に準拠し、以下の施策を行った。</p> <p>①Webサイトに感染症拡大防止への取り組み内容と、それに伴う参加者の遵守事項を掲載した。</p> <p>②運営マニュアルの中に、感染対策、感染拡大予防チェックリストのページを設け、主催者、運営スタッフへの周知を徹底した。</p> <p>③Webサイトに【健康状態申告書】を掲載し、会場での提出を促した。会場でも記載デスクを設け、全参加者から毎日集約した。</p> <p>④会場には、アクリル板、検温機器、アルコール消毒液等を設置し、定期的にマイク等の消毒や換気を行った。</p> <p>⑤飲食を伴うプログラムにおいて、アクリル板、検温機器、アルコール消毒液等を設置し、着席で十分な距離を取って実施した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>7月3日～6日の開催期間中に陽性者の発生は報告されなかったものの、会期後の7日・8日にかけて、4名の陽性者が報告された。</p> <p>【コロナ禍におけるMICE開催のためのガイドライン】や運営マニュアルに従い、該当者からのヒアリングや会場、関係者への連絡を迅速に行い、それ以上の感染拡大を防ぐことができた。該当4名について、会期中に集約した【健康状態申告書】では、発熱や体調不良は報告されておらず、会期終了後に発症したことを確認している。保健所から濃厚接触者と判断された参加者はいなかった。</p>
	(3) 課題	<p>全参加者からの【健康状態申告書】集約を徹底していたことにより、陽性者発生の情報を受けた後、会期中に症状がなかったことや、ワクチン接種状況等を確認することができた。申告書は紙での集約を行っていたため、オンラインで同様の情報集約ができるプロセスを導入できれば、よりスピーディーに該当者の情報確認を行うことができると思われる。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>①時差を考慮した時間帯に海外講演者の口頭発表を配置することで、海外からもライブでの発表・ディスカッションがしやすいプログラムとした。</p> <p>②ポスターセッションを会場で実施することにより、対面形式による議論の充実を図った。ポスター講演内容はショート動画として会場で放映するとともに、オンラインプラットフォームにも掲載し、チャットによる質疑応答の機会も提供した。</p> <p>③オンライン参加が想定される海外委員も座長として配置し、一部主導的な役割を担ってもらった。</p> <p>④開催終了後、8月末までライブセッションの様子を記録した動画を視聴できるアーカイブを用意した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>海外参加者の時差を考慮したプログラム編成を行った結果、オンライン・現地参加者双方の満足度を高めると同時に、世界中の研究者とのライブでの交流を通して、新たな国際共同研究のきっかけを作り、将来の訪日を促すことができた。ポスターセッションについては、会場では対面形式の議論、オンラインでは動画やチャットを活用しての相互交流と、両方のメリットを提供することができた。海外委員によるセッション進行により、国際会議としての雰囲気づくりを行うと共に、会場が主でオンラインは従という雰囲気を低減することができた。</p>
	(3) 課題	<p>日本以外からの参加国が21ヶ国にわたっており、全参加者の時差を配慮したプログラム編成を行う難しさは残った。現地参加者からは、約2年半ぶりに対面での議論を行えたことにとっても満足したとの声が多く寄せられた。オンラインで様々なコンテンツや相互交流の機会を提供したとしても、対面にまさる交流はないということも改めて感じた。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>富山コンベンションビューローと連携し、以下の取組を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Webサイト・TOPページに富山観光ビデオを掲載した。 ・開催支援制度を利用し、会場1Fにインフォメーションコーナー設置、駅・空港に歓迎看板掲示、観光パンフレット等の配布を行った。 ・広報協力を依頼し、北日本新聞社の取材を受け、新聞紙面やWebサイトで会議開催が広報された。
	(2) 取組による成果	<p>本国際会議初のハイブリッド開催ということもあり、大幅な参加者減となる可能性もあったが、結果的には現地・オンライン合わせて約600名の参加者を迎えることができた。富山という立地、富山国際会議場での開催についても、良い環境だったとの声が多く寄せられた。本会議は富山国際会議場におけるコロナ禍後の初めての国際会議であり、十分な対策を行うことで、無事に開催可能であることを実証することができた。</p>
	(3) 課題	<p>海外参加者を受け入れるための事前準備が少しでも緩和されない限り、コロナ禍以前と同じような状況で国際会議を開催するのは難しい。入国者健康確認システム(ERFS)の簡略化や、全外国人にビザの発行が必要という水際対策の緩和が望まれる。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>本国際会議では3年に一度、日本で開催されているが、開催地の選定は前回大会の3年前、2019年まで遡る。学術分野の発展に寄与するという本会議の開催目的だけでなく、複数の開催候補地からレガシー効果の創出やSDGsへの取組も意識し、富山国際会議場を選定した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>・日本で開催することによって、主題である光通信分野、さらに、第5及び第6世代移動体通信システムやIoT分野においても日本の科学技術力向上、国内産業の活性化、大学や国立研究機関の研究推進に貢献することができた。</p> <p>・「SDGs未来都市」、「自治体SDGsモデル事業」の両方に選定されている富山市に滞在することで、公共交通(LRT: Light Rail Transit)を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりの体験や、先進的なSDGsに対する取り組みを参加者に提供することができた。</p>
	(3) 課題	<p>コロナ禍以前と同じような状況で、海外参加者を受け入れることができるようになれば、レガシー効果の波及範囲も世界に広げることができると考える。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>「サステナビリティ」を意識した取組として、「ポストコロナにおけるSDGs達成に向けた光技術」に関するシンポジウムを企画した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>ハイブリッド開催を利用し、通常開催では招聘しにくい国内外の政府関係者や著名な研究者を招き、本会議の主題である光エレクトロニクス・光通信技術が、いかにSDGsの目標達成に向けて貢献できるかを幅広い視点から議論する場を提供することができた。</p>
	(3) 課題	<p>特になし</p>

【実証事業④ 27th Optoelectronics and Communications Conference / International Conference on Photonics in Switching and Computing 2022 個別アンケート】

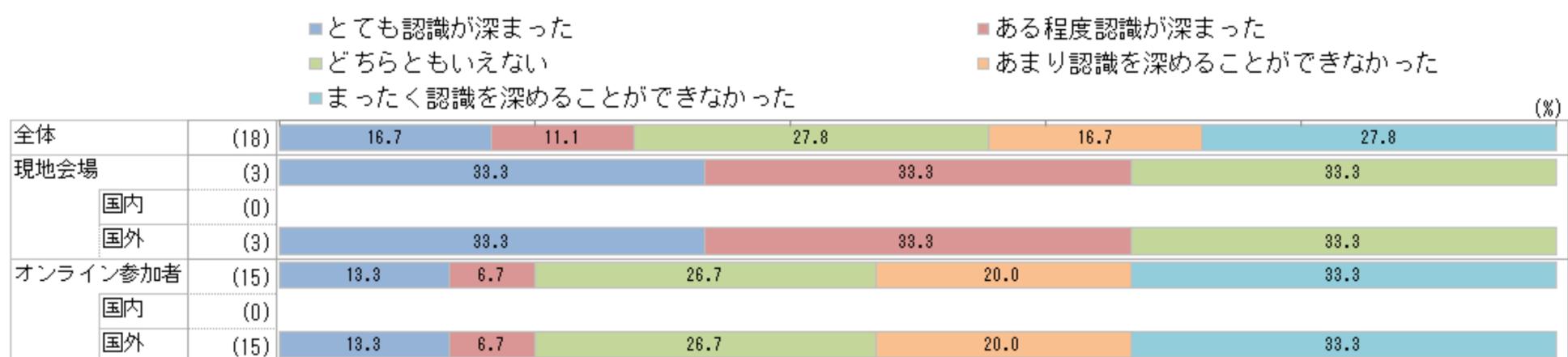
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



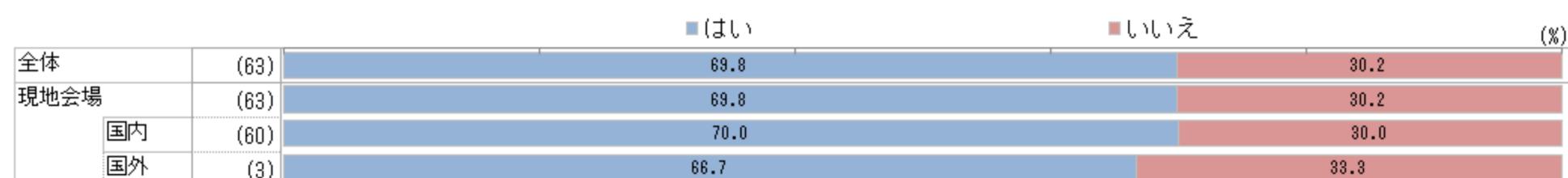
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(富山市)のことをどれくらい知っていましたか



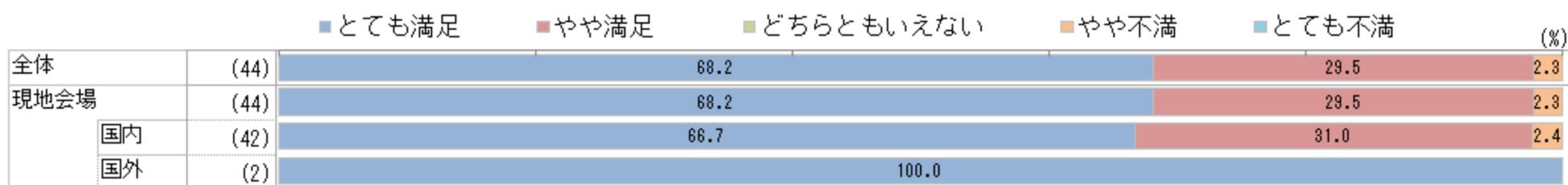
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(富山市)への認識が深まりましたか



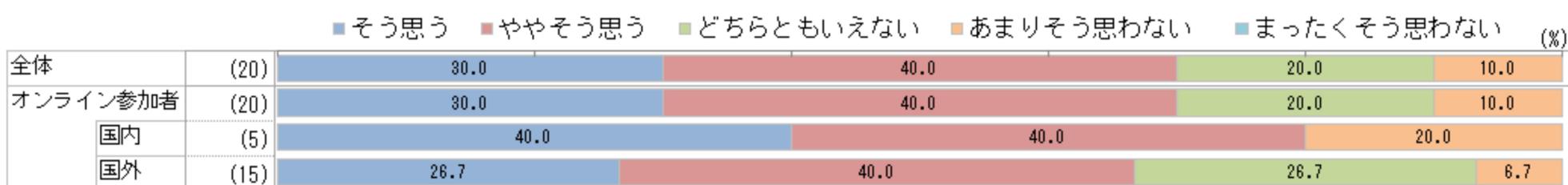
Q. あなたは、7月3日の夜に開催された Get Together Party(ANAクラウンプラザホテル)に参加しましたか



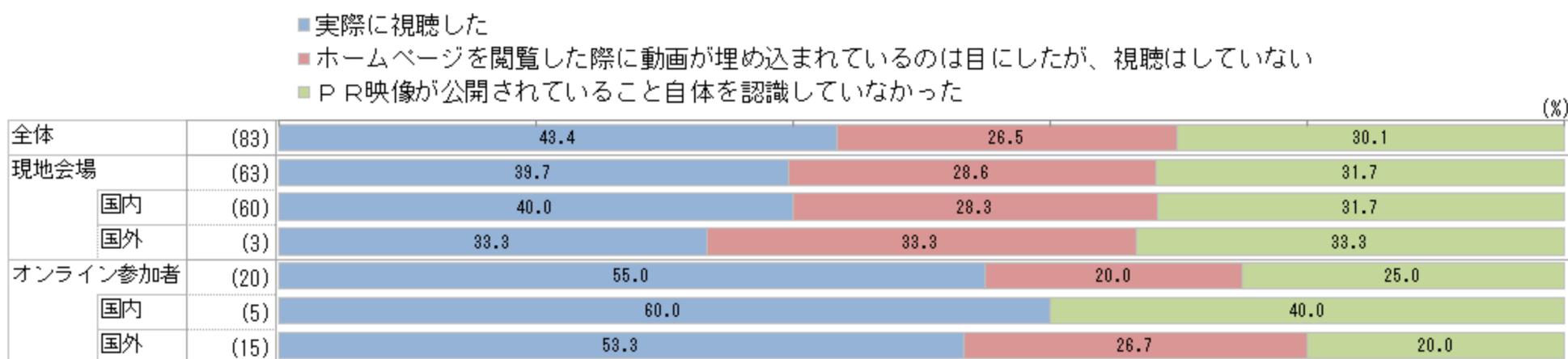
Q. Get Together Party の満足度を教えてください。



Q. この会議をきっかけとして今後、観光等の目的で開催都市(富山市)を実際に訪れてみたいと思われましたか



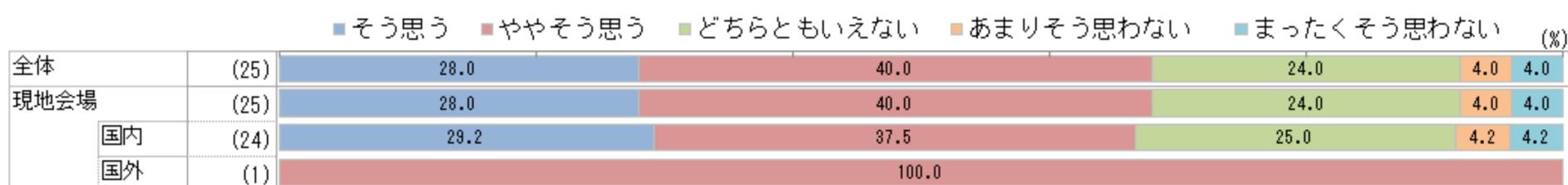
Q. 会議公式サイトトップページで公開されている以下のPR映像をあなたは会議開催前にご覧になりましたか



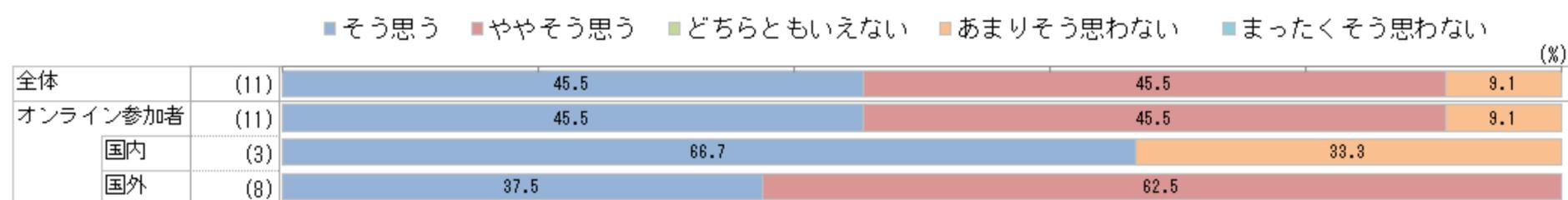
Q. その映像はどの程度、あなたの印象に残っていますか



Q. その映像は、開催都市(富山市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



Q. その映像を見て今後、観光等の目的で開催都市(富山市)を実際に訪れてみたいと思いましたか



【実証事業⑤ 第10回先端エンジンシステムにおけるモデリングと診断技術に関する国際会議】

主催者名	一般社団法人日本機械学会		
会期	7月5日～7月8日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	札幌市	主たる会場名	北海道大学 札幌キャンパス

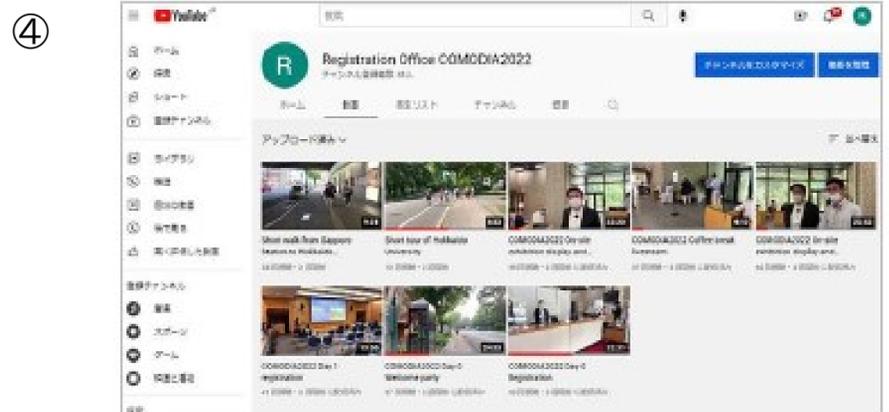
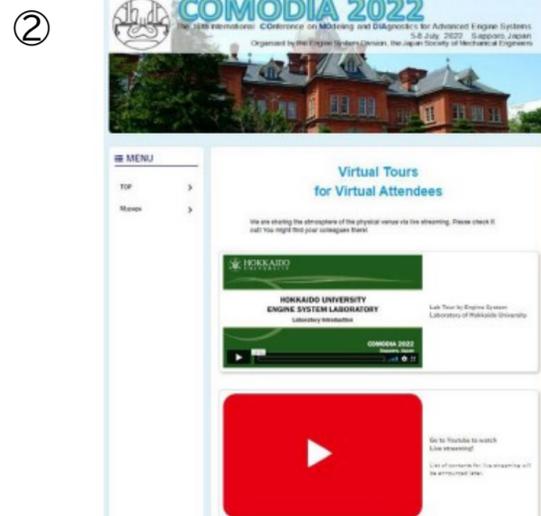
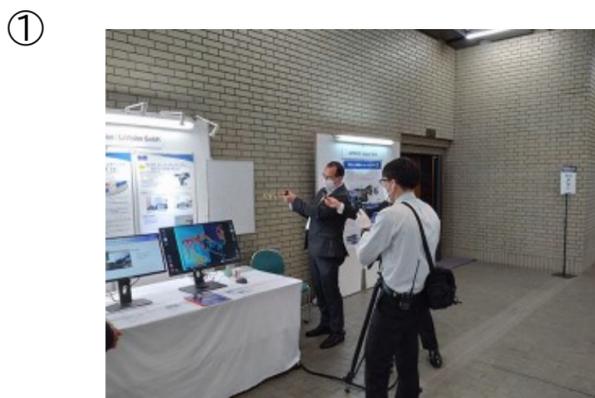
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	143	44	187
外国人	35	38	73
計	178	82	260

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	●
③	参加登録システムの導入	●
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	●
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施	●
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	

2)特筆すべき取組

①	開催後の追跡調査の実施	Office365のFormsを使って事後に参加者へアプローチを行う。事後の回収率を上げるために、事前にアンケート調査への回答協力に努めた。
②	質疑応答の代替システム(チャットシステム等)の活用	オンライン会場プラットフォームの各発表ページにコメント入力欄を設けて、開催期間中のみならず後日オンデマンド配信期間も含めて質疑対応できるようにした。
③	感染症対策	会場である北海道大学学術交流会館の入口に検温器+消毒ディスペンサーを設置した。
④	開催地へのレガシー効果の向上に資する取組	大会長である小川教授の研究室学生制作による英語版ラボツアー動画を制作し、大会参加者に対して北海道大学PRを行った。またこのコンテンツは大会分野に係る学生以外にも、北海道大学自体のPR動画としても本大会以外でも活用できるようにした。



▼Youtube コンテンツ

https://www.youtube.com/channel/UCX9KKzc_uaJ8c-j72WWMVq7Q

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

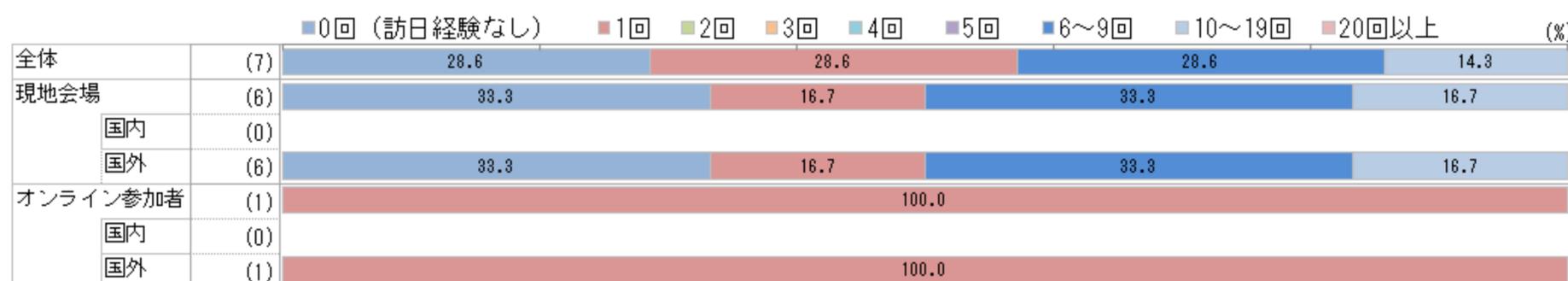
感染症対策	(1) 取組内容	①一般社団法人日本コンベンション協会、「コロナ禍におけるMICE開催のためのガイドライン」に準じて感染対策を講じた。 ②全体的に人の密集、接触を避ける、換気施策をベースとした。③受付は特に人が滞留しやすいため、 受付時はQRチェックインシステムと参加登録システムから名札をPDF化し事前送付し、事前にご自身で出力して持参いただいた。 ④名札ケースや必要な配布物は所定の位置におき、正常チェックインした参加者にご自身で取っていただいた。⑤基調講演など聴講者が多くなる場合は、サテライト会場を設置し室内の人数を調整した。⑥セッション会場内の消毒、トイレや水場などはスタッフにより定期的に清掃。⑦ウェルカムパーティー、コーヒープレイクでは、同じ内容の卓を複数用意し1か所に密集するのを防いだ。⑧ウェルカムパーティー、コーヒープレイクでは、茶菓子や飲み物は迷わずすぐに取りれるような配置。(内容が分かる茶菓子を置く)⑨ウェルカムパーティー、コーヒープレイクのようなネットワーキング時は、換気しつつ天候に応じて屋外へも誘導できるようお互いの距離を保てるようスペースを広くした。⑩バンケットでは会場ホテルの対策に準拠しながら、1テーブルに着席する人数を少なくし、距離感を保てるようにした。⑪海外参加者へ一般的な日本人の感染対策を事前に情報提供し、海外参加者が居心地悪くなる状態を作らないように配慮。(規制なしでのマスク着用率の高さなど)
	(2) 取組による成果	久々に対面開催ということで、想定より多く現地来場があった。事前に感染症対策を行う旨をアナウンスし当日配布プログラムにも記載していたためか、日本人だけではなく海外参加者もマスク着用を行っていただけのため、お互いに安心できる雰囲気であった。また、ウェルカムパーティーは屋外ウッドデッキと室内の両方で行い、料理も一人盛りで提供したため、一か所に長時間滞留するようなことは避けられた。コーヒープレイクも同様に、同じドリンク内容、茶菓子で2台用意したため、目立った混乱はなく、適度な距離感で交流できる状況が出来た。また、バンケットは市内ホテルで開催したが、換気を想定し、天井がかなり高い宴会場、参加者の間にアクリル版対応など行ったため、参加者から不安の声は特になく、今後に繋がる親交を深めていただく機会を作れたと思われる。会議運営の中でも密になりやすい受付デスク周辺も、なるべくスタッフとの接触は減らす QRチェックインシステムを導入し、誘導係のスタッフも配置していたため、長蛇の列を作ることなくスムーズ行うことが出来た。 この受付方法は、 コロナ禍前から存在しており、名札を参加者各自で出力準備してもらうという作業をお願いしづらかったが、今後は非接触受付運営ということで定着させられる雰囲気 が作れた。
	(3) 課題	受付、バンケット会場、セッション会場の座長席にはアクリル版を入れていたが、それを挟んでの会話は声が聞こえずらいので、結局近づいて聞かなければならない状況もあった。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	オンライン参加者は現地会場の雰囲気を感じられないため、基本的には通常業務の合間に目的の発表だけ視聴するようなスタイルになりやすく、国際会議に参加している実感が薄くなりがちである。そのため、セッションの際は会場の雰囲気が分かるカメラを導入し、企業展示ブースへのインタビュー生配信など同じ時間を共有している雰囲気を出し、継続してオンライン上で会議に参加したくなるよう映像を提供した。それにより、札幌の風景に触れる機会が増えるため、その後の現地参加意欲を掻き立てたい。また、 北海道大学ラボツアー動画作成を学生中心で実施し、オンラインだからこそ見られるものを中心に編集し、公開する。 それにより、今後の来札、ひいては北海道大学への留学、共同研究を促すきっかけとする。
	(2) 取組による成果	配信した動画はYouTubeで閲覧できるようにしていたが、 計9本の動画を公開し平均再生数43回 であった。オンライン参加者が全員が閲覧しているわけではないが、半数近くの視聴はあったということで、オンライン参加者視聴率50%前後ということで、セッションだけの配信よりは現地の雰囲気をオンライン参加者へ伝えることが出来たと考える。 Welcome Party:67回再生、受付の様子:63回再生、41回再生、企業展示インタビュー1日目:55回再生、企業展示インタビュー2日目:62回再生、コーヒープレイク:37回再生、北海道大学構内お散歩:13回再生、札幌駅から北海道大学までのお散歩:32回再生、ラボツアー:38回再生。
	(3) 課題	現在はCOVID19のため参加できない事情もある方もいるが、煩雑な事務作業を経てでも来日された方もいるため、 オンラインを選択された方が感じるメリットとして「移動がない」点があるため、そのメリットを超える訪日の魅力を「サービス」部分で伝えるのは大変難しい課題 であると感じた。
開催地との連携	(1) 取組内容	札幌コンベンションビューローとの連携として、①札幌市独自のハイブリッド運営(一部機材対象)助成金申請② ネットワーキング や上記 ラボツアーを市民への周知に関わる企画立案で協働 ③コンベンションビューローの「カーボンオフセットプログラム」を会場内で実施(札幌への移動に対するカーボンオフセットの募金を設置し、募金者へは北海道の四季折々のポストカードをプレゼントする)を行った。
	(2) 取組による成果	コンベンションビューローより、コロナ禍以降、この人数の海外参加者がいる会議は初めてと情報をいただき、札幌のMICE再稼働の口火を切るイベントとなった。企画立案で協働することにより、助成金情報や「カーボンオフセットプログラム」などご紹介いただき、積極的にサポートいただくことが出来た。
	(3) 課題	今回事業採択から本番まで時間がなかったため、一般市民へ浸透させる有効な施策について一緒に検討いただくことが難しかった。また、当初の構想では、ビューローが事務局になっているボランティア制度も活用を検討していたが、コロナ禍では活動も中止ということで、会議運営のボランティア活動を通じて、開催地住民と交流が果たせなかったのは時期的な問題となるが、課題であると感じた。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	上記の内容と重複するが、作成したラボツアー動画は今後も北海道大学の研究の一旦を見ていただき北海道大学への入学を検討してもら要素として今後の活用を期待しつつ、オンライン開催のメリット、そして世代における意識の違いを認識し今後に繋げる
	(2) 取組による成果	リサーチについては、現状有効な回答が多くは得られていないため総括が難しいが、 オンラインは「すでに知っている者同士」であればいいが、初めて会う人とは関係が深まらないという意見 や、海外からの学生の参加も多く、初めての来日が今回の会議であった学生もいたことから、やはり現地開催はMICEの意義である知的交流を考えると、まだまだ重要であると認識した。また、オンライン参加者には時差を考慮し、事前提出動画を運営側で再生するパターンでも発表と認めたと、 数名は時差が理由ではなく「別の出張がある」「授業がある」という理由での動画再生対応 となった。本来現地開催のみであれば「欠席」と見做される行為であるため、 今後はそのようなサービスは学術会議の目的から外れないかなど要検討事項 が見えてきた。また、札幌はMICEイベントで有効な人材育成が急務であるため、現場業務を提供できたことは、今後の(2022年時点では誘致活動段階の)札幌オリンピックまで続く人材育成に寄与したと思われる。
	(3) 課題	地元人材育成にも寄与しつつも、感染症対策でなるべく「非接触」という点が、大きなジレンマだと印象を受けた。スタッフも淡々と会議運営するのではなく、参加者との交流も多文化を知る意味で重要な要素であったが、今回はそれを極力「しない」「アクリル版で仕切る」感染症対策であったため、通常より十分な交流が出来ていないと感じた。

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

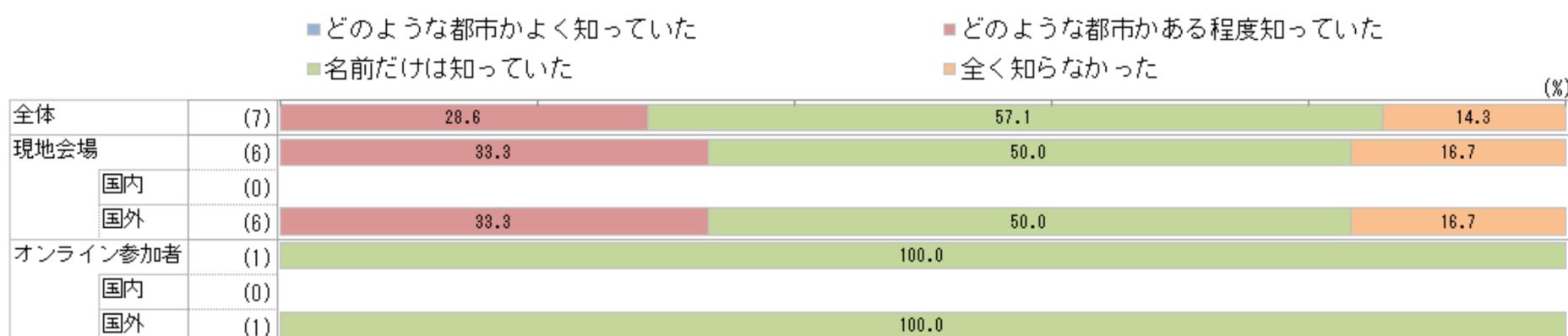
サステナビリティ	(1) 取組内容	コロナ禍では様々なオンラインイベントの形やプラットフォームが登場するなか、テクノロジーに惑わされ手段が目的になるようなことはせずに、また参加者の年代による意識の違いも考慮しながら、本来の国際会議開催の目的に立ち返り、持続可能な会議運営を目指すようにした。また、上記の学生によるラボツアーは、この分野の研究者を札幌に呼び込む、または若手研究者間の横の連携を促し、今後の活発な研究に繋がる一役となることを期待している。
	(2) 取組による成果	今回はハイブリッド運営のため、現地会場以外にオンライン会場も存在し、シンプルな構成で講演情報があり発表会場への入口、各講演毎に質疑応答が入力出来るプラットフォームを利用したが、オンデマンド配信期間も考慮しても質疑の活用はあまりなく、セッション毎のアーカイブ動画の再生は平均7回程度であった。その結果から少なくとも今回の会議においては、過度なデジタル化は費用に見合わない結果を得られた。その他、上記と重複するが、札幌コンベンションビューローの「カーボンオフセットプログラム」を受付デスク横に置き、参加者へ案内する「サステナビリティ」への寄与を印象づけられた。
	(3) 課題	市民向けの公開講座を実現できなかった点は今後の課題と感じる。

【実証事業⑤ 第10回先端エンジンシステムにおけるモデリングと診断技術に関する国際会議個別アンケート】

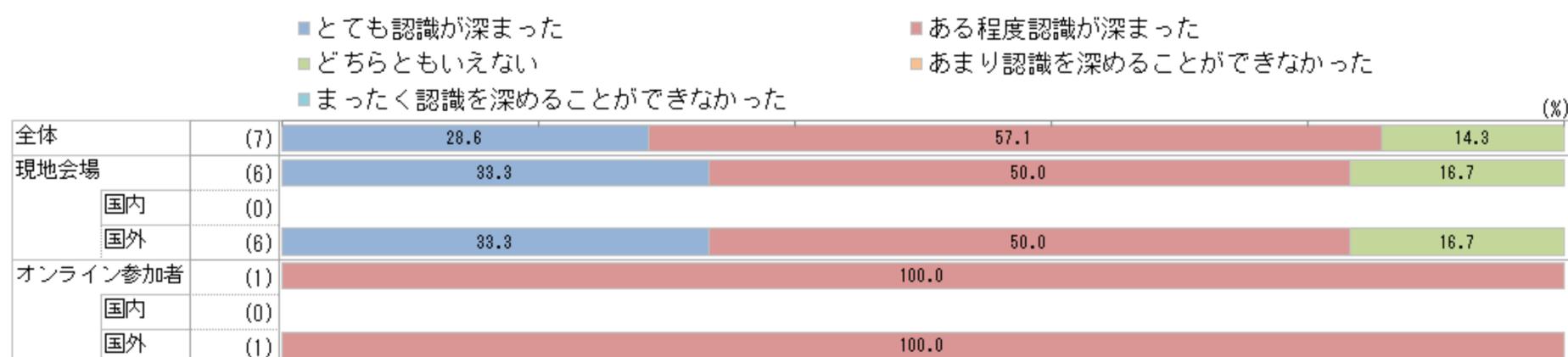
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか。(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



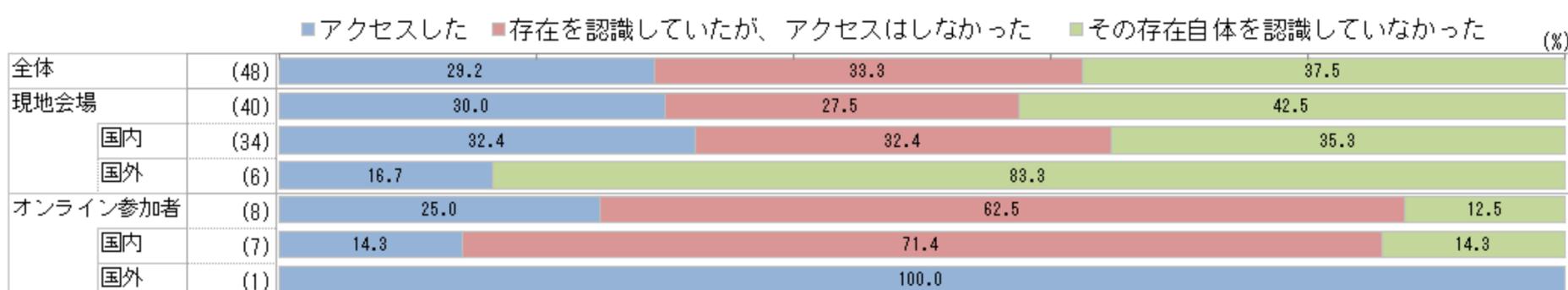
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(札幌市)のことをどれくらい知っていましたか



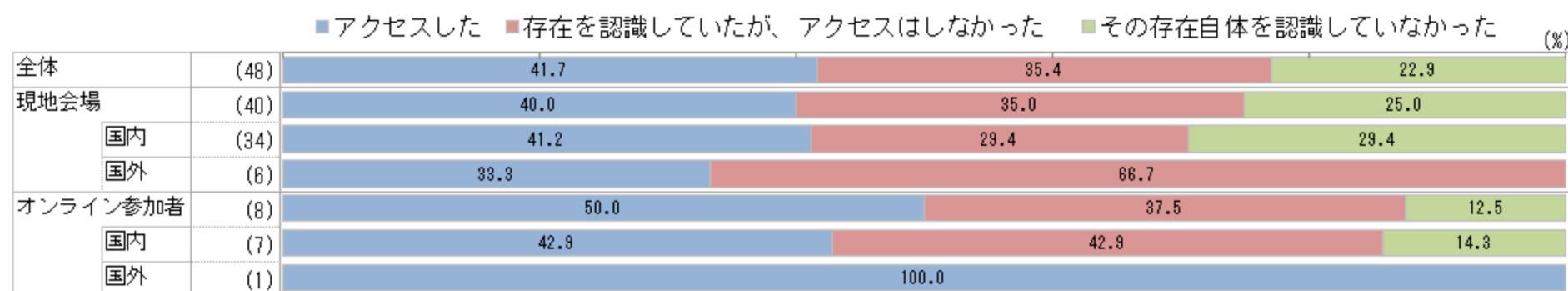
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(札幌市)への認識が深まりましたか



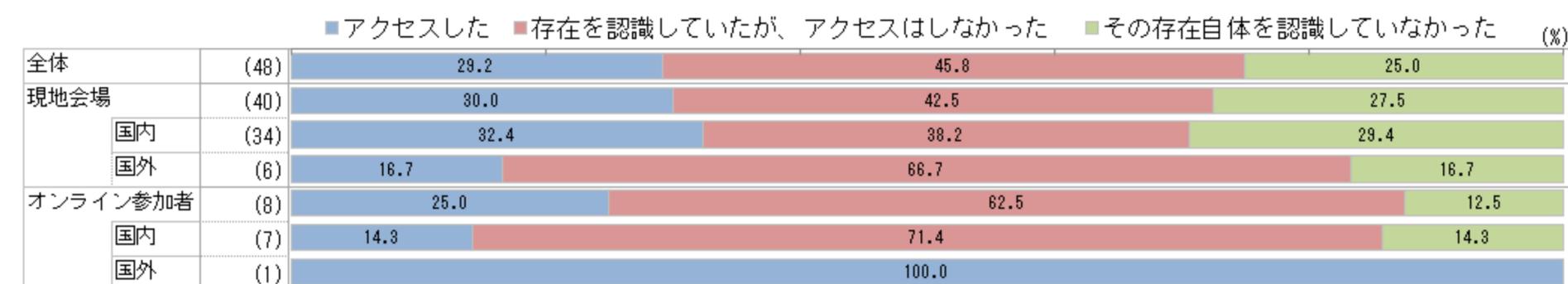
Q. あなたは会議公式サイト上の「北海道大学エンジンシステム研究室によるラボツアー動画」にアクセスしましたか



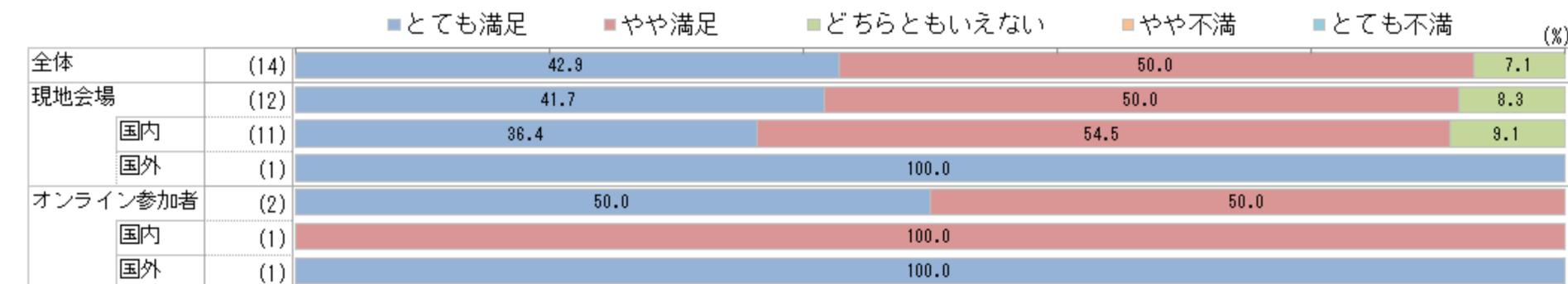
Q. あなたは会議公式サイト上の「会場の様子のライブ配信」にアクセスしましたか。



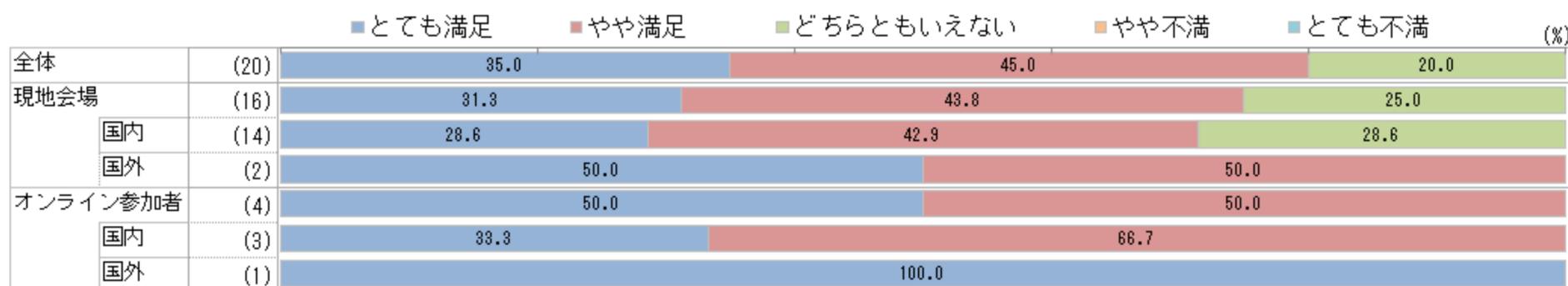
Q. あなたは会議公式サイト上の「バーチャル展示会」にアクセスしましたか



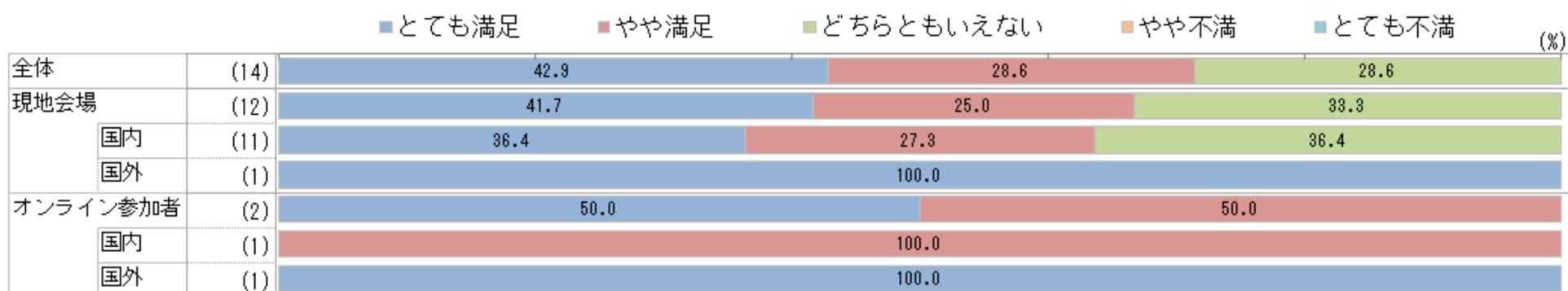
Q. 「北海道大学エンジンシステム研究室によるロボツアー動画」の満足度を選択してください



Q. 「会場の様子のライブ配信」の満足度を選択してください

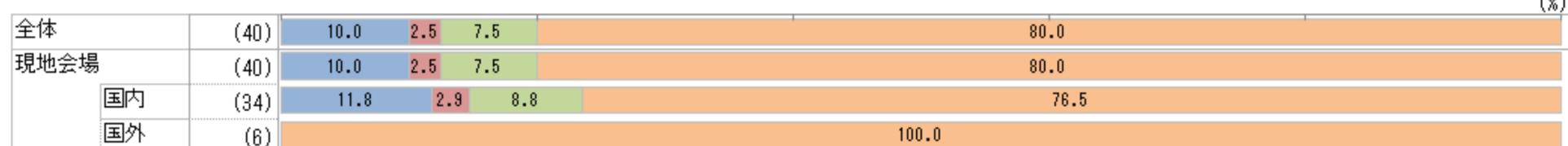


Q. 「バーチャル展示会」の満足度を選択してください



Q. あなたは、会場に設置された募金箱への募金によるカーボンオフセットプログラムに参加しましたか

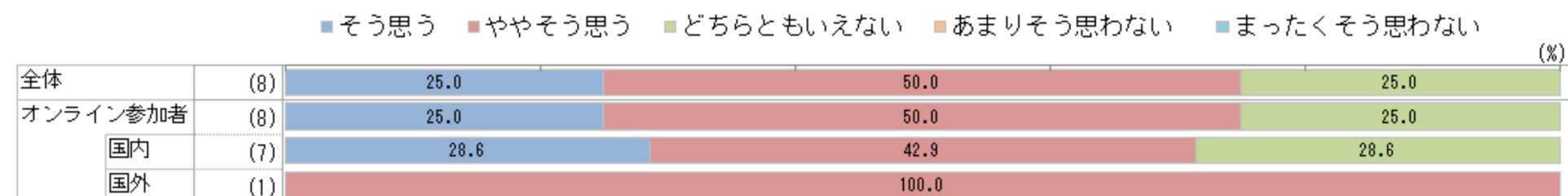
- プログラムに参加し、北海道の風景が印刷されたポストカードを受け取った
- プログラムに参加したが、ポストカードは受け取らなかった
- 会場で募金箱を目にしたが、参加はしなかった
- そうしたプログラムの存在自体を認識していなかった



Q. あなたは、今日における国際会議はサステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだと思いますか



Q. この会議をきっかけとして今後、観光等の目的で開催都市(札幌市)を実際に訪れてみたいと思いましたか



【実証事業⑥】 第26回国際膵臓学会／第53回日本膵臓学会大会

主催者名	近畿大学 医学部 外科 胆肝膵部門		
会期	7月7日～7月9日	分野	医学
主たる開催都市	京都市	主たる会場名	国立京都国際会館

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	916	498	1414
外国人	54	93	153
計	970	591	1567

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	サーモグラフィー等の検温機器、二酸化炭素濃度測定機器等のリース	来場の際、非接触型のサーモグラフィーを設置し、モニターに検温結果を表示。会場の換気状況を確認するために、二酸化炭素濃度計を設置。測定結果が1,000ppmを超えそうになると、メインエントランスを開放し、二酸化炭素濃度が高くなりすぎないようにした。感染防止及び参加者に安心いただけるように、参加者自身でも確認できるようにパネルを設置。
②	参加者の事前登録システム(ワクチン接種情報の登録等)	事前の参加登録を促すために、早期登録と後期登録の期間に分け、早期登録者は参加費を安く設定した。 ・参加登録の項目に参加の予定区分をヒアリング。 区分は「現地」「WEB」「現地・WEB」とし、現地会場の来場者数を予測し、1,500名全員が現地参加する場合は、来場者制限などの運営仕様を検討した。 ・現地会場での参加受付は無しとし、すべてオンライン参加登録とした。
③	非接触受付システム	参加登録はオンライン(WEB)のみとし、参加登録後にQRコードを参加登録者にメールで送り、スマートフォンに表示されるQRコードをかざしてネームカードの発券をする。現地会場でのネームカード発券は機器を用いて、スタッフとの接触を避ける仕組みにした。
④	リアル参加を仮想体験できるバーチャル会場	主たる講演会場において、全世界で視聴可能な遠隔登壇システム・配信サイトを構築。高いコミュニケーションを目指した。

①



②



③



④

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

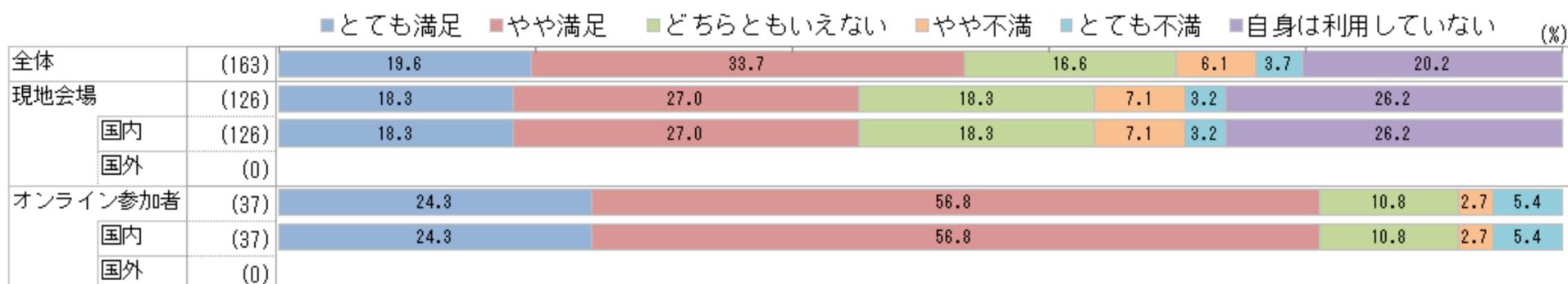
感染症対策	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・登壇者の席の前と間にアクリル板を設置することで感染対策を実施した。 ・登壇者がかわるごとにマイク及びPCなどの使用機材のアルコール消毒を行った。 ・昼食のお弁当配布では、参加者自身がお弁当を取るようアナウンスを行った。セッティングはスタッフで行う。 ・検温器の設置、アルコール消毒及びマスク着用の案内看板を各所に設置し、参加者自身でもできる感染対策を促した。 ・会場内での昼食をとる際も、席の間隔をあけた上で、黙食を呼びかけた。 ・お弁当と飲み物のセッティング時は手袋の着用をした。
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・飛沫感染など防ぐことができた。 ・検温器の設置で高熱者の来場を防ぐことができた。 ・海外の登壇者はマスクを外すことがあり、使用機材のアルコール消毒をすることにより、次の登壇者に安心してもらうことができた。 ・飲食物の受け渡しに発生する接触を極力でき、手袋着用により参加者も安心してお弁当を受け取ることができた。 ・会場内での参加者は全員マスクを着用してもらえた。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当以外の配布物も多く、会場前が混雑した時があった。飲食を伴うセミナーでは、人同士の間隔をあけるように、足元シールを設置する必要も検討する。 ・今回、マスク案内の看板を20枚設置をした。一方で黙食の案内は、講演会場内のスライドで流した。黙食の案内も会場前に看板として設置できれば、感染対策としてさらに効果的に周知することができたと感じる。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・WEBからも現地に来場した際と同様に、LIVEで視聴できるように特設サイトを作成した。 ・WEB視聴者も質疑に参加できるように、WEB特設サイトからチャットで質疑ができるような配信サイトを作成する。 ・時差ケア:海外との時差を考え、プログラムの開始を7:10~にする。全セッションの内、およそ98%は発表、質疑、司会を英語とした。 ・現地参加者とWEB参加者が双方向のコミュニケーションを行えるよう、WEB参加者はチャットにて発表者に対して質問やコメントを行い、現地発表者が回答する。 ・現地会場のフロアマイクの音声はWEB参加者に漏れなく聞こえるように音声ラインをセッティングし、WEB参加者の臨場感を確保する。 ・渡航に際してVISA取得のサポートを行う。 ・現地会場にはベジタリアン食を用意し、参加者の多様性に配慮する。
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・WEBからの参加も受け入れることで、現地の混雑を緩和させることができた。 ・早朝のセッションでも海外からのチャット質疑があった。 ・現地参加者とWEB視聴者の討議は、プログラムの司会者がチャットの質疑を読み上げ、現地の参加者や発表者は会場のマイクを使用し、現地、WEBの討議を実現することができた。 ・VISA取得サポートではERFSの申請等複雑な手続きがあるが、旅行代理店と連携し、来日希望者は問題なく来日することができた。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・WEB視聴者がチャットではなく、音声で質疑をできる仕組みがあれば、WEB視聴者もさらに活発にコミュニケーションがとれたのではないかと感じる。WEB視聴者のリアルタイムの音声による質疑を実現するには、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使用し、そのルームを管理するスタッフとPCなどの機材が追加で必要になる。会場付近でも機材スペースの確保が必要になり、初期段階からの実施計画案に盛り込むことが必要になる。 ・VISA取得サポートでは、ERFSの申請や 厚労省、外務省、各国の渡航制限など最新情報が分散されているので、1人1人の対応に相当な時間と業務を要した。
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>京都文化交流コンベンションビューロー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誘致サポート(誘致助成金、京都の素材提供) ・MICE京都モデル(感染対策に留意したMICE実施ガイドライン)に沿ったユニークベニュー活用の協力 ※NHKより取材を受けている。
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・全員懇親会では、ビューローの協力もあり、舞妓を手配し、海外参加者に日本文化を体験してもらえた。また、県外の参加者には、京都らしさを経験してもらえた。 ・全員懇親会の会場は 京都水族館を利用。会長招宴では平安神宮会館を利用し、平安神宮の散策もしてもらい、特に海外の方には日本文化を体験してもらえた。会場は京都文化交流コンベンションビューローに紹介してもらった。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニークベニューの活用では参加者の輸送計画とその費用が課題。 ・クローズドの招宴では、海外招待者の来日が直前で変更になることもあり、最終の手配食数を調整することに困難があった。 ・京都文化交流コンベンションビューローの開催助成金と京都らしいプログラムの助成金を利用。本助成金も含め、ビューロー担当者にも助成金申請のサポートも良かった。

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

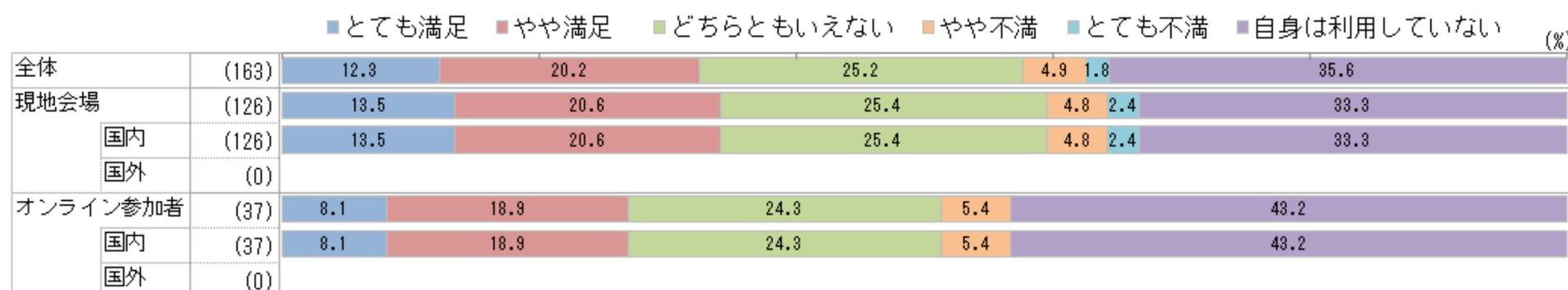
レガシー 効果の 創出	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・懇親会参加者にグルメカードを配布して、京都市内の飲食店で食事をしてもらう計画。そのため、Party会場は軽食とドリンクのみの提供とする。 ・京都水族館でGala Partyを実施し、京都の観光をアピール。アトラクションとして、イルカショーや舞妓の踊りや写真撮影をし、京都らしさを堪能してもらう。
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・グルメカードの配布は130名に配布することができた。コロナ渦ではあるが、130名×3000円(グルメカード1人あたり)に配布をし、39万円以上は地域の飲食店へ波及効果があったと推測される。 ・舞妓の写真撮影では、海外の参加者の希望が多く、行列になるほどであった。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ渦のため立食形式の飲食を制限されている施設もある様子。そのため、Gala Partyの参加者人数は300名想定のところ、その半数の150名程度であった。 ・舞妓のステージを1か所にしていたため、一時人口密度が高くなった。参加者の高密度を回避するために、今後は舞妓のステージを複数箇所設けるなど、参加者の分散ができればよかったと感じる。
サステナ ビリティ	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・脱ペットボトル運営(運営にかかわる部分の飲み物は、ペットボトル製品を使用しない。また、会場の京都国際会館でもペットボトル自販機は廃止している。) ・紙の抄録集を廃止し、アプリ、WEBを用いた抄録集としている。 ・多くの学会で見られる「食品ロス」を削減するため、これまで実施していた朝食の無料配布を取り止め、販売制とすることで個数を少なくする。ベジタリアン食を用意し、参加者の多様性に配慮する。 ・スタッフに障がいのある方を起用した。
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・業務の制限や一部サポートは必要ではあったが、障害者でも当日の運営スタッフとして働いていただけることを実証できた。 ・抄録冊子は、発表要旨のページを含め印刷ページが350ページほどになるが、プログラム部分のみにしたことにより100ページで収まる。250(ページ)×1200部(印刷部数)=300,000枚の削減に成功した。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の障害者起用数は3名だったため、実証できた人数が少ない。 ・一部の参加者からは紙の要旨を求める声があった。製本まではいかなくても、少部数は印刷したものを会場で準備できていれば、一層の参加者満足につながった可能性がある。

【実証事業⑥ 第26回国際膵臓学会／第53回日本膵臓学会大会 個別アンケート】

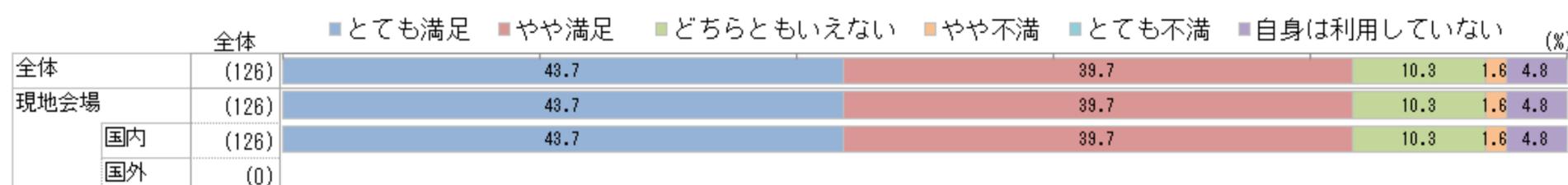
Q. WEB配信特設サイト 今回、参加者向けに導入されたシステム等に対する満足度を選択してください



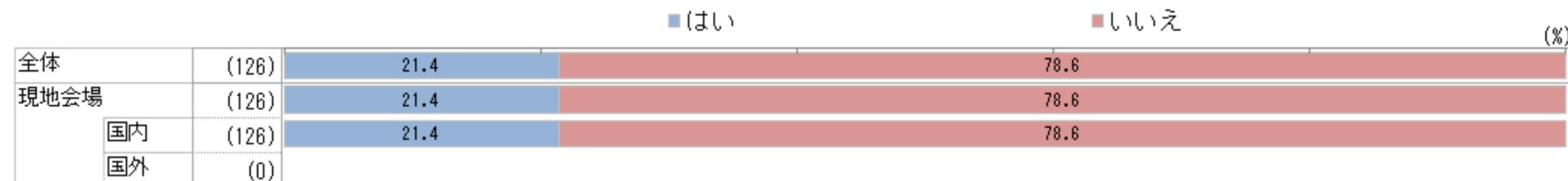
Q. 遠隔登壇システム 今回、参加者向けに導入されたシステム等に対する満足度を選択してください



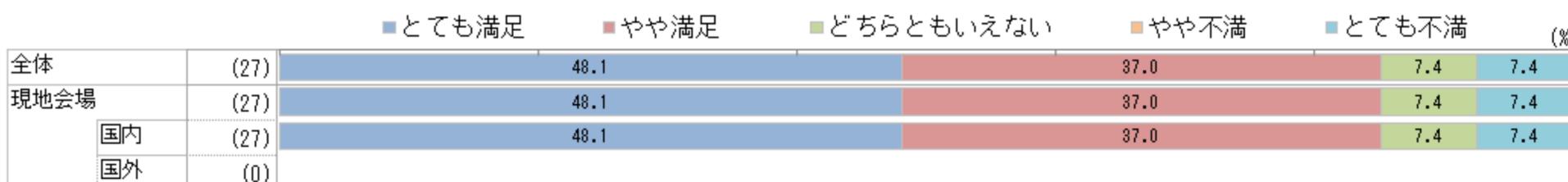
Q. 参加証自動発券機 今回、参加者向けに導入されたシステム等に対する満足度を選択してください



Q. あなたは、7月8日の夜に開催された全員懇親会(京都水族館)に出席しましたか



Q. 全員懇親会の満足度を選択してください



Q. あなたは、歴史的建造物・文化施設・公的空間等の「ユニークベニュー」における会議やレセプションの開催に魅力を感じますか

■ そう思う ■ ややそう思う ■ どちらともいえない ■ あまりそう思わない ■ まったくそう思わない (%)

対象	人数	そう思う (%)	ややそう思う (%)	どちらともいえない (%)	あまりそう思わない (%)	まったくそう思わない (%)
全体	(163)	29.4	32.5	25.2	6.7	6.1
現地会場	(126)	32.5	30.2	23.8	7.9	5.6
国内	(126)	32.5	30.2	23.8	7.9	5.6
国外	(0)					
オンライン参加者	(37)	18.9	40.5	29.7	2.7	8.1
国内	(37)	18.9	40.5	29.7	2.7	8.1
国外	(0)					

【実証事業⑦ 25th IUPAC International Conference on Physical Organic Chemistry】

主催者名	ICPOC25実行委員会		
会期	7月10日～7月15日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	広島市	主たる会場名	広島市文化交流会館

1)参加者数

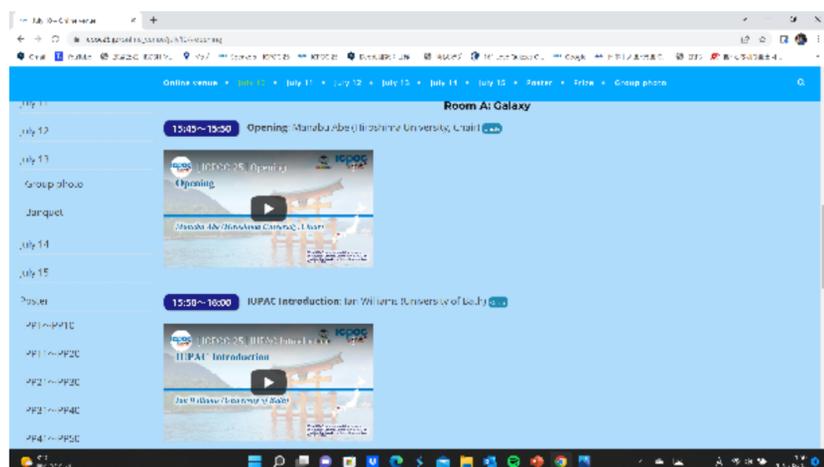
	実地	オンライン	計
日本人	219	25	244
外国人	42	45	87
計	261	70	331

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(パンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	オンライン展示会	オンライン展示会:WEBを利用し、口頭発表/ポスター発表を国内外で見ることができるよう動画管理を行う。それに伴いオペレーターとディレクターを広島会場に置く。この方たちにより、企画構成/現場演出を指揮頂く。その際の機材費、出張旅費/宿泊費を負担する。
②	国際会議参加者が自ら抹茶を点てる体験プログラム	開催地のレガシー効果の向上に資する取組み:昼休憩に参加者本人が抹茶を点てる体験プログラム(盆点前)を4日間実施。Registrationにおいて、茶道点前披露/英語により茶道説明、参加者に抹茶を提供。(高級旅館での抹茶サービスのイメージ)の実施。

①



②

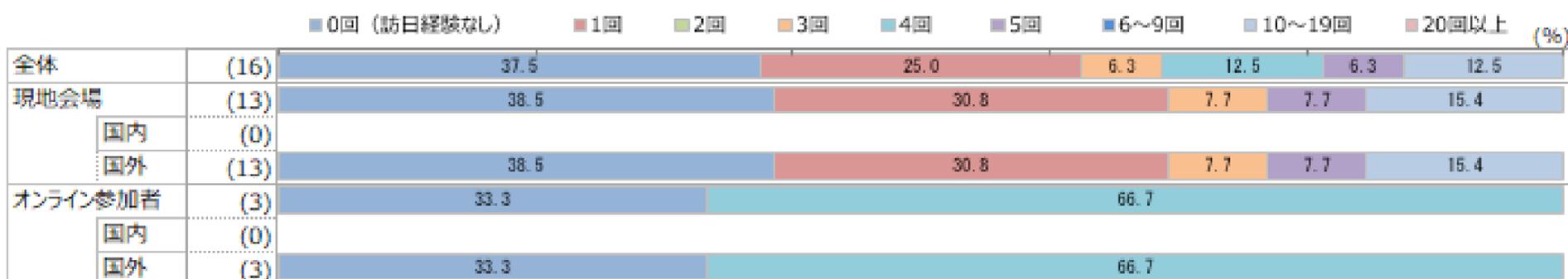


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

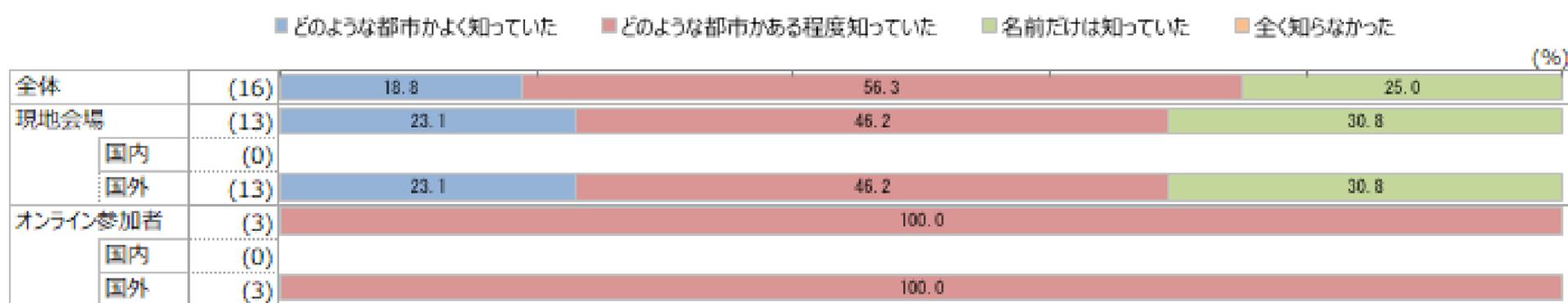
感染症対策	(1) 取組内容	<p>【受付】会場である広島市文化交流会館の入口に、体温計及びアルコール消毒液を設置。さらに2階の国際会議受付において、体温計を設置し、体温を計った。マスクが必須である旨、看板を設置。発表後、毎回、発表テーブル、演台、マスク、発表席まわりを除菌した。会場は、広島市の施設で、市の指示を遵守し、すべての部屋でスクール形式70%を下回る収容人員とした。会場において、アルコールを伴う飲食なしとした。会期中、毎朝、会場に入る前の体温測定と消毒・マスクの着用。</p> <p>【ポスター会場】通常、缶ビール等が提供されるのが常であるが、会場のみならず、ホワイエ/ロビーで実施のポスターセッションもアルコールなしとした。</p> <p>【コーヒーブレイク】コーヒーカップは蓋つき、参加者が自分でコーヒーカップを取るような形にした。お菓子は一つずつ個別包装のものとした。</p> <p>【バンケット】ガラスの仕切りを用意。十分なスペースを確保。</p> <p>【有事対策】事前に会場でコロナ関連の事が起こった場合の検査場所や陰性証明の取得場所などを調べ、参加者に配布した。</p> <p>【主催者側】毎朝、朝礼において体調確認を実施。健康管理促す。</p> <p>【Registration】キャッシュの利用を極力減らす。登録受付は、本人が自分の名札を取る。Onsiteの登録受付は、WEB経由で行った。</p>
	(2) 取組による成果	会期内/会場内にコロナ患者を出すことはなかった。全員が当たり前にマスクをしていた。
	(3) 課題	7/10-7/15開催は、コロナの第7波の谷間の開催であった。2日後の週明けには拡大傾向にあった。そうなれば、コーヒーブレイクなし、welcome receptionなしになっていたかも知れない。その時の状況にあった対応が求められる。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	参加者が満足のいく発表ができるようインターネット環境やOnlineシステムを最善の手段を講じた。但し、広島市文化交流会館の施設が古く、準備の段階から時間を要した。初日はインターネット接続に不手際があったが、二日目には十分な環境を用意できた。プロの担当者を東京から招き、各部屋1名を常駐できたことは大きい。
	(2) 取組による成果	参加者から大変満足のいく国際会議(ハイブリッド)運営であったと多くの方からお礼、お褒めの言葉を頂いた。
	(3) 課題	経費負担が大きい。
開催地との連携	(1) 取組内容	コンベンションビューローからの助成金を含む各種支援を受けることができた。当実証事業についても情報提供くださり、申請することができた。(体温測定器の無料貸し出し・無料でマスクの支給(参加者1枚)・ボランティア通訳の派遣2日間/2人・マップ等の無料提供・広島市長からの歓迎用メッセージ・広島平和記念資料館の無料拝観など)
	(2) 取組による成果	体温測定器の無料貸し出しは、会場での体温測定に役立った。プログラムに市長の歓迎用メッセージを掲出した。会場内でボランティアにより観光案内を行ってくださった。抹茶体験では、一般市民との交流ができたと思う。広島通訳ガイド協会から4名に来て頂いた。各参加者からの茶道に対する質問にも、力強い立派な返事をされていた。よいメンバーで受入れができた嬉しい限りであった。本物を見て頂いたと思う。
	(3) 課題	コロナ禍にあったため、茶道の呈茶や抹茶体験には、非常に気を使った。お茶碗は1度洗い、アルコール消毒後、再度洗剤で洗い、水洗いし、お湯で温めた。呈茶を行うスタッフは手袋をつけて行った。茶しゃく、茶筌他、毎回使用後アルコール消毒を行った。一週間遅い開催であったら、どのように気遣っても実施はできなかったと思う。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	国際会議が目指すものは、その会場における発表環境を十分に整え、研究者が自身の研究を存分に発表し、各参加者とともに磨きあげる議論を展開し、将来に向かう研究に繋がり、その結果を社会に還元することである。その部分は、著名な研究者と若い研究者の熱い議論の場となったことから、重要な国際会議になったと自負している。世界の物理有機化学における先導的な役割を担う国際会議になった。相応しい招待者を招き、半数はWEBになったが、魅力的な構成であった。・初日に、会場において、「茶道点前と英語により説明」を行った。ここは日本であり、日本の「道」と触れ合う機会を創出した。また、立礼席と池坊の華を会場内に設置し、日本を感じてもらった。
	(2) 取組による成果	どこの場においても、熱心な議論と温かい場の空気を感じた。同じ研究者が集い、議論する仲間の集まりであることを実感した。 日本文化を見る/感じるきっかけになったと思う。
	(3) 課題	コロナ禍により、通常できることができないこともあったが、人が集う・協議するパワーを感じた。
サステナビリティ	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・第三世界からの参加者は、20%の参加費用割引を行った。 ・小さなお子様をもつ女性の研究者のために、育児室を設け、ベビーシッターにお子様を預けることができるようにした。 ・これからの世界を担う若い研究者が参加/発表できるよう学生は非常にリーズナブルな参加費用とした。 ・調和的進歩の一翼を担う「化学」の発展を図る国際会議である。 ・コーヒーブレイク等では、自然素材の紙カップ/スプーン等を利用した。 ・SDGsの観点で言えば以下の項目を化学的研究により推進 ○3:すべての人に健康と福祉を ○6:安全な水とトイレを世界中 ○7:エネルギーをみんなにそしてクリーンに ○9:産業と技術革新の基盤をつくろう ○12:つくりたい責任つこう責任 ○15:陸の豊かさを守ろう
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・100名を超える若手研究者が参加し、熱い議論を交わした。 ・小さなお子様をもつ、女性研究者から、安心して国際会議に参加できたとお褒めの言葉を頂いた。 ・物理有機化学において、大きな飛躍の国際会議であった。
	(3) 課題	・ICPOC25自体が、サステナビリティを図る重要な国際会議である。通常隔年開催であるが、コロナ禍により、前回から4年の後の開催となった。ハイブリッドの活用/Onsiteの開催で今後はしっかり隔年開催ができることを望む。

【実証事業⑦ 25th IUPAC International Conference on Physical Organic Chemistry 個別アンケート】

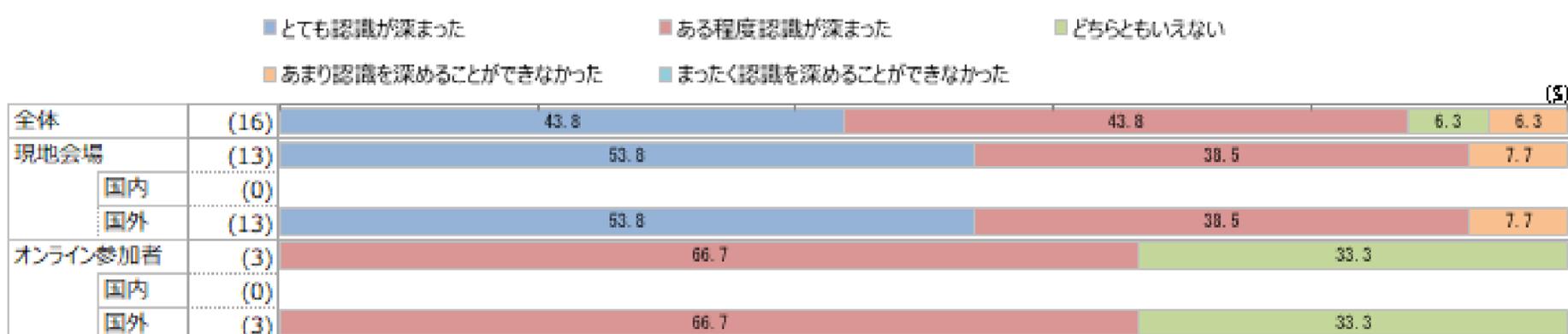
Q.あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



Q.開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(広島市)のことをどれくらい知っていましたか



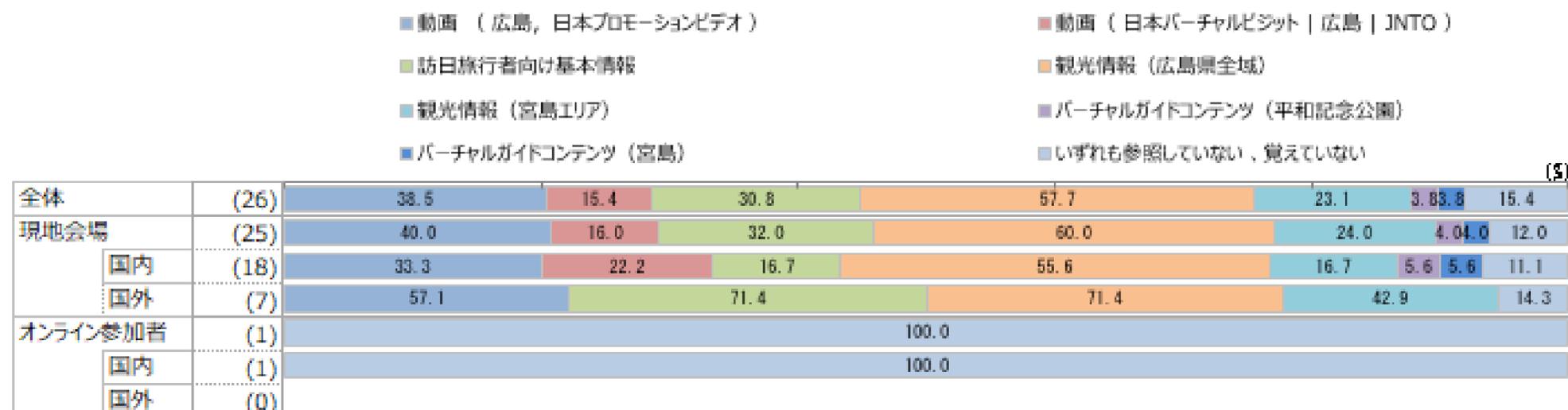
Q.この会議に参加をしてどのくらい開催都市(広島市)への認識が深まりましたか



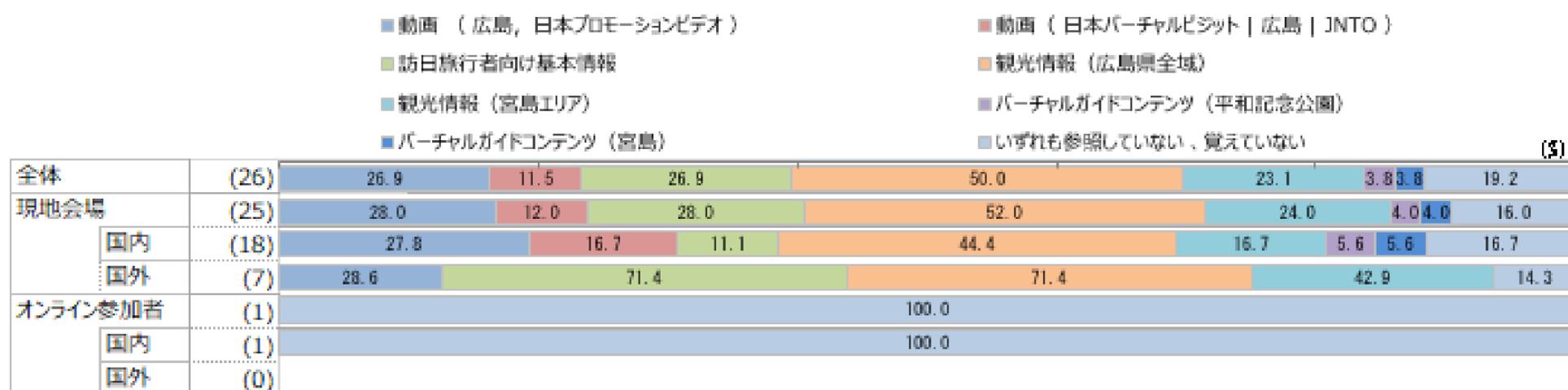
Q.あなたは、会議公式サイト上の Hiroshima/General Information を会議開催前に閲覧しましたか



Q. Hiroshima/General Information に掲載されている情報やURLのなかで、あなたが会議開催前に実際に参照したものを全て選択してください



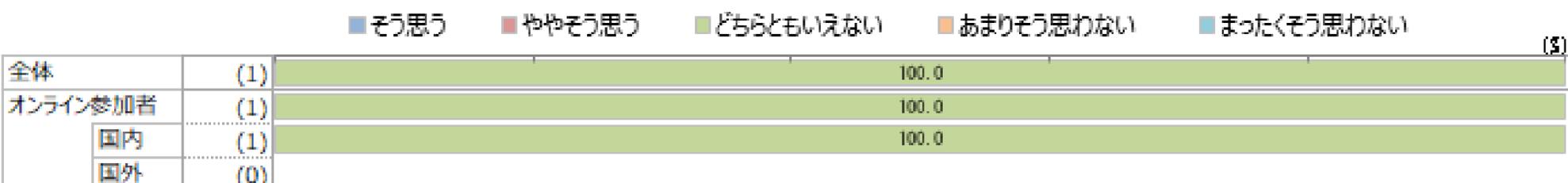
Q. そのうち、あなたの役に立った、もしくは魅力的であったものを全て選択してください



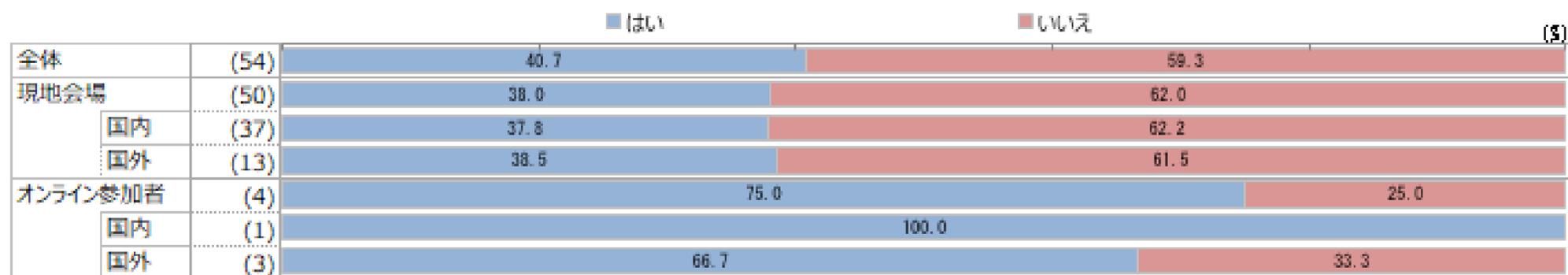
Q. Hiroshima/General Information は、開催都市(広島市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



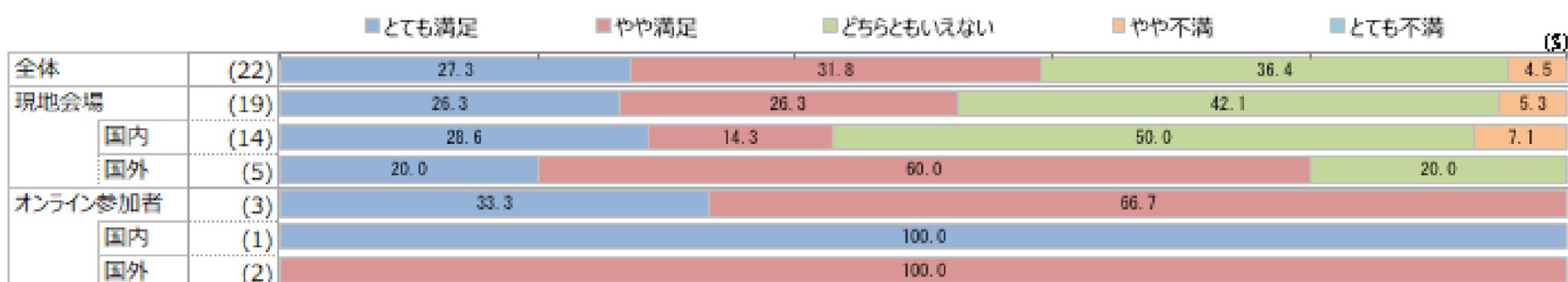
Q. Hiroshima/General Information を閲覧し、今後、観光等の目的で開催都市(広島市)を実際に訪れてみたいと思いましたか



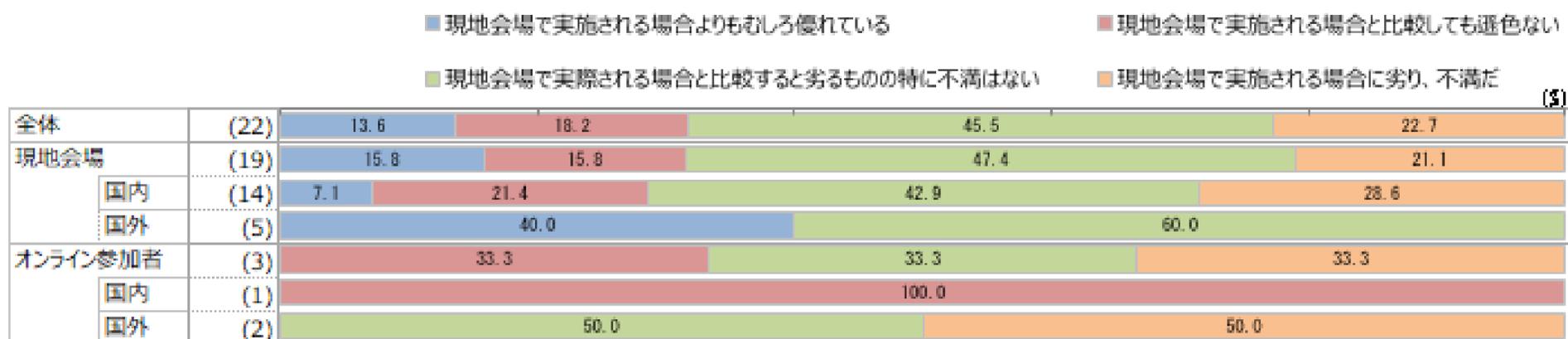
Q. あなたは、オンライン会場におけるポスター発表(Online Poster Presentation)にアクセスしましたか。



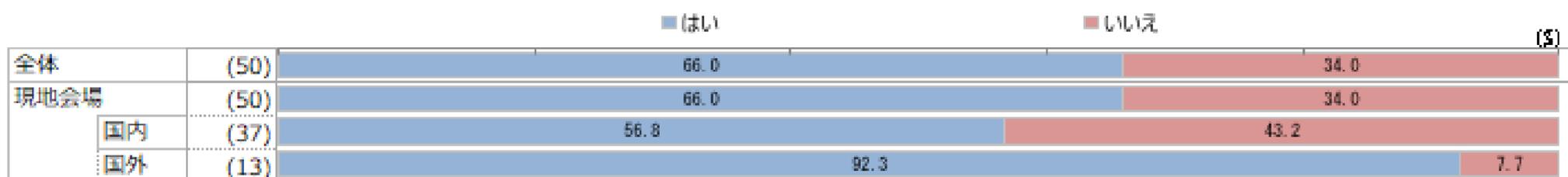
Q. オンライン会場におけるポスター発表(Online Poster Presentation)の満足度を選択してください。



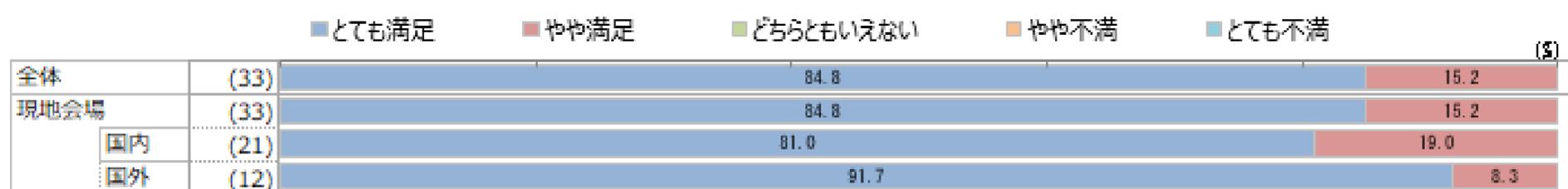
Q. オンライン会場におけるポスター発表(Online Poster Presentation)について、あなたはどのように感じましたか。



Q. あなたは、7月13日の夜にクルーズ船上で開催された懇親会に出席しましたか。



Q. 懇親会の満足度を選択してください。



Q. あなたは、歴史的建造物・文化施設・公的空間等の「ユニークベニュー」における会議やレセプションの開催に魅力を感じますか。



【実証事業⑧ The 8th International Symposium on Metallomics】

主催者名	The 8th International Symposium on Metallomics 組織委員会		
会期	7月11日～7月14日	分野	医学
主たる開催都市	金沢市	主たる会場名	金沢商工会議所会館

1)参加者数

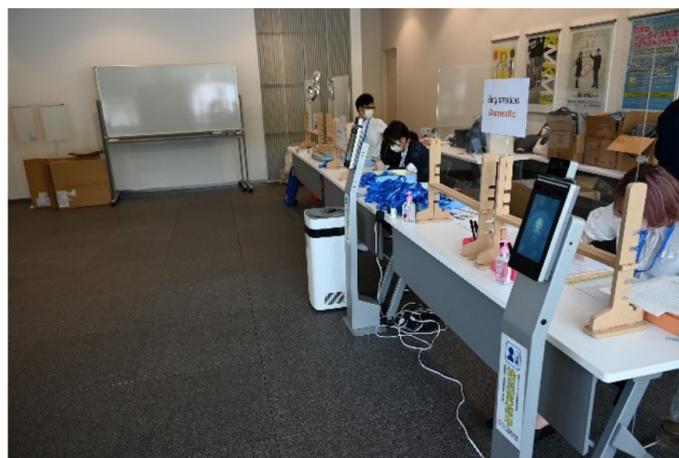
	実地	オンライン	計
日本人	127	23	150
外国人	22	33	55
計	149	56	205

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスクーリションツアーの実施 ●
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

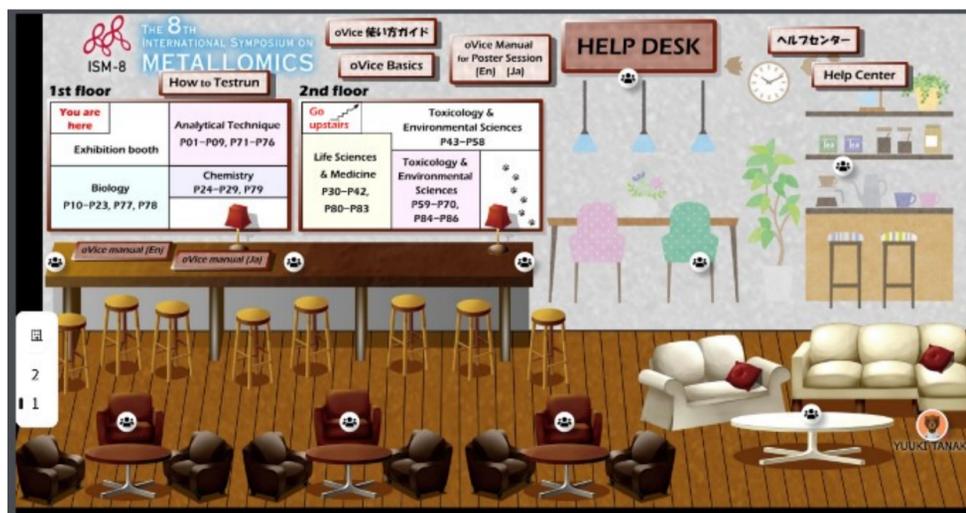
2)特筆すべき取組

①	感染症対策	国内外から参加者が集まるため、換気や消毒に係る物品購し、健康状態観察のための体温計、サーモグラフィーなどの機器を用意。
②	リアル参加を仮想体験できるバーチャル会場	学会へのオンライン参加を可能とし、そのためのバーチャル会場を利用した。
③	会議冊子等の紙媒体の電子化システムの活用	環境への配慮また受付での接触機会の削減のため、会議冊子を電子化した。

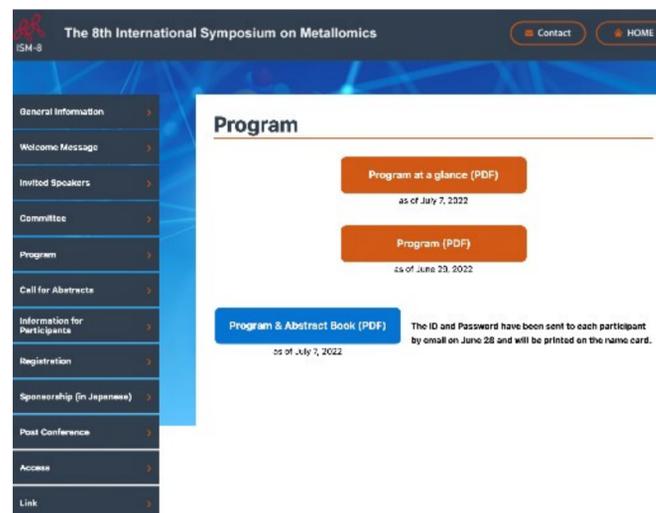
①



②



③



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

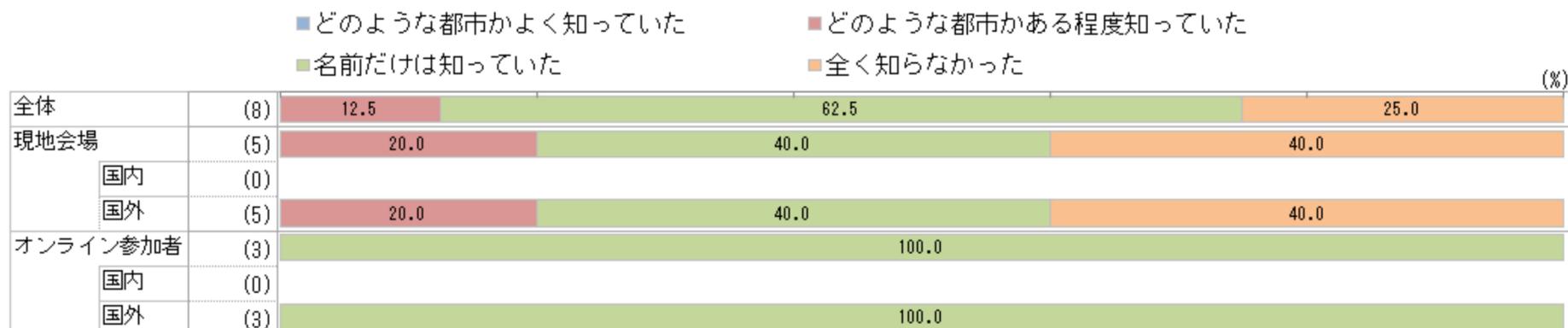
感染症対策	(1) 取組内容	参加受付において現地参加者に個人用消毒液及びマスクの配布を行なった。また、受付、会場入り口にはアクリル板、非接触型の体温計、消毒液を設置した。講演会場内には1~2台の空気清浄機を設置し常に稼働させ、マスク着用も徹底させた。 参加登録はオンライン化 し、事前に済ませ、要旨集も電子化することで受付での物品の受け渡しや、人同士の接触機会を減らした。 ランチオンセミナー では参加者数を会場定員の半分以下に制限した。立食形式のイベントは会期直前に中止とした。
	(2) 取組による成果	会期中から会期後3日の間に新型コロナウイルスへの感染者は発生しなかった。上記の取り組みによって、150名近い参加者がオンサイトで参加しても、十分に感染リスクをコントロールすることができることが示された。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	一部の講演については、オンライン参加者が オンデマンド型でも視聴できるように、参加者専用ページに動画をアップロード した。また、 ポスター発表は現地での発表に加え、バーチャル空間(oVice)を利用したオンラインにおいても開催 し、現地参加、オンライン参加の参加者が密に交流できる時間と場を提供した。 現地で行う伝統芸能鑑賞のイベントの様子についても、参加者専用ページに撮影した動画をアップロード し、オンラインの参加者(特に海外参加者)が日本及び開催地金沢に興味を持って貰えるようにした。
	(2) 取組による成果	動画配信したランチオンセミナーは会期後3日までにいずれも30回近い再生回数があった。ポスター発表はオンラインでも開催することができ(ログインしていた参加者100名程度)、全ての発表者に平等に発表機会を提供することができた。また、伝統芸能イベントについては、7/18より公開を行っており、50回以上再生されている。
	(3) 課題	現地とオンラインのポスター発表を行うことで、プログラムが過密になってしまった。
開催地との連携	(1) 取組内容	金沢コンベンションビューロー:公的助成金の紹介、会場選定や学会運営に関する相談 石川県、金沢市:公的助成金の申請
	(2) 取組による成果	金沢コンベンションビューローには助成金や会場の紹介だけでなく、無料配布の観光パンフレットや個人用感染対策グッズなどを提供して頂き、参加者の安全と満足度向上に資する連携が取れた。石川県、金沢市からの助成金によって、学会運営の一部を専門業者に委託することができ、参加者の満足度を向上するような、学会運営ができたと考えている。
	(3) 課題	開催地が遠く、視察や打ち合わせを十分に行えなかった。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	学会3日目に参加者向けに Excursionと能楽鑑賞(Noh Night)を行なった 。参加者が金沢の伝統芸能を体験することで、学会開催地としてだけではなく、観光地としての魅力も伝えることができた。また、伝統工芸体験においては、現地のガイドボランティアに引率を依頼した。また、金沢能楽会には学会(国際組織委員会)から感謝状を贈呈した。
	(2) 取組による成果	学会3日目に参加者向けにExcursionと能楽鑑賞(Noh Night)を行なった。参加者が金沢の伝統芸能を体験することで、学会開催地としてだけではなく、観光地としての魅力も伝えることができた。また、伝統工芸体験においては、現地のガイドボランティアに引率を依頼した。また、金沢能楽会には学会(国際組織委員会)から感謝状を贈呈した。
サステナビリティ	(1) 取組内容	環境への配慮: 講演要旨集を電子化 し、紙媒体での配布物の量を大きく低減する。
	(2) 取組による成果	紙媒体の配布物を低減することで、荷物の輸送量や会場で発生するゴミの量の削減に大きく貢献することができた。

【実証事業⑧ The 8th International Symposium on Metallomics 個別アンケート】

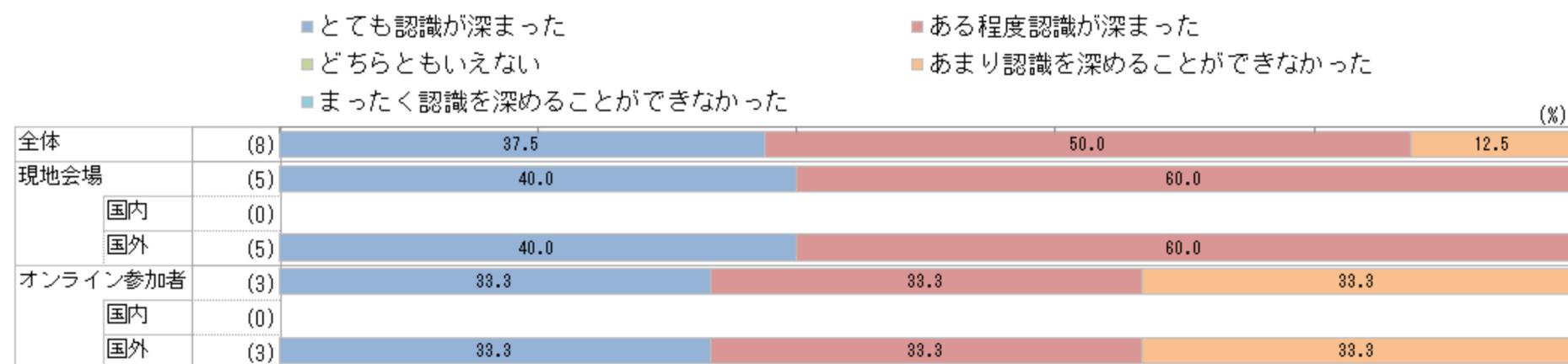
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



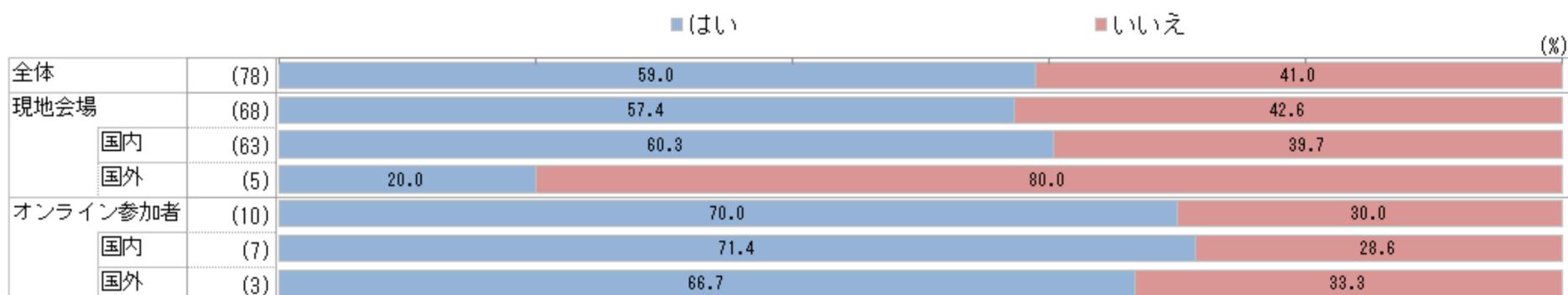
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(金沢市)のことをどれくらい知っていましたか



Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(金沢市)への認識が深まりましたか



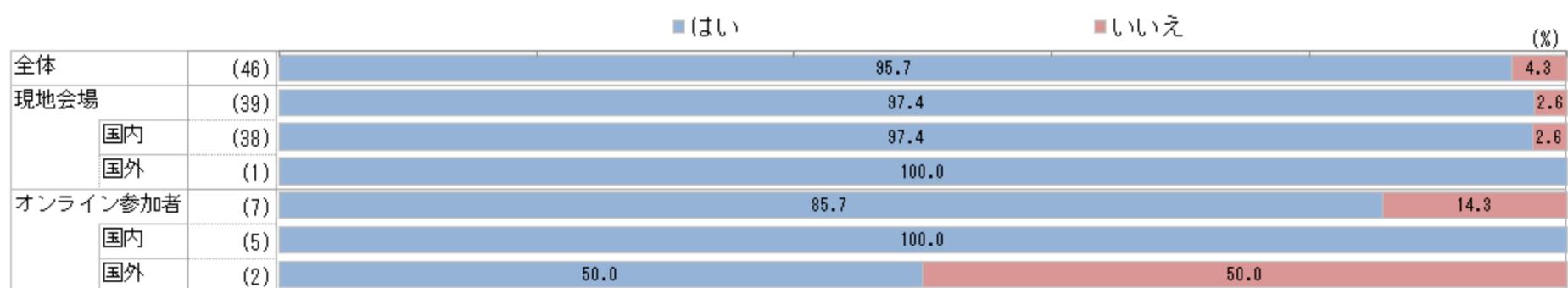
Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(oVice)にアクセスしましたか



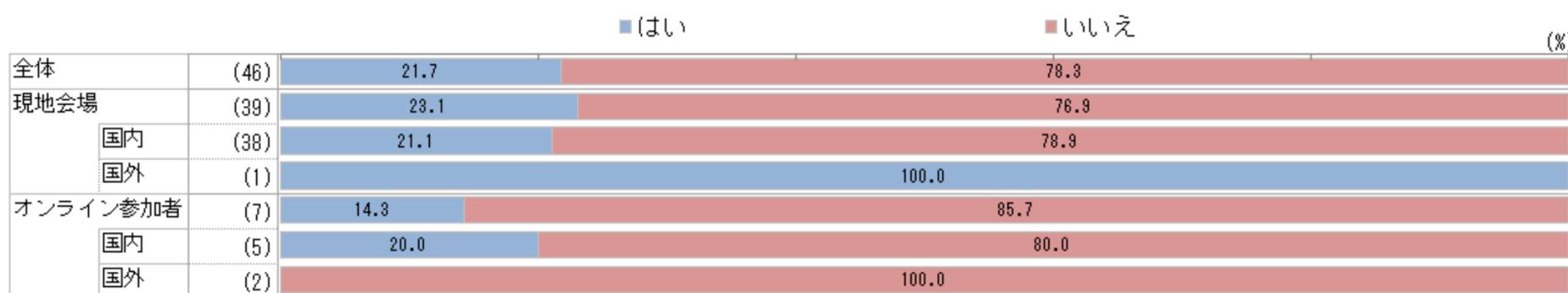
Q. バーチャル会場(oVice)において、あなたは以下の体験をしましたか
 <他の出席者とのコミュニケーション>



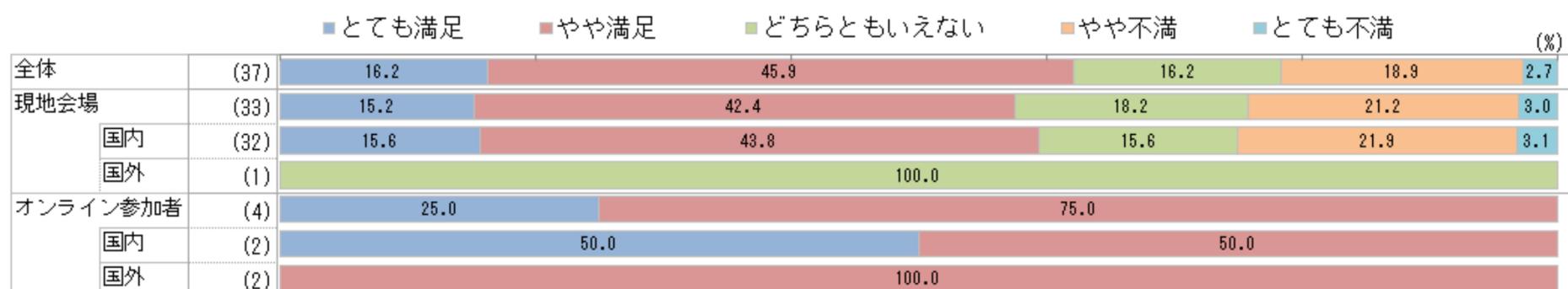
Q. バーチャル会場(oVice)において、あなたは以下の体験をしましたか
 <ポスターセッション>



Q. バーチャル会場(oVice)において、あなたは以下の体験をしましたか
 <企業展示>



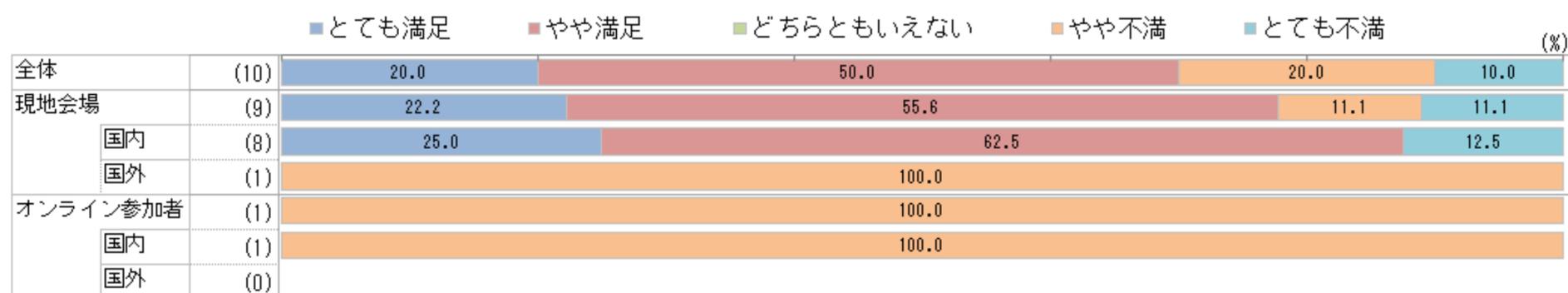
Q. バーチャル会場(oVice)における体験の満足度を選択してください
 <他の出席者とのコミュニケーション>



Q. バーチャル会場(oVice)における体験の満足度を選択してください
 <ポスターセッション>



Q. バーチャル会場(oVice)における体験の満足度を選択してください
 <企業展示>

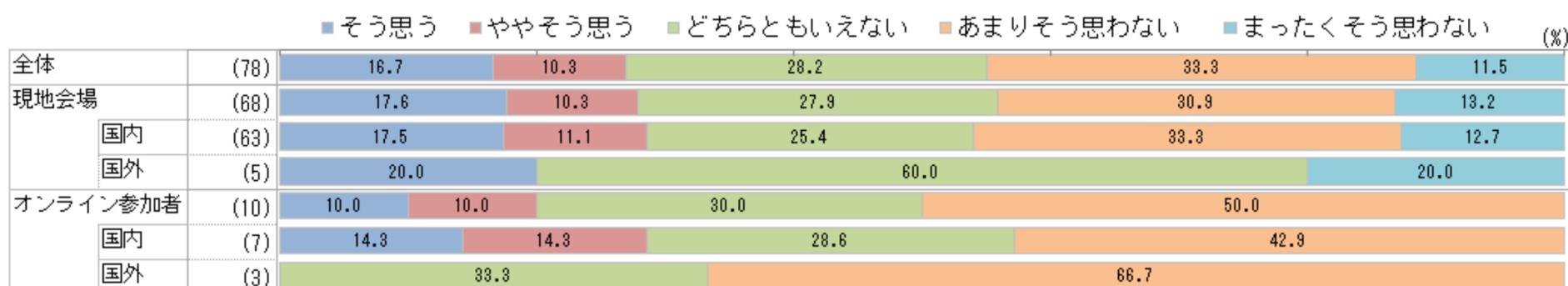


Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(oVice)における他の参加者とのコミュニケーションについて、あなたはどのように感じましたか

- 対面によるコミュニケーションよりもむしろ優れている
- 対面によるコミュニケーションと比較しても遜色ない
- 対面によるコミュニケーションと比較すると劣るものの特に不満はない
- 対面によるコミュニケーションには劣り、不満だ



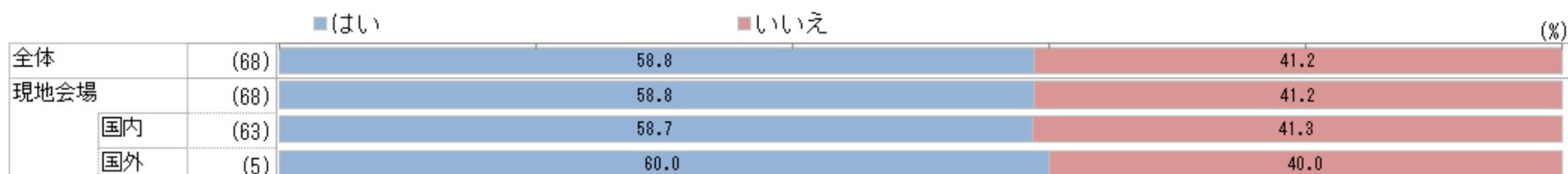
Q. 新型コロナウイルス感染症の国際的な感染拡大が収束した後、ハイブリッド形式で開催される国際会議の場合、あなたはオンライン会場での出席を積極的に選択しますか



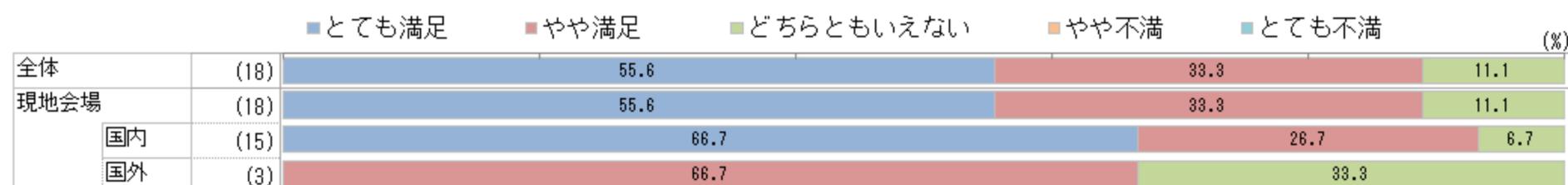
Q. あなたは以下のプログラムに参加しましたか
<エクスカージョン>



Q. あなたは以下のプログラムに参加しましたか
<能ナイト>



Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<エクスカージョン>



Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<能ナイト>



【実証事業⑨ The 13th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing】

主催者名	特定非営利活動法人PCTFE-Japan		
会期	8月7日～8月10日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	東京都	主たる会場名	工学院大学

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	94	60	154
外国人	5	47	52
計	99	107	206

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施 ●
②	オンラインエクスクーションツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	会議冊子等の紙媒体の電子化システムの活用	従来は会場で紙媒体として配布していた、Program Book及びproceedingsは、会場参加者も含めて、オンライン上で配布し、各自が自身のPC等で見ていただくため、HPにそれぞれのダウンロードリンクを設定した。なお、参加登録者に限定して、ダウンロード可能とするためにパスワードを設定した。
②	消毒液、アクリル板、消毒ジェル・マスク等の感染症対策に資する物品	Registrationデスクや各講演会場に、手指消毒のためのアルコール消毒液を設置した。
③	リアル参加を仮想体験できるバーチャル会場	オンサイトとオンラインで同様に、講演発表、その視聴を行うため、オンサイト講演者を含み全ての講演はZOOMを介して行い、会場に設置したPCからプロジェクターに画面投影を行なった。音響は、会場での音響設備に一元化し、個人のPCでマイク、スピーカは禁止した。講演会場は6室によるパラレル開催であり、これにはZOOMのブレイクアウトルームを用いた。このため、オンサイト参加者にもネットワーク接続が必須であり、eduroamを用い、対象機関外の方には臨時IDを提供した。この環境を実現するために、ホストPC管理、各会場PC管理、時間管理(これもZOOMを介したPCによる)、ネットワーク対応などの人員を配置した。また、開催当日のみではなく、事前リハーサルも入念に実施した。

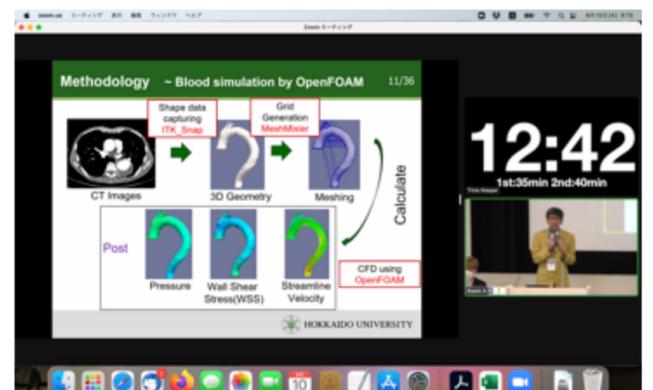
①



②



③



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	国際会議PSFVIP13は東京都新宿区の工学院大学、及びオンラインのハイブリッド形式で開催した。会場参加とオンライン参加を合わせて、約200名の参加者を得た。基調講演などを行うアーバンテックホール(約300名定員)とTechnical Sessionを行う200名規模の講義室5室で開催し、参加人数に対して十分に余裕のある講演会場を設定した。従来は会場で紙媒体として配布していた、 Program Book 及び Proceedings は、会場参加者も含めて、 オンライン上で配布 し、各自が自身のPC等で見ていただく形とした。このため、これらの冊子を参加者に限定して配布するようなWEB上の仕組みを構築した。
	(2) 取組による成果	講演会場の入口に設置した温度計による体温計測を実施、アルコール消毒液を配置し、手指消毒をおこなった。会場各所に、感染防止対策の掲示を実施した。ネットワーキングのための飲食としては、 Welcome Reception においては、食べ物とアルコールの提供を止め、歓談時にマスク着用を求めた。 Symposium Dinner においては、80名程度の参加に対し、405㎡と十分な広さの会場を用意し、ホテルスタッフの経験をもとにした感染対策のもと、着席によるディナーとした。このような取り組みにより、現地参加者に対しては、十分な感染対策をした上で、従来の対面の国際会議と同等の内容を実施できた。
	(3) 課題	海外参加者に対して、ビザ免除国はなく、全ての方に日本入国ビザの取得が必要であった。ビザ取得にはERFS登録が必要であり、シンポジウム事務局での対応を行ったが負荷は大きかった。日本での感染が拡大していたことにもより、来日希望者は多くはなかったが、ビザ取得書類に時間を要したこともあり、その日時におけるビザ発給の上限人数に達し、ビザ発給が受けられないケースもあった。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	オンサイトとオンラインで同様に、講演発表、その視聴を行うため、オンサイト講演者を含み全ての講演はZOOMを介して行い、会場に設置したPCからプロジェクターに画面投影を行なった。音響は、会場での音響設備に一元化し、個人のPCでのマイク、スピーカーは禁止した。講演会場は6室によるパラレル開催であり、これにはZOOMのブレイクアウトルームを用いた。 Symposium Dinner は参加者のネットワーキング形成のための重要なイベントであり、ここでの体験が後の会議での共通話題となることも多い。これを オンライン参加者にも配信 し、同じ体験を共有した。海外研究者に、日本の研究者との関係を深め、日本の魅力を感じていただき、今回は日本に來れなかった海外研究者の訪日意欲を高めるよう努めた。
	(2) 取組による成果	技術講演は、オンサイト、オンラインと区別なく実施でき、質疑応答も問題なく実施できた。本会議におけるSymposium Dinnerは新宿のホテルの39階で実施し、日本らしいアトラクションとして、獅子舞(江戸里神楽)を行った。獅子舞は1504年ごろから飢餓や疫病を追い払うために神として獅子頭を祭り、正月に舞ったのが始まりで、獅子舞にてコロナを追い払うことを祈念した。高層階からの新宿の夜景と共にオンラインにて配信を行うことができた。
	(3) 課題	オンサイトとオンラインで同等の画面や音声の共有には、十分な設備と人員が必要であった。今回は工学院大学のオンライン配信に対応した教室設備を利用できたことが幸いであった。ただし、その設備を使いこなすために、多くの人員を配し、講演当日だけでなく事前のリハーサルなど十分な準備を必要とした。 Symposium Dinner における オンライン配信は、時差の問題もあり、また十分な設備と人員を配することができず、長時間の試聴を行った参加者が限られていた。
開催地との連携	(1) 取組内容	主催者であるPCTFE、可視化情報学会が2023年に日本で開催するISTP(熊本)、ASV(東京)に関して、開催地のコンベンションビューロー作成ビデオの一部を利用し、Symposium Dinnerの際にビデオ放映し、参加を呼びかけた。
	(2) 取組による成果	比較的容易に次回開催地のPRを実施できた。
	(3) 課題	特に無し。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	国際会議参加者は、会議に参加するのみではなく、その開催地を観光したり、会議前後に知人の研究者を訪ねて日本各地を訪れる場合がある。その際の新幹線をはじめとする国内移動にも興味と日本の技術に関心を持つことも多い。日本各地の文化の違いを感じることもあり、観光も含めた日本滞在が日本の魅力として海外に発信できる。これらの観光、移動、宿泊について、海外の方を受け入れた経験(それぞれのスタッフにおける)は、日本にとってのレガシー効果と言える。
	(2) 取組による成果	海外の方を受け入れる経験については、ERFSを含めたVISA申請や帰国時のPCR検査のサポートなど、事務局スタッフとしての受け入れ経験を積むことができた。ただし、オンライン参加者が多く、実際に日本を訪れた方が少なかったため、いわゆる観光、交通、宿泊に関しては、その効果は少なかった。
	(3) 課題	ERFSの申請に関して、本務である国際会議出席以外の観光(移動を含んだ)を禁じており、来日者の行動制限を課しており、海外からの参加者の希望や意識との相違が見られた。
サステナビリティ	(1) 取組内容	持続可能(サステナブル)な社会の構築のために、21世紀に人類が直面する地球・社会・人間システムに関わる課題の解決に貢献できる人材の育成は必須である。日本は課題先進国として、これから全世界が直面する課題の多くを既に経験している。必要な解決策を導き出すために、世界中から多様な意見や経験を聞き、共に行動することが求められており、これに対応できる人材育成が重要である。
	(2) 取組による成果	本シンポジウムは、流れの可視化、画像処理及び関連技術のあらゆる分野における世界の研究者、技術者が、協力と友好の精神のもとに、知識や新しい経験を交換する機会を提供した。特に大学院学生をはじめとする若手研究者が多く参加しており、人材育成の面の効果が大きかった。
	(3) 課題	世界との交流は、単に講演会としての技術的交流だけでなく、講演後の立ち話、飲食、イベントの共同体験などが重要である。オンラインでは、現在の技術では十分な交流ができず、現地参加が必要であり、海外からの現地参加者が少なかったことは残念であった。

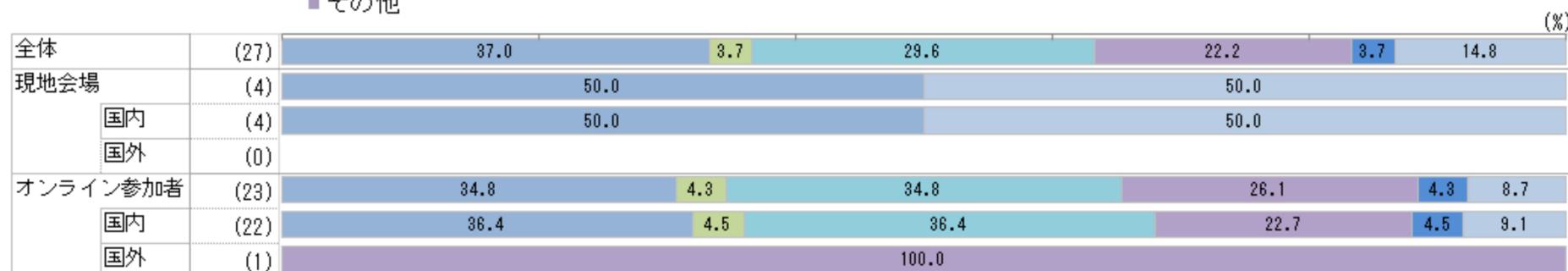
【実証事業⑨ The 13th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing 個別アンケート】

Q. 夕食会の満足度を選択してください



Q. あなたが夕食会に出席しなかった理由を全て選択してください

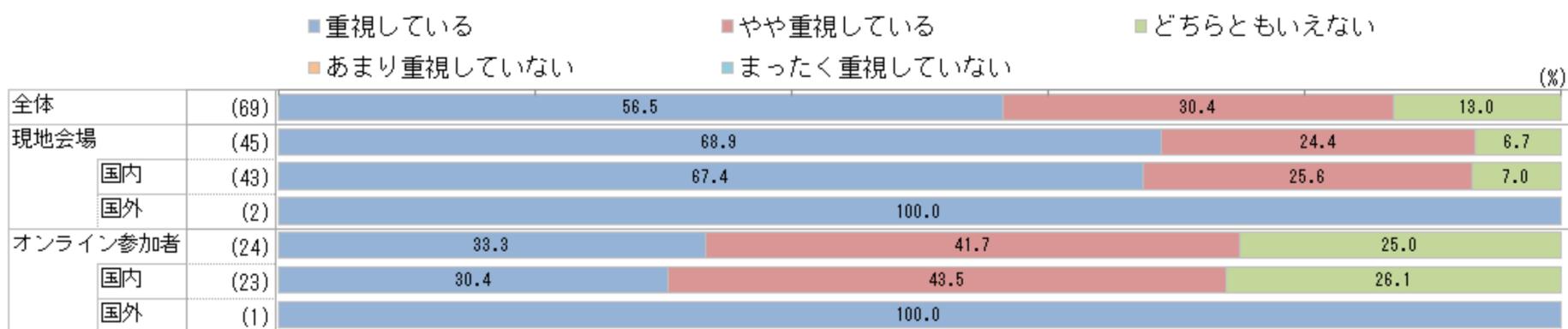
- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 夕食会をオンラインで視聴すること自体にあまり魅力を感じなかった
- 夕食会をオンラインで視聴できることを知らなかった
- 夕食会の会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 夕食会の会場における感染症対策に対する不安があった
- その他



Q. 夕食会をオンラインで視聴してみて今後、観光等の目的で開催都市(東京)を実際に訪れてみたいと思いましたが



Q. 国際会議のプログラムのなかでも他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)をあなたはどの程度、重視していますか



【実証事業⑩ 第29回低温物理学国際会議】

主催者名	低温物理学国際会議組織委員会		
会期	8月18日～8月24日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	北海道札幌市	主たる会場名	札幌コンベンションセンター

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	631	166	797
外国人	147	201	348
計	778	367	1145

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	事前のPCR検査または当日の抗原検査	参加者に配布したコングレスバッグに抗原検査キットを同封し、体調不良時に新型コロナウイルス陰性か陽性かを簡易的に確認できる状況を整える。
②	開催後の追跡調査の実施	参加証にQRコードを掲載し、来場者の情報収集・把握を行う。
③	会議冊子等の紙媒体の電子化システム	全プログラムの開催日時、会場、発表要旨に係る情報をすべて電子化することで、参加者同士の接触する機会を低減する。また、ライブ配信視聴用のZoomのURLも埋め込む。
④	今回の開催地または次回の国内開催予定地の PR映像の製作・放映	札幌開催をPRする動画を上映し、海外参加者の日本への再訪を促す。

①



②



③



④



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

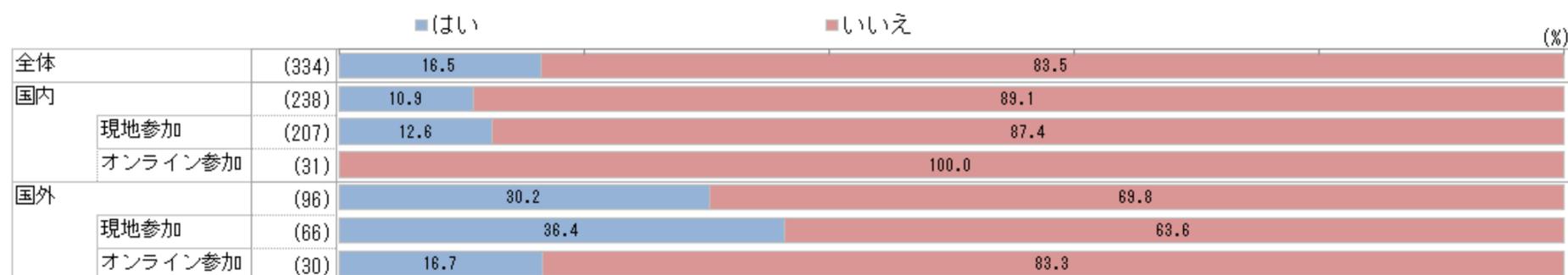
感染症対策	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・①Google Formsで毎朝体調を報告してもらった。②入り口でサーモカメラを導入し発熱者を検知。③名札の裏側にQRコードをつけて、毎日チェックインしてもらい、会場入場者を把握。④発熱者などへの対応(現地委員会)及び追跡調査。⑤マスクの用意と着用の徹底。⑥参加者間の十分な距離の確保の注意喚起。⑦食べ物、飲み物、現金、配布物などを介した接触の排除。⑧COCOAダウンロードの要請。⑨ 飲食ゾーンと議論ゾーンの分離。⑩CO₂メーターの設置と換気サーキュレーターの適切な運転。⑪消毒ジェルと抗体検査キットの配布。⑫体温計とマスクを受付に置く。⑬各所に消毒用アルコールを設置。 ・参加者への連絡は可能な限りアプリ等の電子媒体を用いて行い、プログラム等の紙媒体の配布物は最小限に抑えた。 ・現地参加者には国内参加者にも3回以上のワクチン接種証の提出を要請した。
	(2) 取組による成果	<p>入り口で37.5度以上の発熱が確認された人は会期を通じていなかった。何回も注意喚起を行った結果、講演会場では外国人を含めほぼ全員がマスクを着用していた。その成果としてオンライン参加者が800名近い大規模な国際会議であるにも関わらずクラスターは発生しなかった。アルバイト学生の陽性者が出たが、現地コミッティーが個別に対応を行い、周囲への感染を抑えることができた。また、ポスター会場と休憩室に設置したCO₂メーターが1000近くになると換気を行ったため、基準値の1500を超えることはなかった。</p>
	(3) 課題	<p>今回はバンケットの開催は見送ったが、何らかの感染症対策で開催できればと考える。会話と飲食を完全に分離することはバンケットでは困難なので、両者を分離しない方法を検討することが課題である。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・満足度の高い「手作り」のハイブリッド形式を目指した。 ・オンライン参加者にとっても臨場感が高まるハイブリッド運営の工夫を行った。会場に講演者追尾カメラと、聴衆を前方から映すカメラを併用し、後者は、質問用のスタンドマイク位置にプリセットですぐに画像を移動できるようにした。 ・会議初日には北海道チーズなどのセットを配布した。 ・開会式の冒頭でアイヌの踊りを披露してもらい、自然との協調をアピールした。 ・開会式では札幌市長にご挨拶をお願いし、その魅力をアピールしてもらった。 ・各休憩時間には北海道特産のおやつセットとペットボトルの飲料を配布した。 ・十分に間隔の取れるツアーとして、100名の希望者には北海道大学の植物園チケットを配った。 ・北海道の魅力をアピールする映像やポスターを、セッションの合間に映写したり壁面に貼るなどして将来の訪日を促した。
	(2) 取組による成果	<p>事前のリハーサルを十分に行ったために、セッション中のカメラ、マイクの操作は極めてスムーズに行われ、活発な議論が行われた。また、Zoomによるオンライン講演でも、講演者がそこに居るかのように自然な形で、オンライン参加者と議論を行っていた。あるセッションでは、外国人の座長が「素晴らしい運営に感謝したい」という挨拶を述べるほどであった。天候にも恵まれほぼ100名近い参加者が植物園を訪れ、北海道の自然を身近に感じてもらった。北海道限定の菓子と飲料の提供は概ね好評であった。今回海外から約150名もの現地参加者があったことは、オンライン参加者にとって次回に来日する動機付けになったはずである。</p>
	(3) 課題	<p>ポスターセッションを昼間と夜間の2回行うこと、夜間の発表をポスター賞の必須条件としたこと、オンライン発表者のポスターを昼間にボードに貼りだす等、オンライン参加者にも便宜を図ったが、昼間の盛況に比べて夜間のセッションは参加者数が少なかった。何回か奨励を行ったり、弁当を配って外食に行かずに夜間のポスターセッションに参加できるようにしたりしたが、思ったより効果が現れなかった。また、ハイブリッド形式でオンライン参加者の満足度が高いほど、ハイブリッド会議における今後のオンライン参加者が減ってしまうというジレンマがある。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ①主催団体である学術会議とは緊密に連絡を取り、会議場使用料を部分的に支援していただいた。また開会式で高村ゆかり副会長にご挨拶いただいた。 ②会議を誘致する際に、観光庁からご支援を得て、観光庁長官招請状をいただきプレゼンで使用した。また、このハイブリッド国際会議実証事業によって多くの施策が可能となった。また、観光庁のハイブリッド会議のセミナーに出席し、多くの情報を得た。 ③IUPAPの会議として承認され、資金援助を受けた。 ④札幌コンベンションビューローとは会議招致の段階から連携をとり、札幌市、及び北海道から資金援助も受けた。
	(2) 取組による成果	<p>ハイブリッド国際会議実証事業の申請を行う過程で、感染症対策をはじめ多くの知見を得ることができた。また、学術会議からは市民講座の日程や開会式の手順などでアドバイスを受けた。IUPAPからの援助で、発展途上国からの参加者に登録料の援助を行うことができた。札幌市と北海道からの資金援助は、予算の中で大きな位置を占めており、コンベンションセンターのスペースが広いこと、会場費が安いことも併せて、振り返ればハイブリッド会議に理想的な開催地の設定であった。観光庁の実証事業によって、将来に繋がるハイブリッド国際会議の様々な試みを実施できた。</p>
	(3) 課題	<p>コンベンションビューローとは招致の際には連携実績があったが、コロナ禍での開催に関しては利用できる支援メニューが少なかった。また、国際会議場の最近接駅である東札幌駅構内に英語の表示がほとんどないために、アルバイト学生による誘導も行ったが、駅構内に英語の案内板を貼らせてもらえば、なお良かった。(ただしこれはどの会議にも必要なので、市として対応していただく方が良さそう。)</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ①世界に向けて最先端の成果発信をするために、ビザ取得の援助を行い、オンラインの海外参加者を増やした。若手の教育のために学生の登録料を半額以下に設定し、若手の登録料・旅費の支援のための予算も計上した。また、超伝導に関する市民講座をオンラインで開催し、全国の国民のリテラシー向上をも目指した。②量子コンピュータを始めとする量子技術の基礎と応用の研究者が一堂に会するとともに多数の企業展示を行ってもらった。③本会議の実施を通じて多くの経験やノウハウを蓄積し、その詳細な記録を残した。
	(2) 取組による成果	<p>ハイブリッドにすることによって1145名の参加者を得、そのうち348名が海外からであった。また現地参加者778名のうち147名が海外からという数字は、コロナ禍での国際会議としては大きな数字であり、世界に向けた発信という目的を果たせた。市民講座では全国から270名を超える登録があり、多くの質問が出て盛況であった。アルバイトの学生たちは会議の雰囲気を感じることによって大きな刺激を得た。22もの企業展示が行われ、会期を通じて活発な交流が行われ、我が国における量子技術の発展に寄与した。また、ハイブリッド会議のノウハウが蓄積された。</p>
	(3) 課題	<p>ハイブリッド会議を組織して痛感したのは、その必要経費の大きさである。広い会場が必要なうえに、人件費をはじめハイブリッドならではの多くの経費が発生する。機関からの助成を受けるとともに、安くて大きな会場、多くの登録者、多くの企業展示、などの条件が揃わないと赤字になってしまうのが現実である。また、プログラム作成をはじめ、組織委員会の負担は極めて大きく、多くのリスク要因と向き合わねばならなかった。大規模なハイブリッド会議を今後も開催するためには、十分な助成金と、支援のために仕組みを作る必要がある。</p>

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

サステナビリティ	(1) 取組内容	①若手の教育を意識して、登録料を約半分にするとともに、参加支援のための予算を設けた。②オンライン参加者のポスターを印刷して掲示を代行する対応を行った。この印刷に用いるポスター紙は再生紙でSDGs対応版にした。③ブックレットを極力排除して、プログラム等はオンライン配信をベースにした。④資源ごみ、可燃ごみ、不燃ごみ、などごみの分別を徹底し、可能な限りリサイクルに回した。⑤ハイブリッドのために購入した機器で継続して使用できるものは札幌コンベンションセンターに無償寄付し、今後のハイブリッド会議に資するように取り計らった。
	(2) 取組による成果	SDGsとの対応では4,7,9,10が関連した成果があった。特に量子技術は7,9に直結しており、その分野での最先端の研究交流が進んだうえに市民講座で一般のリテラシー向上に資することができた。発展途上国やウクライナからの参加希望者に登録料支援を行い、会議参加を可能にした。またオンライン参加で会議参加のバリアが大きく下がった。電子化を極力進めたために紙媒体はほとんど使わなかった。ごみの分別を行い、会議場ではほとんどゴミはなく、清潔な環境を維持できた。菓子類などの余ったものはアルバイトの学生に渡して食品ロスが出ないようにした。
	(3) 課題	限られた予算の中で、支援希望者の多くの希望に沿えなかったことは今後の課題である。飲料をペットボトルで提供したことは、コロナ対策とはいえ、サステナビリティの観点からは課題が残った。会議最終日には参加者からの要望をふまえ、感染症対策を工夫したうえでホットコーヒーをSDGs対応の紙コップで提供した。SDGsの目標5に関しては、女性の参加者、講演者割合をさらに増やす努力が必要である。例えば、託児所の設置などを検討する必要があった。

【実証事業⑩ 第29回低温物理学国際会議 個別アンケート】

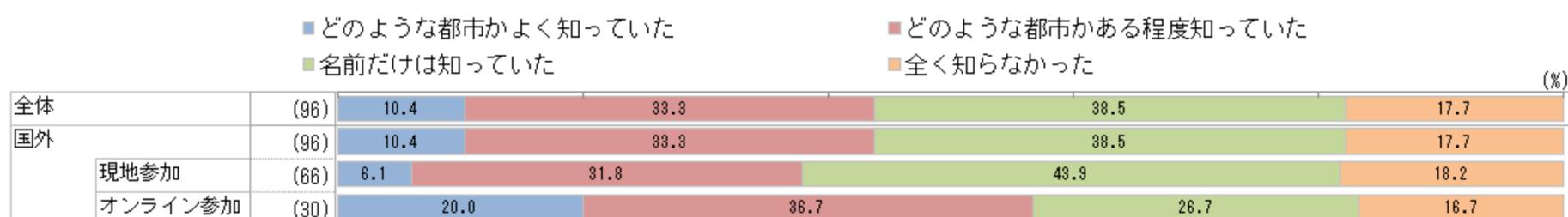
Q. あなたは、サテライト会議「超低温物理学国際会議2022(ULT2022)」にも参加しましたか



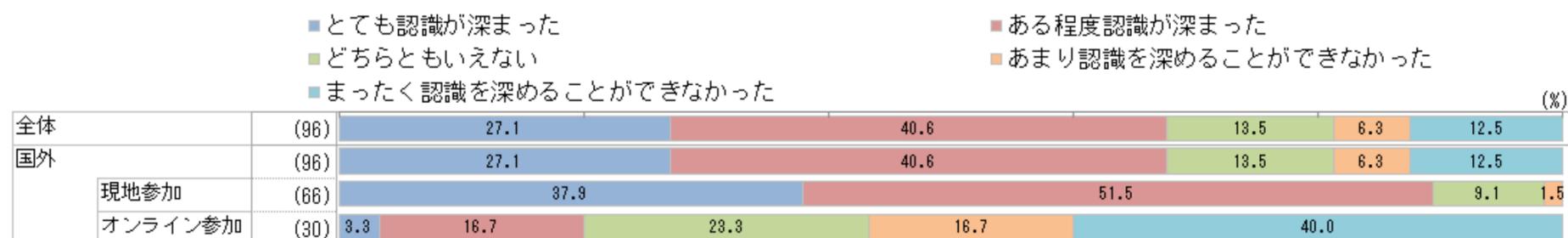
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(札幌市)のことをどれくらい知っていましたか



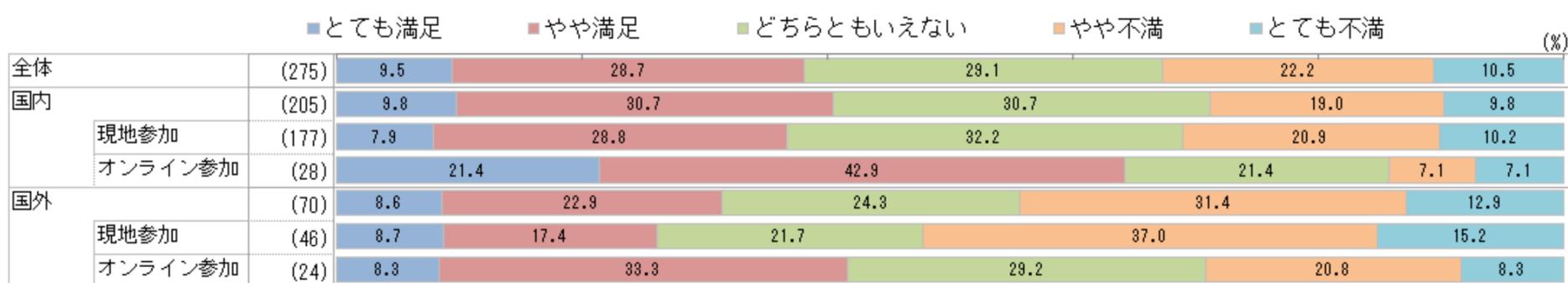
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(札幌市)への認識が深まりましたか



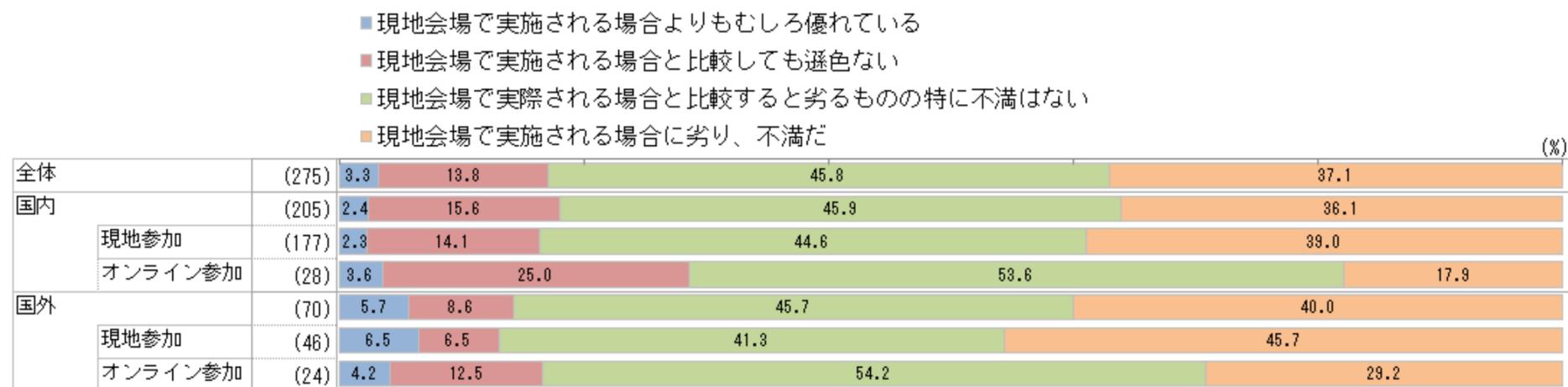
Q. あなたは、オンライン上でのポスター発表(The remote poster session)にアクセスしましたか



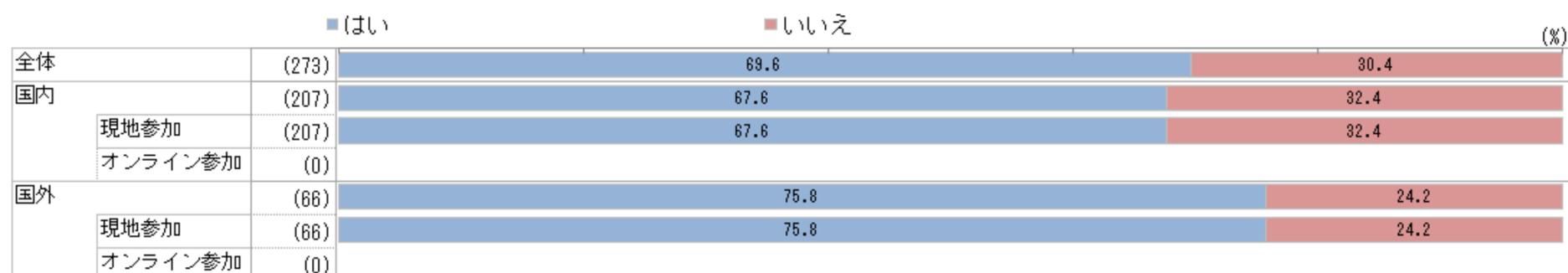
Q. オンライン上でのポスター発表の満足度を選択してください



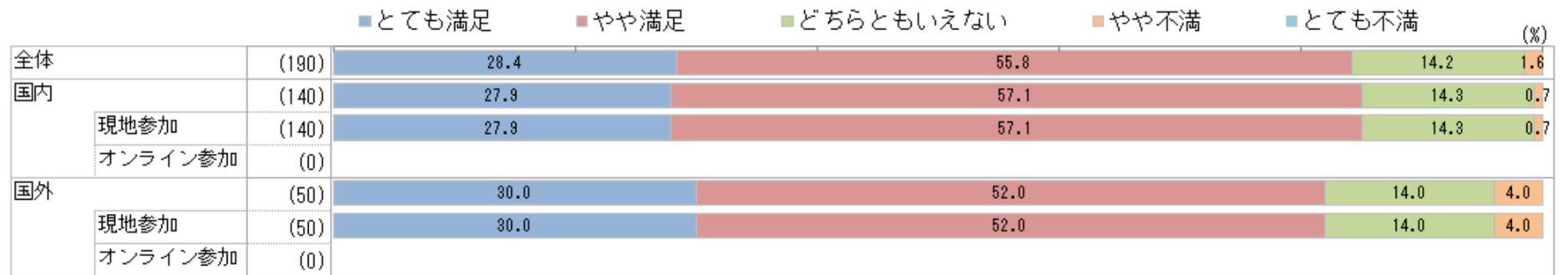
Q. オンライン上でのポスター発表について、あなたはどのように感じましたか



Q. あなたは展示ブースを訪れましたか



Q. 展示の満足度を選択してください



【実証事業⑪ The 12th World Conference on Computers in Education 2022】

主催者名	WCCE2022運営委員会		
会期	8月20日～8月24日	分野	芸術・文化・教育
主たる開催都市	広島市	主たる会場名	広島国際会議場

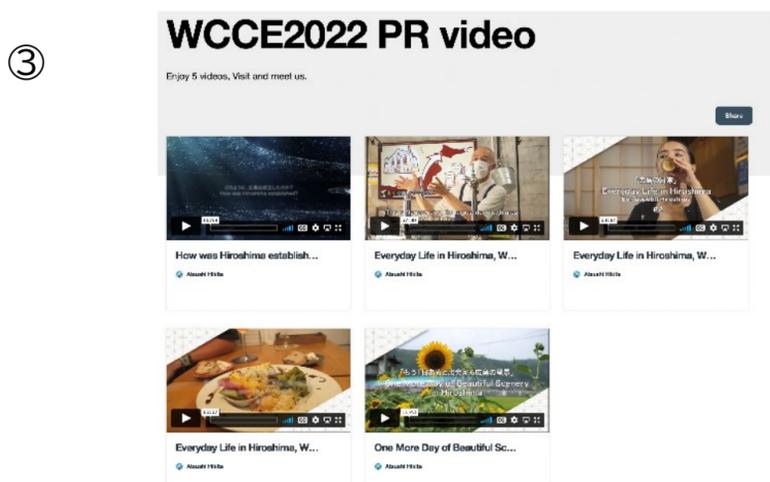
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	326	70	396
外国人	37	84	121
計	363	154	517

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施 ●
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	オンラインツアーのコンテンツ作成及び提供	開催地の印象をオンライン参加者と共有し、さらに一日滞在するための提案として、オンライン・エクスカージョン「WHO&WHAT 誰が何を紹介するか」を主軸としたコンテンツを制作する。開催地広島市から海と山の各方面に日帰り往復でき、日本の原風景をテーマとした動画コンテンツを作成し、オンライン会場を通じて共有する。
②	感染症対策	会場の入退場管理を参加者QRコードを用いて非接触で行う。事前登録システムのデータに基づいて、スマートフォン、ネームプレートなどを用いて、参加者のQRコードの発行も非接触で行い、非接触参加登録システムによる感染対策の実証を行う。
③	PR映像の製作・放映	都市の魅力をWHY, HOW, WHO&WHATで分類し、それを伝える取り組みを実証するため、WCCE2022の開催地である広島市と、会場の広島国際会議場について、①広島市の都市のおいたち、②安心できる広島滞在をテーマとした動画コンテンツ(各5分～10分程度)を作成する。作成した動画は、会場内やオンライン会場で逐一上映する。
④	参加者の事前登録システム	会場の入退場管理を参加者QRコードを用いて非接触で行う。事前登録システムのデータに基づいて、スマートフォン、ネームプレートなどを用いて、参加者のQRコードの発行も非接触で行い、非接触参加登録システムによる感染対策の実証を行う。

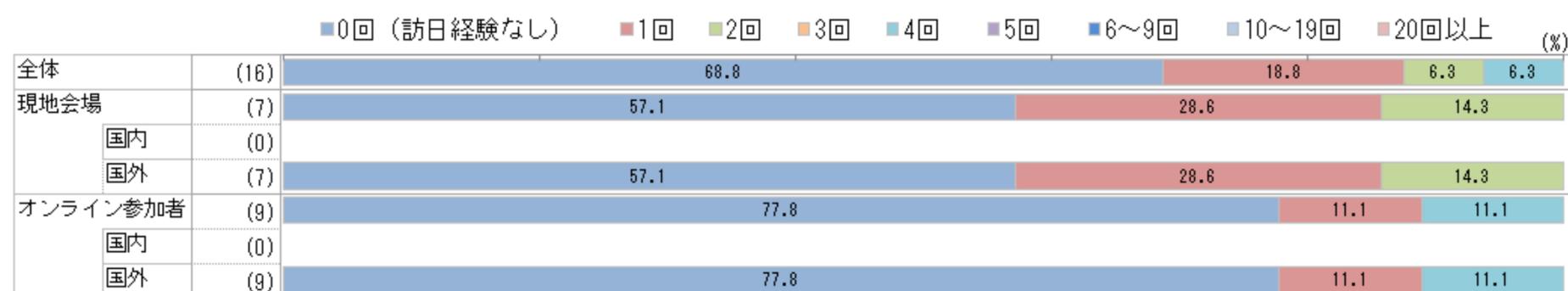


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

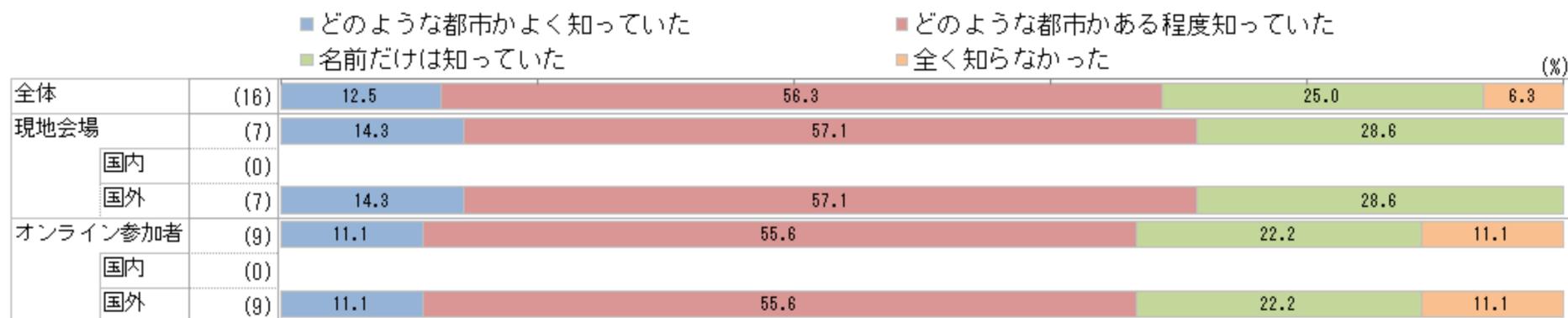
感染症対策	(1) 取組内容	新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、3密の回避は当然のことであるが、一方で不特定多数が触れる場所を減らすことも重要である。そのため、会場の 入場管理をQRコードを用いた非接触システムにより実施 した。事前登録システムのデータに基づいて、スマートフォン、ネームプレートなどを用いて、参加者のQRコードの発行も非接触で行い、非接触参加登録システムによる感染対策の実証を行った。会議参加者に加え、市民公開講座参加者、スタッフを含む全ての参加者を事前登録し、該当者に参加者QRコードを発行し、会場の入場管理を参加者QRコードを用いて非接触で実施した。
	(2) 取組による成果	事前登録システムのデータに基づくQRコード発行と、これを用いた非接触参加登録システムを構築し、非接触で入場管理を実施した。会議参加者とスタッフについてはネームプレートにQRコードを印刷し、 市民公開講座参加者についてはQRコードを事前送付しスマートフォン画面にQRコードを表示してもらうことで非接触での入場管理 を行い、不特定多数が触れることなく入場者を把握し、また、受付付近での滞留時間を短くすることができた。非接触入場管理システムについて説明するスタッフも配置したが、QRコードをスキャンするだけの単純なシステムであり、ほぼ全ての参加者が、特別な説明なしに本システムを利用することができたことは、 有益な成果である 。
	(3) 課題	本システムの利用には事前登録が必要であり、事前登録のない参加者については、その場で登録してもらい、無記名のネームプレートを渡す必要があった。このような際には、非接触入場管理システム担当スタッフが登録方法を説明する必要があり、また、参加登録費の受け渡し等で、担当要員と参加者との接触機会が生じてしまった。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	開催都市の魅力をWHY, HOW, WHO&WHATで分類して、オンライン参加者にも開催地の歴史、生活、人々との触れ合いを共有できるように、以下の三種類、5つの動画(5~7分・英語のネイティブスピーカーによるナレーション)を作成した。 1)広島のおいたち(なぜ広島で開催するのか) 2)広島市の日常(滞在中の移動と食事を疑似体験できるよう3つの動画で紹介) 3)もう一日あると出会う人と風景(1~2時間の小旅行) 動画は参加者向けサイトであるHowspaceの参加者の交流ページにて公開したほか、vimeoを用いてインターネット上で一般に広く公開した。
	(2) 取組による成果	参加者向けのサイトHowspaceの交流ページでは、 オンライン参加者、オンサイト参加者それぞれからの反応がみられた 。何人かのオンサイト参加者からは、広島市のイメージがよく理解できたという声があったほか、紹介した飲食店に実際に行く人もみられた。vimeoを用いたインターネット上での一般公開は、WCCE2022参加者のみにこのサイトの存在を伝えただけであるにも関わらず、1動画あたり会期中4アクセス(16インプレッション)あった。さらに会期終了直後の8月26日、27日には、それを超える1動画あたり5アクセス(21インプレッション)があったことから、会期終了後の 振り返りに一定の効果があった 。
	(3) 課題	制作スケジュールがタイトだったため、オンライン参加者への動画への誘導が、会期中になってしまった。会期前の期待感が高い状況で動画を提供することができれば、より満足度や訴求度が高まったものと考えている。また、オンサイト参加者の声が反映される仕組みがあると、オンライン参加者がより動画を視聴し訪日を疑似体験する機会が増えたと考えている。
開催地との連携	(1) 取組内容	広島観光コンベンションビューローの支援制度を利用し、国際会議の誘致・開催を進めた。受けた支援としては、誘致助成金、外国語ボランティア派遣、平和記念資料館観覧料減免等がある。また、広島をアピールするための画像資料、テキスト、交通アクセス等の情報の提供を受けた。
	(2) 取組による成果	誘致助成金は、会議誘致のための資料作り、会場施設のハイブリッド配信対応に利用した。外国語ボランティア派遣、平和記念資料館観覧料減免は、参加者が広島について学ぶうえで有用であった。広島をアピールするための情報は、国際会議のサイト作り、パンフレット作成に役立てた。
	(3) 課題	コロナ禍で、食事のために利用できる店舗情報等が以前と比べて変化していたため、これに対応した会議開催時点でのレストランマップ作り等を進めたが、日々変化する店舗情報に対応していくシステム作りが、今後の課題と考えている。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	さまざまな登場人物に、英語で身近なものの生い立ちや魅力を紹介してもらうことで、対外的な情報発信の事例を自ら学ぶこと、その事例を周りの人々と共有することで、人々の情報発信の気運を高めることを狙った。
	(2) 取組による成果	開催地付近の交通機関や飲食店の従業員に焦点をあて、彼らにインタビューをする形式で、日常の魅力を語ってもらった。日常の風景と人との交流の様子を発信することへの気運が高まったものと考えている。また、オンライン配信、発表者や座長の補佐の役割に就いて、デジタル世代である高校生ボランティアが活躍したことは、ハイブリッド国際会議ならではのレガシーといえる。
	(3) 課題	今回は制作期間が短かったため、コンテンツの構成をあらかじめ制作サイドで決めて撮影に臨んだが、出演する従業員や周囲のスタッフを巻き込んで構成を決めていくことができれば、地域の情報発信力がさらに増すと考えている。
サステナビリティ	(1) 取組内容	名所や名物にこだわらず、日常の風景や生活の魅力を丁寧に発信することで、地域資源に市民自身が気づき、地域資源として再認識するよう促すことで、市民の郷土愛を高めることを狙った。また、会議テーマにある「教育におけるコンピュータ」は文明の持続的発展のために不可欠な要素の一つであり、会議運営に若手人材を関わらせることで、本分野の継続的な発展を狙った。
	(2) 取組による成果	動画の出演者に動画をみてもらったところ、「こういうふうに見えるのか」「いつもと違う場所のようだ」という感想を多く得た。自身の日常の風景に対して、地域資源としての魅力を再認識したことの表れであると考えている。また、高校生、大学生、大学院生、若手研究者が、積極的に講演を行っただけでなく、スタッフとして運営に参加した。
	(3) 課題	今回の動画制作をきっかけとして、より多くの場所、人々とこの経験を共有し、来訪者をもてなすことの意味を考えるきっかけにしていくために、ワークショップなど広く市民を巻き込んだ継続的な活動が必要だと考えられる。また、今回関わった若手を中心とした新しいコミュニティの形成が、本分野の発展に向けた課題である。

【実証事業①】 The 12th World Conference on Computers in Education 2022 個別アンケート

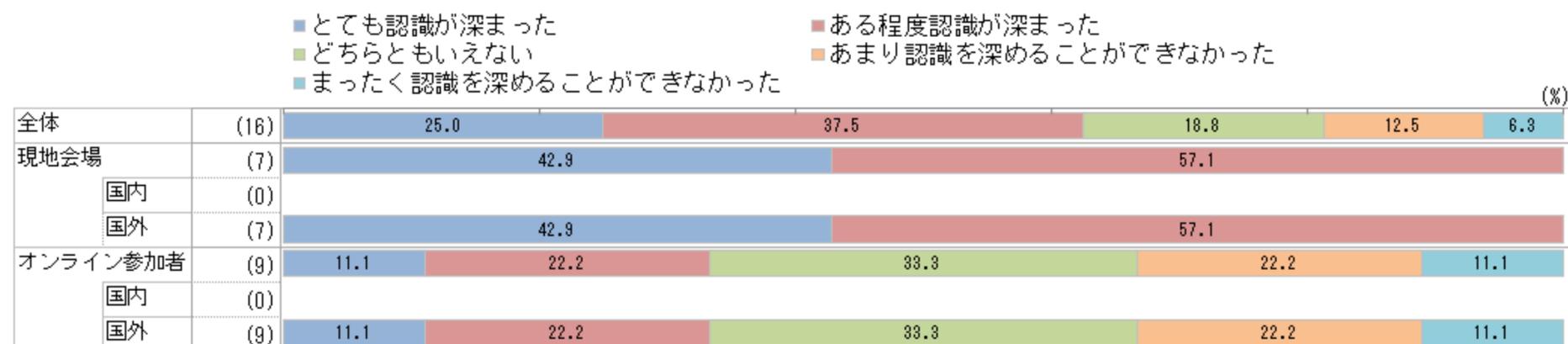
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



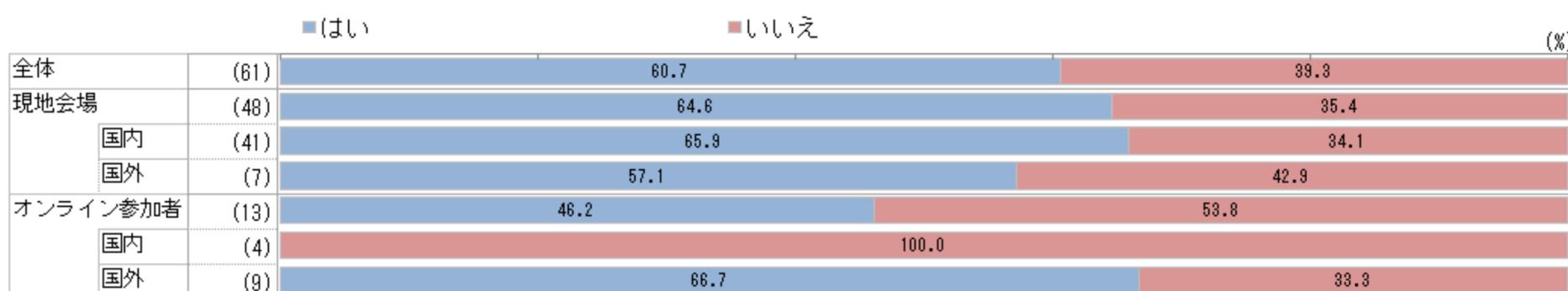
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(広島市)のことをどれくらい知っていましたか



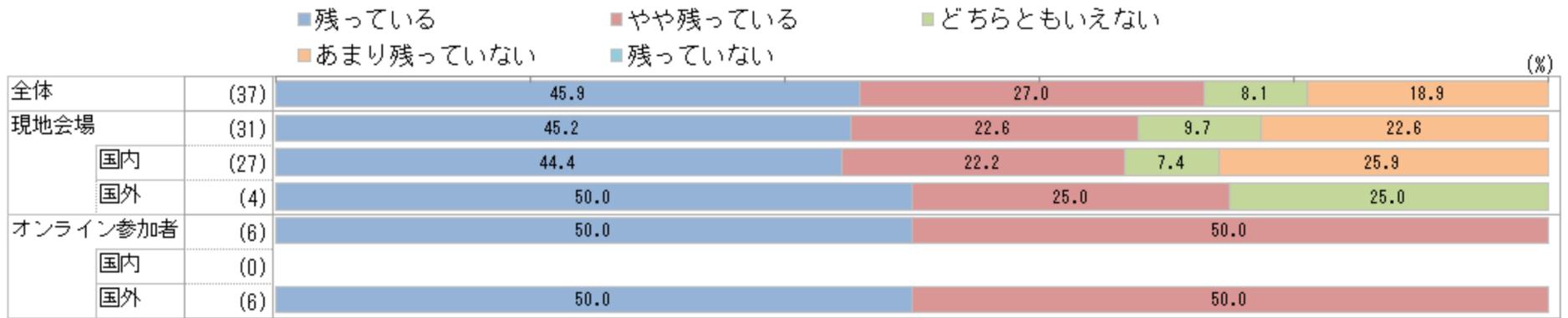
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(広島市)への認識が深まりましたか



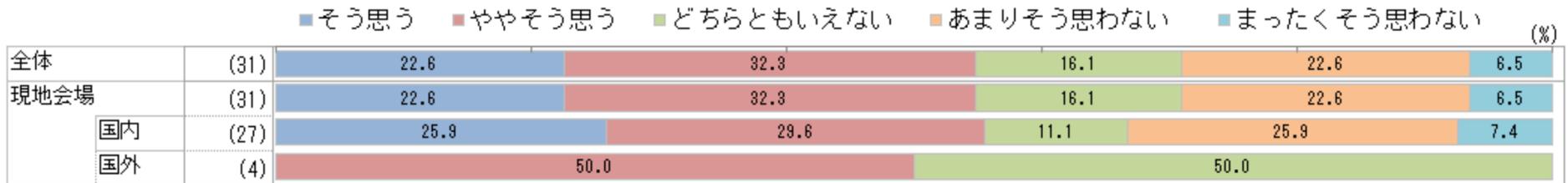
Q. プログラム中に上映された開催都市(広島市)のPR映像をご覧になりましたか



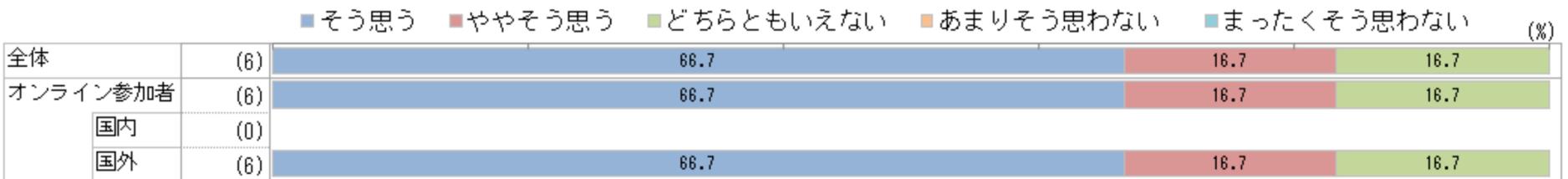
Q. その動画はどの程度、あなたの印象に残っていますか



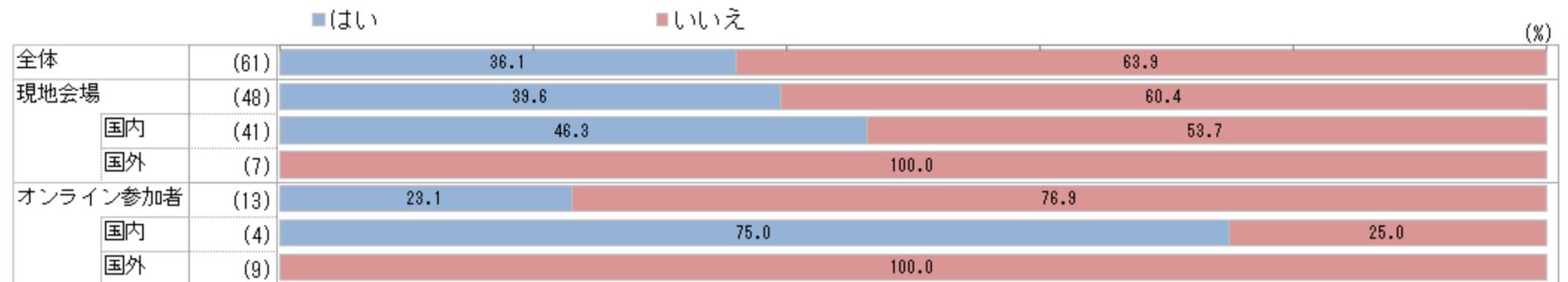
Q. その映像は、開催都市(広島市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



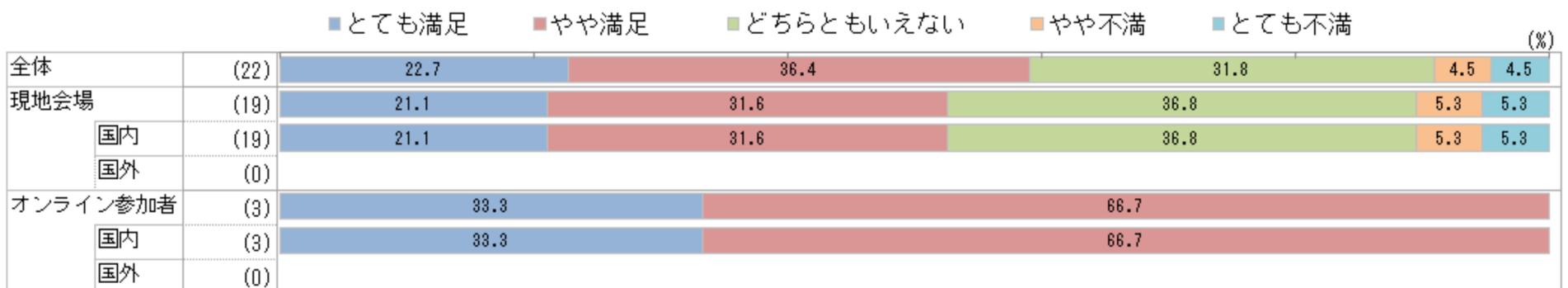
Q. その映像を見て今後、観光等の目的で開催都市(広島市)を実際に訪れてみたいと思いましたか



Q. あなたは、オンライン上でのポスター発表にアクセスしましたか



Q16 オンライン上でのポスター発表の満足度を選択してください



Q. オンライン上でのポスター発表について、あなたはどのように感じましたか

- 現地会場で実施される場合よりもむしろ優れている
- 現地会場で実施される場合と比較しても遜色ない
- 現地会場で実施される場合と比較すると劣るものの特に不満はない
- 現地会場で実施される場合に劣り、不満だ

		(%)			
全体	(22)	13.6	27.3	40.9	18.2
現地会場	(19)	10.5	31.6	36.8	21.1
国内	(19)	10.5	31.6	36.8	21.1
国外	(0)				
オンライン参加者	(3)	33.3		66.7	
国内	(3)	33.3		66.7	
国外	(0)				

【実証事業⑫ 第68回 国際食肉科学技術会議】

主催者名	日本食肉科学会		
会期	8月22日～8月25日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	神戸市	主たる会場名	神戸国際会館

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	57	55	112
外国人	8	136	144
計	65	191	256

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	
③	参加登録システムの導入	
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスクーショントัวร์の実施	●
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	

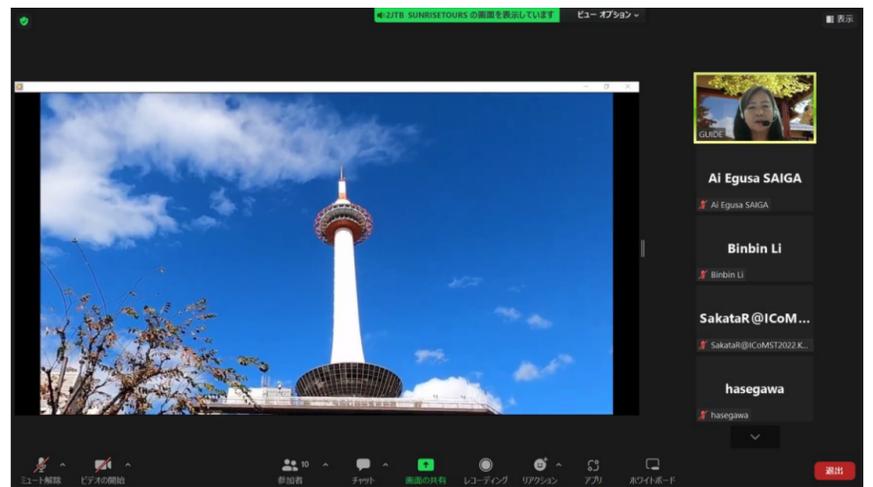
2)特筆すべき取組

①	開催後の追跡調査の実施	開催後の感染状況の調査のための文書を参加者に電子メールで送り、調査結果をまとめた。
②	オンラインツアーのコンテンツ作成及び提供	会議中に実施するオンラインツアーを企画、制作した。
③	消毒液、アクリル板、消毒ジェル・マスク等の感染症対策に資する物品	感染対策用のグッズ(消毒液、アクリル板、消毒ジェル、マスク等)を会場に設置した。

①



②



③

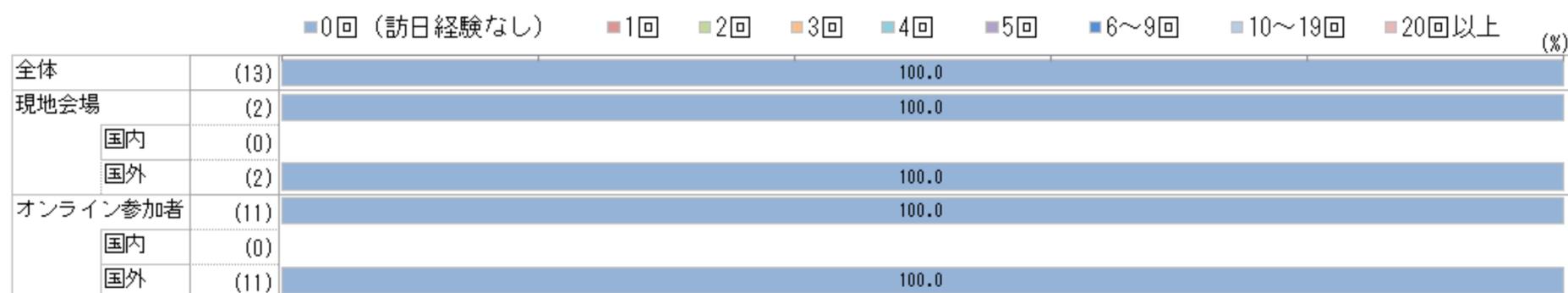


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

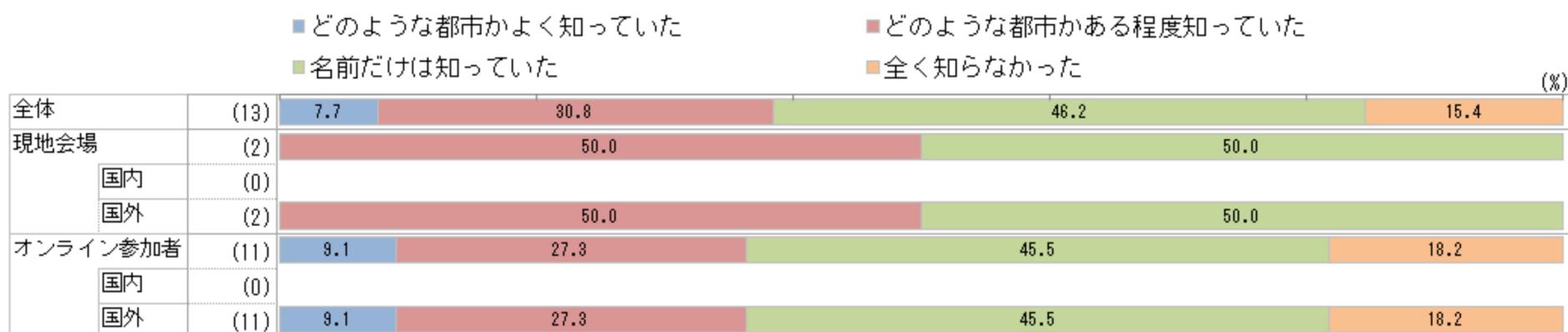
感染症対策	(1) 取組内容	来場者にはマスク着用を義務付け、会場内に検温器、アルコール消毒、除菌マットを設置し、衛生対策を図った。スクリーン設置のメインホールでは、ソーシャルディスタンスを確保して参加者が座れるよう席を配置した。注意喚起ポスターを各所に掲示して積極的な感染防止対策の呼びかけを実施した。現地参加者は来場前に抗原検査キットによる検査を行った。アルコールによるデスク等の清拭を一定の頻度で実施。抗原検査せずに来場した場合には、隔離して抗原検査を実施。また会議後に、感染状況の調査アンケートを実施した。
	(2) 取組による成果	会場受付時に、抗原検査キットの陰性確認と、体温測定、アルコール消毒は徹底して行った。パーティションもメイン会場だけでなく、スタッフ控え室も含めほぼ全ての部屋に設置した。会場内では全員がマスク着用で過ごし、現地での感染症対策は徹底されていたと思われる。座長に限ってはマスクを外して進行を行ったが、パーティション設置や前後の座長席の消毒などを徹底し、感染を抑制できた。ただし会議後の調査では陽性者がわずかに認められた。会場内でクラスターが発生した形跡はなかった。
	(3) 課題	会場内の感染症対策は徹底されていたが、会議以外の時間帯の参加者の行動を管理する事は不可能であった。本国際会議の実施時期(2022年8月)は感染者が全国でも非常に多い時期であったため、繁華街や公共交通機関における市中感染を完全に防ぐことは困難であったように感じた。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	オンライン参加者と現地参加者として提供サービスが公平となるよう、 会議冊子等はすべて電子化しウェブ配信で提供した 。また、良好な通信環境はオンライン参加者の満足度に直結するため、その準備と運営を専門業者に委託した。食肉関係者にとって神戸は特別な地であり ツアーは、バーチャルで実施した 。ツアーは神戸牛生産関連施設や神戸周辺の景勝地(京都市)など、魅力的なコースを複数準備し、バーチャル参加者には会議後にも、あらためて「神戸あるいは日本各地に足を運びたい」と思ってもらえるコンテンツを兵庫県や神戸牛流通推進協議会と連携して行った。
	(2) 取組による成果	全体として、現地参加者しか分からないような状況で会議が進むことは一切なく、 オンライン参加者中心で会議が実施できた 。この結果は、国際会議用ポータルサイトの綿密な検討、 会議冊子の電子化の徹底、配信基地(神戸国際会議場)の高速ネットワークの整備のおかげ である。上記の取組は本事業で助成されたものではないが、オンライン参加者の満足度向上には極めて重要な点であったと思われる。一方、大会3日目の エクスカージョンではバーチャルツアーを参加者に提供し 、わが国を代表する観光地の一つである神戸・京都の素晴らしさを参加者に伝える事ができた。神戸ビーフと結びつけたインバウンド需要の今後の拡大にも寄与しているものと自負している。時差を考え、開催時刻を朝と夜の2回実施した点も工夫の一つである。
	(3) 課題	オンラインの企画としては高水準であった印象であるが、対面のツアーと比べれば印象は弱いであろう。だからこそ、オンラインツアーをきっかけとして、今後の訪日を促す意味は大いにあったと思う。
開催地との連携	(1) 取組内容	(一財)神戸コンベンションビューローとは、開催地決定の段階から、具体的な施設の使用に至るまで連携して準備に取り組んだ。(一財)神戸観光局からは、本会議の公式ウェブサイト等に用いている神戸の写真が無償提供いただいた。兵庫県には、本会議の開会式での県知事によるあいさつ(録画ビデオ)をいただき、大会オープニングセッションで配信した。神戸肉流通推進協議会からは協賛を頂き、神戸牛のローストビーフを現地で提供した。
	(2) 取組による成果	新型コロナウイルスの感染状況が誰にも予測できない中、今年に入ってハイブリッド開催(国際会議場利用スペースの縮小)への切替を決断したが、神戸コンベンションビューローは協力的な姿勢で利用スペースの修正に応じて頂けた。また、上記取組内容に記載の通り、兵庫県・神戸市には多くの点で本国際会議にご協力を頂き、世界中の参加者に神戸の魅力が伝わったはずである。
	(3) 課題	ハイブリッド開催やオンライン開催における会場近辺の経済効果の減少をどう防ぐかは今後の課題と言える。対面開催であれば、会議場や周辺宿泊・飲食施設の売上げも大いに増えていたはずであるが、国際会議主催者としてできる事は限られており、残念である。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	既に「Kobe Beef」は日本を代表する食肉として世界的に有名であるが、前項で述べたような兵庫県及び神戸牛の魅力の発信と、この会議のセッションで取り上げる「日本からのメッセージ(世界に誇る和牛、ブランド肉等)」により、地元への需給押し上げ効果として、神戸ビーフの流通促進があげられる。国際会議を神戸で開催することで、上記の神戸肉流通推進協議会をはじめ、兵庫県の食肉関連箇所もこの機会に世界に発信していただいた。
	(2) 取組による成果	「Kobe Beef」のアピールを起爆剤とした「和牛に関する日本食文化」の認知度向上とあらたな文化的発展を参加者に提供できたと思う。また、バーチャルツアーを通じて、神戸市のアピールも行った。神戸コンベンションビューローは、国際会議のサポートサービスMeet in Kobeを提供している。そのサービスの一つの日本文化体験(華道・書道・茶道)を現地にて実施し、参加者には好評であった。
	(3) 課題	上記のようなアピールは大変素晴らしいものであると運営スタッフとして感じたが、あくまで現地に行った事で得られる印象である。オンラインでどのようにレガシー効果を強力に与えられるかは、大変難しい課題である。
サステナビリティ	(1) 取組内容	本会議のメインテーマは「食肉の未来を考える」としており、SDGs(持続可能な開発目標)達成への貢献が期待される研究についての招待講演を各セッションに準備している。特に、新技術に関するセッションでは、温室効果ガスなど環境負荷の観点から従来の食肉生産に代わる生産技術(培養肉や代替肉)に関する講演や、動物資源の有効利用(副生物利用)に関する講演があることが、本会議の特徴と考えている。
	(2) 取組による成果	上記の新技術に関するセッションとは、8/25のSession 7. Topics of Meat Science & Technologyである。予定通り当セッション(3題の基調講演)が行われ、どの演題も素晴らしい内容で、議論も盛り上がった。それ以外では、別のセッションで動物資源の有効利用(副生物利用)に関する講演も行われた。
	(3) 課題	食肉産業は、地球の環境・気候、経済活動、エネルギー問題、人の健康、飢餓など、SDGsの多くの項目に関わりがある産業である。今後もサステナビリティに関わる課題を解決するための基盤を提供することが、研究者と技術者の努めであり、このような国際会議を通じて、SDGsの活動に貢献していきたい。

【実証事業⑫ 第68回 国際食肉科学技術会議 個別アンケート】

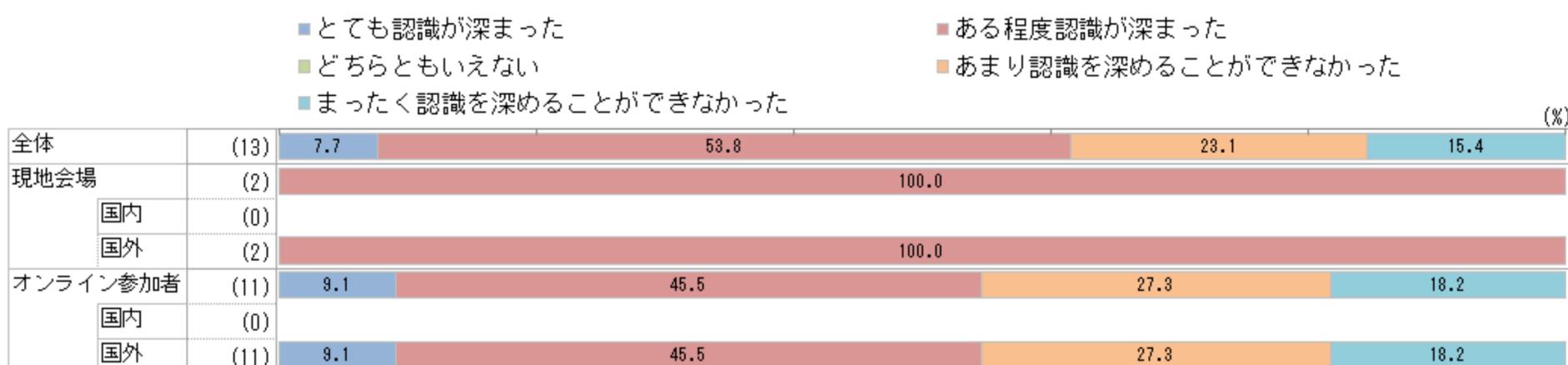
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



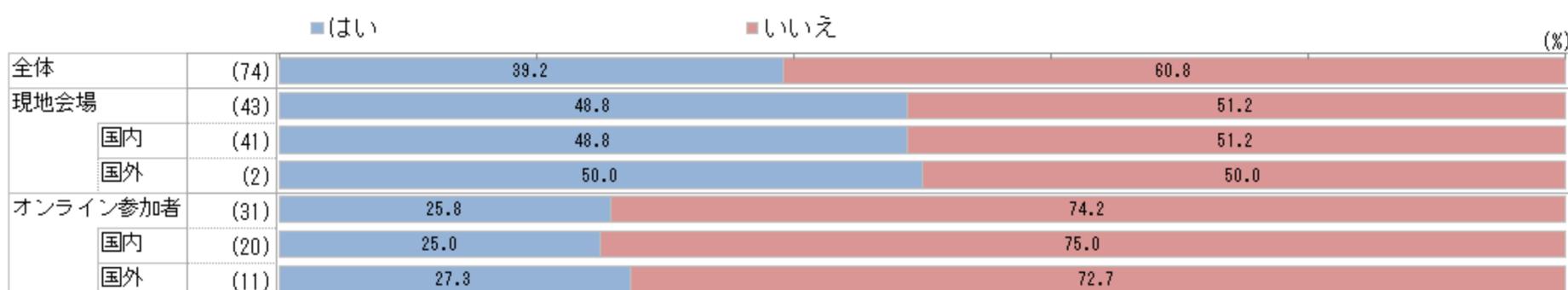
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(神戸市)のことをどれくらい知っていましたか



Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(神戸市)への認識が深まりましたか

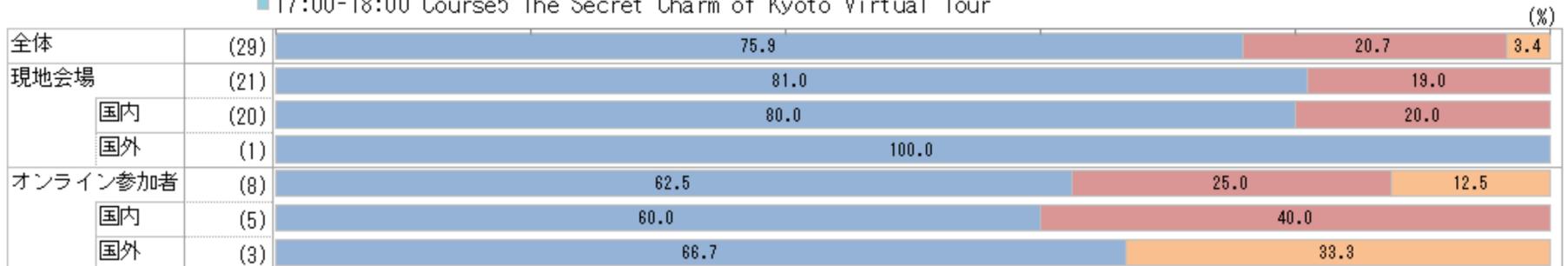


Q. あなたは、8月24日に実施されたエクスカージョン(バーチャルツアー)に参加しましたか



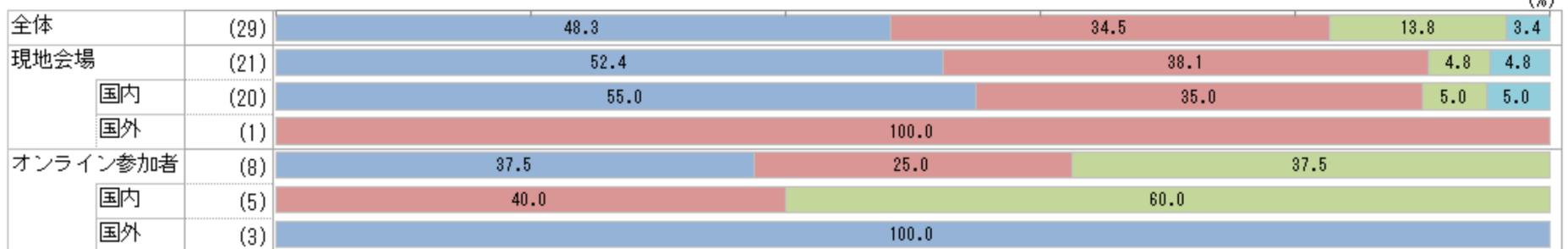
Q. あなたが参加したコースを選択してください

- 09:00-10:00 Course1 Heritage of Kobe and Tajima, the closed breeding from womb to chopsticks strategy
- 09:00-10:00 Course2 Arashiyama & Sagano Virtual Tour
- 09:00-10:00 Course3 The Secret Charm of Kyoto Virtual Tour
- 17:00-18:00 Course4 Arashiyama & Sagano Virtual Tour
- 17:00-18:00 Course5 The Secret Charm of Kyoto Virtual Tour



Q. エクスカーション(バーチャルツアー)の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満



Q. その体験は、開催都市(神戸市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか

- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない



Q. その体験を経て今後、観光等の目的で神戸市を実際に訪れてみたいと思いましたか

- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

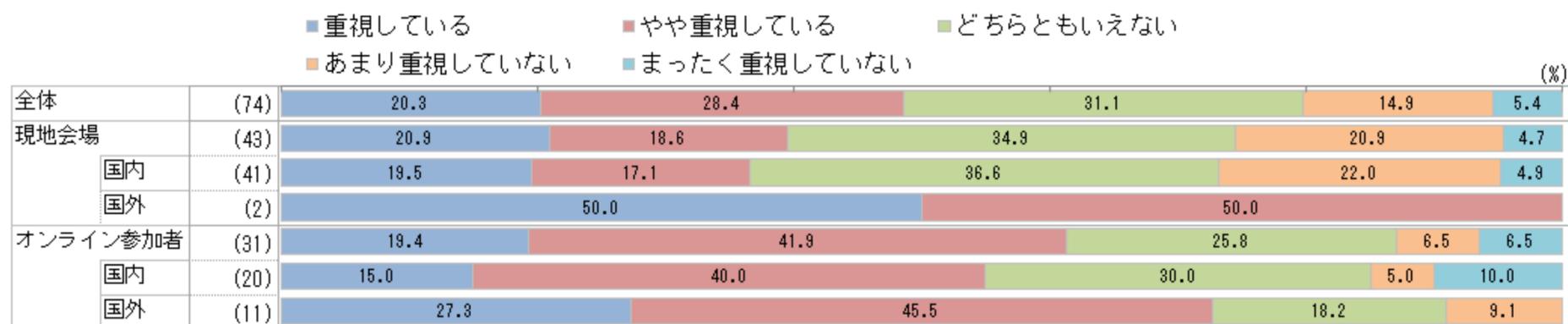


Q. その体験を経て今後、観光等の目的で京都(バーチャルツアーでの訪問地)を実際に訪れてみたいと思いましたか

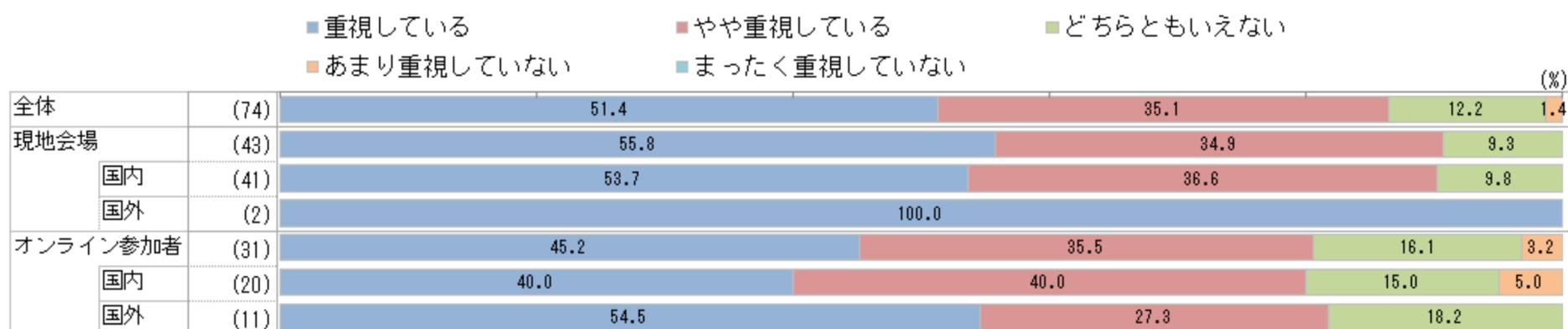
- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない



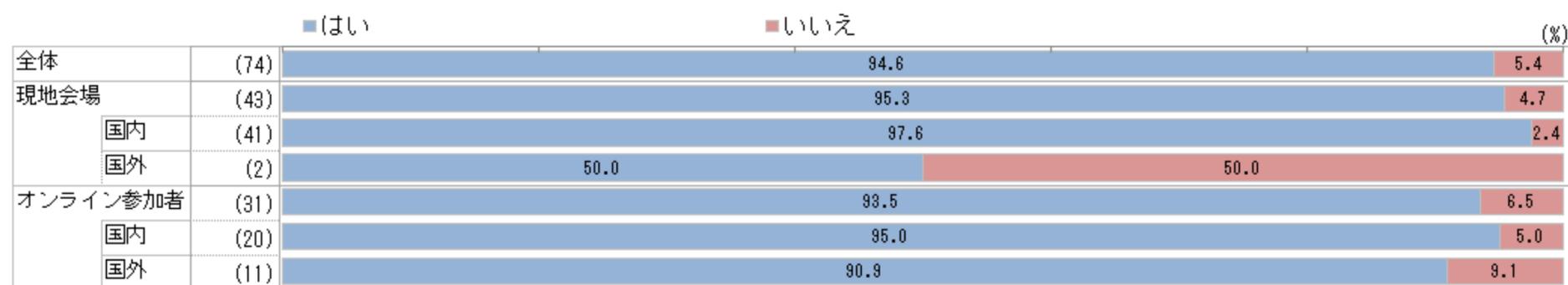
Q. あなたは、国際会議のプログラムのなかでもエクスクーションを重視していますか



Q. あなたは、国際会議のプログラムのなかでも他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)を重視していますか



Q. あなたは、オンライン上でのポスター発表(E-Poster Session)にアクセスしましたか



Q. オンライン上でのポスター発表の満足度を選択してください



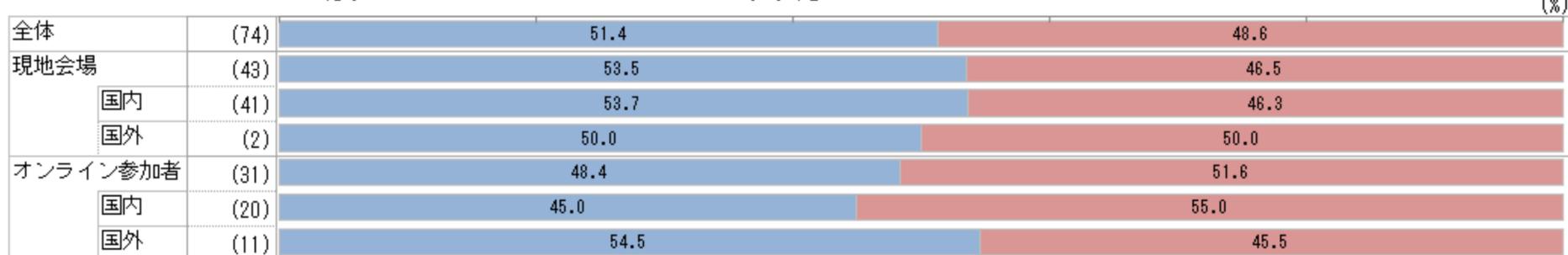
Q. オンライン上でのポスター発表について、あなたはどのように感じましたか

- 現地会場で実施される場合よりもむしろ優れている
- 現地会場で実施される場合と比較しても遜色ない
- 現地会場で実施される場合と比較すると劣るものの特に不満はない
- 現地会場で実施される場合に劣り、不満だ



Q. あなたはオンライン展示にアクセスしましたか

- はい
- いいえ



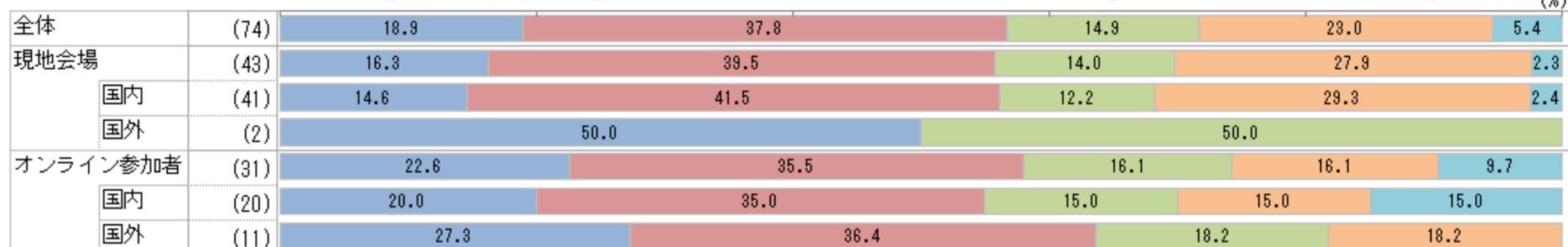
Q. 展示の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか

- そう思う
- ややそう思う
- どちらともいえない
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない



【実証事業⑬ 超低温物理学国際会議 2022】

主催者名	超低温物理学国際会議実行委員会		
会期	8月25日～8月28日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	北海道小樽市	主たる会場名	グランドパーク小樽

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	50	13	63
外国人	48	22	70
計	98	35	133

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスクーションツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	事前のPCR検査または当日の抗原検査	感染症対策を最重要課題に位置づけてできる限りの対策を行いましたが、発熱や咳などの症状が出た際の検査実施機材として、抗原検査キットを100個購入し、会議初日に参加者及びスタッフ全員に配付しました。
②	オンライン展示会	ポスターセッションは対面とオンラインで2回実施しました。オンラインポスターセッションを実施するための機材設置と会場設営、当日の会議運営を株式会社イー・シーにより行いました。

①



②

No.1 その他諸経費 オンラインポスターセッション実施のための設置及び運営 (株式会社 イー・シー)



イー・シーからのエンジニアと
オンラインポスターセッション実施準備風景(ZOOM等設定)

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	2022年7月時点で国外参加者が50名弱となると同時に、第7波の感染爆発が起こっていたため、会場面積を当初予定の2倍にして、現地参加者が2m程度の間隔で着席できるように配慮しました。また参加者交流のためのエクスカージョンとディナーは中止しました。ERFSを発給した参加者の健康チェックを行うと同時に、全ての現地参加者に抗原検査キット・マスク(N95と不織布を4日分)を配布し、会場内外で常にマスク着用を徹底させました。会場外に非接触検温器と消毒ディスペンサーを設置しました。昼食は弁当を配布して会場内で取り、休憩時の茶菓はカップに入れたものを提供し、参加者が手を触れないように配慮しました。帰国時にPCR検査が必要な韓国からの参加者1名は、会議3日目の午後札幌市の民間検査会社に行き検査を受けるよう配慮しました。
	(2) 取組による成果	上記の取り組みが奏功し、会議期間中一人も感染者を出すことはありませんでした。日本人参加者はもちろん外国人参加者も会場でマスク着用を遵守していました。感染者を出さないことを最大の目標としていましたので、目標が達成され十分な成果があったと言えます。帰国時にPCR検査が必要な参加者へのアドバイスと誘導もうまくいきました。感染者、患者が発生した際の病院等へのアクセスについても事前に会場ホテル担当者、旅行会社担当者と段取りを打ち合わせしていましたが、幸いにも利用することはありませんでした。
	(3) 課題	本国際会議は伝統的に参加者のインフォーマルな議論を重視しているため、エクスカージョンと会議ディナーを実施できなかったことは残念でした。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	完全ハイブリッド方式の会議を目指しました。現地の講演をリアルタイム中継して、講演スライドと講演者、会場の様子が常にオンライン参加者に見えるようにしました。質疑応答時は質問者の顔が瞬時に映るよう画面切り替えを行いました。オンライン講演への切り替え、オンライン参加者の顔の映し出しも瞬時にできるようにしました。またポスターセッションは現地参加者用の会場開催と、オンラインでの開催の2回を行いました。特にオンラインポスターセッションでは本実証事業のサポートによりオンライン会場設置を行いました。
	(2) 取組による成果	ハイブリッド会議は大きなトラブルもなく、大成功に終わったと言えます。オンライン参加者と現地参加者のコミュニケーションも十分に取ることができ、参加者からも高い評価を得ました。ポスターセッションもバーチャル会場上で参加者のコミュニケーションが取れていました。
	(3) 課題	ハイブリッド会議に使用したコンピュータの1台が会議開始30分前にシステム自動更新を始めてしまい、そのためオンライン会議のZOOMの設定がリセットされ、オンライン講演の音声伝わらなくなり、開始が5分ほど遅れたというトラブルがありました。会議全体を通してトラブルはこの1件だけでした。
開催地との連携	(1) 取組内容	参加料の徴収と現地での会議運営を旅行会社に依頼して進め、現地参加者への観光情報提供も行いました。また外国人現地参加者をできる限り増やすため、ERFS及び査証発給サポートを、業者の協力を得て進めました。査証発給のアナウンスを会議ウェブサイトを通じて広く呼びかけました。ポスター賞受賞者への景品作成を小樽市の有名な北一硝子に依頼し、会議ロゴ入りグラスを受賞者に贈呈しました。
	(2) 取組による成果	会場が小樽市のショッピングモール内にあるため、参加者は会議の合間に買い物などを楽しむことができ、また小樽市の観光も容易に行うことができました。
	(3) 課題	感染対策のためエクスカージョンやディナーを中止したことにより、会議の中で小樽市の紹介等をする機会がなかったことは非常に残念でした。また参加者に飲食や観光を積極的に勧めることができなかったことも、感染対策とは言え課題として残りました。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	本国際会議は超低温物理学という基礎科学技術に関連するものであり、開催地の産業や学術の発展に直接関わるものではありませんが、現在爆発的に発展し世間の関心を集めている量子技術における最も基本的な学術及び技術として、北海道及び小樽市でも関心と呼ぶように配慮します。
	(2) 取組による成果	今回の会議では、超低温物理学の最近の動向と他分野への波及状況を考慮して従来よりも広範囲の研究分野でセッションを構成しました。またエクスカージョンの時間をセッションに充てることで、各講演に十分な質疑応答の時間を取ることができました。また量子技術を取り扱う国内企業2社の援助を得て両社のセミナーを実施し、日本での当該分野を利用した産業発展について議論する機会を設けることができました。
	(3) 課題	今回の会議は外国人研究者の現地参加と感染対策、ハイブリッド会議及びオンラインポスターセッションの成功を最重要目標として進めたため、一般市民に対するアピールが十分ではなかったことが課題として残りました。
サステナビリティ	(1) 取組内容	超低温物理学は量子コンピュータの実現に大きく貢献し、次世代の量子情報技術に不可欠な要素技術・基礎学問として改めて脚光を浴びつつあります。本会議は基礎科学と次世代量子科学技術の発展を加速させるとともに、SDGs-9「レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る」に大きく貢献できると考えています。講演動画配信を通じて、本研究分野への関心・投資が増えることを期待しています。
	(2) 取組による成果	SDGs-9に貢献する取り組みとして、超低温物理学の他分野への波及を意識したセッションを構成しました。特に日本と米国における量子コンピュータ技術の進展について、当該分野の第一人者より講演を頂けたことは成果として挙げられます。また全講演の動画を現在配信できるように編集途中で、講演者の許可を得たものについては広く配信する予定です。
	(3) 課題	感染状況や水際対策による会議運営への制約がある中では、最大限SDGsに対する取り組みができたと思いますが、やはりコロナ禍の影響で通常時よりも十分ではなかったことは残念であり課題として残りました。

【実証事業⑭ 第5回価値創造のためのグローバルカンファレンス】

主催者名	第5回価値創造のためのグローバルカンファレンス実行委員会		
会期	9月2日～9月4日	分野	社会
主たる開催都市	金沢市	主たる会場名	金沢文化ホール

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	55	5	60
外国人	11	11	22
計	66	16	82

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスクーショントัวร์の実施 ●
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	ソーシャルディスタンス意思表示シールの配布	意思表示シールとして、①非接触型挨拶、②握手OK、③ハグOKの3種類とし、参加者へ3種類のシールをネームカードとともに配布。会期中は参加者に「意思表示シール」を身につけていただくことにより、感染対策に関するお互いの意思が明確となり、コミュニケーションにおける不安や心配事をなくすことによって、それぞれの意思を尊重した交流の機会を創出することが期待でき、実施した。
②	ゾーニングのための看板等の設置	ゾーニング看板には、マスクと手袋の着用という内容を記載し、感染症対策の喚起効果を発揮した。ビュッフェの前に設置したことにより、国籍問わずほとんどの参加者はルールを守っていただくことができた。
③	オンラインツアーの作成	ネットワーキングの場であるGala Dinnerのライブ配信を行うことで、オンサイト会場の臨場感を伝えるとともに、オンライン参加者だけに向けた、金沢市観光PR、特別講演講師等の対談とGala Dinnerが行われた料亭の料理人より料理の紹介を配信した。その際、インタビュアーが料理紹介の通訳したり、質問をしたりした内容を配信。日本料亭を選定したため、金沢地元の食材の魅力だけではなく、日本の和食文化も伝えることができた。

①



②



③-1



③-2



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	<p>【取り組み①】Welcome Reception開催時に、交流エリアと飲食エリアとしてゾーニングを行い、交流エリアには飲み物程度が設置できる程度のテーブルを配置し、飲食エリアはソーシャルディスタンスとパネルのある席を設置し、参加者それぞれが選択ができる環境を用意しました。さらに、交流エリアは通常のパーティションではなく、レセプションの雰囲気に合わせて、パーティー風船を装飾しました。</p> <p>【取り組み②】会期中は参加者に「意思表示シール」を身に付けていただくことにより、感染対策に関するお互いの意思が明確となり、コミュニケーションにおける不安や心配事をなくすことによって、それぞれの意思を尊重した交流の機会の創出が期待でき、実施しました。「意思表示シール」は3種類に分けられて、「非接触型挨拶」、「握手OK」と「ハグOK」です。</p>
	(2) 取組による成果	<p>【取り組み①】今回は交流エリアを会場の一番奥に設置したため、ご利用が見込みよりも少なくなっていました。今後、配置などを考慮することで認知を高めて活用してもらえるような流れが必要であることがわかりました。また、ゾーニング看板には、マスクと手袋の着用という内容もあるため、感染症対策の喚起効果を発揮し、料理卓の前に設置したことにより、明確な認知を図ることを可能にし、国籍問わず、ほとんどの参加者にルールを守っていただくことができました。【取り組み②】90%の参加者は意思表示シールをネームカードに貼っていただき、会期中にもお互いの意思が確認でき、一定の効果が発揮された様子でした。また、参加者の反応も、概ね良好であり、楽しみながら、取り組んでいただくことができました。なお、3種類それぞれの概ねの比例は以下の通りです。(スタッフ含む)非接触型:15名、握手OK:40名、ハグOK:5名という結果でした。</p>
	(3) 課題	<p>ゾーニングエリアは事前のご案内を行ったが、会場奥へ設置したこと、また、認知不足により利用者数は少ない状況となりました。交流エリアの設置場所と飲食エリアのゾーニングと配置の考慮、認知を高める改善が必要であることが課題として残りました。</p> <p>さらに、雰囲気を緩和するための風船は、配置やサイズ等の選定によっては、入りにくさを演出してしまう場合もあり、効果的な実行を目指すためには、さらなる検証が必要であることがわかりました。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>ネットワーキングの場であるGala Dinnerのライブ配信をおこなうことで、オンサイト会場の臨場感を伝えるとともに、オンライン参加者だけに向けた、金沢市観光PR、特別講演講師等の対談が行われた。料亭の料理人より料理の紹介を配信しました。</p>
	(2) 取組による成果	<p>現地に来られない参加者にも、開催地の魅力を伝える機会となりました。さらに、オンライン参加者のみのコンテンツを設計し、現地参加者とは違ったプログラム提供をすることで、特別感の演出もできたと考えています。</p>
	(3) 課題	<p>時差があるため、実際にリアルタイムで視聴される参加者は少なく、プログラムに関する魅力だけではなく、必然性や実行タイミング等も考慮すべき点であることが、わかりました。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>【取り組み①】金沢コンベンションビューローより、開催に関する助言だけでなく、観光パンフレットとマスク除菌シートセットもいただきました。</p> <p>【取り組み②】金沢観光協会が提供された金沢PR動画をGala Dinnerのライブ配信で活用しました。</p>
	(2) 取組による成果	<p>【取り組み①】会議の計画運営をする際に、金沢コンベンションビューローより様々な事例やアイデアを頂き、現地の施設とのやり取りもよりスムーズにできました。提供していただいたパンフレットも参加者にご提供し、会議以外の時間を現地の観光や食事を促す効果もあります。</p> <p>【取り組み②】現地に来られないオンライン参加者に、動画を通して開催地の魅力を伝えることができました。</p>
	(3) 課題	<p>今回の取り組みにおける大きな課題はありません。オンラインコンテンツについて、開催地の諸団体でもプランを持っていたらと企画面での労力が少なく、有効だと感じました。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>レセプションとGala Dinnerを開催し、地元の料亭とレストランを使用しました。</p>
	(2) 取組による成果	<p>Gala Dinnerを日本料亭を選定したため、金沢地元の食材の魅力だけではなく、日本の和食文化もよく伝えられたと思います。日本の和食文化をより世界中に発信できたかと思えます。</p>
	(3) 課題	<p>基本的な開催における経済波及効果は前提であるものの、レガシー効果を最大化するためには、開催地がどのような地域づくりを目指してMICEに取り組んでいるのか、地場産業との関連性なども含めて、開催地で実施する必然性等の連動が図れると、よりレガシー効果が高まるのではないかと感じました。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>特にございません。</p>

【実証事業⑮ 第18回アルミニウム合金国際会議】

主催者名	一般社団法人 軽金属学会		
会期	9月4日～9月8日	分野	産業
主たる開催都市	富山市	主たる会場名	富山国際会議場 ANAクラウンプラザホテル富山

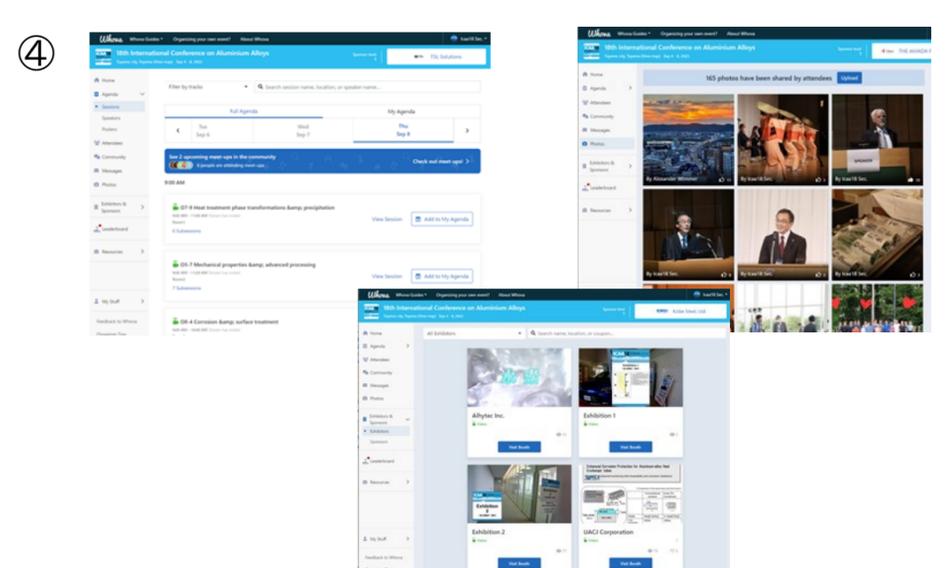
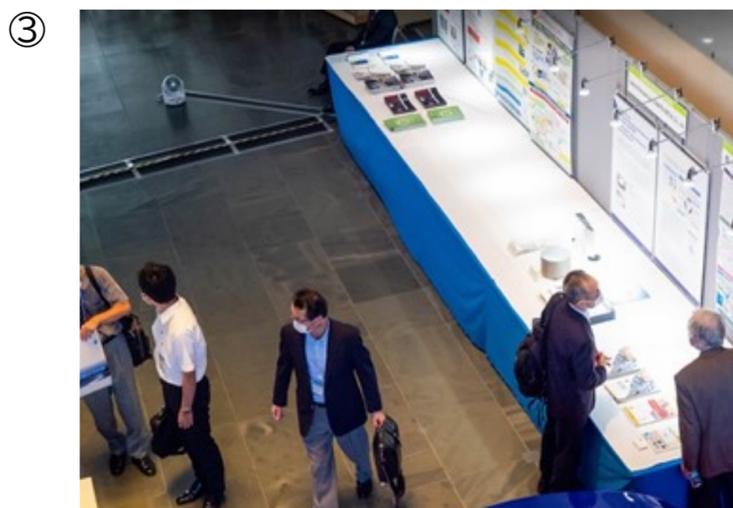
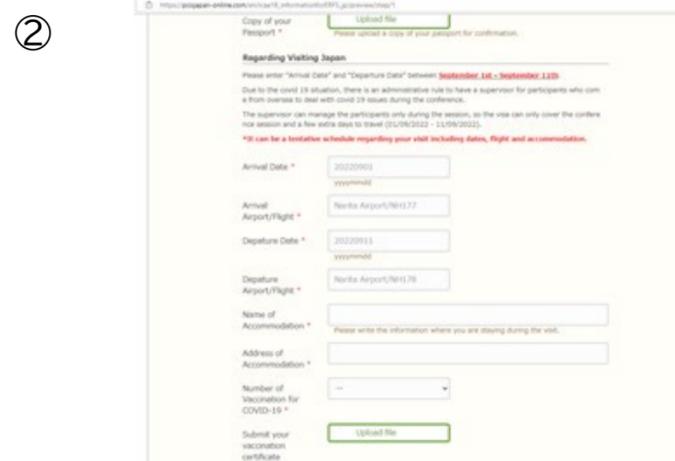
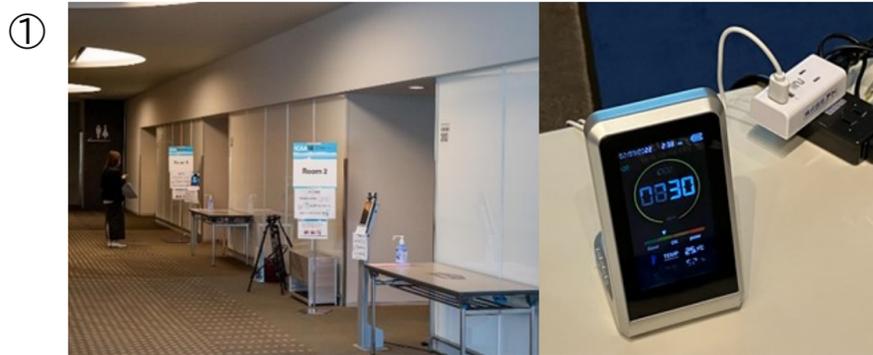
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	269	34	303
外国人	91	83	174
計	360	117	477

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	サーマルカメラや二酸化炭素濃度測定器の導入	検温と消毒をすませてから入場できるように、各会場前にサーマルカメラと消毒液、二酸化炭素濃度測定器の設置。
②	ERFS申請時に検査証明書のアップロード項目追加	海外の方には来日前のPCR検査をICAA18のホームページにて促した。また、ERFS申請に関する書類のヒアリングの際には、接種証明のアップロードができるように、参加登録システムに項目を追加した。
③	サーキュレーター配置	場内にサーキュレーターを設置し、会場の換気に加え、空気を循環させることができた。
④	プラットフォームWhovaの活用	主催者からのアナウンスメントをWhovaを活用し、参加者へ発信した。このツールからは、アプリ、Email両方へアナウンスメントを送ることができ、PCを開いていない参加者へもスマホを通じてお知らせを流すことができた。アプリから配信を見ている方が現地でも見られた。また、現地での様子をアプリを通じて掲載した。参加者も写真のアップロードが可能であり、会議の合間の旅行やアフターコンベンションの様子などを何うことができた。

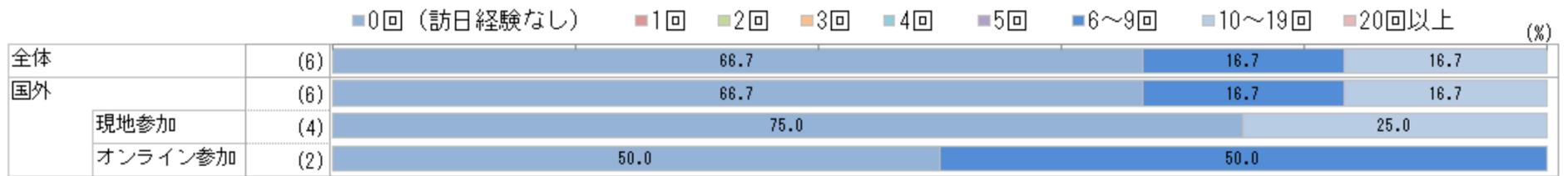


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

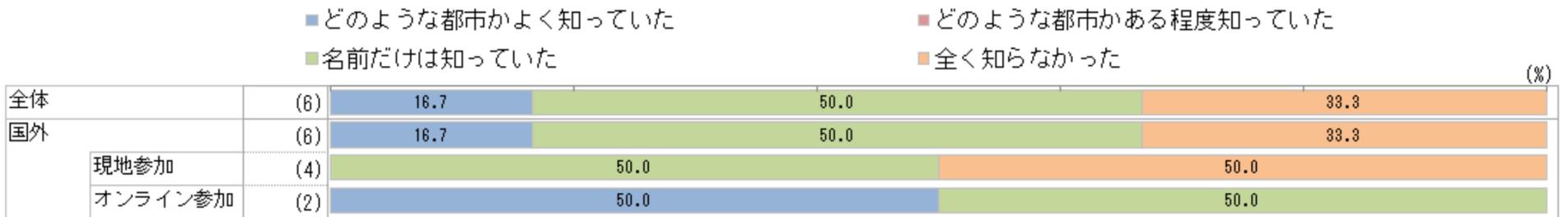
感染症対策	(1) 取組内容	<p>コロナ対策:事前のPCR検査を促し、検査証明書の提示(事前アップロード)をしていただく。前日の受付時や会期中には抗原検査キットの配布を行った。会場周辺のPCR検査場のご案内の作成。会場はサーマルカメラや消毒液を各所に設置、飛沫防止対策を講じた。各部屋のキャパシティを50%程度とし、間隔を十分に取ったレイアウトとし、感染リスクを軽減。飲食の場でも、近距離の会話時はマスクの着用を励行。晩餐会は正餐とし、お酒の注ぎ合いは行わない。感染のリスクを極力避け、安全な会議環境を提供した。</p> <p>アクリル板の設置を行い演者はマスクを外して講演を可能とした。マスクを外しての発表の後は、必ずマイクや設備などを消毒することを徹底した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>検査証明書の事前アップロードでは、ほぼ証明書を提出してもらえることができた。また、感染が疑われる方は自らオンライン参加を選ばれ、会場にお越しになることはなかった。</p> <p>また会場のキャパシティを50%程度とすることで、密となる会場がなく、参加者同志の間隔を十分に取ることができた。飲食の場でも隣接する参加者とはアクリル板越し、マスク着用で会話をしていただけた。</p> <p>COCOAでも陽性者に対する接触通知を受けることがなかった。</p>
	(3) 課題	<p>海外の参加者にルールを守っていただくことに苦心した。マスクを外す方も時折見られたが、マスクの着用をお願いするなどお声がけをした。</p> <p>気軽にPCR検査を受けられることができる場所が限られている。</p> <p>抗原検査キットでの検査を嫌がる方が見られたので、もっと簡易な方法があるとよいと感じた。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>ICAA18では会議プラットフォームWhovaの利用 ポスター発表は、E-posterとし、ポスター発表者はZoomのブレイクアウトルームで質疑応答を行った。</p> <p>Whova上では、学会発表以外に参加者同士のコミュニケーションを取ることができた。国内外の研究者とコミュニケーションを取れるようにすることで、国境を超えた研究者同士の繋がりを深めていただく。</p> <p>オンライン展示では、会場の風景を撮影し、オンライン参加の方にも会場の様子が分かるよう配信を行った。</p> <p>会場では、専用回線の増設を行った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>プラットフォームWhovaを参加者自ら活用し、会議内外でのソーシャルギャザリングでの活用が見られた。オフィシャルカメラマンの写真のアップロードも好評であった。</p> <p>アプリ版のダウンロードも79%あり、メール・アプリでのアナウンスメントができ、小さな用事であってもやり取りが可能であったことは大変便利であった。</p>
	(3) 課題	<p>多くの参加者はWhovaの使用方法について理解していたが、一部の参加者にはわかりにくい部分があったようだった。</p> <p>マスクを外してアフターコンベンションを楽しんでいる写真がアップロードされたことがあったが、事務局側で削除を行った。楽しんでくださっていることは分かったが、日本のルールを学会場で徹底することは難しいと感じた。(反面、その事実を知ることができた)</p> <p>アプリの公開がもう少し早くできれば、参加者間だけでなく、参加者と事務局のコミュニケーションにもっと活用できた。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>立候補を決意してから開催地である富山県のPRのため、立候補資料作成時から富山県の支援を得ている。また、コンベンション開催補助金を申請する。富山県からは参加者向けに富山のミネラルウォーターの提供をいただいた。富山県とはコロナ対策についても常に情報共有させていただいており、今回は、富山県PCR等検査無料化事務局にコロナの検査について情報協力を得て臨み、スタッフマニュアルに緊急時の連絡先などを記載し、共有した。【富山県】富山県開催補助金の申請 【富山市】富山市後援、富山市コンベンション開催補助金 【富山コンベンションビューロー】伝統芸能、県内観光に関する補助金、インフォメーションブースを設置し、ボランティアが観光情報などを案内、県内観光に使えるコンベンションタクシー(半額補助券)の受付を行った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>富山コンベンションビューローのインフォメーションコーナーには、各国の参加者が周辺情報や観光情報などを求めて訪れていたし、会議の合間に観光している様子がうかがわれた。</p> <p>また気温が高かったので、提供されたペットボトルの水も好評であった。</p>
	(3) 課題	<p>富山コンベンションビューローが、英語対応のボランティアを集めていただくのに苦心された。しばらく海外の方の対応をしていなかったことと、コロナ禍であることが影響したと思われる。海外からの人の交流が見込まれる中、人材の確保なども課題と思われる。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>日本のアルミ産業、特に豊富な水が育んだ富山のアルミ産業を世界に発信。国内のアルミ産業力を示す展示に加えて、富山県内のアルミ産業の工場見学を行い、終了後にはその様子をICAA18ウェブサイトレポートすることで、富山はもちろん、我が国のアルミ産業がカーボンニュートラルを達成する潜在能力を持つことを世界に発信した。</p> <p>富山の水素エネルギービジョン、新規に検討されているアルミシティー構想の情報発信もあわせて行った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>一般県民がアルミの展示物やMIRAIの展示を見学に来てくださった。</p> <p>また、地元メディアへの情報提供により、地元ニュースや新聞などに取り上げられた。外出を控えるよう言われている中、このような国内外の人の交流があることで世界的にも権威のある会議が開催されたことをアピールできた。</p>
	(3) 課題	<p>本来ならば市民公開講座で富山県民にこの学会をアピールすべきであったかと思うが、コロナ禍であることより断念した。また、工場見学も複数開催をしたかったが、企業からの賛同を得ることが難しかった。このようにコロナ禍での制約をうけたことが残念であった。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>ICAA18のメインテーマは“Aluminium and its alloys for zero carbon society”である。</p> <p>「Zero carbon」いわゆるカーボンニュートラルをメインテーマとした国際会議であり、特にアルミのリサイクルを中心とした今後のアルミ産業を取り巻く課題と、今後の展開を予期させる研究発表と技術紹介のセッションから構成されている。さらに、これらに関連した企画展示をオンサイト並びにオンラインにて世界に配信し、「日本のアルミ産業」の先進性を世界に先駆けて発信した。提供されたアルミ缶飲料の空缶を回収し、地元富山のリサイクル業者に回収を依頼した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>日本のアルミリサイクルに関しては、プレナリー講演にて熱い議論やコメントが交わされた。これら海外からの日本アルミ産業に関するコメントが、今後の産業発展の糧となることを期待したい。</p> <p>配布物はできるだけPDFで配布を行った。</p>
	(3) 課題	<p>アルミ缶とペットボトルでゴミ箱を分けたが、分別が徹底されなかった。ゴミ回収のルールの徹底も難しいと感じた。</p> <p>紙の印刷物が欲しいという声が聞かれた。スマホやタブレットを使わない人の閲覧環境の対応は課題であった。</p>

【実証事業⑮ 第 18 回アルミニウム合金国際会議 個別アンケート】

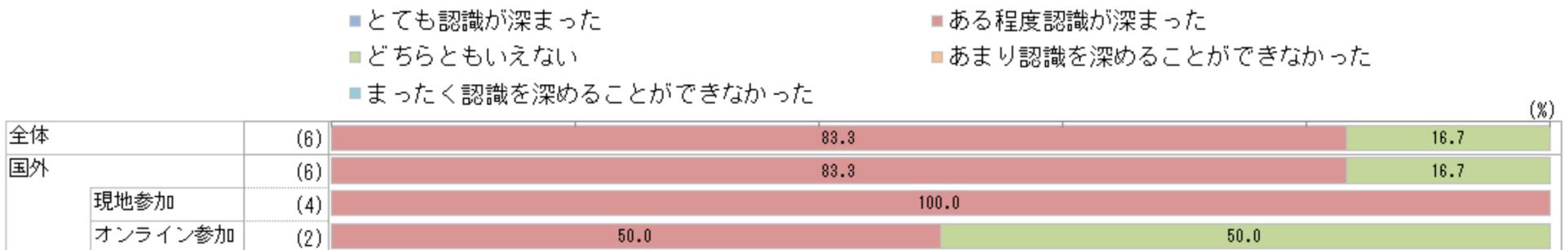
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



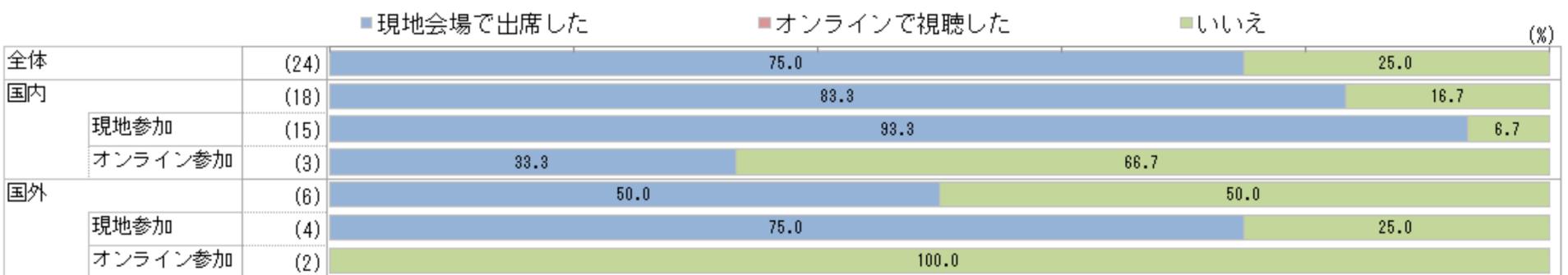
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(富山市)のことをどれくらい知っていましたか



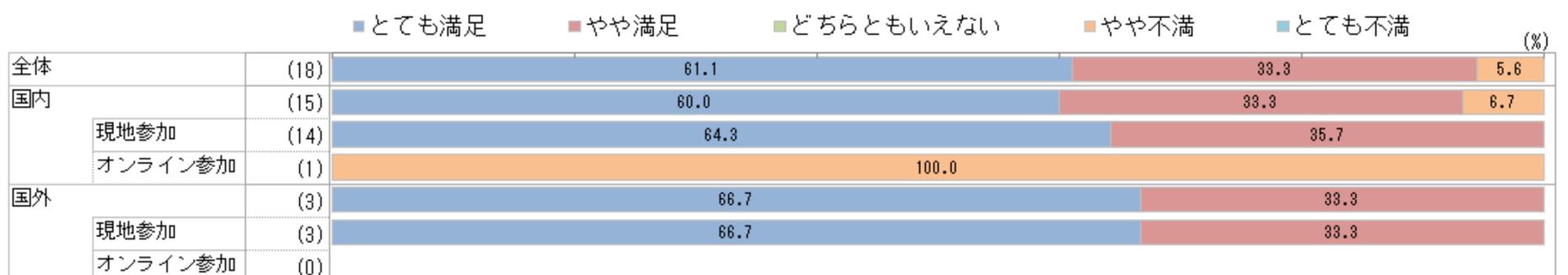
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(富山市)への認識が深まりましたか



Q. あなたは、9月7日の夜に開催されたバンケット(ANAクラウンプラザホテル富山)に出席しましたか

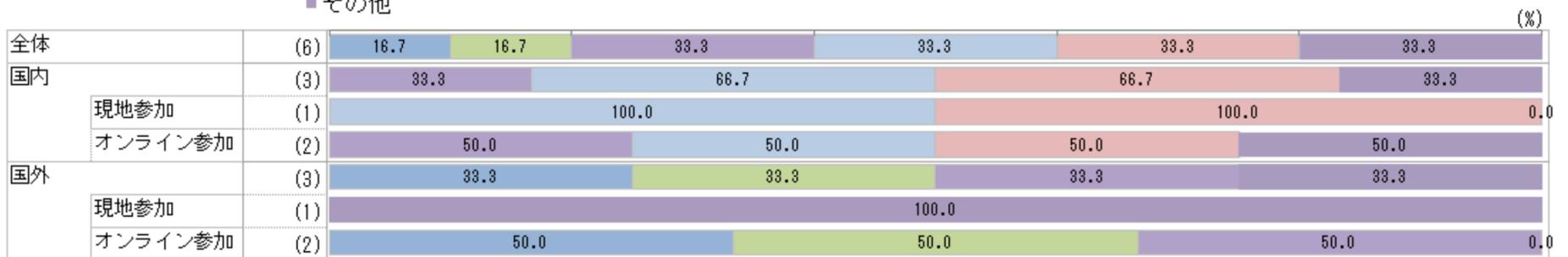


Q. バンケットの満足度を選択してください



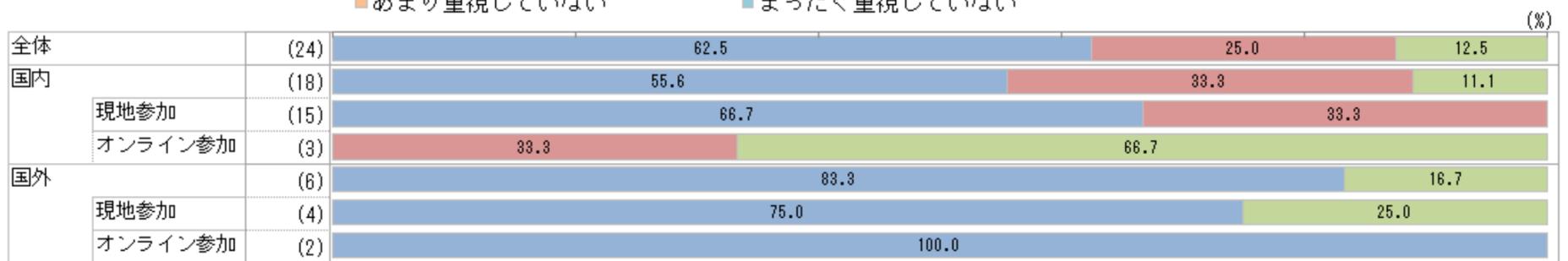
Q. あなたがバンケットに出席しなかった理由を全て選択してください

- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- バンケットをオンラインで視聴すること自体にあまり魅力を感じなかった
- バンケットをオンラインで視聴できることを知らなかった
- バンケットの会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- バンケットの会場における感染症対策に対する不安があった
- その他



Q. 国際会議のプログラムのなかでも他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)をあなたはどの程度、重視していますか

- 重視している
- やや重視している
- どちらともいえない
- あまり重視していない
- まったく重視していない

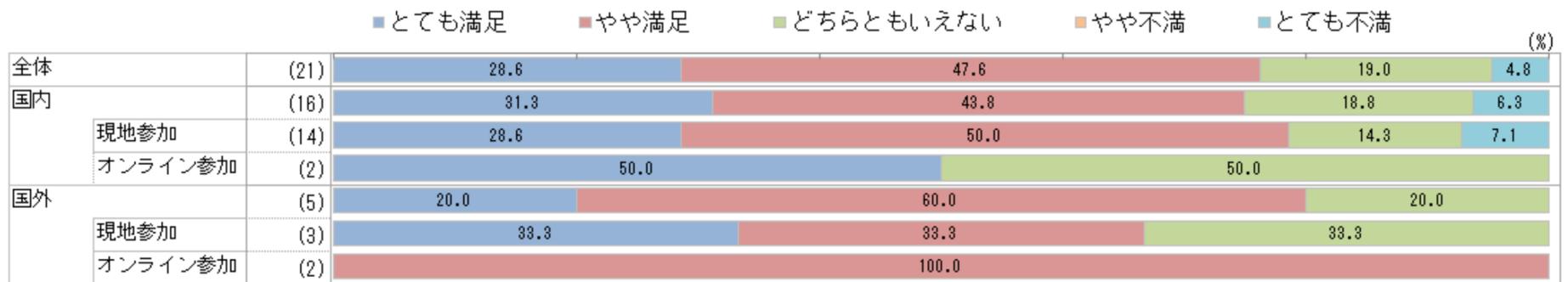


Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(Whova)にアクセスしましたか

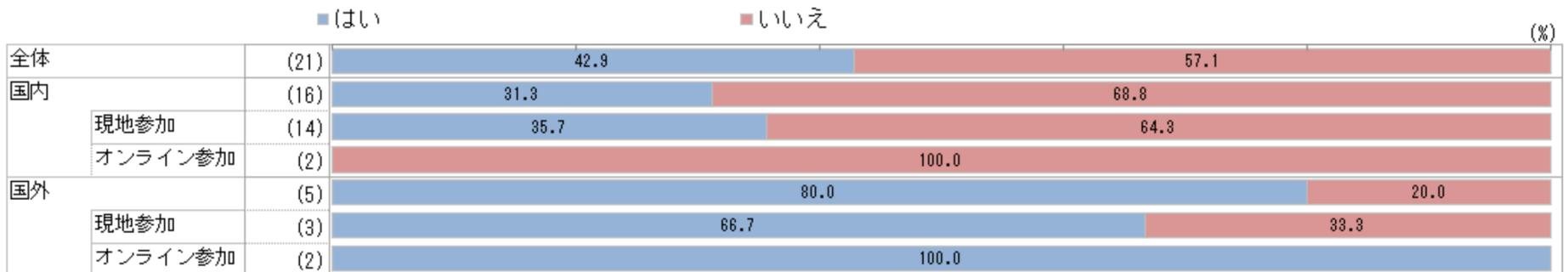
- はい
- いいえ



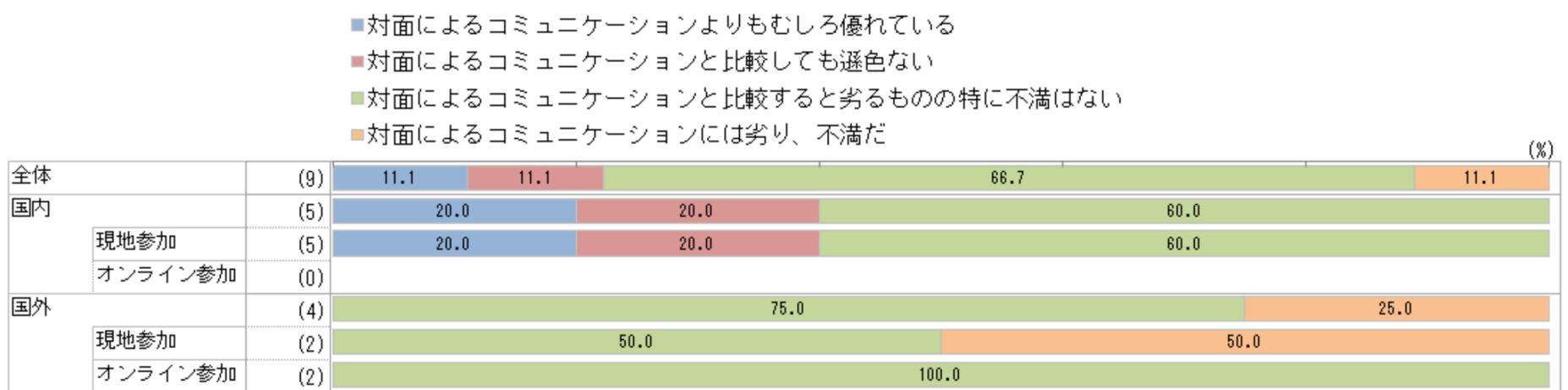
Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(Whova)の満足度を選択してください



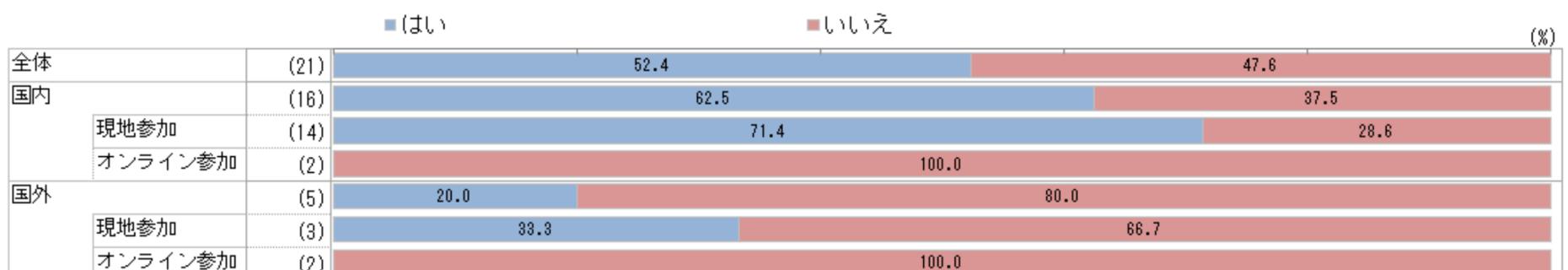
Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(Whova)にアクセスし、他の出席者とコミュニケーションをとりましたか



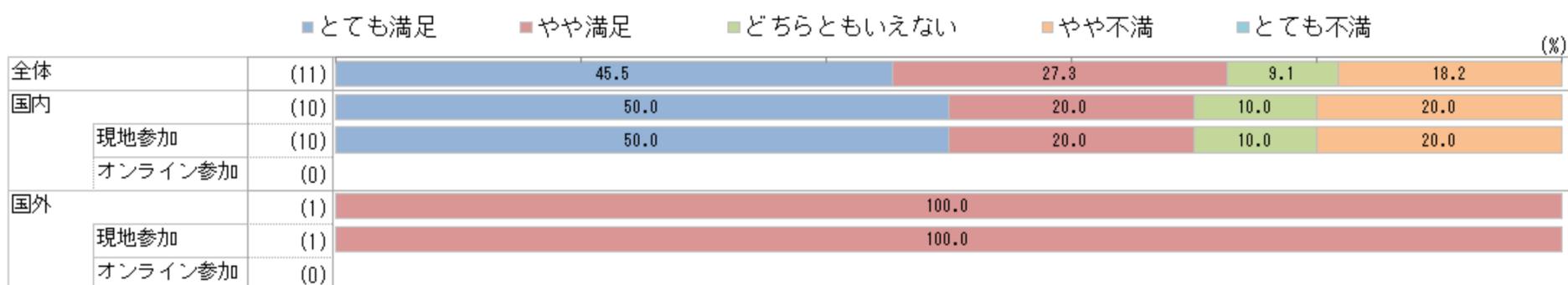
Q. オンライン上に特設されたバーチャル会場(Whova)における他の参加者とのコミュニケーションについて、あなたはどのように感じましたか



Q. あなたは、オンライン上でのポスター発表(e-Poster)にアクセスしましたか



Q. オンライン上でのポスター発表(e-Poster)の満足度を選択してください

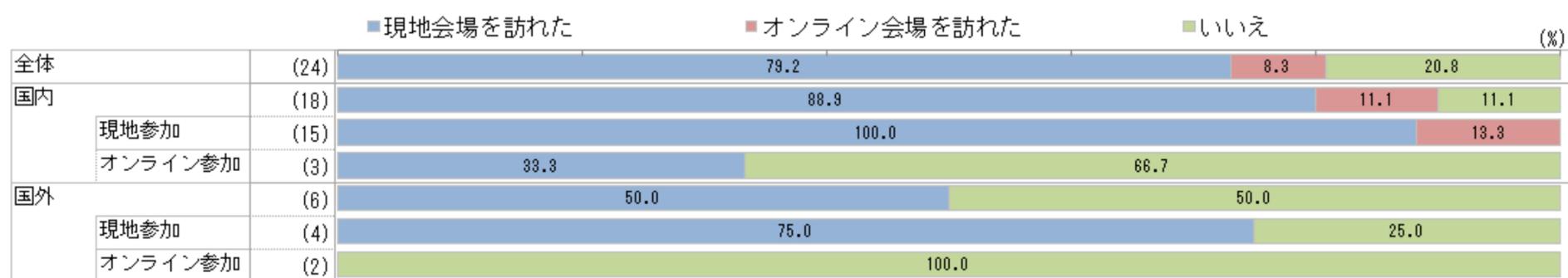


Q. オンライン上でのポスター発表に(e-Poster)ついて、あなたはどのように感じましたか

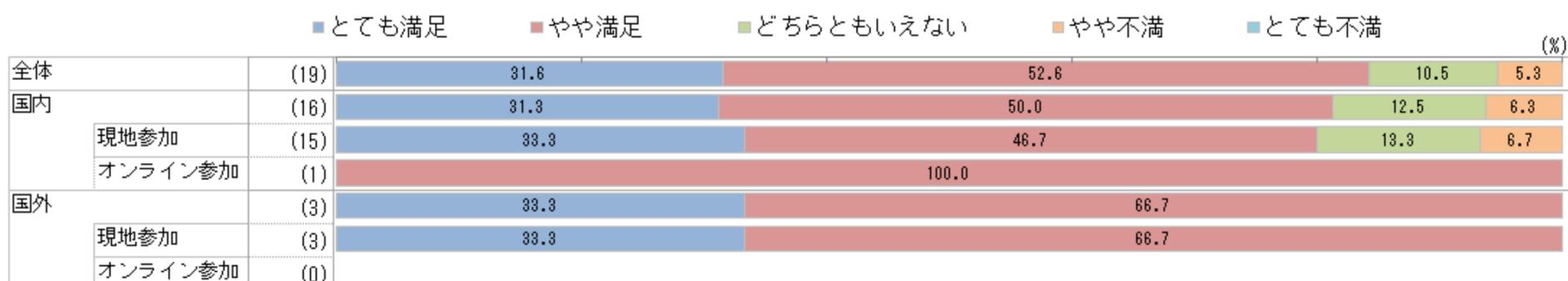
- 現地会場で実施される場合よりもむしろ優れている
- 現地会場で実施される場合と比較しても遜色ない
- 現地会場で実施される場合と比較すると劣るものの特に不満はない
- 現地会場で実施される場合に劣り、不満だ



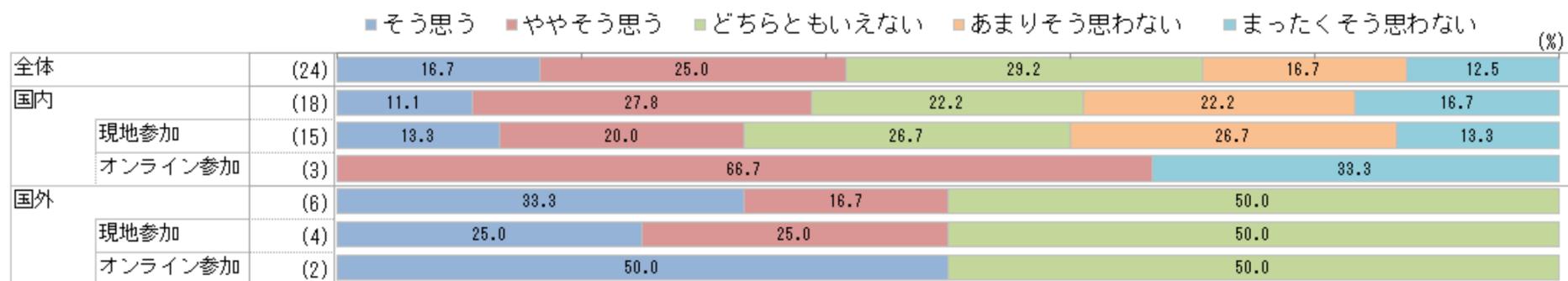
Q. あなたは展示をご覧になりましたか



Q. 展示の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか。



【実証事業⑩ 第22回真空に関する国際会議】

主催者名	公益社団法人日本表面真空学会		
会期	9月11日～9月16日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	札幌市	主たる会場名	札幌コンベンションセンター

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	688	2	690
外国人	224	57	281
計	912	59	971

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	
③	参加登録システムの導入	●
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	●
②	オンラインエクスクーションツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	●

2)特筆すべき取組

①	開催後の追跡調査の実施	参加証にQRコードを掲載し、来場者の情報収集を行うことができた。なお、会期中及び会期後に新型コロナウイルス陽性者は出ず、収集した情報を使用せずに本会議は終了した。
②	会議冊子等の紙媒体の電子化システム	全プログラムの開催日時、会場、発表要旨に係る情報をすべて電子化することで、参加者同士の接触する機会を低減することに繋がった。また、ライブ配信視聴用のZoomのURLも埋め込むことで、オンライン参加者は電子プログラムからライブ配信を視聴することができた。
③	消毒液、アクリル板、消毒ジェル・マスク等の感染症対策	会場の各所にアクリルパーティション、消毒アルコールなどの感染対策備品を設置することで、新型コロナウイルス陽性者を出さずに、本会議を終了することができた。
④	本会議専用のライブ配信回線及びWi-Fiの配備	通信速度が高く、かつ安定したライブ配信回線を配備したことにより、滞りなくライブ配信を実施することができた。また、会議専用のWi-Fiを設置したことにより、参加者がオンラインコンテンツにスムーズにアクセスできる環境を整えることができた。

①



②



③



④

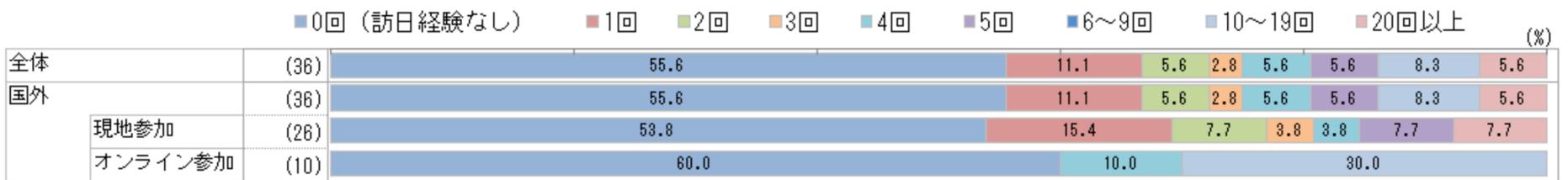


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	①QRコードによる来場者の情報収集。②マスクなどの感染対策備品の準備及びアルコール消毒の徹底。③参加者間のソーシャルディスタンスの確保。④ペーパーレス化による接触機会の排除。⑤飲食時の感染リスクの低減。⑥体調の事前確認の周知及び行政と連携した発熱者への対応。 また、テーブル上へのアクリルパーティション設置し、ソーシャルディスタンスを確保した上で、ウェルカムレセプション及びバンケットを開催した。
	(2) 取組による成果	会期を通じて、入り口で37.5度以上の来場者はいなかった。参加者にホームページやオープニングセッション上で注意喚起を行った結果、会場内では外国人を含め全員がマスクを着用していた。こうした基本的な感染対策を徹底することにより、通常通りのバンケット、レセプションを実施し、現地参加者は700名を超えたが、会期中に新型コロナウイルス陽性者は発生せず、またクラスターも発生しなかった。新型コロナ感染症の第7波に襲われ、現地開催を行うことに危惧する声もあったが、政府の推奨する基本的感染対策が有効であることを実証することができ、今後のパンデミックにおけるコンベンションのあり方のヒントを得ることができた。
	(3) 課題	感染症は、会期中だけでなく会期後に発生するが、現状ではお願いベースで「もし感染がわかったら連絡をください」というものである。これを積極的に参加者から報告してもらうシステム構築ができていなかった。会期後報告のインセンティブと簡易な登録システム構築が必要である。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	口頭発表について、Zoomを使用して全プログラムのライブ配信を行い、可能な限りリアルタイムでコミュニケーションが取れる開催形式を目指した。ポスター発表は、Gather Townと呼ばれる2Dメタバース空間を使用して開催し、実際のポスター会場に近い形式での開催に努めた。会期1日目のウェルカムレセプションでは北海道ならではの銘菓やソフトドリンクを提供し、バンケットでは北海道ならではの食材を使用した料金を提供した。開会式では、札幌市長にご挨拶をお願いし、今回の会議が札幌で開催される意義や札幌の魅力を紹介いただくとともに、岸田首相にもメッセージを頂き、本分野の我が国の果たす役割についてお話を頂いた。ウェルカムレセプションやバンケットでは、北海道の魅力をアピールする映像を上映した。
	(2) 取組による成果	ライブ配信環境の事前テストを行い、インターネット回線状況も逐次確認を行った結果、各プログラムは95%定刻通りに進行した。他は、機器の突発的な不調が起こり遅れがでたが、スタッフの迅速な対応により最大15分程度の遅れでとどめることができた。また、Zoomによるオンライン発表でも、オンライン発表者と現地参加者の活発な議論が行われた。ウェルカムレセプションやバンケットでは、北海道ならではの銘菓や料理を楽しんでいただき、参加者の満足度を高めることができた。
	(3) 課題	ポスターセッションを昼間の現地開催、夜間のオンライン開催の2パターンで開催したが、すべての参加者が昼間の現地開催、夜間のオンライン開催に参加しているわけではなかった。今回ハイブリッドで開催したが、機具の不調等で口頭発表が遅れることがあった。また、画面共有するためのレーザーポインターシステムもときどき、使用不能の状態になったなど、ハイブリッドに備えたハード面の充実が必要である。また、2Dメタバース方式で行ったオンラインポスターセッションも準備に手間取り、遅れたため、参加者全員に使用方法の周知が遅れ、参加できなかった人がいた。今後はこうしたメタバースの活用を進めることが重要であり、ハード、ソフト面の課題があるが、一方で参加者にどのようにリモートでインストラクションするかも大きな課題である。
開催地との連携	(1) 取組内容	主催団体である日本学術会議とは事前から密に連絡をとり、札幌コンベンションセンターの会場費の一部をサポートいただき、開会式では高村ゆかり副会長にご挨拶いただいた。また、市民講座も開催した。札幌コンベンションビューローと日本への誘致段階から連携をとり、札幌市及び北海道から会議開催にあたって資金援助をいただいた。札幌観光協会と連携し、会議参加者向けに観光案内を行った。開会式では、札幌市長にご挨拶をお願いし、今回の会議が札幌で開催される意義や札幌の魅力を紹介いただくとともに、北海道の取り組む共生空間の構築に向けた取組の紹介をおこなった。
	(2) 取組による成果	市民講座をハイブリッド形式で開催し、プレナリースピーカーの國中先生と杵本先生にハヤブサプロジェクトのご講演をいただき、市民約100名が参加した。さらに、北海道のすすめるカーボンオフセットプロジェクト支援のための募金を参加者から募った。多数の参加者(とくに海外の参加者)からは、パンデミックが収まったらぜひまた再来日し、札幌市を訪れたいという希望を聞くことができた。また、アイヌ文化の素晴らしさを伝えることで、共生空間実現に貢献できた。
	(3) 課題	エクスカージョン等でウポポイなどのアイヌ文化をもっと積極的に発信できるような取組が課題である。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	海外参加者VISA取得やERFS発行手続きのサポートを行い、最先端の技術発信を行う場の提供に努めた。また、IVC-22の開催を記念して、真空技術に関する市民講座をハイブリッド開催し、市民のリテラシー向上を図った。真空工学、表面・ナノ科学・分析、薄膜・スパッタ、半導体材料、バイオ等広汎な分野の企業が一同に集まった企業展示会も行った。
	(2) 取組による成果	ハイブリッド開催により971名が参加し、そのうち281名が海外からの参加であった。コロナ禍での国際会議としては大きな規模となり、世界中の研究者にコミュニケーションの場を設けるという目的を果たせた。ハイブリッド開催となった市民講座では全国から多くの登録があり、真空技術について活発な議論が行われた。アルバイトの学生たちは、世界中の研究者の雰囲気を感じることによって大きな刺激を得た。企業展示の開催により、研究者と企業の活発な交流が行われ、日本における真空技術の発展に寄与した。
	(3) 課題	ハイブリッド会議の開催にあたっては、収入の確保が課題である。人件費をはじめとして、配信機材・システムの手配などの必要経費を賄うために、参加人数を増やすだけではなく、行政機関から助成金・スポンサー収入の確保が必要であった。大規模なハイブリッド開催を支援するための助成金制度の拡充を期待したい。
サステナビリティ	(1) 取組内容	札幌コンベンションビューローとの連携により、カーボンオフセットプログラムを実施した。カーボンオフセットにご賛同いただける参加者の皆様の寄付を北海道の森の植林や野生生物保護にあてた。ご寄付いただいた参加者には、北海道・札幌の自然や動物のポストカードをプレゼントした。資源ごみ、可燃ごみ、不燃ごみなどごみの分別を徹底し、可能な限りリサイクルを行った。プロシーディングスの作成を行うが、完全電子媒体で出版する。
	(2) 取組による成果	SDGsに関して、17の目標のうち4, 7, 9に関連した成果をあげることができた。真空技術に関して世界中の研究者の交流が行われ、かつ市民公開講座の開催により真空技術の重要性を市民に広く知っていただいた。プログラム情報は電子媒体のみとするすることで、印刷を最小限とすることができた。また、プロシーディングスを集め、eJSSNT誌から電子媒体で出版する。
	(3) 課題	今後は現地参加者が増えていくことが予想されるが、参加者に提供する飲食物の廃棄をできる限り最小限にする取組みが今後必要になるのではないかと考えている。

【実証事業⑩ 第22回真空に関する国際会議 個別アンケート】

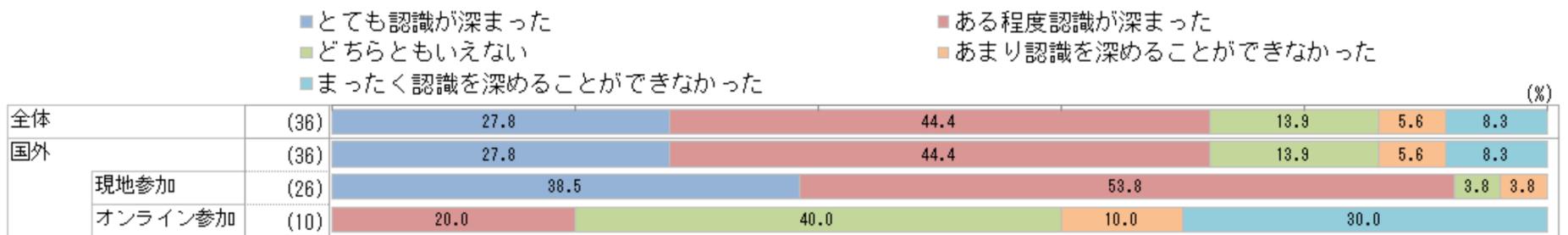
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



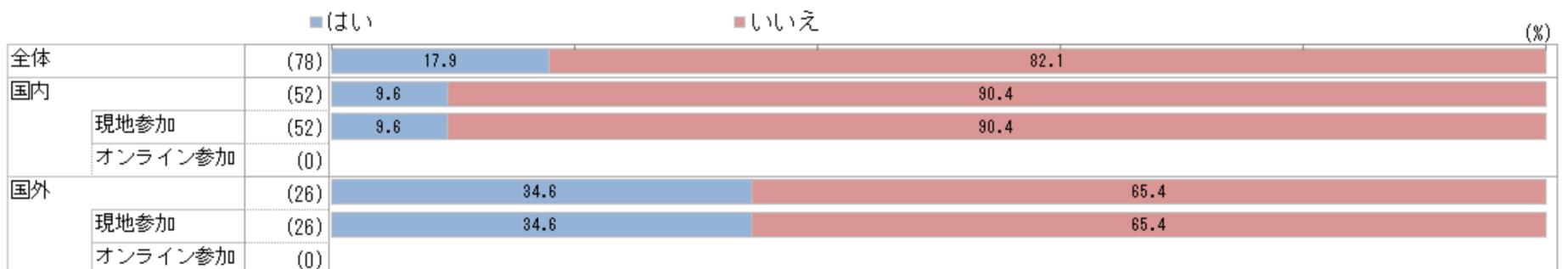
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(札幌市)のことをどれくらい知っていましたか



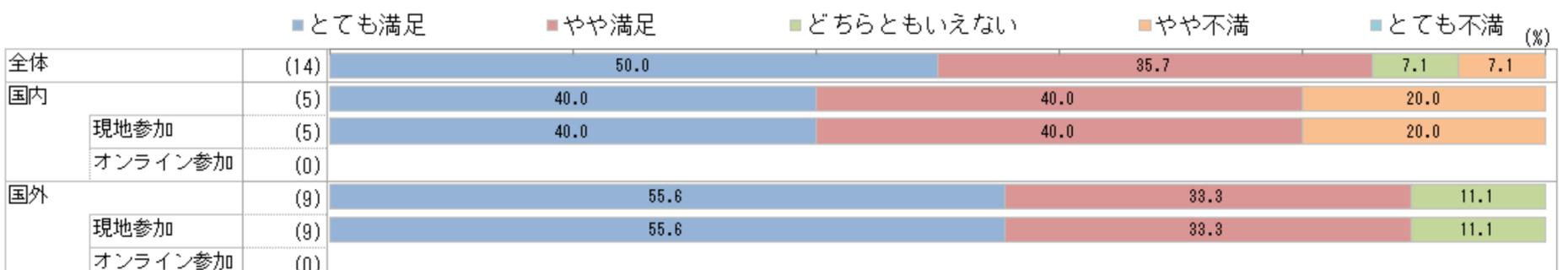
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(札幌市)への認識が深まりましたか



Q. あなたは、9月15日の夜に開催されたバンケット(札幌パークホテル)に出席しましたか

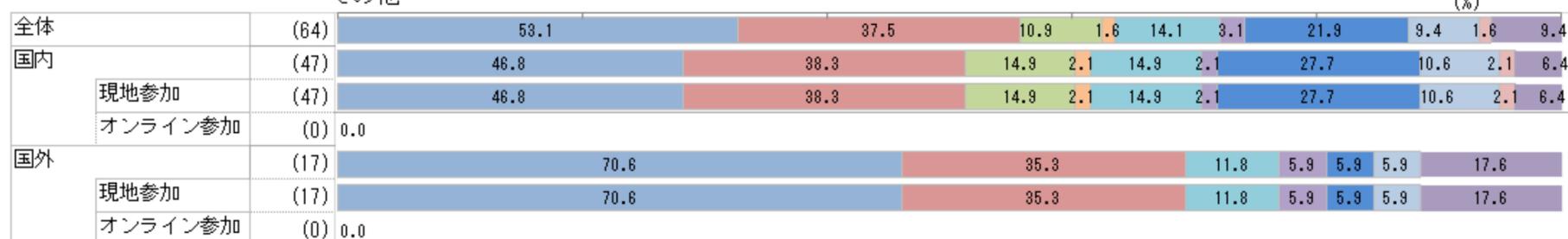


Q. バンケットの満足度を選択してください



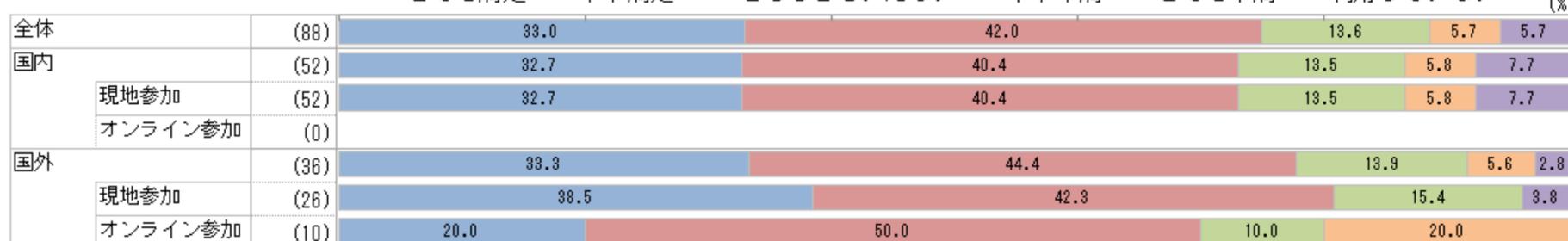
Q. あなたがバンケットに出席しなかった理由を全て選択してください

- 参加料が高い
- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- バンケットの会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- バンケットの会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた /
- その他



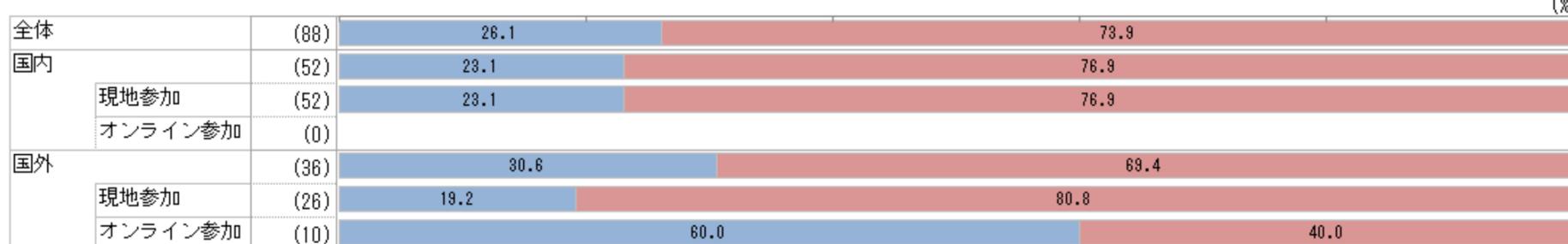
Q. 会議参加者向けアプリケーション(Confit)の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満
- 利用していない



Q. あなたは、オンライン上でのポスター発表(Gather Town)にアクセスしましたか

- はい
- いいえ



Q. オンライン上でのポスター発表(Gather Town)の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満



Q. オンライン上でのポスター発表について、あなたはどのように感じましたか

- 現地会場で実施される場合よりもむしろ優れている
- 現地会場で実施される場合と比較しても遜色ない
- 現地会場で実施される場合と比較すると劣るものの特に不満はない
- 現地会場で実施される場合に劣り、不満だ

						(%)
全体	(23)	4.3	17.4	56.5	21.7	
国内	(12)	8.3	16.7	50.0	25.0	
	現地参加	(12)	8.3	16.7	50.0	25.0
	オンライン参加	(0)				
国外	(11)		18.2	63.6	18.2	
	現地参加	(5)		20.0	60.0	20.0
	オンライン参加	(6)		16.7	66.7	16.7

Q. あなたは展示ブースを訪れましたか

- はい
- いいえ

				(%)
全体	(78)	91.0	9.0	
国内	(52)	90.4	9.6	
	現地参加	(52)	90.4	9.6
	オンライン参加	(0)		
国外	(26)	92.3	7.7	
	現地参加	(26)	92.3	7.7
	オンライン参加	(0)		

Q. 展示の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満

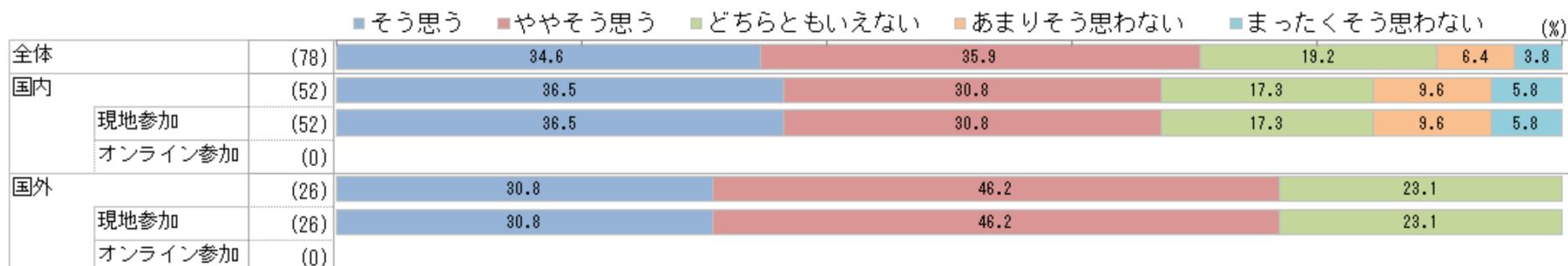
							(%)
全体	(71)	32.4	57.7	7.0	2.8		
国内	(47)	38.3	53.2	6.4	2.1		
	現地参加	(47)	38.3	53.2	6.4	2.1	
	オンライン参加	(0)					
国外	(24)	20.8	66.7	8.3	4.2		
	現地参加	(24)	20.8	66.7	8.3	4.2	
	オンライン参加	(0)					

Q. あなたは、会場に設置された募金箱への募金によるカーボンオフセットプログラムに参加しましたか

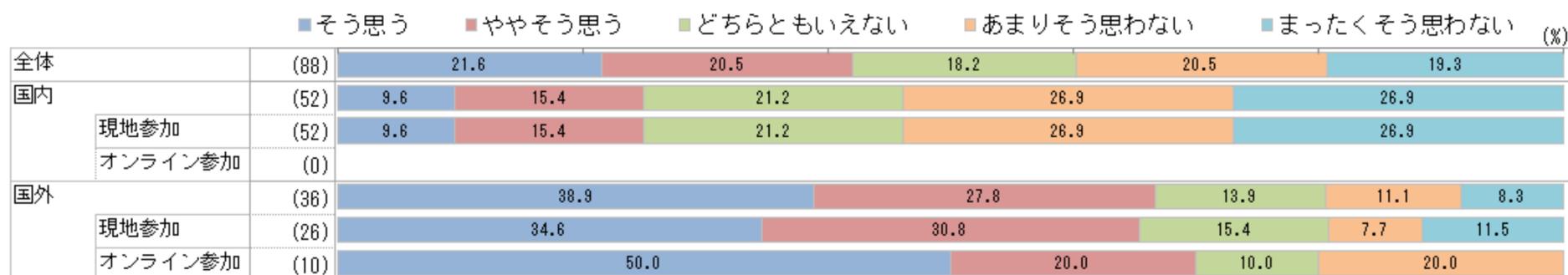
- プログラムに参加し、北海道の風景が印刷されたポストカードを受け取った
- プログラムに参加したが、ポストカードは受け取らなかった
- 会場で募金箱を目にしたが、参加はしなかった
- そうしたプログラムの存在自体を認識していなかった

						(%)
全体	(78)	3.8	2.6	3.8	89.7	
国内	(52)	5.8	1.9	3.8	88.5	
	現地参加	(52)	5.8	1.9	3.8	88.5
	オンライン参加	(0)				
国外	(26)	3.8	3.8		92.3	
	現地参加	(26)	3.8	3.8		92.3
	オンライン参加	(0)				

Q. あなたは、今日における国際会議はサステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだと思いますか



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要だと思いますか



【実証事業⑰ 2022年 国際固体素子・材料コンファレンス】

主催者名	公益社団法人 応用物理学会		
会期	9月26日～9月29日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	千葉市	主たる会場名	幕張メッセ 国際会議場

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	403	181	584
外国人	77	121	198
計	480	302	782

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	●
③	参加登録システムの導入	
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	

2)特筆すべき取組

①	入場前の検温によるスクリーニングを実施	会場の入口を1か所に限定し、入場前の検温によるスクリーニングを実施した。各会場に二酸化炭素濃度計を設置した。感染の可能性を未然に阻止するとともに、意識的な換気を促すことで感染拡大を防止した。
②	名札の裏にQRコードをプリントし、受付に設置した機器で自動チェックインを可能にした	事前にプリントしたQRコードを専用の機器で読み取る非接触型受付システムを導入した。受付での接触を最小限に抑え、また自動システム化によって受付を短時間で済ませることで密を回避して感染を防止した。
③	タイムテーブル、プログラム、抄録などの情報が集約されたオンライン会議システム	プログラム、抄録をオンライン配布とすることで現地参加、オンライン参加の区別なく参加者に共通の情報を提供した。また、紙媒体をなくすことでCO ₂ 削減にも貢献した。アプリを利用することで現地参加者は会場を移動しながら、オンライン参加者はオンライン会議に参加するためのPCとは別にプログラム等にアクセスでき、さらに利便性の向上に寄与した。オンライン配信に特化した専属のディレクターがハイブリッド運営を担当した。
④	オンライン配信に特化した専属のディレクターがハイブリッド運営	専属のディレクターを配し、オンライン会議システムと動画配信サービスを駆使して現地、オンラインを問わずリアルタイムでの参加を可能にするとともに、時差に配慮してオンデマンド配信を実施することで参加者のさらなる利便性向上を実現した。現地に来訪できなかった招待講演者や各賞受賞者にも感謝状等を送付し、現地と同様に顕彰することで、招待講演や各賞の意義を留めた。

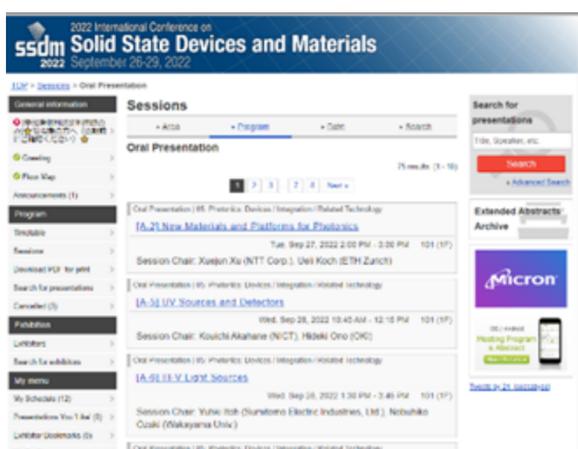
①



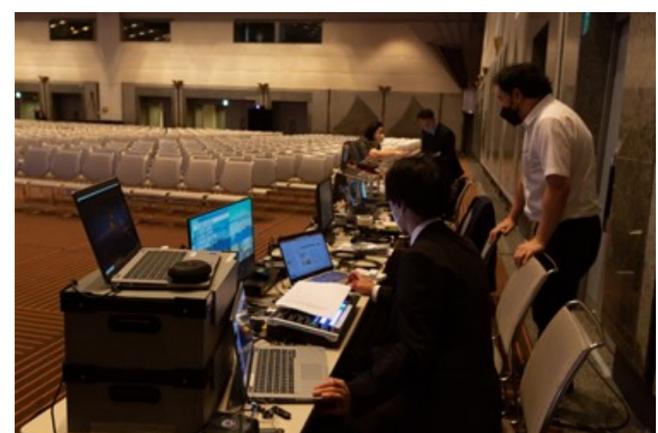
②



③



④



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

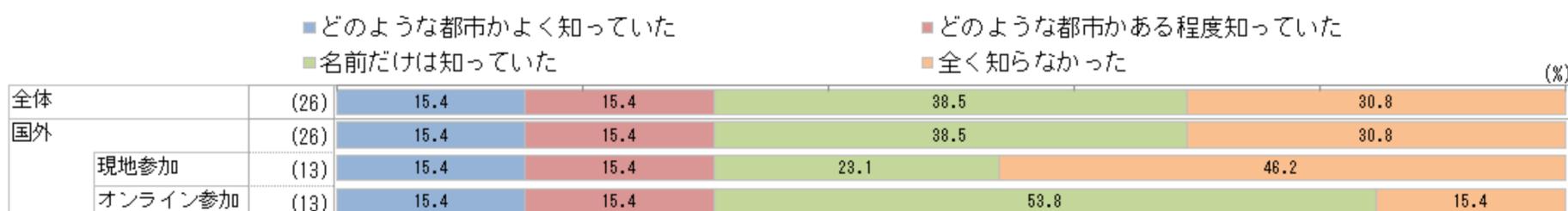
感染症対策	(1) 取組内容	①会場入口を1か所に限定し、入場前の検温によるスクリーニングを実施するとともに、各部屋に足踏み式消毒スプレー、除菌シートを設置するなど会場内での消毒の徹底により、コロナ感染とその拡大の防止に努めた。 ②参加者同士が密にならないように会場を広く使い、各会場に二酸化炭素濃度計を設置して換気状況をモニタリングするなど会場の安全性を確保した。 ③非接触受付システムを導入し、受付カウンターに透明カーテンを設置して、人と人との間での物理的な接触や飛沫散布を防ぐ空間づくりを行った。 ④参加者間の交流を促すためレセプションを実施した。会場にアクリル板を設置し、ドリンクをチケット制にして節度が保たれるよう心がけ、料理はビュッフェのような大皿ではなく個別に容器に入れてラップをかけて提供した。
	(2) 取組による成果	①設計通りに入場者管理を行うことができた。 ②想定内の参加者数であったため、密にならない会場の使い方ができた。 ③非接触受付システムも大きな問題なくスムーズに運用できた。 ④想定内の参加者数であったため、密にならず感染予防をしながらレセプションを実行でき、参加者交流を促進できた。以上の取り組みの結果、会場内での感染及び会期後の感染拡大の報告はなく、徹底した感染対策が功を奏した。
	(3) 課題	①~④まで大きな問題なく実施することができた。同様のハイブリッド開催の国際会議がある場合には、好事例として参考になると考える。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	①現地参加、オンライン参加にかかわらず双方向のコミュニケーションを可能にするオンライン会議設備・ツールを構築した。 ②現地及びオンラインで共通して利用できるオンライン抄録集を作成した。 ③現地の雰囲気伝えるための写真を会議の壁紙やシステム上に取り込んだ。 また、時差に考慮し、リアルタイムで参加できない参加者のために、 ④講演を録画、編集しオンデマンドで視聴できるシステムを構築した。 ⑤システム上での質疑応答の機会を確保した。 ⑥現地展示に加えてオンライン展示の場を提供し、オンライン参加でも出展者の情報にアクセスできるようにした。
	(2) 取組による成果	①全日程で現地講演+オンライン講演、及び現地聴講+オンライン聴講が実施でき、現地・オンライン両方でコンテンツとコミュニケーションの提供ができた。 ②オンライン抄録集はこれまでも実績があり問題なく提供できた。 ③セッション間に会場に流すスライドで現地の雰囲気を表す写真を示すことができた。 ④リアルタイムで参加できなかった人への会期後のオンデマンドでの視聴システムも問題なく運用できている。オンデマンド配信は12月23日までアクセス可能。 ⑤システム上での質疑応答の機会も提供できた。会期中のオンライン参加者にはその場で音声またはチャットで質疑応答ができた。 以上のように、参加形態に関わらず、活発な議論の場を提供できた。
	(3) 課題	①については大きな問題なく実施できたが、以下の点は改善できる課題と考える。 ・最近では会場参加者もスライドをよく見られるよう、会場で自分のPCでZoomにアクセスしてスライドを見ながら聴講することが多いようである。そのため、事前に各会場では、音声はオフにしてハウリング防止への協力をお願いしていた。それでも若干数会場内でハウリングを起こすことがあったようである。 ・オンライン講演者がセッション開始時にチェックインしていないことも若干あり、座長が心配する場面があった。
開催地との連携	(1) 取組内容	開催にあたって千葉県、千葉市及びちば国際コンベンションビューローから会場及び周辺情報の提供などの協力を得た。会期中は現地担当者が視察に来場した。
	(2) 取組による成果	現地の情報、写真素材などを提供してもらい、現地参加者、オンライン参加者に還元した。
	(3) 課題	千葉県・千葉市の国際会議補助金を受けられる予定だったが、会期前に感染症第七波がおり、特に海外からの参加者が想定を下回ったため、交付基準を満たすことができず助成を受けられなかった。交付基準がコロナ前と同様であるため条件を満たすことが難しいので、今後に向けて条件の再考をしていただきたい旨を担当者に伝えた。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	当初、公開市民講座の実施を予定していたが、それに代わるものとして若手研究者、学生を主な対象とした教育的プログラムShort Courseを、千葉県・千葉市内にある学術機関の学生に無料で提供し、実際に参加があった。
	(2) 取組による成果	千葉県・千葉市の無料参加枠で東京大学柏の葉キャンパス及び千葉大学の学生が聴講し、現地の若手研究者に充実したコンテンツを提供できた。
	(3) 課題	無料参加枠で参加した学生が3名と少なかったため、より積極的な宣伝が必要であったと考える。またより多くの一般市民の方にもご参加いただいて本分野に関するアウトリーチができるよう、専門的な内容をかみ砕いて説明し、一般向けに構成したシンポジウム・チュートリアルができるとよい。
サステナビリティ	(1) 取組内容	①次世代太陽電池、環境発電、バッテリー技術に関する最新の研究についての議論を通じて参加者に将来のサステナブルなエネルギー技術に意識を向けさせた。 ②プログラムや抄録集は紙媒体ではなくオンライン上の電子媒体として提供した。 ③会場の幕張メッセは天井が高く、各会議場が広く、風通しがよい点ため、過度に空調を使用することなく快適な環境を提供した。 ④会場の幕張メッセは電車でのアクセスがよく、車を用いない移動を推奨することで燃料排出に伴うCO ₂ 排出を抑えることができる。
	(2) 取組による成果	①次世代のサステナビリティへの様々な研究が報告され議論がなされた。 ②プログラムや抄録集について紙の使用はゼロで実施できた。 ③会場と気候にも恵まれ、空調の使用を軽減して快適に会議を進めることができた。 ④参加者のほとんどが電車を利用しており、車の使用の削減によりCO ₂ 排出の抑制に貢献した。
	(3) 課題	①~④まで大きな問題なく実施することができた。同様のハイブリッド開催の国際会議がある場合には、よい実施例として参考になると考える。

【実証事業⑰ 2022年 国際固体素子・材料コンファレンス 個別アンケート】

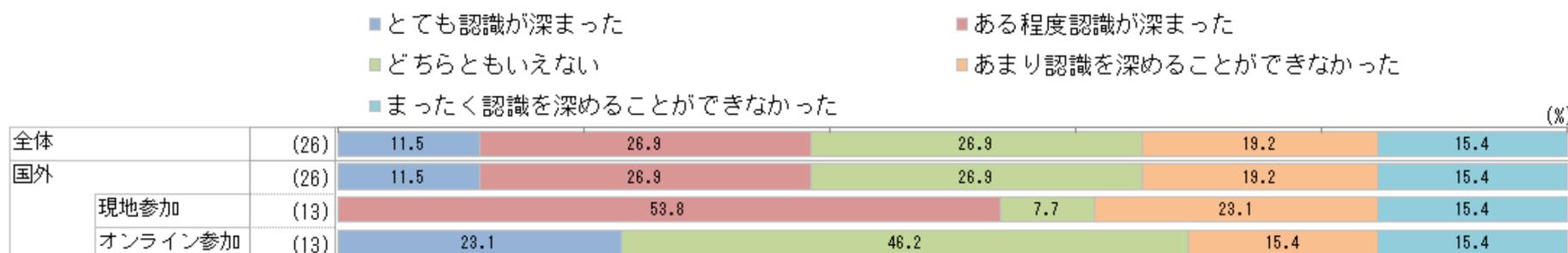
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか。(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



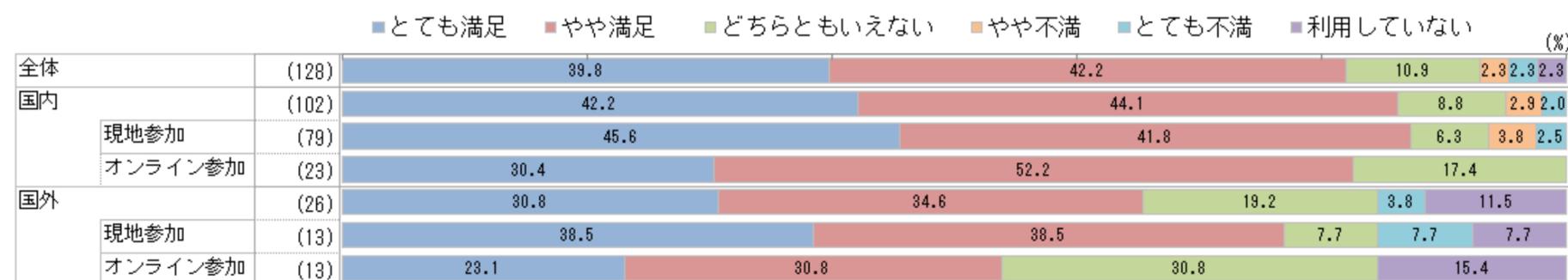
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(千葉市)のことをどれくらい知っていましたか。



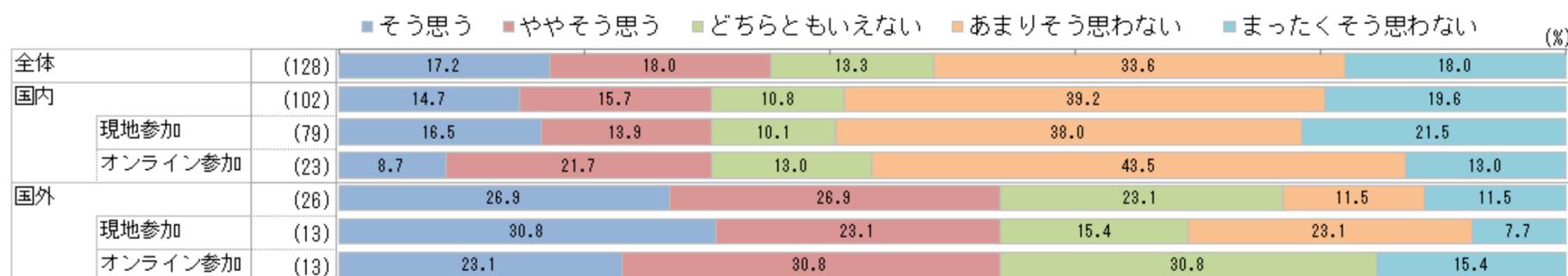
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(千葉市)への認識が深まりましたか



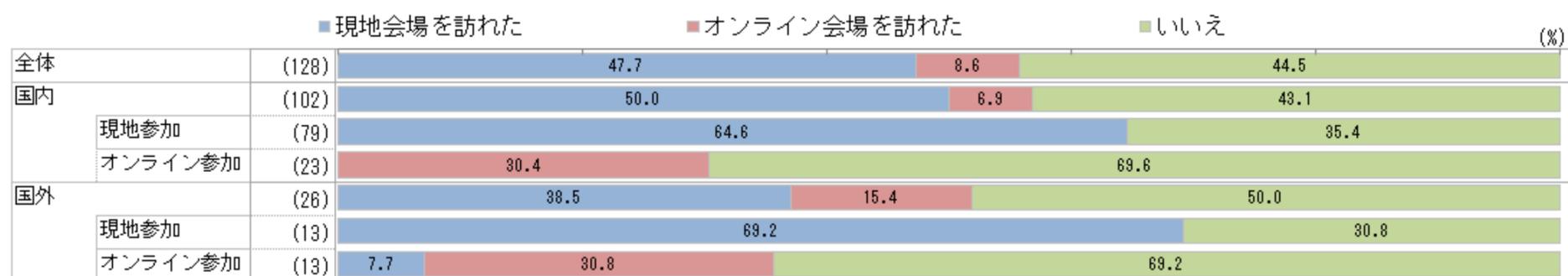
Q. 会議参加者向けアプリケーション(Confit)の満足度を選択してください



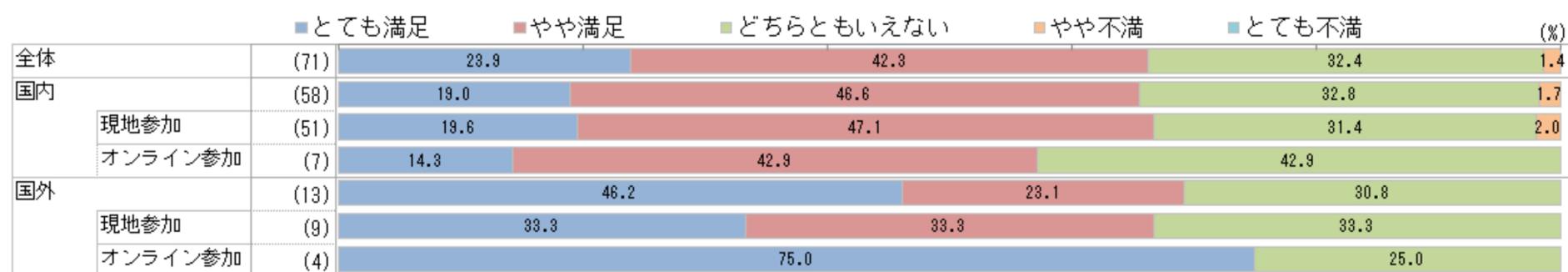
Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



Q. あなたは展示をご覧になりましたか



Q. 展示の満足度を選択してください



【実証事業⑱ 国際シンポジウム2022”未来につなぐ湖沼の価値”】

主催者名	公益財団法人国際湖沼環境委員会		
会期	10月12日～10月15日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	滋賀県草津市	主たる会場名	滋賀県立琵琶湖博物館

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	62	27	89
外国人	5	81	86
計	67	108	175

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	受付における感染症対策	受付に非接触型体温計を配備。プログラム等はクリアファイルにまとめ、接触を避けるため手渡しを避けた。通訳レシーバーは要員が手渡し(ビニール手袋着用)返却時にはペーパータオル、除菌シートで消毒した。 受付付近はソーシャルディスタンスを保つための床サイン、アクリルパーテーションを設置。
②	琵琶湖のエコツーリズム映像の制作	琵琶湖に繋がる森・川・里の自然と人の生活文化が織りなす恵みの映像制作を行った。ドローンを使用し、よりダイナミックな映像を作成し、第1部の「湖沼のエコツーリズムコンテスト」において日英両言語で紹介することでインバウンド誘致に寄与した。
③	コンテスト参加者への記念品	ハイブリッド形式での開催は、海外から発表者を招くことが出来ただけでなく、コンテスト参加者もオンラインの参加を可能にしたため、より参加しやすい場を創出できた。イベントへの参加の記念品として製作した琵琶湖を象ったピンバッジは、「琵琶湖からの発信」を強く印象付けるものであり、関係者も身に着けて、参加者と気持ちを一つにしてイベントを催行することを可能にした。
④	QRコードとGoogle Formを用いたオンライン投票	本企画運営は業務委託を行ったが、費用の掛かるシステムを使わずに、参加者が容易に参加できる企画が提案され、当日も円滑に運営された。この企画は、イベントへの参加をよりアクティブにすることに役立った。視聴者からは、投票があったため、より真剣にプレゼンテーションを聞くことができたという感想を得た。

①



②



③



④



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	<p>感染症対策については、一般社団法人日本コンベンション協会策定のガイドラインに記載されている事項に沿って、的確に実施した。</p> <p>更に独自の対策として、シンポジウム会場の最大収容人数の半分程度の収容とし、座席間は空席を設けるとともに、会場参加は申込制とし、参加者の連絡先の把握を行い後日追跡可能とした。</p> <p>また、会場への公共交通機関はバスのみであるが、シンポジウム当日は土曜日でバスの本数が限られていたため、バス内及び到着時の混雑を避けるため、専用バスを用意した。</p> <p>昼食の時間を利用してシンポジウム参加者が交流できる場を設けた。昼食場所は換気を行い、アクリル板の設置、食事中以外のマスク着用、テーブルや椅子の消毒の徹底を行った。また、ソーシャルディスタンスを保つため、テーブル間の一定の距離を確保した。なお、食事は個別パッケージされた弁当等を提供した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>会議終了後、関係者をはじめ参加者からの感染の報告を受けていないことから感染対策は万全であったと言える。受付が密になる可能性が最も高い場所であったが、関係者は受付を通らず控室に進めるよう誘導し、参加者も受付時間をずらして案内するなど行ったため、会議開催前の混雑は最低限にとどめることが出来た。</p> <p>昼食時には感染症対策を行いながら、コンテスト参加者と審査員や関係者とのネットワーキングの機会を有意義に持つことが出来た。テーブルの配置を口の形にし、向かい合う席とはテーブル間の距離を取り、隣り合う席の間にはパーテーションを設置し飲食を行い、飲食後はマスクを着用してお互いに情報交換を行うことが出来た。イベント終了後、コンテスト参加者からは交流の時間を高く評価する声が届いている。</p>
	(3) 課題	<p>会場に公共交通機関を利用して来場する場合、利用できる手段が限られているため、ある一定の時間に一齐に来場者が受付に来るといった事態が発生した。今回の会議では、現地参加者数が容易に対応できる範囲であったため、混乱は生じなかったが、今後、より多くの現地参加者を集める場合は、会場へのアクセスを考慮に入れ、駅から近い会場を検討することも必要である。</p> <p>昼食時のネットワーキングのプログラムでは、黙食の徹底が困難であった。しかし、テーブル間の距離やパーテーションの設置、飲食後のマスク着用で、一定の感染症対策は出来たと考える。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>会場での同時通訳をオンライン視聴者にも配信し、言語面の満足度向上を図った。</p> <p>第1部のエコツーリズムコンテストではPR映像を制作し開催地のツーリズムの紹介を行った。またオンライン参加者のチャットによる投票を行い、審査にも参加することが出来、イベントに一体感を持たせた。</p> <p>主催者からの一方通行なイベントではなく、オンライン及び現地の双方の参加者がイベントに関与できることを目的に、第1部のコンテストでは現地参加者にはQRコード利用、オンライン参加者にはGoogle Formを利用した審査投票を行い、第2部のパネルディスカッションでは視聴者へのアンケートを行い、その結果をスクリーンに投影し、パネルディスカッションへの話題提供を行った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>同時通訳の活用は、言語面に不安のある参加者が、安心して参加でき満足度向上に繋がった。</p> <p>エコツーリズムコンテストでは2つの映像紹介を行った。1つは「琵琶湖のエコツーリズム」と題し、コンテストのテーマである「エコツーリズム」とは何かを分かり易く説明し、視聴者のテーマ理解を深めることが出来た。ドローンを使用して撮影された琵琶湖の美しい景観の映像やエコツーリズム紹介ビデオは、視聴者からの評判も良く、訪日観光客の促進となることを期待する。また、コンテスト参加者の提案をまとめた映像を制作した。</p> <p>開催後のアンケートでは、現地とオンライン参加者両方に、投票やアンケートを使用してイベントに参加する仕組みが入っていたのは良かったとの声があった。</p>
	(3) 課題	<p>アンケートでは、参加者からイベントは概ね満足のいくものであったという結果を得ているが、オンライン参加者からは、「音声が途切れる場面があった」「通訳音声聞きづらかった」などの意見もあった。会場のインターネット速度の問題など、技術的な事前確認を慎重に行う必要があることを学んだ。</p> <p>また投票やアンケートも、結果の報告だけではなく、それをベースに現地やオンライン参加者からの声を実際に聞くなど、よりインタラクティブなやり取りを行うことも今後の課題としたい。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>「湖沼のエコツーリズムコンテスト」では滋賀県、びわこビジターズビューロー、琵琶湖博物館から審査員を迎えた。また、東近江市や高島市から事例紹介の登壇者を招き、自治体や地元住民が中心となっていっているエコツーリズムの紹介を行った。コンテストの参加者募集の段階では、滋賀県内の大学を訪れ、地域連携、国際関係の学部及び滋賀県内観光旅行者との連携を図った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>滋賀県が推進しているマザーレイクゴールズという取組はエコツーリズムとの親和性が高く、びわこビジターズビューローは滋賀県の観光と物産の振興事業を行っている。また琵琶湖博物館は人気の観光施設であるとともに環境教育を行うなど地域の人を育てる施設であることから、観光と環境の両方の観点からの確かな審査を行うことができた。また、滋賀県内で実績のあるエコツーリズムの事例紹介をした登壇者も審査員と交流の機会を持ち、新たなネットワークを構築することが出来た。今後当財団がエコツーリズムに関するカリキュラム作りを行うに当たり、貴重なリソースをイベントを通して得た。</p>
	(3) 課題	<p>コンテストの参加者募集を行う際、各大学で募集期間の短さや募集開始の時期の遅さの指摘を受けた。適切な時期に応募を始めていれば、もっと多くの大学生の参加が見込めたかもしれない点は今後の課題である。</p>

【実証事業⑨ 第29回国際高血圧学会】

主催者名	特定非営利活動法人 日本高血圧学会		
会期	10月12日～10月16日	分野	医学
主たる開催都市	京都市	主たる会場名	国立京都国際会館

1)参加者数

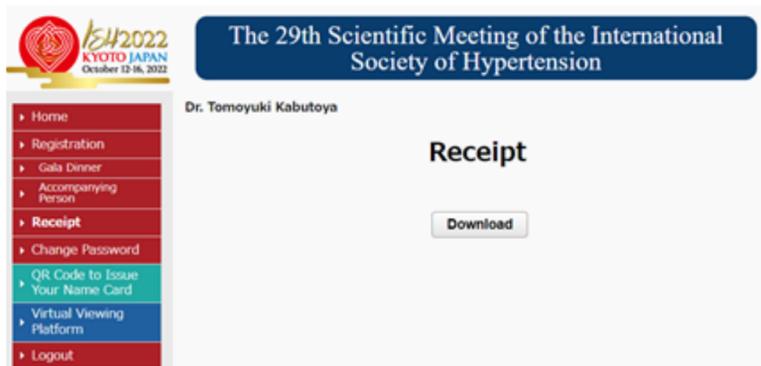
	実地	オンライン	計
日本人	878	264	1142
外国人	587	909	1496
計	1465	1173	2638

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

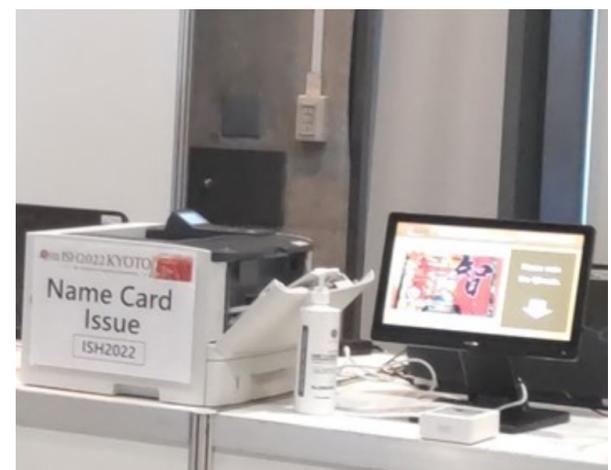
2)特筆すべき取組

①	参加者用事前参加登録システム	2,500名を超える参加者がシステムを利用し、参加登録をスムーズに行うことが可能となった。視聴サイトとも連携されていたことで、参加者にもログインの仕方が分かりやすく満足度の向上に繋がった。決済、領収書発行、当日発券用QRコード発行をマイページより対応可能。主催者側としても参加人数の予測がつけやすくなった。
②	非接触受付システム	事前参加登録をした参加者にはマイページよりQRコードをダウンロードできるようにし、スマートフォンへの保存、印刷いただくことで、受付の際にQRコードリーダーにかざすだけで参加証の発券を行うことができた。また、当日の受付待ちの為の混雑が緩和され、非接触での受付を行うことにより、感染症対策として有効であった。
③	検温器、消毒液の設置等の感染症対策	受付では検温器、消毒液の設置を行い、感染症対策の案内を事前より徹底した。参加受付では、マスクの紛失や忘れた方ようにマスクを配布するとともに、また、主催スタッフ用にも用意することで必要に応じて取り替えることも可能とした。セッション会場でも必ず消毒液を設置し、利用を促した。
④	HPに設けた京都観光案内ページ	HPで「Kyoto Guide」という京都の魅力や観光地、飲食店を紹介するページを作成し、公開した。適宜ページの更新も行い、その都度会員宛のニュースレターでご案内することで会期直前まで京都開催を印象付けて盛り上げる取り組みとした。HPやSNSで発信することで多くの関係者を巻き込み、開催までの日程を楽しくお待ちいただけるように心がけた。TwitterやFacebookでは、参加者もコメントや写真を投稿し、参加者間の交流も見られ、ISH2022を盛り上げる要素の一つとなった。

①



②



③



④



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

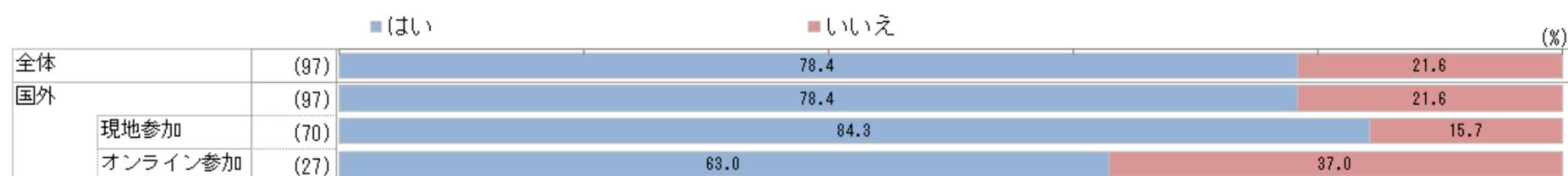
感染症対策	(1) 取組内容	<p>入場時のサーモグラフィーによる体温のチェック、手指消毒・換気の徹底、健康状態申告書の提出を行った。参加登録はシステムを利用して、現金の授受をなくし非接触での受付とし、当日はQRコードで参加証を発券することで、対面でのやりとりを減らすことで感染対策を行った。参加者には原則事前のオンラインでの参加登録をお願いし、受付での参加者の滞留が少なくなるように配慮した。</p> <p>また、セッション会場では、マイクやマウスの消毒を徹底した。参加者には受付で必要に応じてマスクを配布するとともに、スタッフ用にもマスクを用意することで、必要に応じてマスクを取り替えることや重ねて付けることもできるようにし、参加者だけでなく、スタッフにも安心して対応できるように心がけた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>事後に感染が会議によって拡大したという報告もなく、無事に終了することができた。</p> <p>会期中は基本的には現金の授受もなく、受付を行うことができ、事前に参加登録を完了していた方はQRコードによるスムーズな発券ができ、大きな混乱もなく、受付を行うことができた。</p> <p>5日間と長い会議であったが、主催側で感染対策を徹底して行うことで海外からの参加者の方々にも日本の感染対策について示すことができた。</p>
	(3) 課題	<p>参加登録は年配の方やスマートフォンをお持ちでない方等、オンラインでの参加登録やQRコードでの発券が困難なケースがあり、該当の方には対面での対応が必要であった。マスクの着用については、事前から感染対策として案内を行っていたが、日本と海外の感染対策の考え方の違いもあり、最初は着用していても途中から外していたりするケースも見られた。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>現地での開催に加えて、複数会場をライブ配信、及び同日中にオンデマンド配信を行った。チャットでの質問機能を搭載し、ポスター発表では、従来のポスター発表を行うと同時に、リモートでの発表者には音声付のデータを提出いただくことで、発表の機会を創出した。また、同様に現地発表する方にもデータを提出いただくことで、全ての演題を現地・リモート両方の参加者が閲覧可能にする。参加者が全ての演題にアクセス可能とすることによって、参加者の満足度の向上を図った。訪日を促す為の取り組みとしては、HPに「Kyoto Guide」という京都の観光名所や飲食店等を掲載したページを作成し、京都の魅力を発信した。また、Facebook, Twitter, Instagram等SNSでも京都の魅力を発信していくことで、会議の現地参加を促すと同時に、来日できなかった方にも今後京都に行きたいと思っただけのようなPRを行った。また、会期中は来日した参加者にはパーティまたはセレモニーでの舞妓による舞の披露や日本食の提供、写真撮影コーナーの設置等日本らしいサービスを行った。リモート参加者には、日本開催を実感いただく為に、京都文化交流コンベンションビューローのPR動画をセレモニーで放映し、ライブ配信を行った。</p>
	(2) 取組による成果	<p>ライブ配信を行うことで、来日できなかった参加者にもリアルタイムで最新の研究の講義を受けられるとともに、質問機能での質疑応答も可能であった為、リモートでの参加者もディスカッションに参加することが可能となった。また、全てのプログラムをオンデマンド配信することにより、時差を意識せず、参加者が都合のよいタイミングで勉強することができる。国際会議のハイブリッド開催では、時差が大きな課題となるため、オンデマンド配信は参加者の利便性を考慮すると重要な要素である為、参加者の満足度に繋がった。</p> <p>会期前から「京都での会議を楽しみにしている」、「ポスターに記載されている鳥居のところに行ってみよう」といった声をいただいていた。会期後には来日できなかった参加者から「次回は必ず現地で参加したい」という連絡やSNSでコメントをいただいた。</p>
	(3) 課題	<p>ハイブリッド開催は従来の現地開催に加えて、追加の機材やオペレーター、システムを要する為、費用が追加で発生する為、全体の収支に大きく影響する点が今後の開催での大きな検討事項の一つとなると考えられる。</p> <p>訪日を促すという点では、事前から日本の水際対策について詳細を求める意見が多かった為、発信する側が詳細を理解していることと、政府からの最新の情報を常に確認している必要があり困難であった。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>日本政府観光局(JNTO)には、誘致の段階から数多くの支援をいただいた。開催地である京都の京都文化交流コンベンションビューローにも同様に、誘致の段階から連携して視察会場との調整やビッドペーパー作成の補助及び広報ツールの提供等数多くの支援をいただいている。開催にあたっては、開催助成金での支援、各行政機関(京都府、京都市)との調整、感染対策等の最新の動向について情報共有をしている。</p> <p>厚生労働省、文部科学省には後援いただいた。また、開会式には皇室のご臨席があった為、総務省、宮内庁との連携も密に行なった。</p>
	(2) 取組による成果	<p>日本政府観光局(JNTO)や京都文化交流コンベンションビューローには誘致の段階より、国際本部の会場視察の同行やプレゼンテーションの練習にご協力いただき、会議の運営にも支援をいただき、日本での開催を印象づけることが可能となった。</p> <p>また、多くの官公庁にご協力をいただいたことで、開会式では秋篠宮皇嗣同妃両殿下にご臨席を賜ることができた。日本の国際会議への国全体の取り組みや協力体制を国内外に示すことができた。</p>
	(3) 課題	<p>国際会議の参加者用の交通クーポンや街で使用できるクーポン等があればよいというお声をいただいたので、国際会議の参加者だから得られるメリットのようなものが、あればさらに喜ばれる取り組みになると感じた。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>市民公開講座では、減塩や生活習慣の改善についてわかりやすく説明を行った。学会が一丸となって本会の目的である高血圧に関する研究や社会への啓発活動に通じて、広く国民の皆様の今後の健康増進に寄与した。医療従事者向けのプログラムとしては、J-DOME(高血圧診療推進に向けたかかりつけ医のデータベース事業)やジャパンメソッド(日常から使える生活習慣)等、日本ならではの高血圧に対する取り組みを発表することで、日本の高血圧予防や治療を世界に発信した。また、国際高血圧学会としては、初めてのハイブリッド開催となり、本会議を成功させることで日本の対応力や柔軟性を世界に発信することができた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>新型コロナウイルス感染症拡大以降に強化された水際対策が直前に緩和され、緩和後初の大型国際会議となった。今後、国際会議で海外からの参加者が戻ってくるというイメージを広く示すことができたと同時に、参加者からは「最高の会議であった」等の高い評価を多くいただくことができた。また、国際本部との連携を強め、今後の関係性を強固なものとする事で、日本のプレゼンスを高めることができた。また、実際に来日いただいたことで、日本のホスピタリティについても実感いただくことができた。市民公開講座では150名を超える市民の方々に来ていただき、高血圧に対する最新の知見・予防について啓発を行うことができた。</p>
	(3) 課題	<p>大きな成果は得られた実感はあるが、国民の皆様への健康意識の啓発や日本の国際会議への取り組みについては長期的な影響を与える為にも継続が必要であると感じた。</p>

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

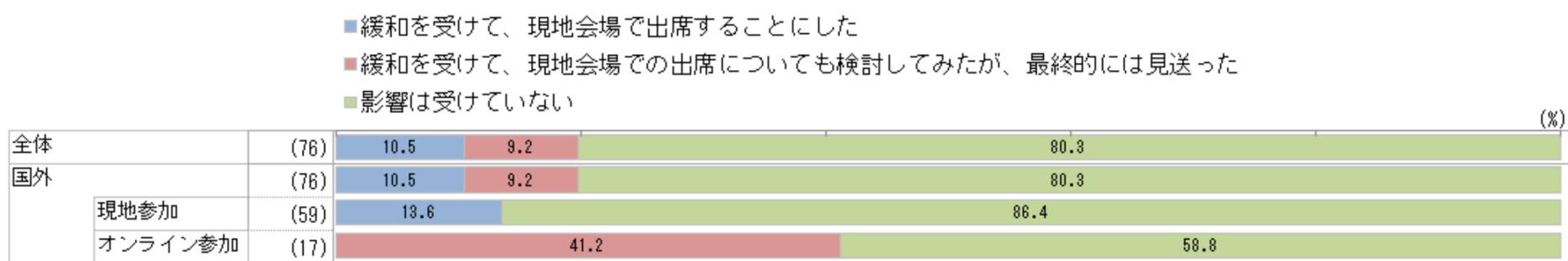
サステナビリティ	(1) 取組内容	本会議では、2030年の世界の為のSDGsを意識したセッションを複数用意しており、災害、気候変動、労働衛生といった観点と高血圧の関係について医療の観点から人々の健康を改善するための取り組みについて考えた。また、座長・演者等の招待者選定にはジェンダーや国・地域の平等性に配慮し、女性の比率30%程度、国・地域の偏りがないようにした。プログラム面以外では、トラベルgrantや若手奨励賞、開発途上国に安価な参加費を設定することにより、開発途上国や若手の参加者が会議に参加しやすい環境を整えた。その他、会議は抄録集の電子化等、極力ペーパーレスに取り組んだ。
	(2) 取組による成果	テーマにSDGsとつけたセッションをいくつか設けることで、参加者の意識も高まり、活発なディスカッションが行われた。また、座長・演者にも積極的に国・地域の偏りやジェンダーにも配慮することで、様々な視点・立場での発表を聞くことが可能であった。開発途上国や若手の参加者には安価な参加費設定やトラベルgrantを設けることで、参加と積極的な発表の機会を創出することができた。抄録集の電子化や証明書のダウンロード化を行うことで、使用する紙の削減を行った。
	(3) 課題	研究内容によっては、女性の演者の選出が難しいケースがあったり、一部の地域に偏ってしまうケースもあり、最初に掲げた目標に僅かながら到達できなかった。また、安価な参加者設定にはしたが、今までに参加していなかった層への広報に対しては難航した。

【実証事業⑨ 第29回国際高血圧学会 個別アンケート】

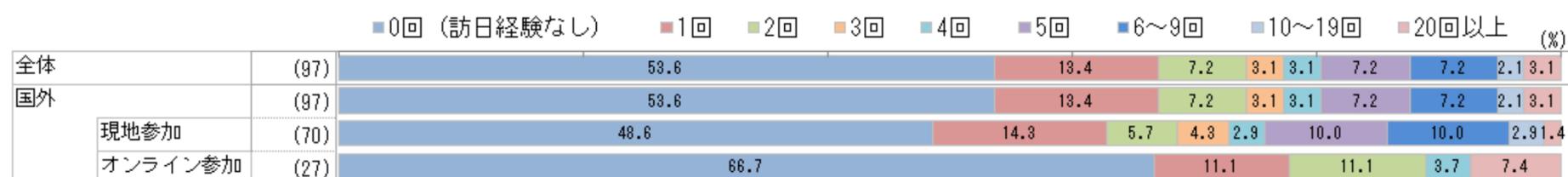
Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



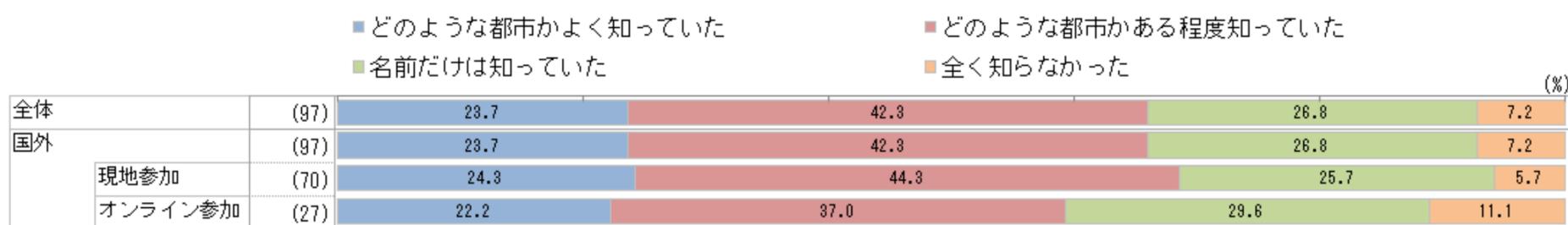
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



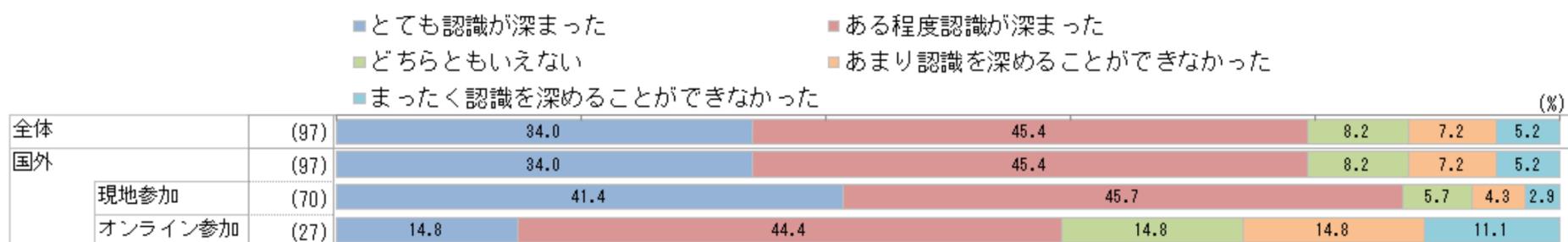
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



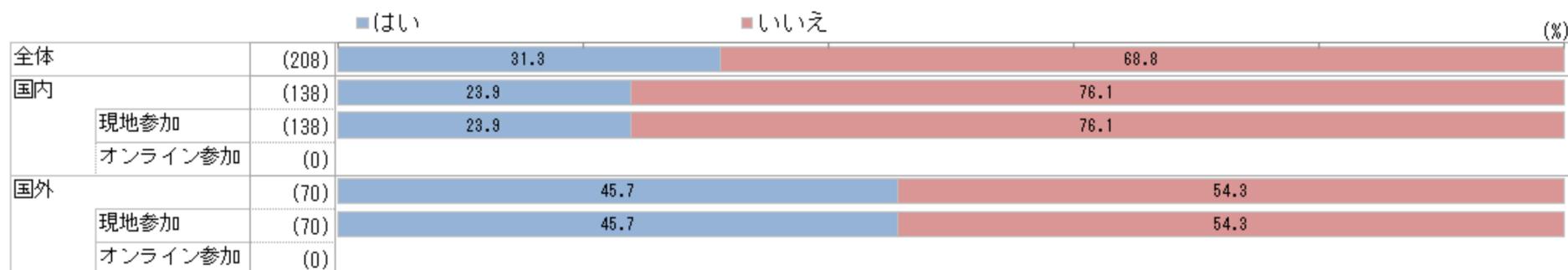
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(京都市)のことをどれくらい知っていましたか



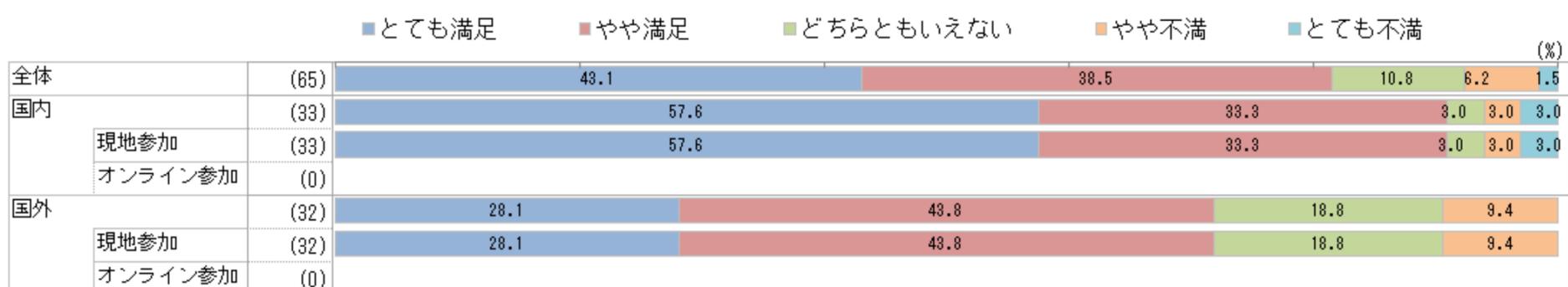
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(京都市)への認識が深まりましたか



Q. あなたは、10月15日の夜に開催されたガラディナー(国立京都国際会館)に出席しましたか

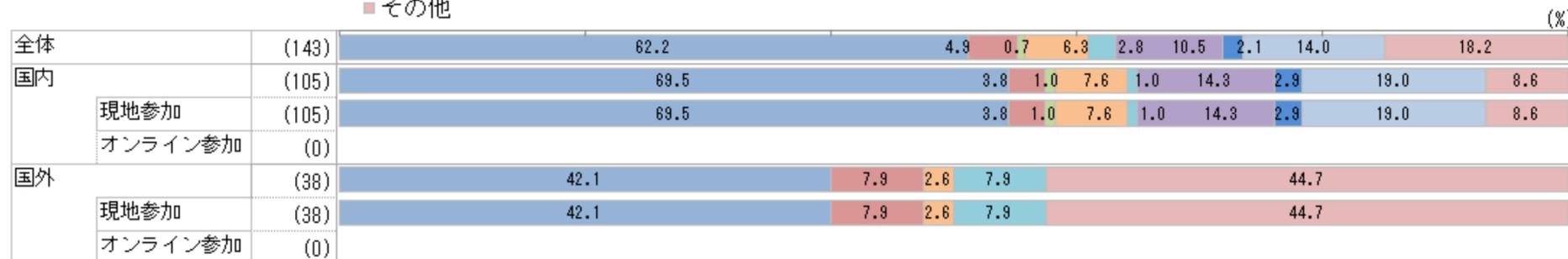


Q. ガラディナーの満足度を選択してください



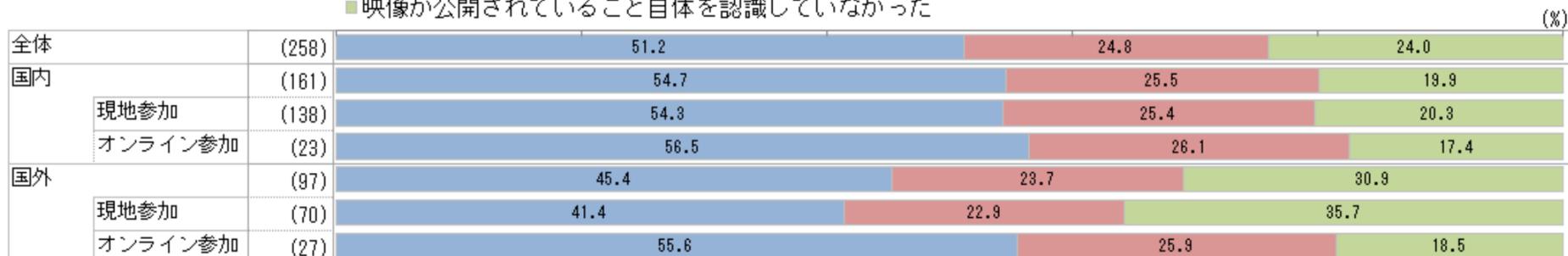
Q. あなたがガラディナーに出席しなかった理由を全て選択してください

- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた
- その他



Q. 会議公式サイトトップページで公開されている以下の映像をあなたはご覧になりましたか

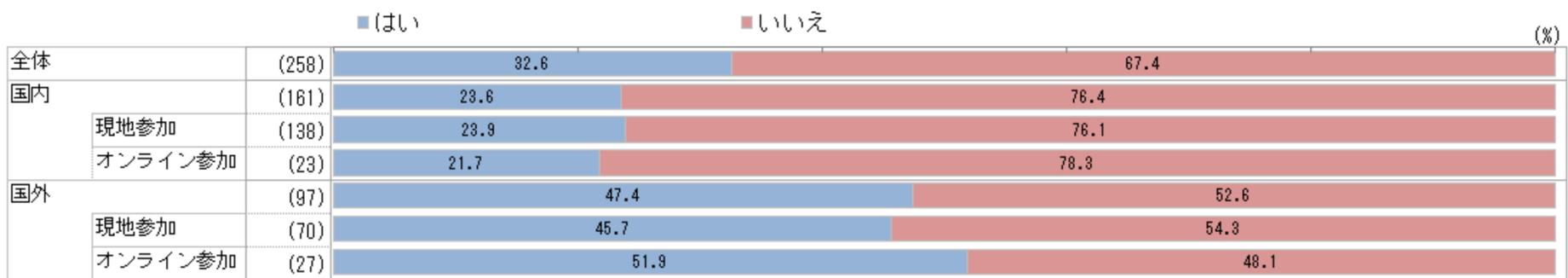
- 実際に視聴した
- ホームページを閲覧した際に動画が埋め込まれているのを目にしたが、視聴はしていない
- 映像が公開されていること自体を認識していなかった



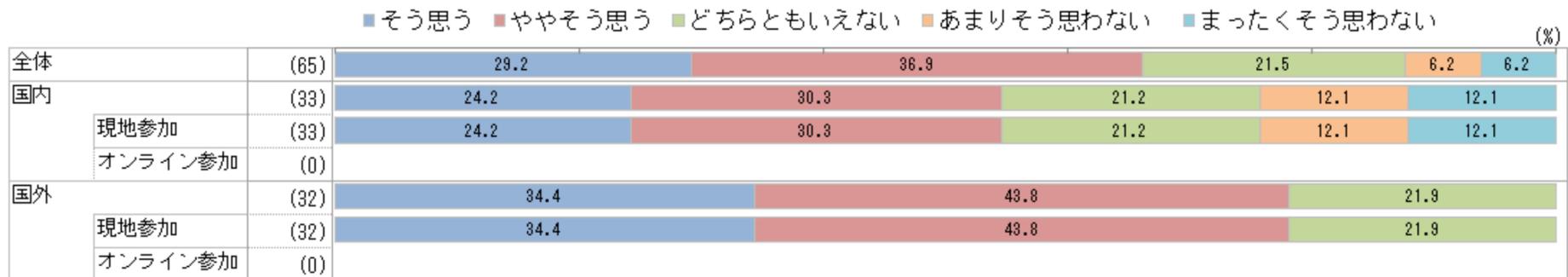
Q. その動画はどの程度、あなたの印象に残っていますか



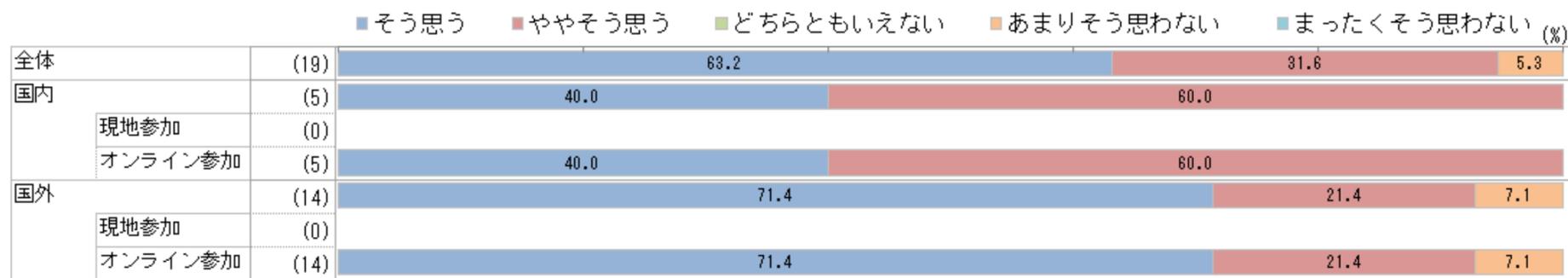
Q. あなたは、会議公式サイト上の Kyoto Guide を閲覧しましたか



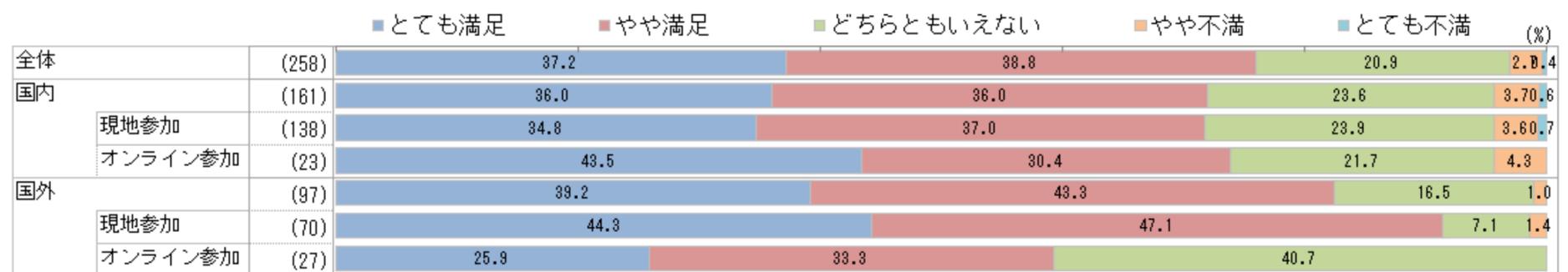
Q. その情報は、開催都市(京都市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



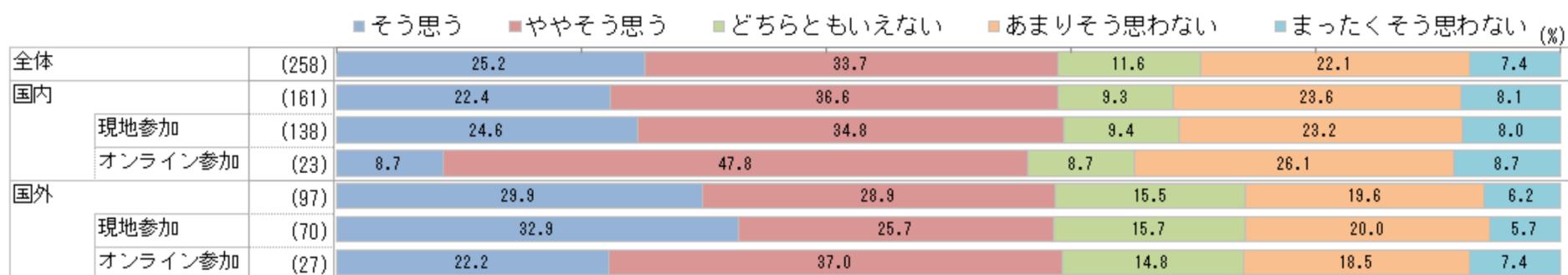
Q. Kyoto Guideを閲覧して今後、観光等の目的で開催都市(京都市)を実際に訪れてみたいと思いませんか



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業⑳ 第14回新材料とデバイスの開発に向けた原子レベルキャラクリゼーションに関する国際シンポジウム】

主催者名	公益社団法人 日本表面真空学会 マイクロビームアナリシス技術部会		
会期	10月16日～10月21日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	沖縄県名護市	主たる会場名	万国津梁館

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	207	3	210
外国人	60	13	73
計	267	16	283

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	
③	参加登録システムの導入	
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスクーションツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	

2)特筆すべき取組

①	会期中の看護師の派遣	救護室を訪れた参加者に対して、医学的な見地から健康観察に対する助言を行い、会期中の新型コロナウイルス感染症の感染防止に大きく貢献することができた。
②	抗原検査キットの参加者への配布	会期中2回の検査を行うことを推奨した。キットは参加受付にて配布した。参加者が250名程度になると予想されたため、抗原検査キットは500個準備をした。検査を行なって陰性を確認できることで安心して会議に参加できたという声が多く聞かれたので、一定以上の効果、成果が得られたと考えている。
③	感染対策の監視要員の配置	参加受付や講演会場で、三密を回避し、マスクの着用や手指消毒、検温などに対する注意喚起を行うための監視要員を配置した。
④	研究者交流サロン入口で混雑緩和の誘導要員の配置	今回はコロナ禍以降ほぼ初めてとなる現地での対面開催であったため、旧知の研究者の盛んな交流が印象的であった。その一翼を担ったのが交流サロンであり、その場での感染対策を徹底するための誘導要員の配置は適切であり、効果が大きかったと考えている。

①



②



③



④

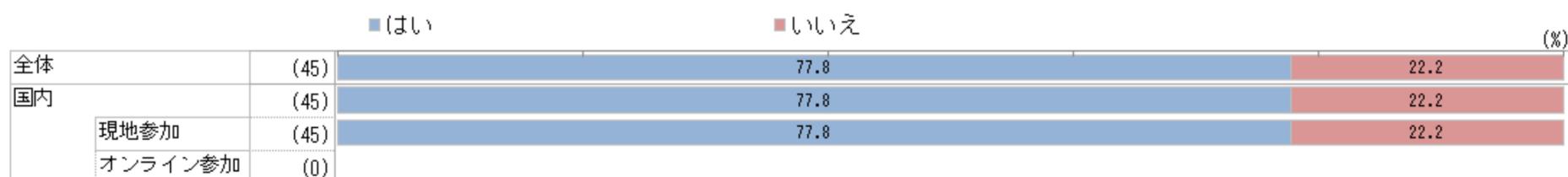


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

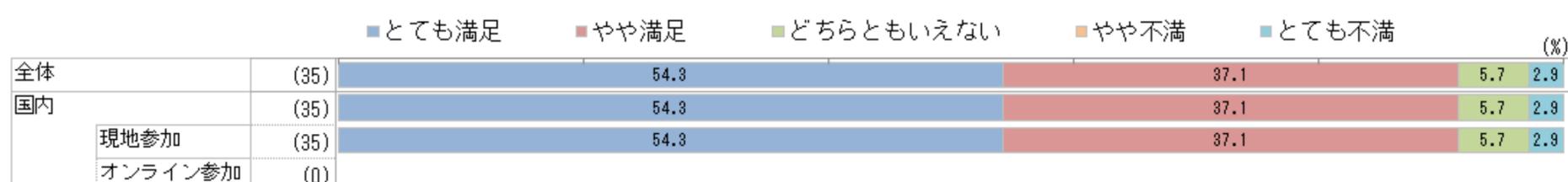
感染症対策	(1) 取組内容	マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保、手指消毒・検温の励行はもちろんのこと、参加者が安心して会議に参加ができるようにするため、抗原検査キットを全参加者に配布し、会期中2回の自己検査を推奨した。また、現地で体調不良など健康観察及び救護が必要となった場合の対策として、地元医師会に看護師の派遣を依頼し、看護師待機室を開設した。 参加者の交流を促進するプログラムとしては、交流サロンを開設した。ここでは、専門知識を有する誘導要員を配置し、徹底した感染防止対策を行った。
	(2) 取組による成果	感染対策を行った上での対面形式の開催であったが、新型コロナウイルス感染症の流行が始まって以降、ほぼ初となる対面での会議であったため、旧交を深める参加者が多くみられた。オンラインでの会議では交流がしづらいこともあって、やはり対面形式での開催には大きな意義があったと考えている。そうした中で、参加者に安心感を与えるための感染防止策を講じたが、参加者からも好評が得られていたので、主催者側の取り組みとしては満足がいくものであったと考えている。
	(3) 課題	十分な感染対策を講じたが、やはり飲食を伴う場面では、マスクを外しての会話や近距離での交流が随所に見られた。これについてはある程度は仕方がないことではあるが、もう少し工夫が必要であったと感じている。しかし、参加者の交流を促進と両立することは困難なので、今後も新しい形の交流促進策を考えていく必要があると痛感している。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	現地参加者の満足度を向上させるために、参加者交流サロンを開設して、アカデミックな議論だけでなく親交を深めるための場を提供した。また、ランブセッションでは、研究室紹介とオンラインでの研究室訪問といったハイブリッドならではの催しを開催した。 学生をはじめとする若手研究者向けには、やはりランブセッションとして企業の現場での研究開発の実情や、海外での学位取得経験談なども交えて、和気藹々とした雰囲気でもアカデミックな議論ができるようなプログラムを準備した。
	(2) 取組による成果	現地参加者には、いずれの取り組みも好評であり、夜遅くまで熱心な議論が続いていた。こうした取り組みにより、新しい共同研究の芽がでたり、新たな交流が始まったりと、ALC国際シンポジウムが本来目指していた姿にほぼ戻りつつある印象を得ることができた。本シンポジウムは、この分野の著名な研究者を多く招聘することによって、高度な議論が可能となるように努めてきたが、その成果として毎回参加してくれる外国人も多く、これを機とした国際交流にも役立つことができていると感じている。
	(3) 課題	やはり、オンライン参加者に対する満足度がやや低かったように思われる。オンラインでの参加者については、やや一方通行的な参加でしかなく、双方向の活発な議論をするには至らなかった。
開催地との連携	(1) 取組内容	沖縄観光コンベンションビューローとは、会議の企画段階からいろいろと相談をしており、コンベンション開催支援金の補助を得るとともに、バンケットでの伝統芸能(エイサー)を披露する人員の派遣もお願いすることができた。
	(2) 取組による成果	開催支援金の補助が得られなかったら、沖縄県での開催は不可能であったと考えられる。また、バンケットでの伝統芸能の披露については、参加者から大変好評であった。
	(3) 課題	新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定していた参加者数を得ることができず、開催支援金の補助金額が想定よりも低かったことが少し悔やまれる。これについては、感染対策をしっかりとするだけでは解決できない社会的な問題も含んでいるので、主催者だけの努力ではどうすることもできないが、行政機関との連携なども考えていく必要があると感じている。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	これまでのALC国際シンポジウムはハワイでの開催が多く、「ALC＝ハワイ」という位置づけであったが、今回初めて沖縄で開催するに当たって「ALC＝沖縄」あるいは「ALC＝日本国内の魅力的な開催地」という印象を与えることによって、次回以降の沖縄開催や国内の別の場所での開催に繋げる意味合いも含んでいた。こうした取り組みにより、開催地に対するレガシー効果を創出し、会議参加者が再び訪れるきっかけの提供を心がけた。
	(2) 取組による成果	当初は、会議でのアカデミックな議論に加え、エクスカーションで沖縄の魅力ある文化に触れる機会を提供し、参加者の満足度を向上するとともに、再び沖縄を訪れたいという印象を植え付ける予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症対策として考えていたバスの増便にかかる費用が認められなかったため、逆に規模を縮小せざるを得なかった。このため、開催地に対する貢献という意味ではやや満足度が低かったと考えている。
	(3) 課題	エクスカーションだけでなく、それ以外の取り組みも必要であると考えている。今回、ランブセッションで沖縄科学技術大学院大学(OIST)の紹介をする機会をもつことができ、また先方の好意によりOISTの見学会も開催することができた。こうした取り組みを主催者主導で取り入れていくことが必要であると痛感している。
サステナビリティ	(1) 取組内容	今回の国際シンポジウムでは、国際的の著名な2名の研究者によるチュートリアル講演を行った。これは、大学院生を含む若手研究者の啓蒙活動の一環でもあり、SDGsのターゲット4.3の理念に通じるものがある。こうしたプログラムは、本国際シンポジウムの参加者に世界トップレベルの高い質の原子レベルキャラクタリゼーション技術を普及する活動となっている。こうした活動を通じて、当該分野のリーダーを育て、持続可能な技術開発への貢献をめざしたプログラム構成となっている。
	(2) 取組による成果	今回の国際シンポジウムには、およそ70名の学生の参加があった。今回のチュートリアル講演の講演者は、この分野で学ぶ大学院生であれば誰もが名前を聞いたことがあるような著名な研究者であったので、大変興味を持って聴講をした様子が見受けられた。これを機会として、社会に貢献できる研究者・技術者として一層の飛躍をすることを願っている。
	(3) 課題	チュートリアル講演の講演者のうち1名が、新型コロナウイルス感染症の影響もあってオンラインでの講演となった。若手の育成という観点では、現地で直接顔を見ながら話を聞くのが最も効果的であるので、今回それに代わる代替策を準備することができなかったことが、今後同じような状況になった時に向けた課題であると感じた。

【実証事業② 第14回新材料とデバイスの開発に向けた原子レベルキャラクリゼーションに関する国際シンポジウム 個別アンケート】

Q. あなたは、10月20日の夜に開催されたバンケット(万国津梁館)に出席しましたか

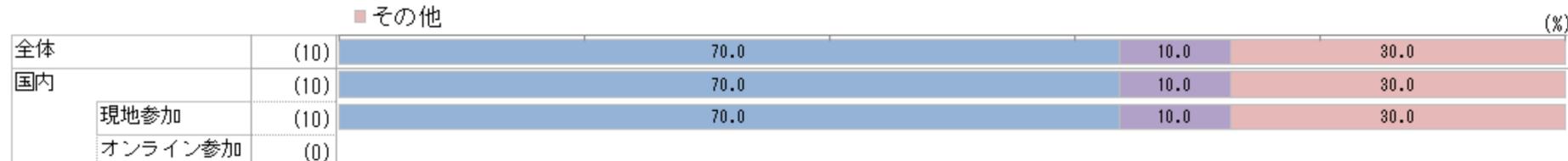


Q. バンケットの満足度を選択してください

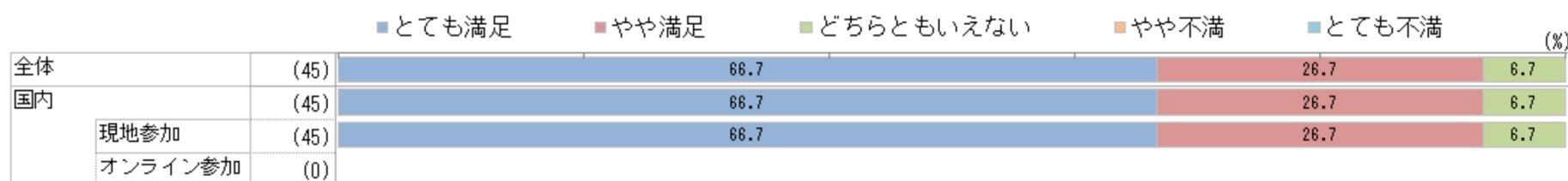


Q. あなたがバンケットに出席しなかった理由を全て選択してください

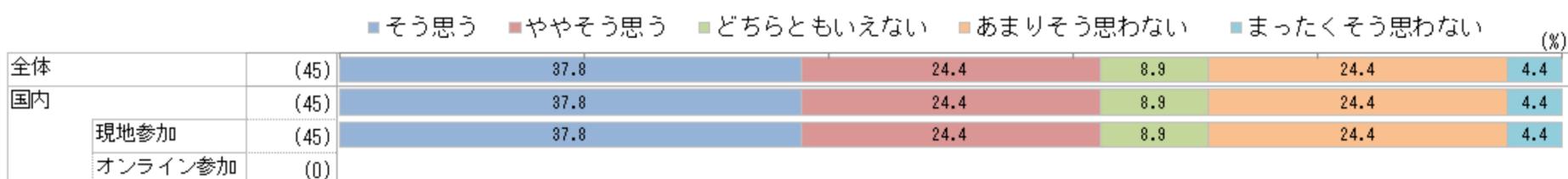
- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた /
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた
- その他



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業② The 2022 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems】

主催者名	IROS2022実行委員会		
会期	10月23日～ 10月27日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	京都市	主たる会場名	国立京都国際会館

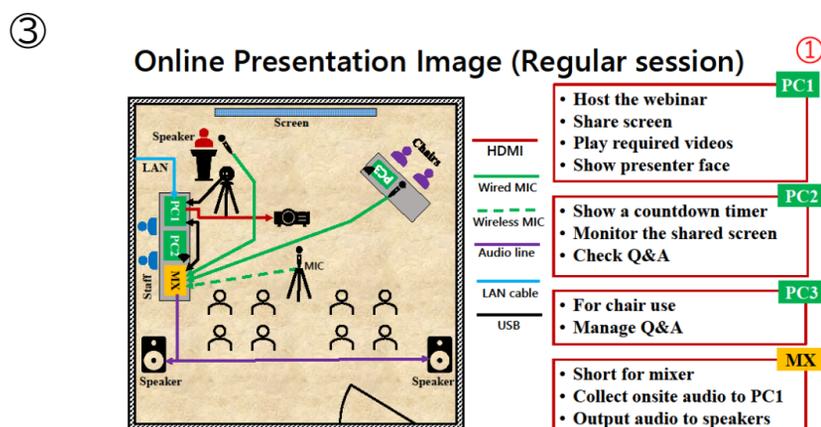
1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	810	130	940
外国人	2379	750	3129
計	3189	880	4069

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2) 特筆すべき取組

①	会場入口にて抗原検査キットの配布	事前検査登録者は4000名を超え、入口で抗原検査を受けた人は243名であり、しっかり広報した結果がでた。
②	サーマルカメラの設置	発熱者は大会に参加できないことを事前にアナウンスしており、入口に体温計を設置した。しかし3000人も参加者が来るので、一旦立ち止まらなると測れないような体温計では滞留が発生して危険である。そのため、立ち止まらずに歩き続けている状態で各人の体温が測れるサーマルカメラをレンタルし、これを会場入り口の2ヶ所に設置した。
③	ハイブリッドプレゼンテーションシステムの活用	Infovayaでは事前にプログラムを設定し、全発表者の発表ビデオクリップを収集掲載した上で会期に臨んだ。このことにより、発表者が来日できなかった場合においても発表ビデオクリップを放映し、質疑だけをon-lineで実施するなど柔軟な対応を行うことができた。
④	LANの増強及びWi-Fiの設置	ハイブリッドで会議を実施する際にネット環境が不安定になってしまっは成功はおぼつかないために23会場のすべてのLAN環境を増強した。京都国際会館のWi-Fiのほかに、会議独自のWi-Fiも設置して、多数の参加者の利便性を向上させた。



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	事務局内にコロナ対策委員会を立ち上げ、京都大学医学部附属病院感染制御部部長の長尾先生にアドバイザーになっていただき、京都国際会館のコロナチェック表などをもとに感染対策を検討した。また、関連分野の世界のリーダーたちに委員会のメンバーになってもらってコロナ対策に関するメッセージを発信してもらうこと、また大会のWebで大会のコロナ対策の状況を具体的に発信することによって、安心して参加してもらうようにするとともに、海外からの参加者に日本国内のルールを守る意識付けをしていくような情報発信を行った。参加者には全員事前にPCR検査又は抗原検査をしてきてもらい、結果を提出させた。結果を提出していない人には入り口で抗原検査キットを渡して検査をさせた。入り口ではサーマルカメラで全員を検温し、また各所にアルコール消毒液を設置した。当初予定していたGala Dinner等はやめ、一部招待客のみに限定したパーティー以外は中止し飲食を伴わない形式にして、酒やジュースなどを持ち帰らせた。昼食は分散して黙食を促した。コーヒー等は名前の書けるタンブラーを配布し、毎日自身のタンブラーを使用頂くようにするなど、飲食に伴う感染リスクをできる限り減らすように試みた。
	(2) 取組による成果	欧米各国ではもうマスクをして生活をするのではないと言われていたので、マスク着用や事前PCR検査の義務化などに対して反発もあるかと思っていたが、基本的になく、大多数の人が事前にPCR検査をしてきてくれて、当日会場入り口で抗原検査をした人は250人程度だった。日本のどこでPCR検査が受けられるか教えてくれ等多くの問い合わせがあったが、不満は多くなかったように思う。事前の丁寧な説明・対応が効果的であったように思う。昼食場所として用意していた部屋のほかに、屋外で景色を見ながら昼食をしている人も多く、ある程度分散して食事をしてもらうことができたように思う。結果として京都に3500人以上が集まったこの大会で感染したという報告はでなかった。(注:正確な参加者数がでないが、現地での大会参加者は3500名以上になるはずであり、そのほかに参加者の同伴者や展示の説明員なども京都に来ていた)
	(3) 課題	初日の朝には入口で少し列ができてしまったり、また昼食を予約しなかった参加者によって食事を提供する場所に列ができるなど、すべてうまくいったわけではない。アルコール消毒も、実態を見ていると会場の入り口では消毒している人も多いが、部屋の入り口においた消毒液を使っている人は多くなかった。また、屋外ではマスクを外して会話をしている構わないと考える外国からの参加者も多く見られた。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	オンライン参加では個別の雑談や簡単な質問、意見交換などを促進するためのオンラインコミュニケーションツールを使った。具体的には、オンサイト・オンライン双方の参加者が、発表及び意見交換できるオンライン発表聴講システム(Zoom Webinar)オンサイト・オンライン双方の参加者が、リアルタイムで進行する発表プログラムを簡単に把握し、効率よく部屋を渡り歩いて聴講できるプログラム管理アプリケーションの提供(Infovaya)、会期後にも任意の時間(2ヶ月程度)聴講し、チャット機能で意見交換のできるオンデマンド発表聴講システム(IROS OnDemand)を使用し、オンサイト・オンライン双方の参加者の満足度向上を目指した。また、オンサイト発表者のみが、会場にてライブで発表できるようにして、オンサイト参加のインセンティブを持たせる。 訪日を促す取り組みとして、同伴者へのソーシャルプログラムとして書道体験・華道体験、抹茶体験、市内観光プログラムなどにより、京都及び日本文化のすばらしさを伝える試みを行った。また京都近郊の大学等の研究室を訪問するテクニカルツアーも実施することで、訪日者にはより深い体験をしていただいた。花火や和太鼓も実施した。
	(2) 取組による成果	オンライン参加者の声を十分に聴けているわけではないが、ハイブリッド開催としてはオンライン参加者にもある程度満足してもらえる運営ができたと思っている。オンサイトで参加予定だったがPCR検査で陽性になったとか熱が出たなどの理由でホテル等からオンラインで発表した人もいて、ハイブリッド環境を構築したことは実施の参加者にもメリットがあったと思う。書道や華道体験は参加者のある程度を絞らざるを得なかったが、多くの希望者がいてすぐに枠がいっぱいになった。大変好評であった。
	(3) 課題	多くのソフトウェアを使用した。多数のパソコンが必要であり、各会場に複数のオペレータを必要とするなど、当初の想定に比べてハイブリッドにしたことで経費が余計にかかった。 屋内でのイベントは感染リスクがあると考え、屋外で花火や和太鼓のイベントを行ったが、海外からの参加者の多くが、屋外だからマスクを外してよいと考えていたようで、マスクを外して近距離で話している人が多数見られた。これらの人は屋内に入るときはまたマスクを着用していた。これを考えると、屋外のイベントだから感染リスクを低減できるとは安易に言えないように思った。
開催地との連携	(1) 取組内容	公益財団法人京都文化交流コンベンションビューローと誘致前から密に連携して、京都の魅力をアピールする素材を提供してもらうなどしてきた。また、参加者に地場産業で作る酒や菓子等をお土産で提供したり、また伝統文化として和太鼓や花火をアトラクションとして実施するなどした際に、紹介及び補助していただいた。
	(2) 取組による成果	誘致時に京都の魅力を発信することができ、誘致につながったと考えている。また早い段階から補助金を確約ではないにしてもある程度もらえることになり、大会運営に余裕が生まれた。会場で食事をしない代わりに京都の日本酒やお菓子等をお土産に渡してホテルで食べてもらうことにつながったり、和太鼓や花火等を楽しんでもらうことができた。
	(3) 課題	会場Gala Dinnerを実施しないとなつて、京都市内で使える共通食事券のようなものがあればそれを配ろうとしたが、そういうものはなかった。京都文化交流コンベンションビューローが中心となつてそういうものを作ってもらえるとよいと考えている。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	IROSはもともと日本で始まった国際会議である。コロナで時代の変革期であるこの時期に再びIROSを日本で開催することで、「ロボット大国日本」を世界に印象付け、優秀な若手研究者が日本にきてロボットを研究したいと思うような機会にしたいと考えている。そのためのイベントとして、ロボットコンテストや見学会などを開催した。また、各種オンラインツールの使用により、それらの効果を検証して、今後の大型国際会議の誘致に繋げることを考えている。
	(2) 取組による成果	すぐに直接的な成果が出るわけではないが、発表や企業展示、見学会などから多くのアピールをできて「ロボット大国日本」を実感してもらえたと考える。例えば展示企業の一つソニー社は、「トップ人材獲得のためにIROSにブースを出した」という(https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/00001/07290/)。このようにこの会議は日本企業が世界から多くの優れた人材を集めるための土台になれたと自負している。また、大型学会を成功させることができ、今後の大型会議の誘致のノウハウも蓄積できた。
	(3) 課題	特になし。

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

サステナビリティ	(1) 取組内容	我々のハイブリッド開催は、ロボット系の会議であるIFAC2023@Yokohama, ICRA2024@Yokohamaにも繋がる(多くの委員が重複して運営にあたっている)ことになり、日本における大型国際会議のサステナブルな運営に繋がることになる。また、コロナ対策では使い捨てなどせざるを得ずに必ずしもサステナブルではないように見える場合もあるが、まず対策をきちんとしてコロナウイルスを撲滅することこそが長期的に見てサステナブルであると考えており、しっかりコロナ対策を実施した。
	(2) 取組による成果	大会運営に関する多くのノウハウを得ることができ、今後の大型会議の開催につながると考える。 また、各人にタンブラーを渡して自分のタンブラーをリユースして使用してもらうことで、紙コップ等の廃棄物も減らすことができ、感染症対策にもなった。
	(3) 課題	特に消毒関連では感染防止の観点で使い捨てにせざるを得ないものは多く、ある程度無駄が発生するのは避けられなかった。

【実証事業② The 2022 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems 個別アンケート】

Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか。

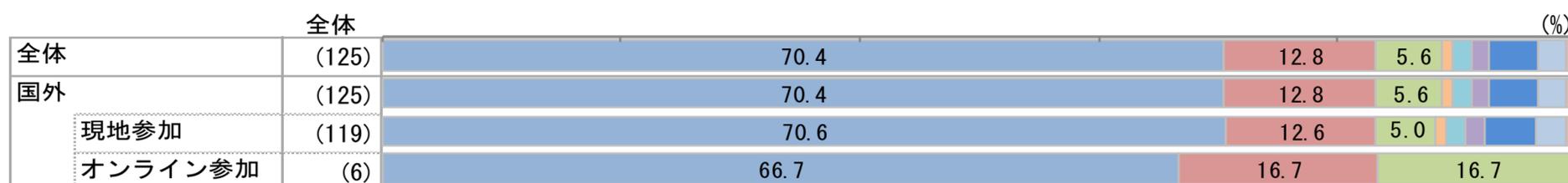


Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか

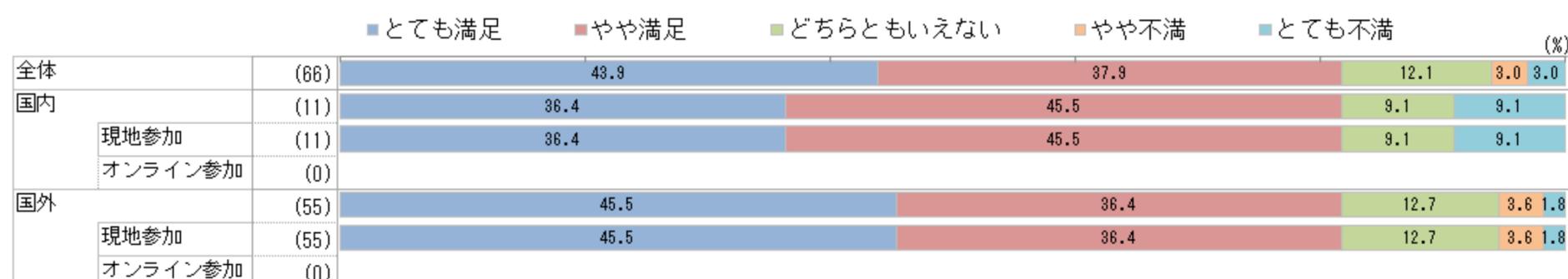
- 緩和を受けて、現地会場で出席することにした
- 緩和を受けて、現地会場での出席についても検討してみたが、最終的には見送った
- 影響は受けていない



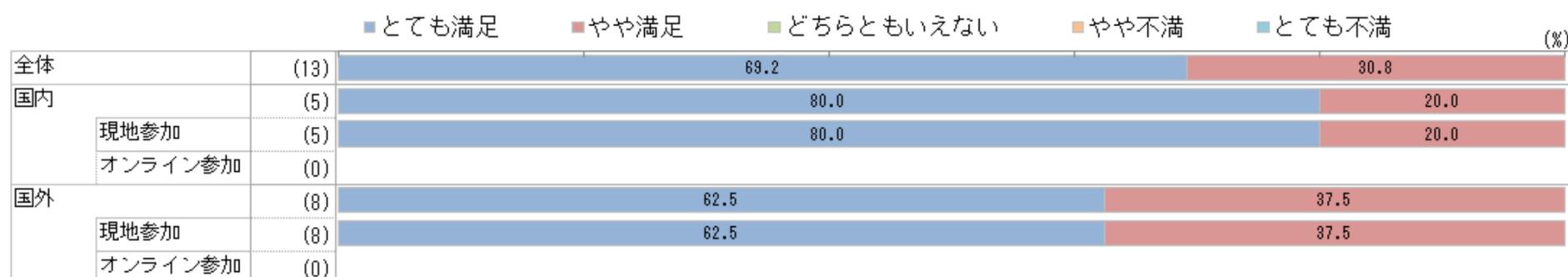
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか（観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません）



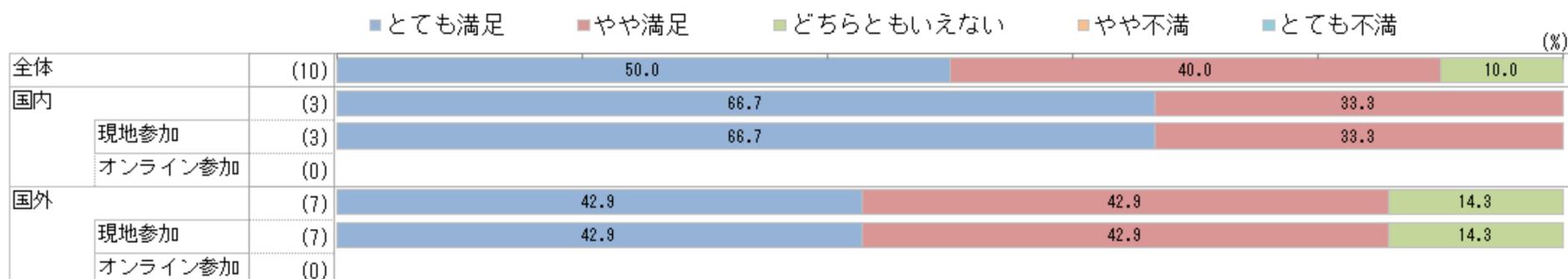
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<Social Events>



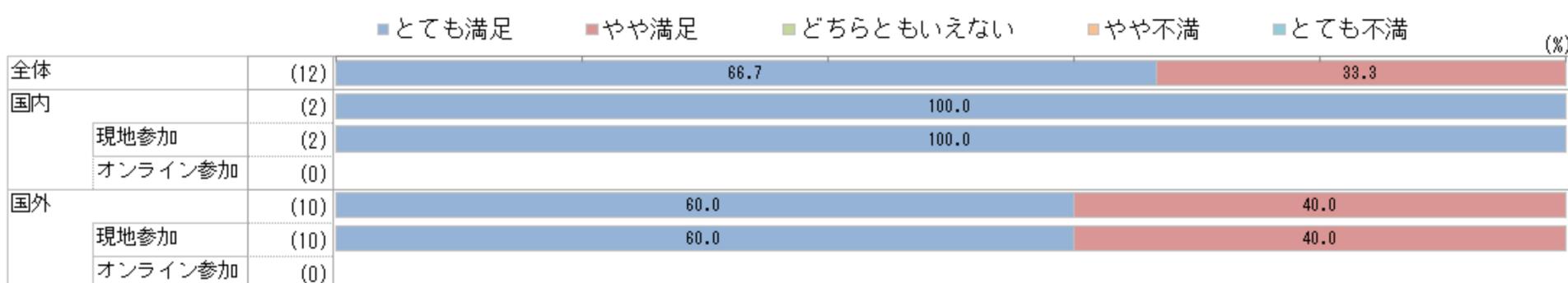
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<Technical Tour>



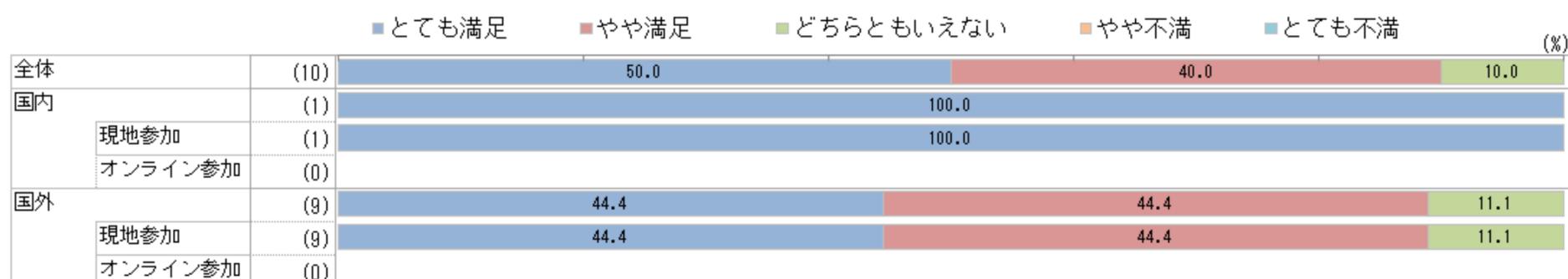
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<Lab Visit>



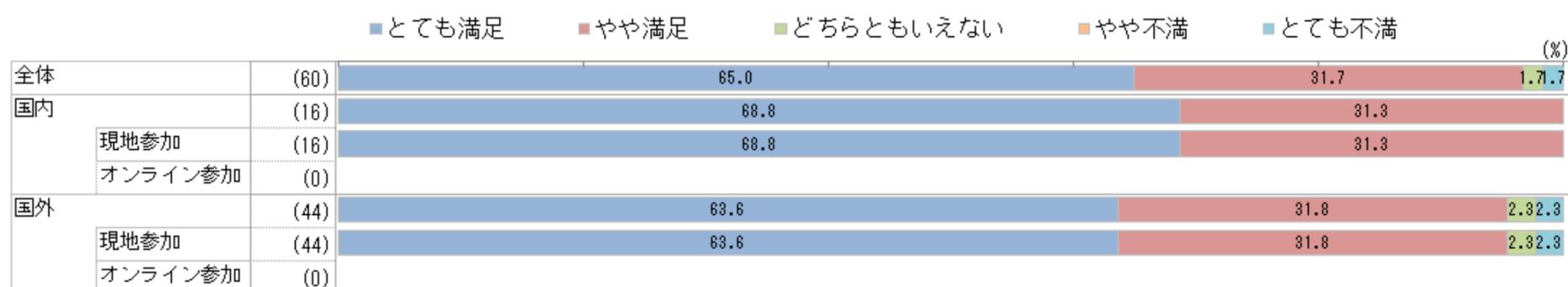
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<Ikebana Workshop>



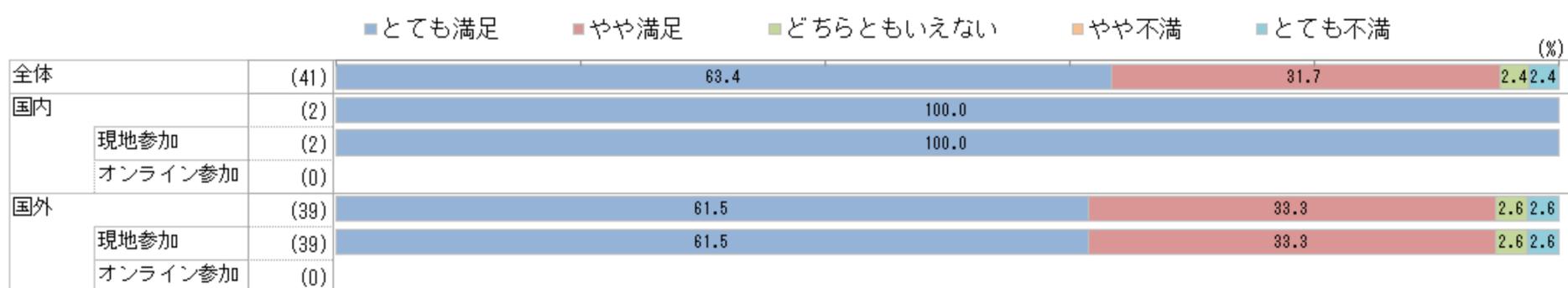
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
<"Shodo" Calligraphy Workshop>



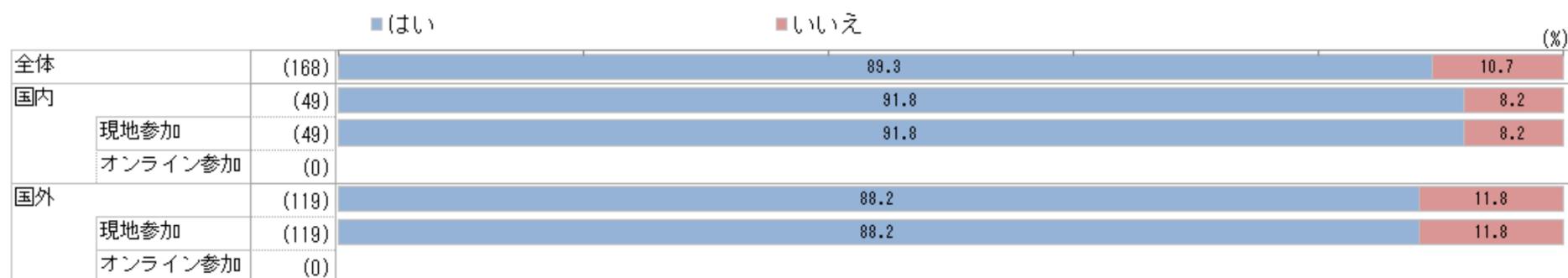
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
 <"Wadaiko" & "Hanabi" Shows>



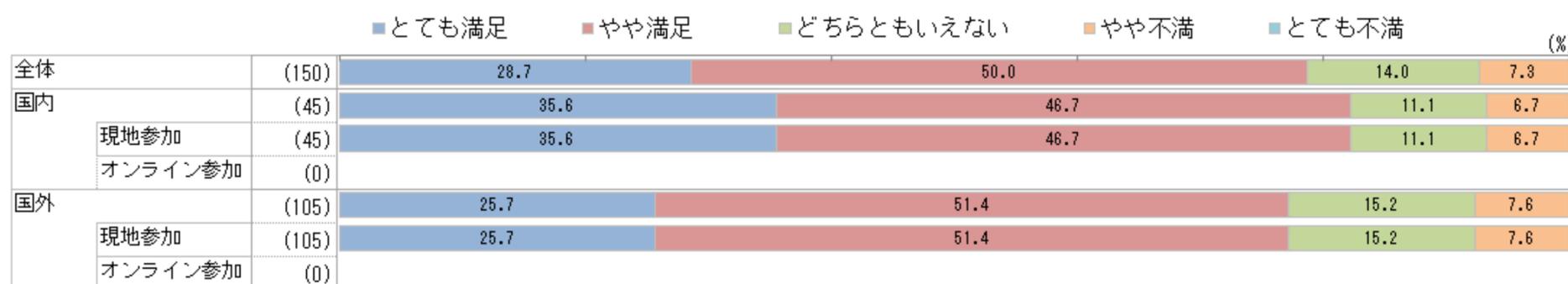
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
 <"Sado" Ceremony>



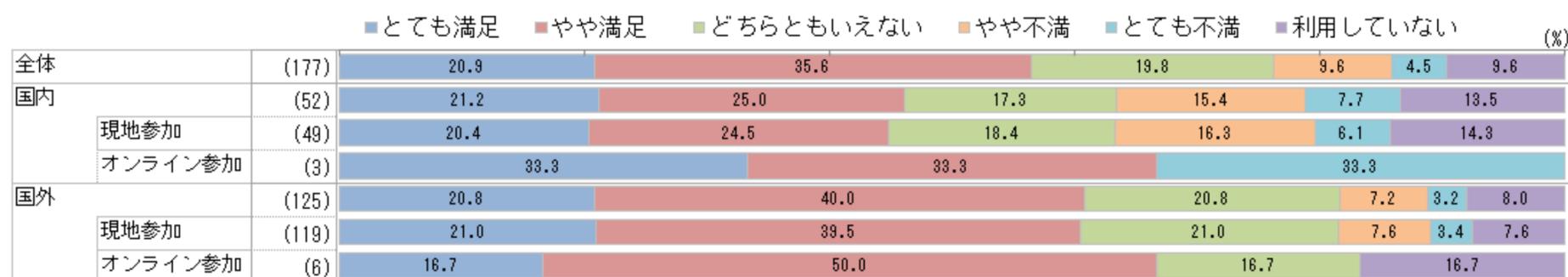
Q. あなたは展示をご覧になりましたか



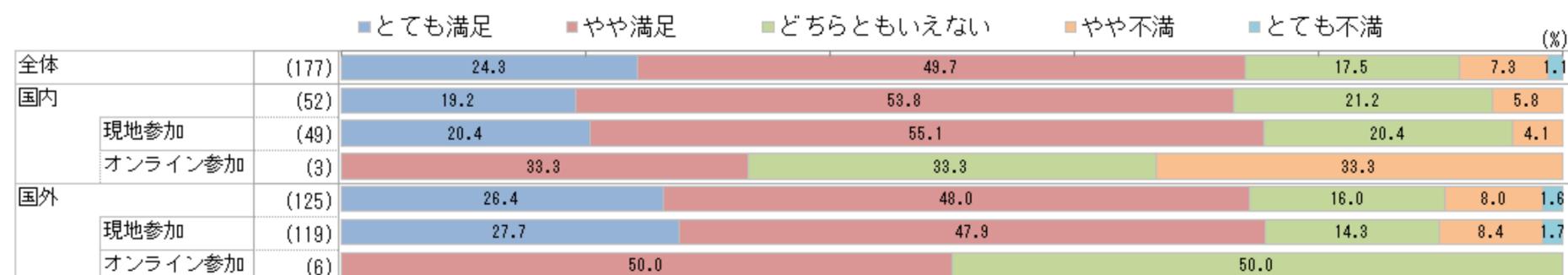
Q. 展示の満足度を選択してください



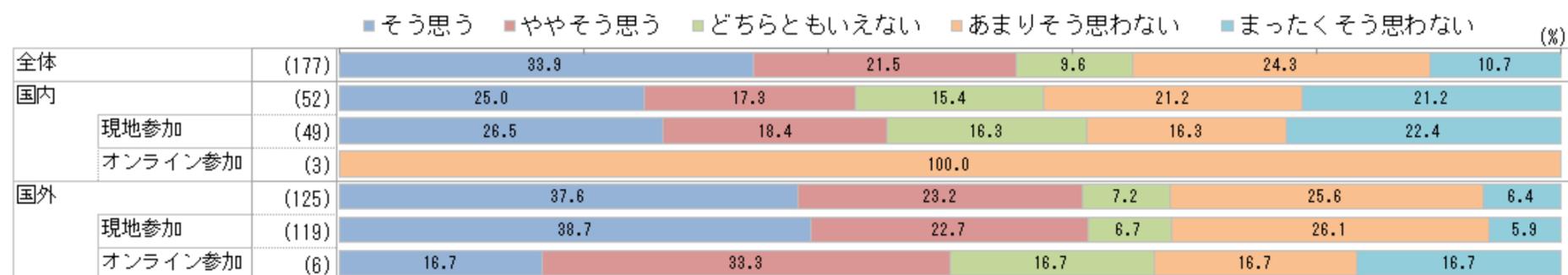
Q. 会議参加者向けアプリケーション(Infovoya)の満足度を選択してください



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業② Redox Week in Sendai 2022】

主催者名	東北大学		
会期	10月28日～11月1日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	仙台市	主たる会場名	東北大学星陵キャンパス

1)参加者数

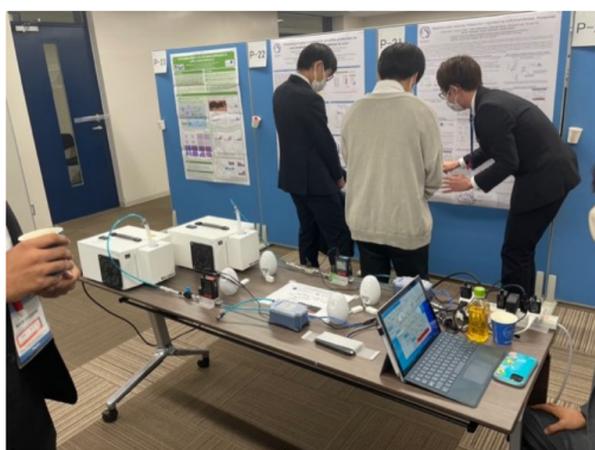
	実地	オンライン	計
日本人	239	7	246
外国人	84	33	117
計	323	40	363

2)特筆すべき取組

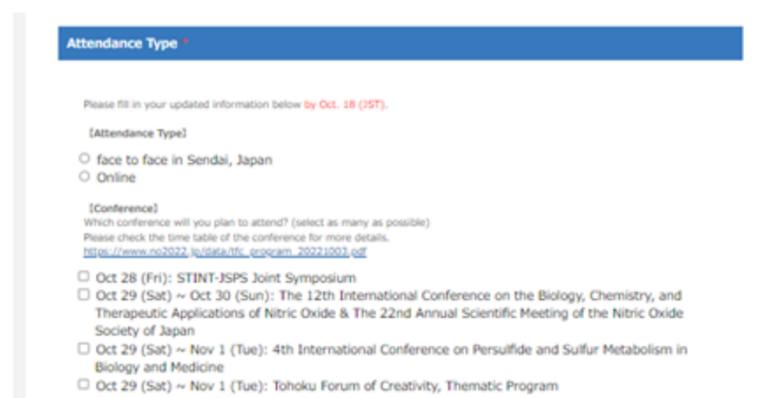
① エアロゾルモニタリングを実施	ポスターセッションにおいて、ポスター会場でエアロゾルモニタリングを実施した。また懇親会でも同様に、エアロゾルモニタリングを実施した。それぞれの会場におけるエアロゾルの回収状況を図に示した。
② 参加登録WEBシステム	コロナ感染の状況に応じて、オンサイト参加、オンライン参加を、いずれでも選択、あるいは、変更できるようなWEBシステムを構築した。
③ 消毒液、アクリル板など、感染症対策	演者の前、演題にアクリル板を設置した。また、演者のマイク、質問者のマイクは、消毒の担当者をおき、毎回使用者が変わるたびに、消毒を行った。
④ 仙台市観光コンベンションによるヘルプデスクの設置	英語と日本語が堪能なアメリカ人のスタッフが常駐してくれたおかげで、海外の参加者に対して細やかな対応が可能であった。仙台市内の地図の要望や、食事が出る場所などの問い合わせに対応した。

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	●
③	参加登録システムの導入	●
④	感染対策に資する物品の手配	●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	●

①



②



③



④

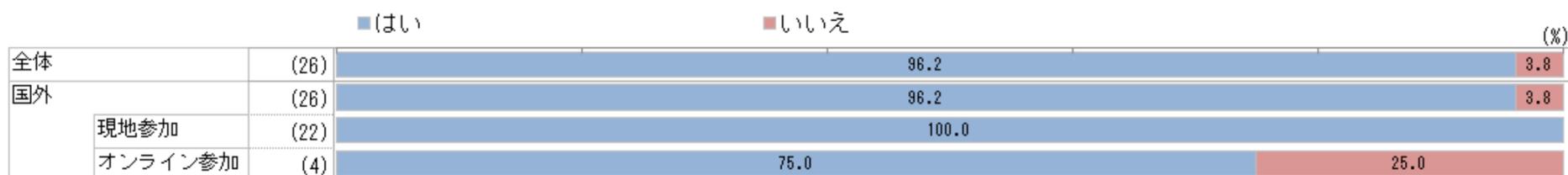


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

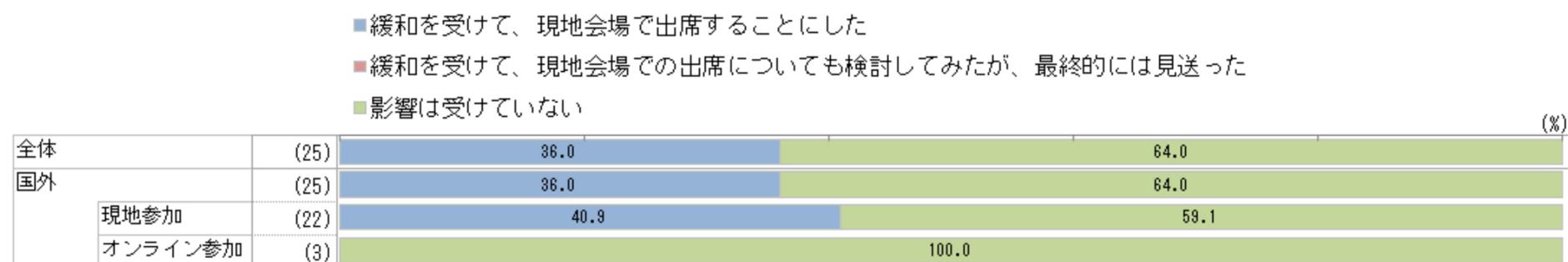
感染症対策	(1) 取組内容	学会本部に、常に医師を1名常駐させて、必要に応じて対応できる体制をとった。幸い体調不良者はでなかったため、実質的には医師が対応する必要がある状況にはならなかった。毎朝会場に入る時に、体温のチェックを行い、その結果をシールにして名札に貼ってもらった。毎日の検温結果がひと目でわかるようにした。会場内では、マスク着用の励行を徹底し、演者の前にはアクリル板を設置、会場内ではサーキュレーターを稼働させた。また、質疑応答の際、マイクを使用する度にマイクの消毒を実施した。本事業でもっともユニークな試みとして、屋内のエアロゾルモニタリングを実施した。会話や飲食があるポスターセッションと、懇親会場で、人が会場に入る前後でエアロゾルを採取し、その分析を行った。
	(2) 取組による成果	体調不良者がでることなく、学会を終了することができた。会場内のエアロゾルモニタリングによりSARS-CoV2ウイルスゲノム、SARS-CoV2ウイルスタンパク質の検出に成功した。しかし、人が会場に入る前のみの検出であり、環境中にウイルスが存在していることがわかったものの、人が入り会場の空気の循環がおこったあとは、検出されなかった。これは、サーキュレーターや窓の開放などが効果的であったことを意味すると思われる。さらに、生体由来の硫黄代謝物の検出にも成功し、生体が活発に硫黄代謝を営んでいることが実証された。これは学術的に極めて意義のある成果といえる。
	(3) 課題	エアロゾルモニタリングの機材のなかで、冷却装置から想定以上の音が発生することがわかった。そのため、講演会場でのエアロゾル回収は断念することになった。今後、冷却装置の改良などが必要と考えている。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	ハイブリッド開催を行い、入国VISAの申請手続きが困難であった海外からの参加者にも対応した。(10月11日からのビザ免除がもう少し早いタイミングでわかっていれば、現地参加者がもう少し増えたものと思われる。)また、オンライン参加者ととも、質疑応答の時間が足りず質問できなかった現地参加者も利用できるように、質疑応答のためのコミュニケーションスペースを演題ごとにオンラインで設定した。
	(2) 取組による成果	Web上での研究者同士のコミュニケーションを活性化させることができた。
開催地との連携	(1) 取組内容	仙台市のコンベンションと協力して、仙台市とその周辺の観光案内を行った。
	(2) 取組による成果	特に、海外からの参加者に対して、仙台市内の土産物店の情報や交通手段についての情報を提供できた。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	今回の学会開催で最もユニークな取り組みは、環境のエアロゾルモニタリングであったと考えている。
	(2) 取組による成果	人が多く集まる環境において、空気中の病原微生物の検出が実際可能であり、実際に、SARS-CoV2ウイルスのウイルスゲノム、ウイルスタンパク質の検出に成功した。それと同時に、生体由来の物質として、二酸化炭素以外に硫黄代謝物の利用が可能であることも明らかになった。
サステナビリティ	(1) 取組内容	会場で配布するお弁当の容器はすべて回収し、資源の節約に努めた。

【実証事業② Redox Week in Sendai 2022 個別アンケート】

Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



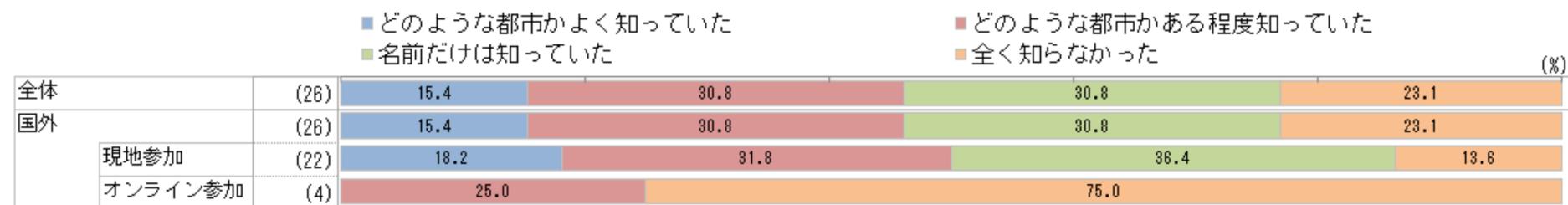
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



Q. あなたは過去何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



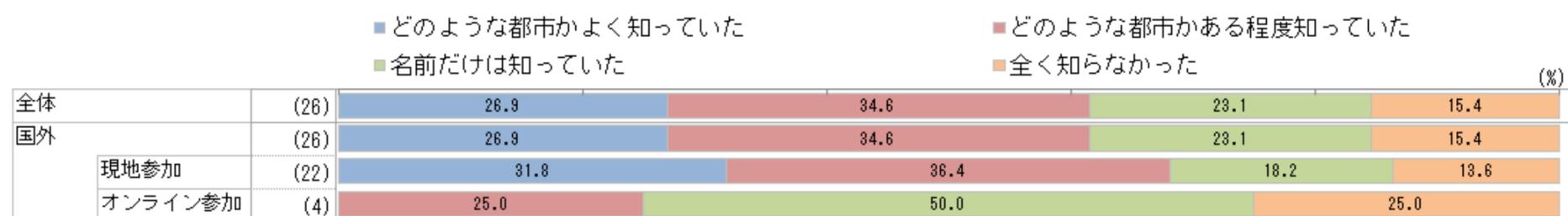
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか <東北>



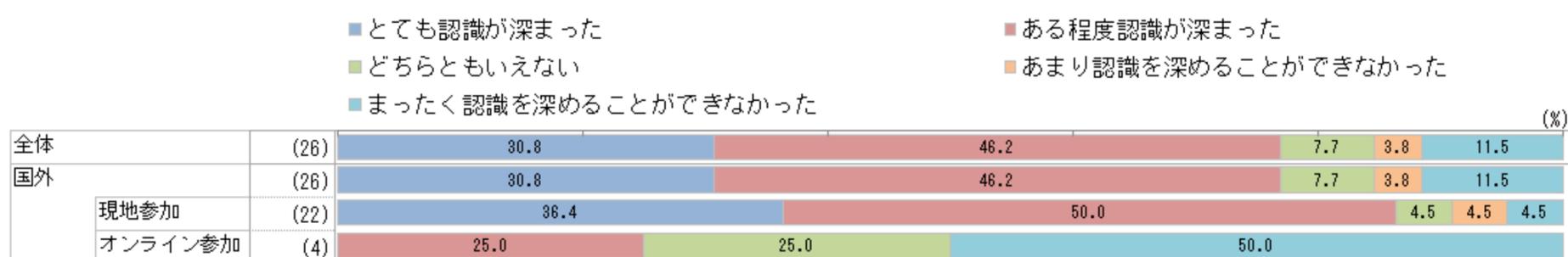
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか <宮城>



Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか<仙台>



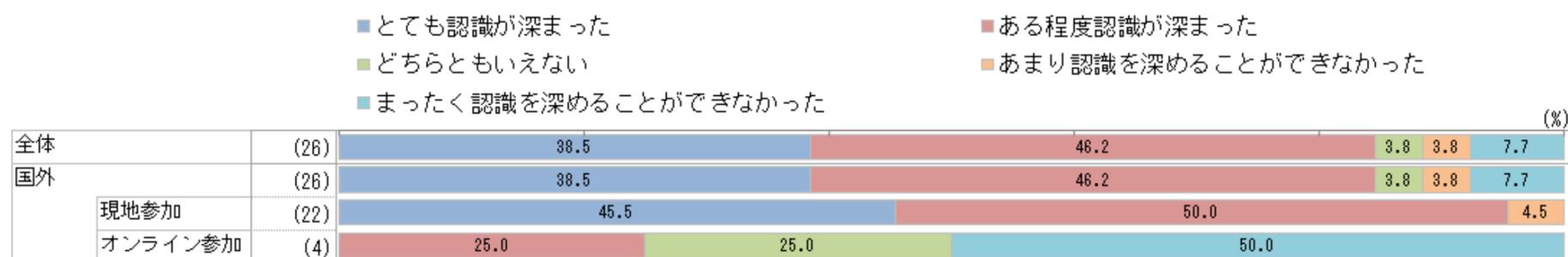
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<東北>



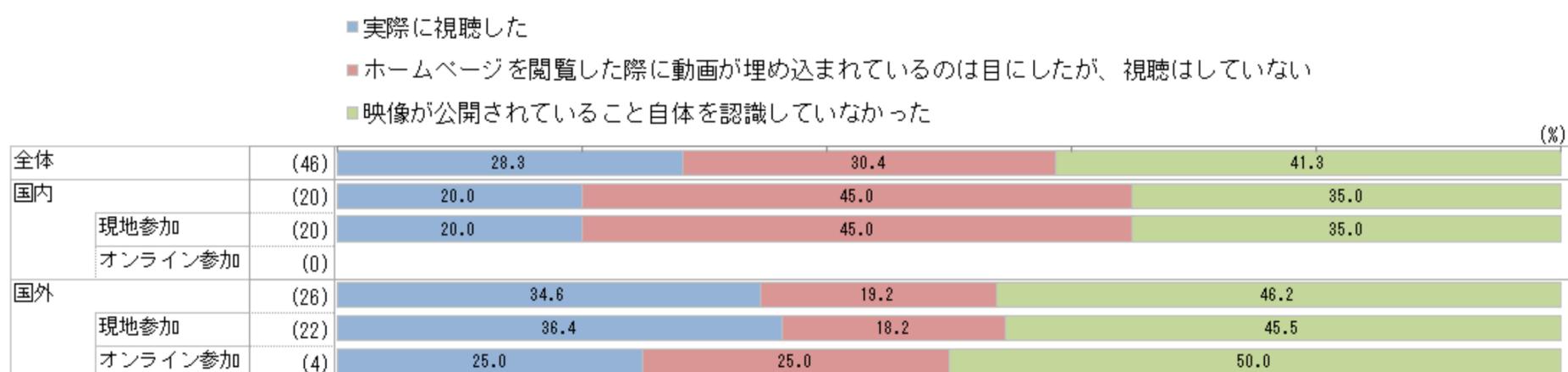
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<宮城>



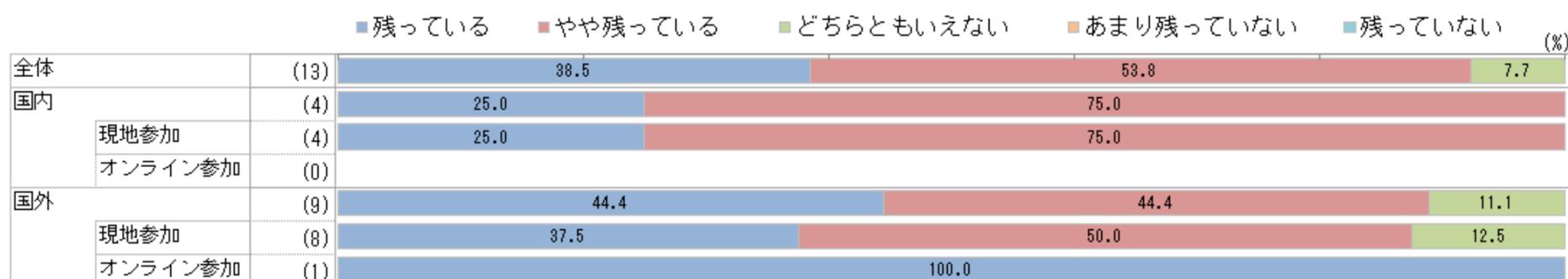
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<仙台>



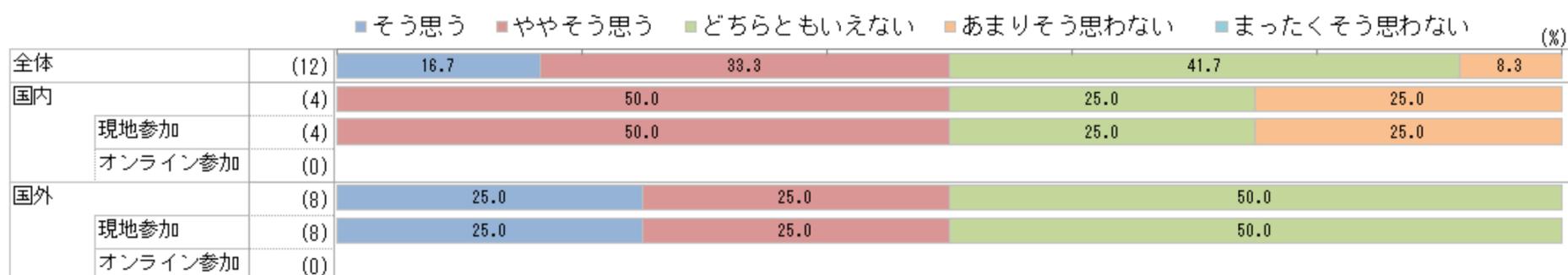
Q. 会議公式サイトトップページで公開されている映像(Welcome to Sendai)をあなたはご覧になりましたか



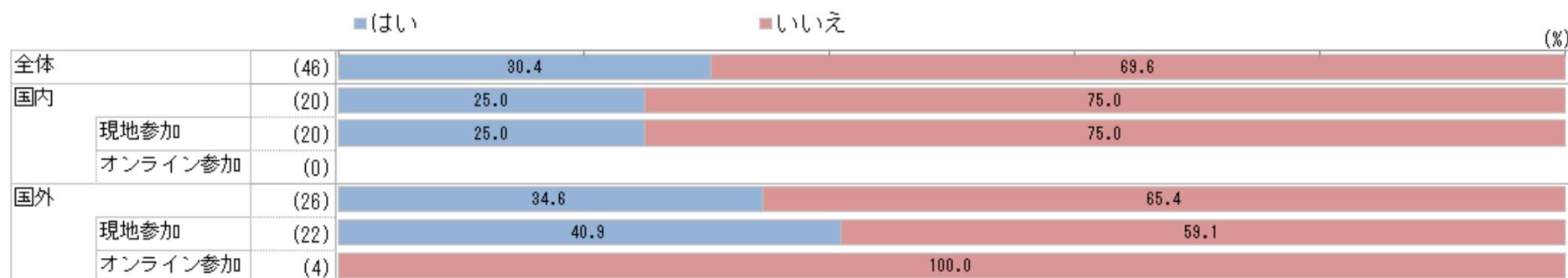
Q. その動画 (Welcome to Sendai) はどの程度、あなたの印象に残っていますか



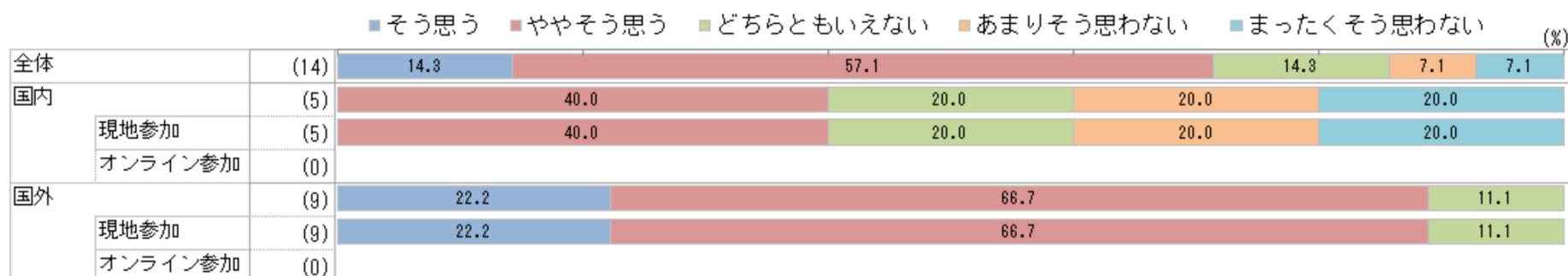
Q. その動画(Welcome to Sendai)は、開催都市(仙台市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



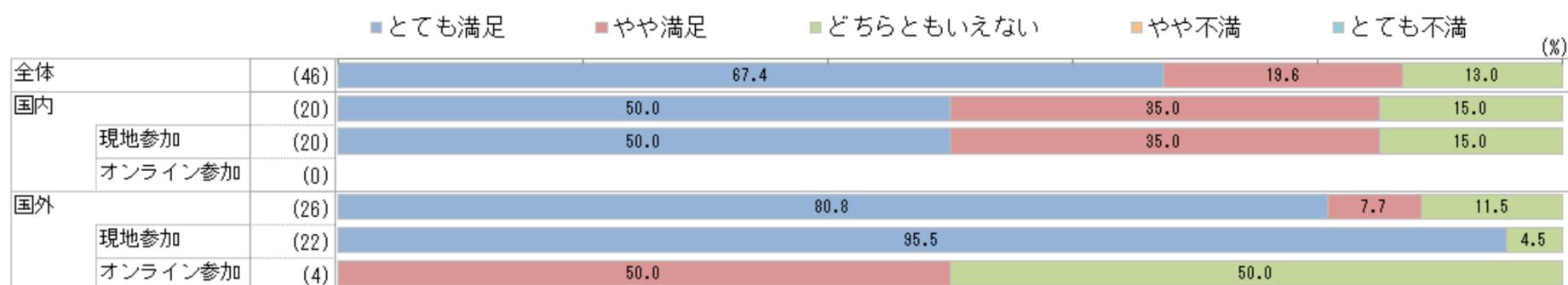
Q. あなたは、会議公式サイト上の動画(Sendai Attractions) を閲覧しましたか



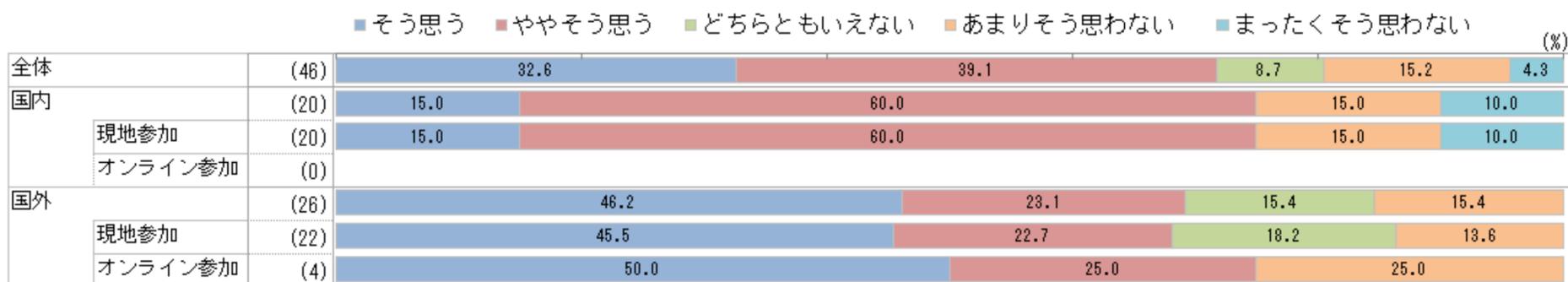
Q. その動画(Sendai Attractions)は、開催都市(仙台市)滞在中のあなたの行動に何らかの影響を与えましたか



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業② 第15回VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウム】

主催者名	第15回VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウム組織委員会		
会期	10月30日～11月2日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	大阪市	主たる会場名	グランキューブ大阪 (大阪府立国際会議場)

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	61	8	69
外国人	13	60	73
計	74	68	142

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	受付前にサーモグラフィー検温機器を設置	体温スクリーニングのため、受付前にサーモグラフィー検温機器を設置した(リース)。リース品選定にあたり、マスク着用のまま非接触で検温可能、また、マスク非着用者には着用を促すメッセージが流れる仕様のものを選択した。
②	個人情報に配慮したマイページを構築	シンポジウムホームページに個人情報に配慮したセキュリティの高いマイページを設定できるポータルサイトを構築した。
③	QRコード付参加証発行機能の活用	事前にマイページよりQRコード付参加証を発行し持参いただくことで、受付での参加者とスタッフの接触を最低限に減らすことができた。 参加証のQRコードの読取りによって、参加状況を簡便に把握することができた。
④	リアルタイムオンライン配信	バーチャル国際会場サイトを作成し、オンライン参加者でも臨場感を感じられる現地開催セッションのリアルタイムオンライン配信を行った。実際の会場とバーチャル間の感覚的な差が軽減され参加意識が向上したというご意見をいただくことができた。移動時間や費用がかからないバーチャル国際会議の利便性も体感いただくことができ、満足感を得ていただけたというコメントを多数いただくことができた。
⑤	ポスター会場をバーチャルで用意	ポスターセッションの時間以外にも質問を書き込み、発表者が回答を返信、質問者が回答を確認するなどのバーチャルポスターセッションを実施することができた。 ポスターアワードも用意し、その投票は現地・オンラインに関わらず全参加者が投票できる仕組みとしたことから、現地とオンラインの区別なく審査に参加していただけた。

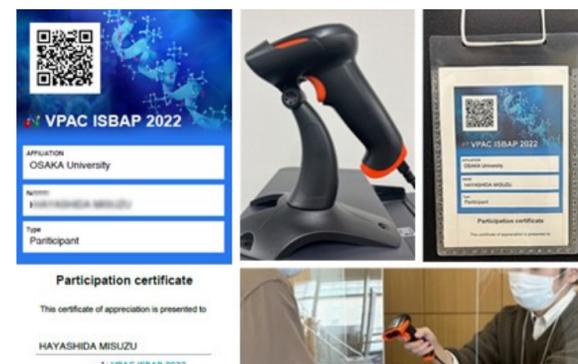
①



②



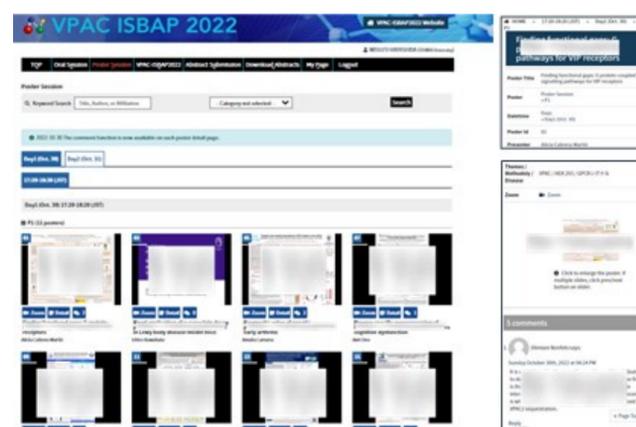
③



④



⑤



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

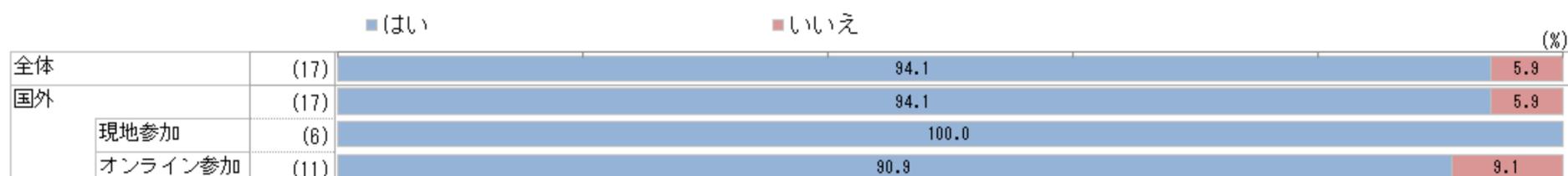
感染症対策	(1) 取組内容	<p>「コロナ禍におけるMICE開催のためのガイドライン」に記載されている事項のうち、いわゆる「3密」の回避のために必要なことを着実に実施した。とくに、参加登録・必要書類配布の事前オンライン実施、プログラム集の電子化、ポスター発表のオンライン化、QRコード等を用いた参加受付・来場記録、会場の高い換気能力(6分毎に1回)等の対策を行った。また、発表者や質問者が交代する都度、アクリル板やマイク等を消毒した。</p> <p>上記ガイドラインに記載されていない取組としては、通常定員を大幅に下回る人数での会場使用計画(2分の1程度)と二酸化炭素濃度のモニタリングを行った。参加者のネットワークングのための飲食を伴うプログラムとして、懇親会(学術賞等の表彰式を併催)を開催した。着席形式で使用し、最大人数を設定した事前登録制にした他、予め参加者に節度と自覚のある行動の必要性を十分に理解していただいたうえで、その履行を要請した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>公式ウェブサイトでの新型コロナ対策の記載、会場入口付近の検温計・消毒スプレー及び注意喚起ポスターの設置、開会挨拶での注意喚起と本実証事業の趣旨説明及び協力要請を行ったうえで、上記(1)の取組みを行ったことにより、参加者の理解と協力が得られたものと感じた。</p> <p>また、大阪国際会議場の特別会議場は、面積393㎡、天井最高部16.8mであり、さらに、3人がけ長デスクに椅子を1脚セットすることにより、十分な距離を確保できたことに加え、参加者に注意を促す効果があったものと思われる。表彰式・懇親会は、距離1m以上を空けた着席とし、ビュッフェではなく配膳によるものとした。</p> <p>全体的に見て、参加者に節度と自覚のある行動をしていただけたものと感じられた。</p>
	(3) 課題	<p>問題では全くないが、二酸化炭素濃度のモニタリングを行ったものの、計測値の変動はわずかで、大きく上がることはなかった。これにより、会場の換気能力が十分に高いことが確認できた。</p> <p>今回は、大きな会議室(最大収容人数414名)をその6分の1で使用したが、当然ながら非常に大きな会議室料が発生した。その分、他の経費を削減する必要がある、主催者の負担は大きかった。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>臨場感がある現地開催セッションのオンライン配信を目指し、オンサイト会場を引きの画角を混ぜ込んで配信した。ポスターセッションでは閲覧人数を表示した。また、ポスターセッション以外の時間にもQ&Aを書き込めるようにするとともに、全参加者が発表賞を投票できる仕組みとし、オンライン参加者と現地参加者の一体感を目指した。日米欧を含む、全19か国から参加した会議であるため、時差が最大の課題の一つであった。その対策として、全てのセッション毎に代表的なエリアの時刻を掲示したほか、一部の講演を予め録画した。一部の録画発表者については、深夜(現地時間)にも関わらず質疑応答にも応じていただけた。</p> <p>2025年大阪・関西万博や開催都市等のPR映像を、セッションの間等に繰り返し上映するとともに、公式キャラクター「ミャクミャク」の大判ポスターを会場に掲示して、配信映像の背景に入るようにした。エクスカーション(大阪城、あべのハルカス)や懇親会の簡易なムービーを作成し、閉会時に配信した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>(1)の取組により、実際の会場とバーチャルの間の感覚的な差が軽減され参加意識が向上したものと思われた。また、バーチャルの利便性(移動の時間や費用がかからず、自宅からでも参加できる)を含めると、満足感を得ていただけたと思われた(メールコメント等)。配信に関しては、カメラを最大4台(フィクス2台(演者、座長用)と移動2台)を用いて、引き画角で会場全体の雰囲気や、質問者がマイクの前に並ぶ様子も配信したことが効果的であった。ハイブリッドでよく経験する、現地は現地、オンラインはオンラインと質疑応答が分かれることがあまりなく、隔たりを感じる事が少なかった。時差を勘違いして、予定時刻に参加されなかった講演者は皆無であった。PR映像等の効果は把握できていないが、配信に入らなかった会場エリアの雰囲気や現地参加者のみのソーシャルプログラムのムービーはご好評いただき、次回は現地参加したいとのメッセージをいただいている。</p>
	(3) 課題	<p>本会は、当初現地開催のみの計画であったが、この実証事業への参加に合わせてハイブリッド開催にすることを決断したが、オンライン部分の見積りは組織委員会としては想定外に高いものであった(約200万円)。そこで、限られた予算内で、実証事業に相応しい「オンライン参加者も意識した参加者の満足度向上」を実現するために、配信機材費(実証事業の経費には含めていない)の削減等を行う必要があった。一方、カメラ等の機材が多いほど会場設営が複雑となり、トラブル発生の可能性が増える。このため、未だ多くの学術会議では質問者の映像は割愛していることも多いと思われる。数日間を通して失敗が許されない会議では、入念な準備やトラブル時の対応を十分に考える必要がある。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>日本政府観光局コンベンション誘致部:2013年より、本シンポジウムの開催都市の選定と日本への誘致に関する企画や多数のアドバイスをいただいていた。大阪観光局MICE推進部:上記により日本(大阪)での開催が決定後は、コロナ禍により再三延期が続く間、開催準備のためのコンテンツ提供やノウハウの助言等、多くのご支援をいただいていた。大阪国際会議場:コロナ禍での対応等、多くの助言等をいただいていた。大阪大学万博推進室及び2025年日本国際博覧会協会:大阪・関西万博紹介動画の使用許可とポスター及びノベルティ(メモ帳など)などをご提供いただいた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>日本政府観光局によるご支援により、日本での開催誘致が実現した。日本政府観光局及び大阪観光局のご支援により、最終的に大阪で開催することを決定できた。大阪国際会議場のご協力により、新型コロナへの対応や本実証事業に関わる計画・準備を含めて、本会を開催できた。大阪大学万博推進室及び2025年日本国際博覧会協会のご協力により、2025年万博をPRできた。</p>
	(3) 課題	<p>新型コロナの前にも、台風・豪雨、大地震等により、会議が中止になることが少なからずあった。しかし、未曾有の災害である新型コロナ禍では、学術集会や講義等においても、オンラインが広く活用されるようになり、オンラインビデオ会議システムそのものも普及し改良された。今後、現地とオンラインの比率をフレキシブルに変更できるハイブリッド(ハイフレックス)会議を容易で安価に実施できるようにすれば、頑強な会議の仕組みを構築することができると考えられる。ただし、これは個々の主催者の努力だけでは実現しないので、各機関の連携で実現していく必要がある。</p>

特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

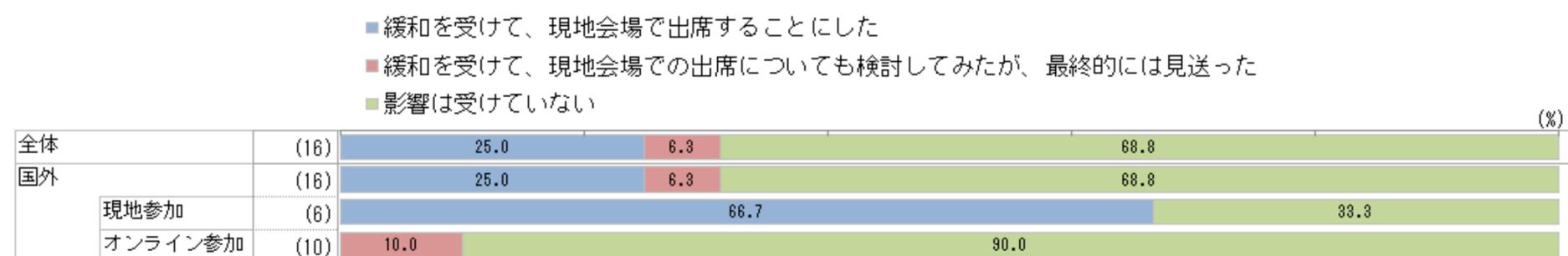
レガシー 効果の 創出	(1) 取組内容	5月時点で予定会場の大阪国際会議場で当該年開催された一定数の外国人実地参加のあった国際会議は、未だ1件のみの状況とのことであり、依然として非常に厳しい世情であった。このような中で、本シンポジウムを安全で満足度が高く円滑に実施することが実現すれば、会議場とその出資者である大阪府と財界、また長年に及ぶ誘致とコロナ禍の影響による再三の延期にも関わらず根気強く伴走してくださった国と大阪観光局のご支援の賜物と言えるものとなり、ポストコロナへ踏み出す一つの成功例となる。これら目指して本実証事業に取り組んできた。
	(2) 取組による成果	上述の通り、日米欧等の世界各地から参加するハイブリッド国際会議では時差が大きな課題となるため、会議を最長夜中0時まで開催し、午後9時以降は主催者は事務局でオンラインを運用するハイフレックス方式で開催した。このような方法は会議場としてもまだ珍しい開催方法とのことで、今後の参考になるとの声をいただいた。また今回は、オンライン参加者にも会議場の臨場感を感じてもらおうとともに、開催都市の大阪や万博のPRやエクスカージョンの様子を配信して現地の様子を共有できたことは、オンラインでは足りない要素を補完し、将来の訪問を促す効果があったものと期待できる。
	(3) 課題	今回は、市民交流を模索したが実現しなかった。会議の開催自体に多くのエフォートがかかる必要があったこと、10月11日に実施された水際対策緩和措置に伴って、海外からの現地参加者が増えたものの、準備が間に合わなかった(その時点で可能なこととして、急遽エクスカージョンを実施することにした)。会議場内でほとんどが完結する会議を、外にも広げることが十分にはできなかったが、ハイブリッドの利点も活かして実現することを考えていく必要があると考えている。
サステナ ビリティ	(1) 取組内容	この会議の開催にあたっては、コロナ禍の影響で、再三の延期が続き計画の変更を余儀なくされてきたこと、参加登録者の規模のみのならず開催の可否さえも不透明であり、開催経費の予算規模を最小限にする必要があったため、PCO等との契約を行わず、開催経費の予算規模を最小限にして実施した。しかしながら、いわゆる手弁当で国際会議を計画していく過程で、様々な発見があった。例えば、この3年弱の間に自らが参加してきたオンラインやハイブリッド会議中に、改善可能ではと感じたことが少なからずあり、それらを自前で計画する際には盛り込めるように工夫した。
	(2) 取組による成果	上述とも関連するが、災害に強く、時差の問題を小さくし(ハイブリッドとハイフレックス(オンラインのみ)の併用)、臨場感がある魅力的な画面を提供し(限られた予算内でカメラ4台を用いた配信を実施)、参加意識を高め、プレゼンターの満足度を高める取組(時間帯に依らず聴講者数を確保するなど)を行った。これら単独の効果は限られるが、合わさることにより効果が高まっていくものと思われた。今回の開催では特殊な方法や仕掛けを用いた訳ではないが、全体として将来的にサステナビリティに少しでも貢献することを期待したい。
	(3) 課題	上記に記載した以外の課題として、今回は、航空運賃の高騰が非常に大きな問題であった。その背景には、石油価格の高騰や円安等があった。新型コロナについても10月11日までの入国制限(査証が必要)が続いていた。このような様々な障害があるなかで、国際会議等の開催を準備している主催者は皆、多くの困難を伴っているのが現状であると思われる。よって、今後も一層の工夫を皆で続けていく必要があると思う。

【実証事業③ 第15回VIP/PACAP関連ペプチド国際シンポジウム 個別アンケート】

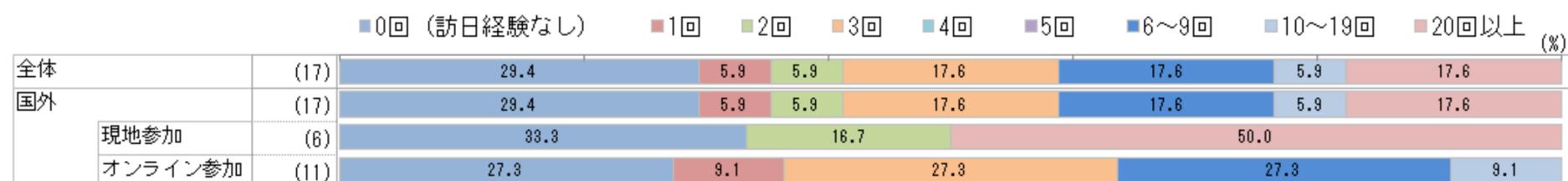
Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



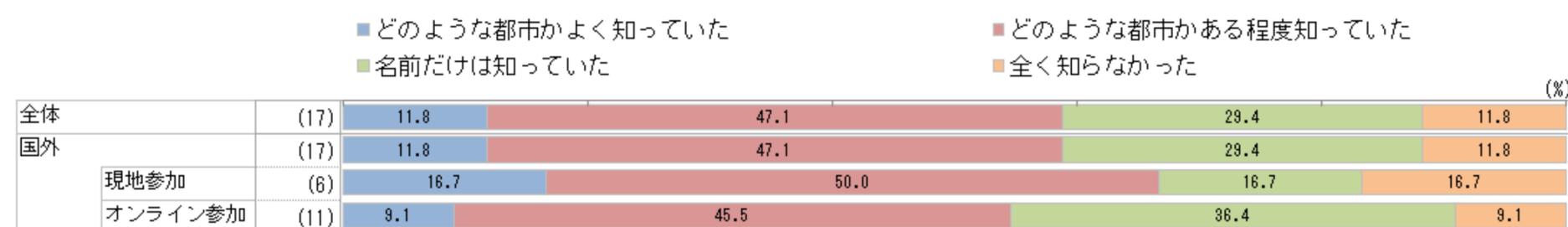
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



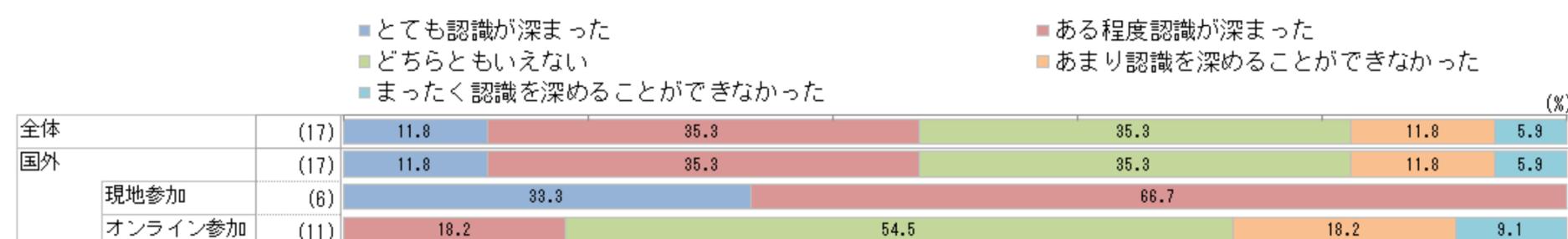
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



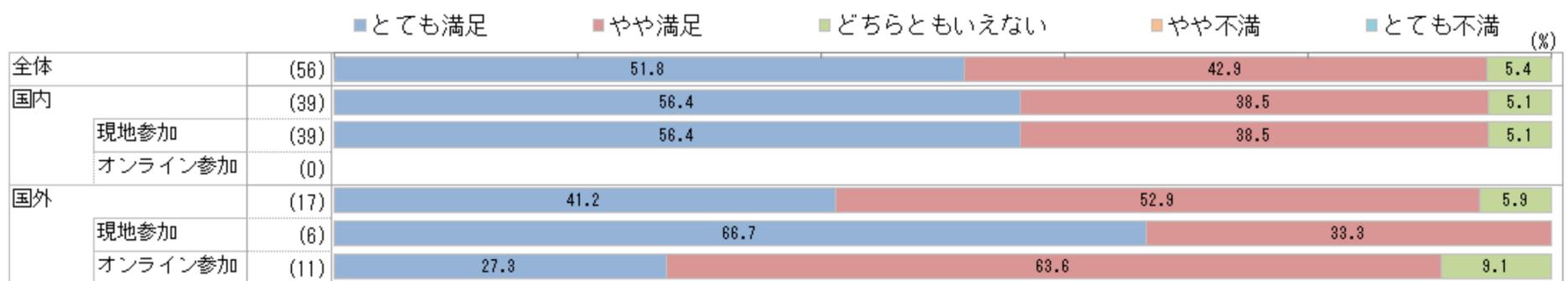
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(大阪市)のことをどれくらい知っていましたか



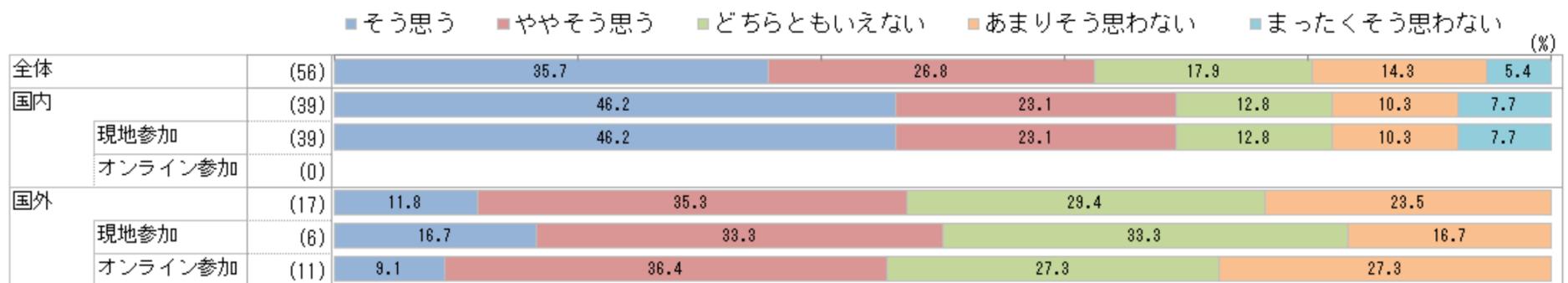
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(大阪市)への認識が深まりましたか



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業④ The 26th Small Powertrains and Energy Systems Technology conference】

主催者名	公益社団法人自動車技術会		
会期	10月31日～11月3日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	兵庫県姫路市	主たる会場名	アクリエひめじ(姫路市文化コンベンションセンター)

1)参加者数

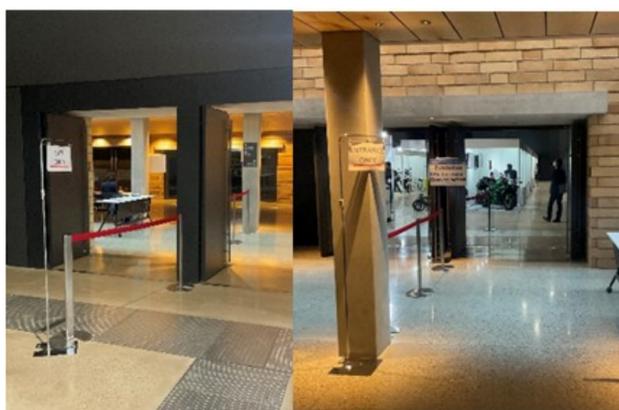
	実地	オンライン	計
日本人	214	14	228
外国人	47	11	58
計	261	25	286

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスクーショントัวร์の実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	入口と出口の分離	受付横の多くの人が入り出りが想定された展示場では、出入口を分けた。受付や各会場入口と会場内では、手指の消毒を設置するとともに、マスク着用の呼びかけを行った。
②	バンケットでのコロナウイルス感染対策	バンケットでは、着席形式、各テーブルで人数を制限、身体的距離の確保、飲食物は個別の容器に分けて実施した。また、各テーブルにアクリル板を設置するとともに、十分な換気を行った。会場側では、食事提供の為にトングや手袋等を準備してもらった。
③	Zoomと連携するオンラインコンテンツシステムの構築	従来はプログラムを印刷して配布していたが、オンラインコンテンツシステムから、セッションタイムテーブルが閲覧できるようにした。また、セッションをクリックすると論文をダウンロードできるとともに、ZoomアイコンをクリックするとZoomでのオンライン参加を可能とした。
④	オンラインコンテンツシステムのマニュアル作成	聴講者や講演者、座長用のマニュアルをつくり、流れを明示したことにより、混乱なくシステム運営ができた。従来、紙配布や集計に時間がかかっていたが、システム化することにより、集計までの時間が大幅に短縮することができた。紙配布で対応していた各講演評価については、QRコードを表示させ、別システムに誘導し評価を入力してもらうようにした。

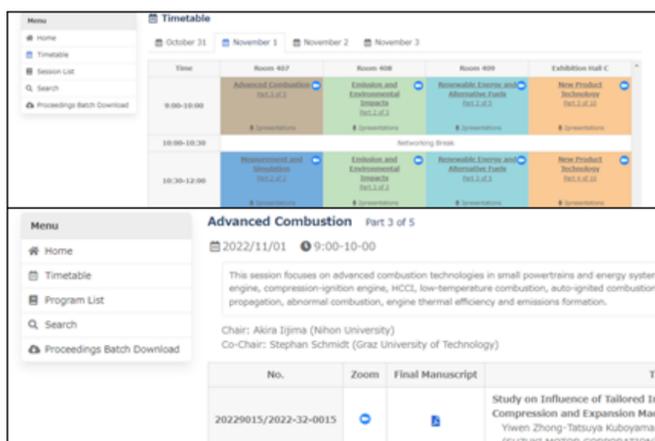
①



②



③



④

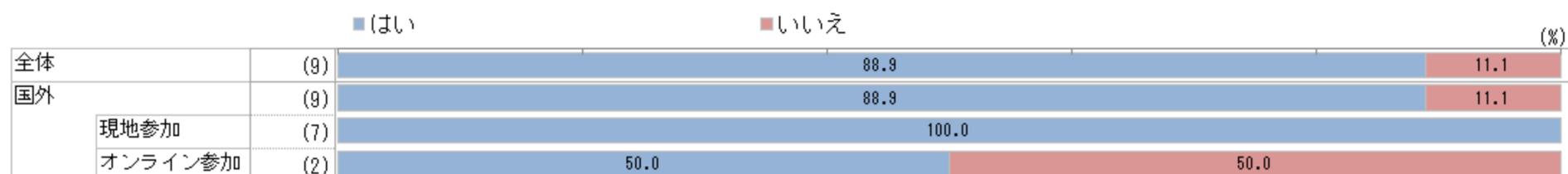


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	①受付:検温、手指の消毒、マスク着用の呼び掛け。 ②各会場:手指の消毒、入室人員の制限、身体的距離の確保、出入口を分ける。質疑応答のマイクや演題は1名毎に消毒。 ③バンケット:着席形式、各テーブルで人数を制限、身体的距離の確保、飲食物は個別の容器に分ける。会話時のマスク着用徹底、各テーブル及び会話スペースにアクリル板を設置、十分な換気。
	(2) 取組による成果	・会期中の感染は無し。 ・会期後の感染報告は無し。
	(3) 課題	・休憩時間中の歓談で、マスクを着用していない例(外国人参加者)が見受けられた。飲料を提供している事も有り、マスク着用は強制し難いものがあった。 ・出入口を分けたことで一定の効果はあったと考えられるが、逆行する参加者もいた。不便にならない程度で強制力を持たせる事も検討したが、良案が得られなかった。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	①実地参加者とオンライン参加者との臨場感が損なわれぬ様に映像や通信やオンラインコンテンツシステムの仕様を設定した。 ②実地参加者には、 オプションツアー として姫路城や地元の酒蔵を見学する機会を設けた。これはHPやプログラムを通じてオンライン参加者にも事前に周知した。 ③ 基調講演の中で姫路城の築城技術の詳細に触れた。これはオンライン参加者にも視聴された。
	(2) 取組による成果	・Q&Aも含めて、通信技術やオンラインコンテンツシステムに関する問題は発生しなかった。(委員会での打ち上げは無く、アンケートでも指摘は無かった。) ・アンケートの結果によると、オンライン参加の回答者の大半が次回実地で参加する事を希望していた。前記の施策が次回の日本開催に対する期待を高めた結果であり、次回以降の訪日促進につながると思う。
	(3) 課題	・費用が高み、収支を圧迫した。オンライン参加者の比率から見て、費用対効果が課題と考える。
開催地との連携	(1) 取組内容	・コンベンションビューロー: バンケットやオプションツアーの詳細検討、地元企業への橋渡し、写真等の広告宣伝ツールの提供 参加者への支援物資の提供(観光ガイド/マップ、割引券、バッグ) ・行政機関: 開会式での姫路市長によるスピーチ、地元企業への橋渡し、基調講演の資料提供や記載内容の校閲
	(2) 取組による成果	・ バンケット : 地元の郷土芸能も披露され、特に外国人参加者に好評であった。 ・ オプションツアー : 参加者の2/3が外国人であり、姫路城と酒蔵と云う日本の伝統文化がよく伝えられたと考える。 ・ 地元企業 : 三菱電機殿より論文発表と技術展示の両面で御協力頂いた。 ・ 姫路市長のスピーチ : 御多忙の中で積極的に御協力頂いた。 ・ 基調講演への支援 : 美しい写真の提供、歴史や姫路城に関する記述の校閲に御協力頂いた。
	(3) 課題	特に無し。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	・ハイブリッド開催や適切なコロナウイルス感染防止策により、当会議や開催地、開催会場のイメージアップを図った。 ・バンケットの参加者に対して、日本料理や地域の伝統芸能等を披露した。 ・オプションツアーの参加者に実際に姫路城や地元の酒蔵を訪問して頂いた。
	(2) 取組による成果	・論文発表、質疑応答、技術展示が予定通り行われ、活発な議論等を通じて当学会としての良好な成果を得た。コロナの問題も発生しなかった。 ・適切な会議及び諸イベントの運営により、開催地である姫路市のイメージや日本人のおもてなしの心に対する印象が向上した。 ・ バンケットの参加者より、日本の料理や飲み物、伝統芸能に対する高評価を得た。又、オプションツアーの参加者に日本の伝統文化を効果的にアピール出来た。これらの活動により再度の日本訪問へのモチベーションを高めたと考える。
	(3) 課題	名所旧跡や文化財等は開催地によるものなので、開催地選定の際に十分考慮する必要有り。
サステナビリティ	(1) 取組内容	フードロス削減の為、サステナビリティを意識した趣旨を明示した上で昼食を申込制とし、費用を参加者と主催者で折半することとした。
	(2) 取組による成果	余った弁当は納入数の10~20%であった。前回大会は約半数が余っていたので、フードロスを効果的に削減出来たと言える。 事前申し込み制とした事で定量的な情報が得られた為、他の情報(参加者の区分等)と関連付けた分析が可能になった。
	(3) 課題	選択肢の幅を望む外国人参加者には不評であったかもしれない。

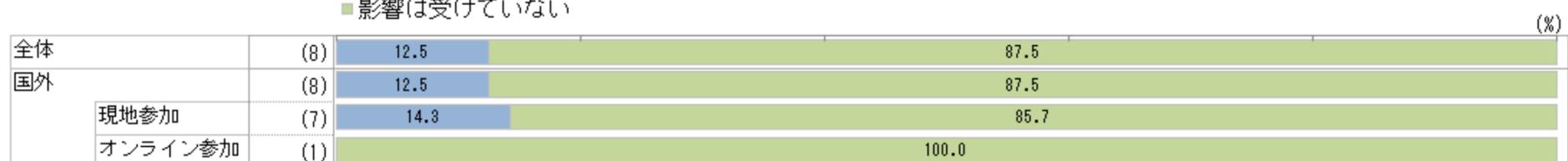
【実証事業④ The 26th Small Powertrains and Energy Systems Technology conference
個別アンケート】

Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



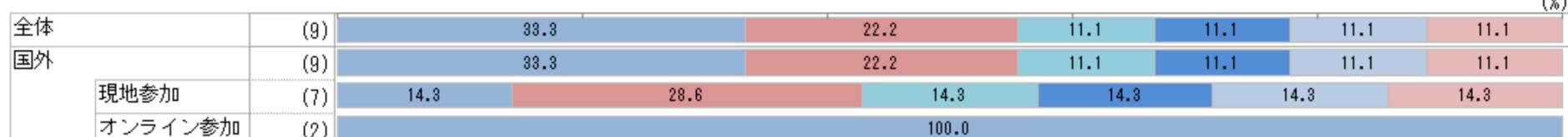
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか

- 緩和を受けて、現地会場で出席することにした
- 緩和を受けて、現地会場での出席についても検討してみたが、最終的には見送った
- 影響は受けていない



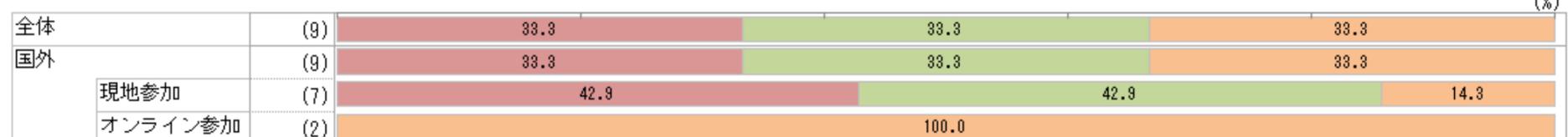
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)

- 0回 (訪日経験なし)
- 1回
- 2回
- 3回
- 4回
- 5回
- 6~9回
- 10~19回
- 20回以上



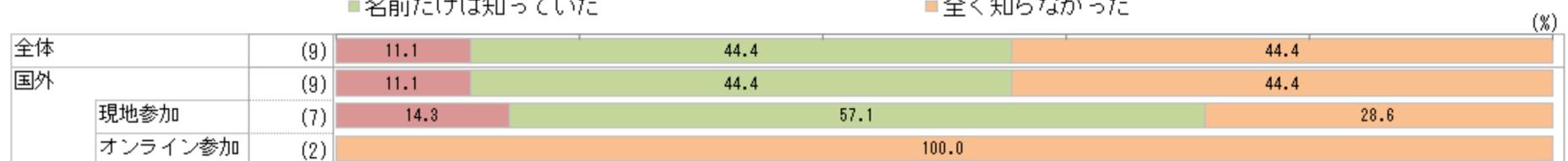
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか<関西>

- どのような都市がよく知っていた
- どのような都市かある程度知っていた
- 名前だけは知っていた
- 全く知らなかった

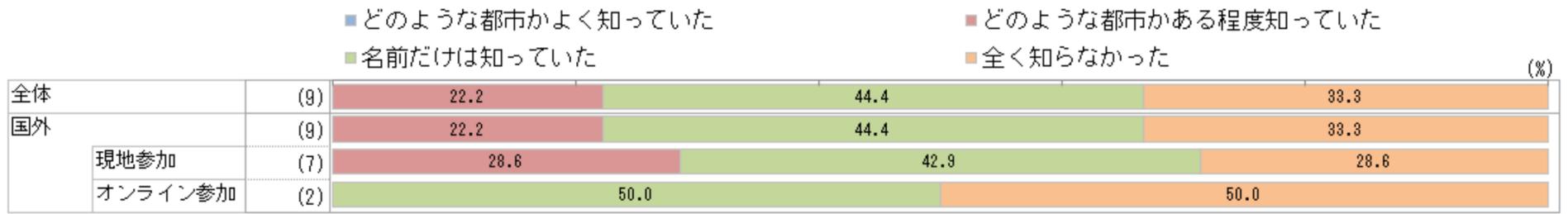


Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか<兵庫>

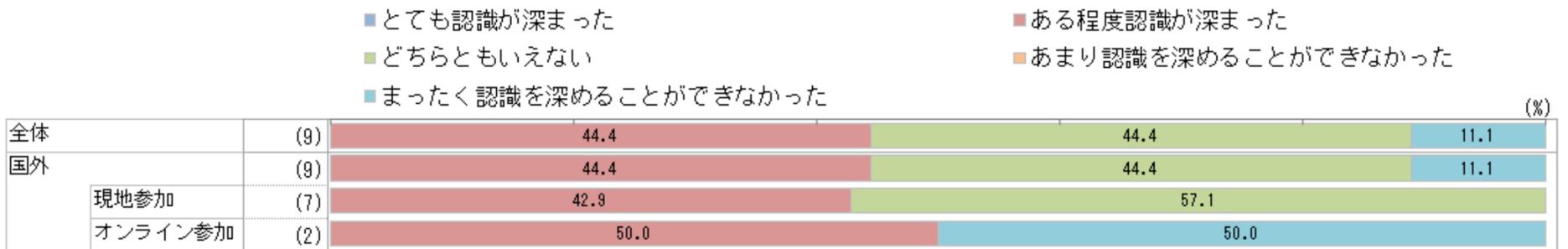
- どのような都市がよく知っていた
- どのような都市かある程度知っていた
- 名前だけは知っていた
- 全く知らなかった



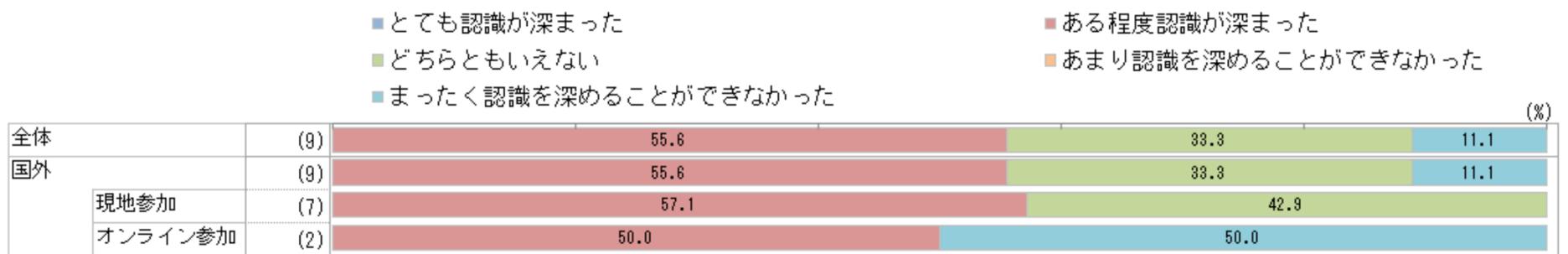
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催地のことをどれくらい知っていましたか<姫路>



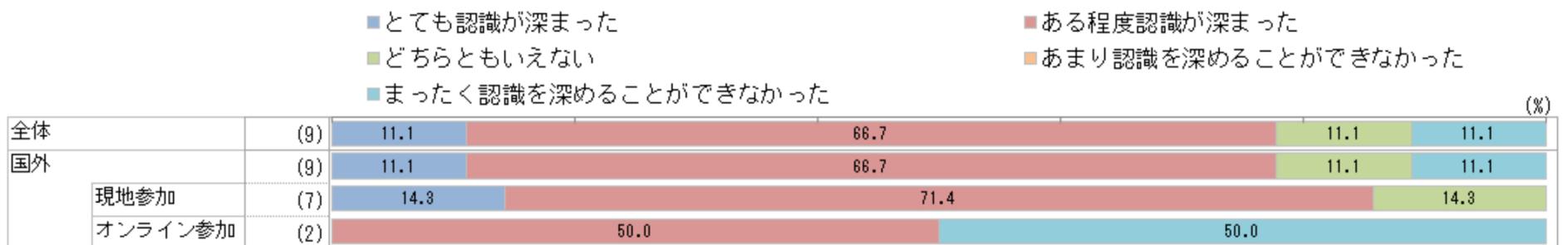
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<関西>



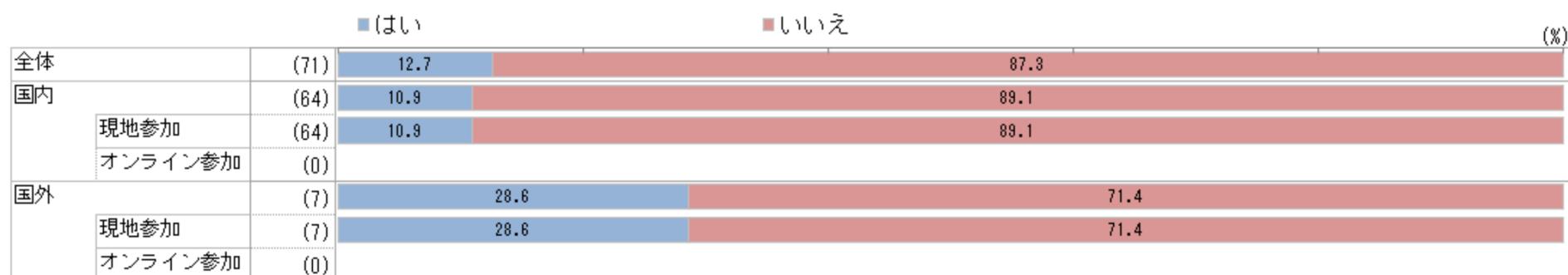
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<兵庫>



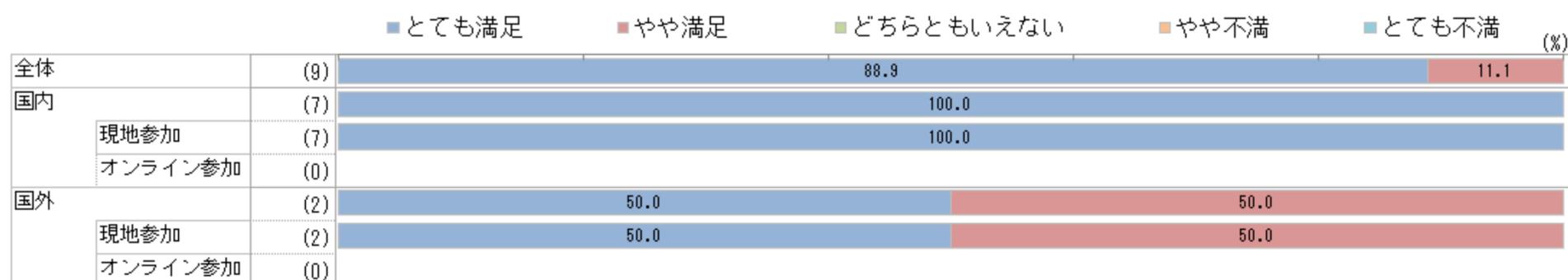
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催地への認識が深まりましたか<姫路>



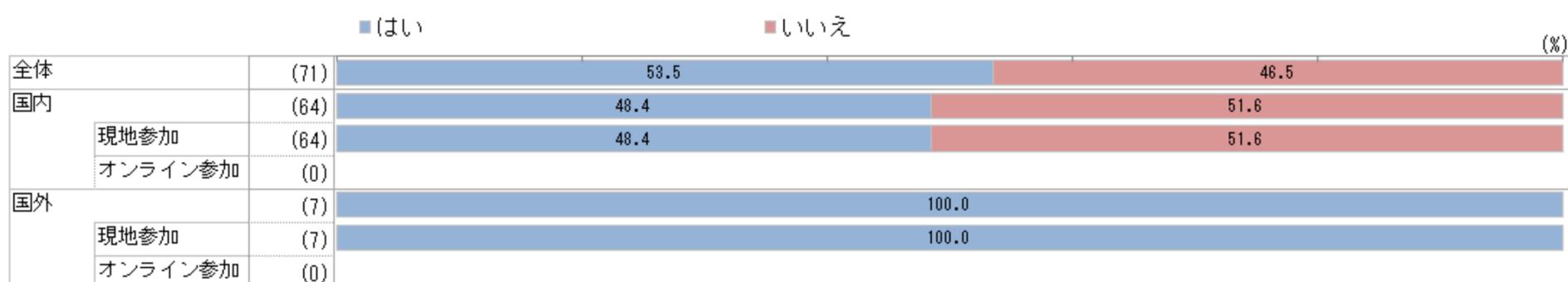
Q. あなたは以下のプログラムに参加しましたか
 <オプションルツアー>



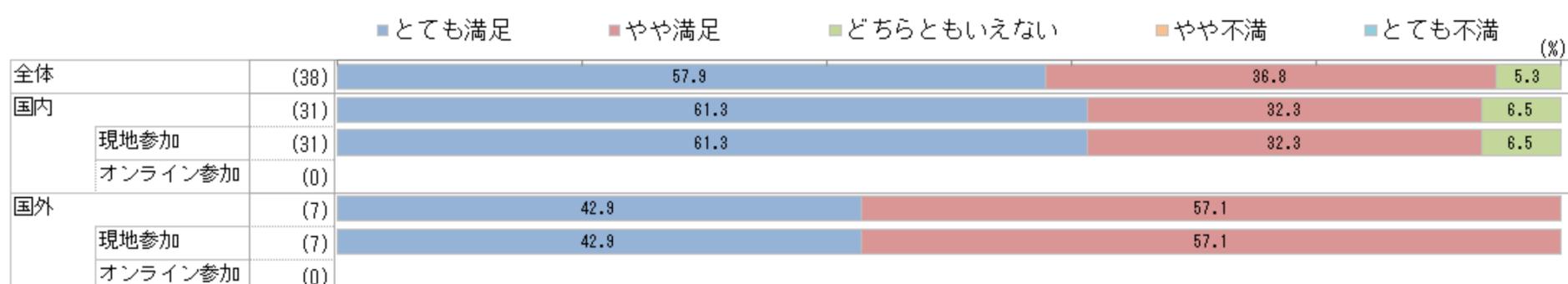
Q. 以下のプログラムの満足度を選択してください
 <オプションルツアー>



Q. あなたは、11月2日の夜に開催されたバンケットに出席しましたか



Q. バンケットの満足度を選択してください



Q. あなたがバンケットに出席しなかった理由を全て選択してください

- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた
- その他 / Other

										(%)
全体	(33)	57.6	3.0	9.1	3.0	9.1	6.1	15.2	18.2	
国内	(33)	57.6	3.0	9.1	3.0	9.1	6.1	15.2	18.2	
現地参加	(33)	57.6	3.0	9.1	3.0	9.1	6.1	15.2	18.2	
オンライン参加	(0)									

Q. あなたは展示をご覧になりましたか

- はい
- いいえ

				(%)
全体	(71)	97.2	2.8	
国内	(64)	96.9	3.1	
現地参加	(64)	96.9	3.1	
オンライン参加	(0)			
国外	(7)	100.0		
現地参加	(7)	100.0		
オンライン参加	(0)			

Q. 展示の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満

								(%)
全体	(69)	29.0	52.2	17.4	1.4			
国内	(62)	29.0	51.6	17.7	1.6			
現地参加	(62)	29.0	51.6	17.7	1.6			
オンライン参加	(0)							
国外	(7)	28.6	57.1	14.3				
現地参加	(7)	28.6	57.1	14.3				
オンライン参加	(0)							

Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください

- とても満足
- やや満足
- どちらともいえない
- やや不満
- とても不満

								(%)
全体	(77)	35.1	46.8	15.6	2.6			
国内	(68)	32.4	48.5	16.2	2.9			
現地参加	(64)	34.4	48.4	15.6	1.6			
オンライン参加	(4)	50.0	25.0	25.0				
国外	(9)	55.6	33.3	11.1				
現地参加	(7)	71.4	28.6					
オンライン参加	(2)	50.0	50.0					

Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業② 第9回国際ヒトマイクロバイオームコンソーシアムコンgres2022神戸】

主催者名	国際ヒトマイクロバイオームコンソーシアムコンgres		
会期	11月8日～11月10日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	神戸市	主たる会場名	幕張メッセ 国際会議場

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	352	31	383
外国人	274	112	386
計	626	143	769

感染対策		
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施	●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置	
③	参加登録システムの導入	
④	感染対策に資する物品の手配	
オンライン参加者の満足度向上に係る経費		
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施	
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施	
レガシー効果の向上に資する取組		
①	開催地や会議のPR画像の制作	
②	公開講座の実施	

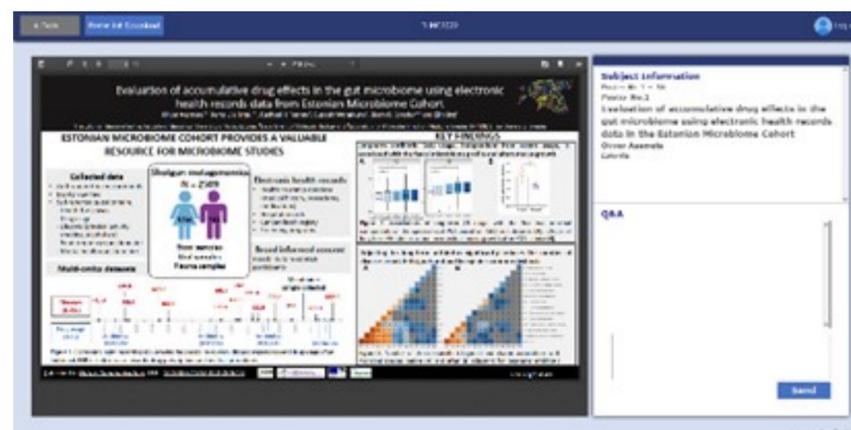
2)特筆すべき取組

①	参加者全員に抗原検査キットを配布	参加者全員に抗原検査キットを配布し、毎日抗原検査をしていただくよう受付で案内した。また、追跡調査が可能になるよう事前及び当日の参加登録者との連絡が可能なメールアドレスを記録し、連絡体制を敷いた。
②	オンラインポスターシステム	ポスター発表について、現地参加、オンライン参加を問わず発表者にはオンライン上にポスターデータを登録していただき、オンライン上でもチャットによる双方向のコミュニケーションを行うことを可能にした。
③	Zoomを活用したオンライン配信	Zoomを活用したオンライン配信を行う。Q&A機能を使用することで、著名な登壇者とオンライン参加者の双方向のコミュニケーション手段を確保する。また、会期終了後は一定期間のオンデマンド配信を実施し、時差の関係でLIVE配信ができないオンライン参加者へも配慮を行う。

①



②



③



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	参加者全員に抗原検査キットを配布し、毎日抗原検査をしていただくよう受付で案内した。体調不良者が出た場合の待機室も2室～4室手配し、万が一に備えてホテルと連携して対応にあたった。また、追跡調査が可能になるよう事前及び当日の参加登録者との連絡が可能なメールアドレスを記録し、連絡体制を敷いた。
	(2) 取組による成果	ポスター発表に際してはリアルコミュニケーションのみならずオンラインシステムも活用したQ&Aを可能として、現地参加者もこのシステムを活用できるようにすることでポスター会場での密な環境を極力解消できるような仕組みを構築した。食事会場は定員の4割減での席数とし、会場設備による換気に加え入口ドアを常に開放し飛沫の滞留解消を心掛けた。会期中1名体調不良を訴える方が出たため、待機室にて抗原検査を実施したが検査の結果は陰性であった。その他には体調不良者や、終了後本日まで参加者及びスタッフを含め、感染者の報告は上がっていない。
	(3) 課題	現地でのポスターセッションが白熱して、密になる環境が複数できてしまった。現地でのポスター発表演題が当初の想定よりも多数集まり、ポスターの掲示場所が確保できなかったため、十分なスペースを取れなかったことが原因として挙げられる。対面開催を制限されていた反動か、参加者の熱意が非常に高く、これらをどのようにコントロールして密な環境を避けるかという点は、他の国際会議や国内会議であっても同様の課題ではないかと考える。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	Zoomを活用したオンライン配信を行う。Q&A機能を使用することで、著名な登壇者とオンライン参加者の双方向のコミュニケーション手段を確保する。また、会期終了後は一定期間のオンデマンド配信を実施し、時差の関係でLIVE配信ができないオンライン参加者へも配慮を行う。 ポスター発表について、現地参加、オンライン参加を問わず発表者にはオンライン上にポスターデータを登録していただき、オンライン上でもチャットによる双方向のコミュニケーションを行うことを可能にした。
	(2) 取組による成果	講演プログラムが開催されていない休憩中の時間帯には、オンライン視聴者に地元神戸の魅力を発信するため、神戸のPR動画(MICE及びインバウンドのPR)を複数種配信する。また、懇親会では地元灘の酒樽による鏡開き、阿波踊りの実施を計画し、実際の会場の模様をTwitterなど即効性の高い媒体で動画投稿し、臨場感あふれる情報共有を図った。現地参加ができない方や、時差の関係でLIVE配信を視聴できない方からも満足のお声をいただいた。ポスター発表についても、発表内容のみならず議論まで閲覧できることに好評のコメントをいただいた。休憩中や懇親会での地元神戸及び日本文化の紹介では参加者も非常に楽しまれ、現地でも多数の賞賛の意見をいただいた。
	(3) 課題	オンラインポスターでは、発表者が投稿しない限り掲載されないシステムであったが、現地でポスターを掲示された方はオンラインにPDFを公開されない方もおり、オンライン参加者からその点に関しては指摘の声をいただいた。
開催地との連携	(1) 取組内容	神戸市観光局、神戸コンベンションビューローと連携し、感染症対策にかかる相談や魅力発信にかかる動画素材の提供、コングレスバッグや地元産のワインなど幅広い支援をいただいた。また、コロナ対応で入国にかかる手続きが日々変化中、対策が変更されるごとに外務省へ問い合わせを行い、最新情報を逐一HPへ掲載し、かつ参加登録者へメール配信にて案内した。
	(2) 取組による成果	現地来場者は一様にコングレスバッグにプログラムや記念品を入れて持参いただいた。また、懇親会で提供された地元産のワインも楽しんでいただいた。コロナ対応の面では、結果的に入国に際してのVISA申請は不要となったが、迅速に最新の情報を掲載することで参加者の安心感につながり、水際対策の緩和前でも参加者数の推移は当初計画と大きな差がなかった。
	(3) 課題	しばらく日本への入国ができなかったこともあり、会議全国に神戸にとどまらず日本各地を訪れる参加者が多数いた。地元神戸だけでなく、近隣の京都大阪や東京などの観光ガイドマップも取り寄せておけばより参加者にとって便利であったかもしれない。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	世界のトップ研究者・企業が現在進めているヒトマイクロバイオームの研究が、人類・地球環境の全てに大きな関わり合いがある重要な研究であること、そしてこれらの研究が未来へどのように繋がるかということ、日本での開催をきっかけに世界へ広くアピールする機会とする。そのために、協賛企業には学会ロゴを企業HPでの掲出を許可したり、プレスリリースで本学会への協賛をしていることの発表を許可した。また、TwitterなどのSNSを通じて、日本で開かれる本国際会議の内容を幅広く世界へ発信した。会期中は地元産のワインや日本酒、地元のお菓子などを参加者に提供し、日本の食文化の魅力発信を行った。
	(2) 取組による成果	影響力の高い参加者によるSNSへの投稿や協賛企業によるプレスリリース、HPへの掲載などにより本研究分野の専門家以外にも幅広く会議について広報を図ることができた。また、会期中は毎日400名を超える国内外からの来場者が訪れ、地元の食材消費のみならず広く滞在にかかる経費や会期終了後の国内観光などで開催地及び日本全体の観光産業の活性化に寄与した。
	(3) 課題	水際対策の緩和が開催1か月前であったこともあり、エクスカーションツアーを事前に設定できずより広範な日本の魅力紹介の機会を喪失してしまった。
サステナビリティ	(1) 取組内容	環境への配慮の観点から、紙資料の印刷は最低限にとどめ、Webも活用してオンラインで配布を行った。指定講演の座長演者の男女比について、いずれかに偏らない構成のプログラムを編成した。懇親会で提供する飲食物について、地元文化の事業継続性への貢献という観点から地元産の食材等を使用する。
	(2) 取組による成果	会期終了後の紙資料の廃棄を極力出さずに終えることができた。オーラルセッションでは22セッションで55名のSpeakerのうち10名が女性、21名のChairのうち11名が女性という男女比に可能な限りで配慮した構成を実現することができた。懇親会では地元灘の酒や神戸産のワインを提供した。また、徳島の阿波踊りをアトラクションとして幅広く日本文化を紹介することができた。
	(3) 課題	紙資料を削減しすぎて、一部の参加者からは紙媒体の演題リストが欲しいと問い合わせをいただいた。登壇者の男女比については、極力偏りがないように心掛けたが、専門性の観点から完全な対等を実現することはできなかった。懇親会の食材について、地元産食材の使用が限定的であった。

【実証事業②⑥ 第33回太陽光発電国際会議】

主催者名	日本太陽光発電学会		
会期	11月13日～11月17日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	名古屋市	主たる会場名	名古屋国際会議場

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	473	69	542
外国人	181	119	300
計	654	188	842

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	参加者がダウンロード可能な参加証とQRコード発行	事前登録システムをWebサイト上に用意し、参加者にWeb登録をお願いした。参加者が事前に各自で参加証(名札)を印刷し、当日は事前に発行されたQRコードを各自で読み込んで入場できるシステムを利用した。受付での接触が避けられ、受付にかかる時間も短縮することができた。また、リアルタイムで参加者や参加者数を把握することができた。
②	オンライン上でのプログラム及び抄録集の配布	オンライン会議システムの個別認証機能、発表データの収集と公開機能を利用することにより、オンライン上でのプログラム及び抄録集の配布とし、現地参加、オンライン参加の区別なくプログラム、抄録の利用を可能とした。また、簡易版としてスマートフォン用アプリを作成することで、現地参加者は会場を移動しながら、オンライン参加者は会議システムに参加するためのPCとは別にプログラム等にアクセスできるようにした。
③	インターネット回線の増強	現地参加者とオンライン参加者がリアルタイムで同時に会議に参加し、聴講、質疑応答を可能にするオンライン会議システムの運用に必要な専用回線を設置した。すべてのセッションにオンライン会議システム及び専用回線を敷設した。有線の専用回線を使用したおかげで、ネットワークトラブルなく、すべてのオーラルセッションを実施することができた。
④	バーチャル展示会場の設置	現地展示会場に加えてオンラインプログラム上にもバーチャル展示会場を設置し、出展者がオンライン参加者とも交流できる環境を整えた。オンライン参加者も展示に参加することができ、各種展示企業の情報収集ができたことで、参加者の満足度が向上した。出展者もオンライン参加者からのコンタクトが得られ、参加者と交流する機会を増やすことができた。

①



②



③



④



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

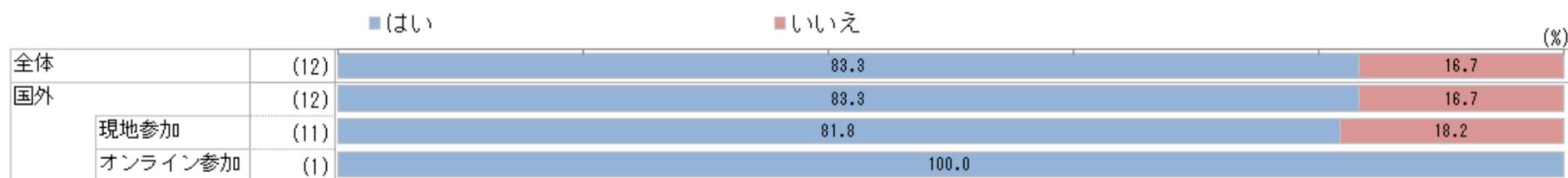
感染症対策	(1) 取組内容	<p>会期中の感染症対策として、以下の感染症対策を実施した。</p> <p>①参加者同士が密にならないように会場を広く利用(会場の規模によってはパーティションを設置)。</p> <p>②発表者・座長の前にアクリル板を設置。</p> <p>③入場前の検温と消毒の徹底。</p> <p>④各会場にハンドサニタイザーと非接触検温機器の設置。</p> <p>⑤参加者には本会議に関するアンケートを実施。</p> <p>参加者のネットワーキングを促すプログラムとして、バンケットやネットワーキングランチを実施した際は、以下の追加の対策を実施した。</p> <p>①会話時にはマスクの着用を徹底、②会場内に会話スペースにアクリル板を設置、③提供する飲食物は基本的に個別の容器にあらかじめ分けられた形で提供。</p>
	(2) 取組による成果	<p>会議全体の現地参加者は654名で、ネットワークランチの現地参加者は49名、バンケットの参加者は175名であった。Websiteでの事前の感染対策の周知の結果か、当初の想定より多くの方に現地参加していただいた。</p> <p>会期中感染者の報告はなく、感染症対策が十分機能した結果と考える。</p> <p>ネットワーキングランチでは日本を含め、11ヶ国の参加者が現地参加し、食事後は女性研究者のロールモデルについて活発なディスカッションが行われた。</p> <p>バンケットでは日本を含め16ヶ国の参加者が参加した。</p>
	(3) 課題	<p>ネットワーキングランチでは食事をする部屋とディスカッションの部屋を分けて実施した。感染対策の中での企画としては大成功であったが、スペースが2倍必要になったり、対応するスタッフの増員も必要となった。また、通常のネットワーキングランチで見られるような食事を取りながらの会話などは制限され、本来のネットワーキングランチの良さが制限される点もあった。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>参加者同士が会場に結集し、直接議論を交わすことのできる対面開催の利点を最大限に引き出すため、上記の感染予防対策を徹底し、できるかぎり現地参加を促した。</p> <p>一方、オンライン参加者の満足度向上のため、以下の取り組みを行った。</p> <p>①「講演者」が現地参加できない場合には、ライブで講演・質疑応答できるようにし、参加者同士がリアルタイムで議論しやすい環境を構築。</p> <p>②「講演者」がリアルタイム参加が難しい場合に、講演は実地で事前録画の動画を放映。参加者と講演者の間で質疑応答ができるよう、一定期間中オンデマンドでのコンテンツ提供環境を構築。</p> <p>③プログラムやアブストラクト集などは紙媒体に代えてオンライン及びアプリで提供。</p> <p>④TwitterやFacebookなどのSNSを通じて実地でのイベントの状況やライブ感を発信し、オンライン参加でも臨場感が感じられるようにした。</p>
	(2) 取組による成果	<p>現地参加を促した結果、654名の現地参加があった。プログラムやアブストラクト集をまとめたオンラインアプリはオンライン参加者のみに留まらず、現地参加者にとっても便利で好評であった。SNSへ実地でのイベントの状況を配信することで、オンライン参加でも臨場感を感じてもらえることができたと考える。</p>
	(3) 課題	<p>オンライン参加の満足度を高めることに固執しすぎると、現地参加者数の減少に繋がる可能性もあるので、現地参加を促す企画を含めて、会議全体のバランスをとりながら計画する必要があると感じた。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>①日本政府観光局(JNTO)の支援で、2021年12月に開催した第31回太陽光発電国際会議@シドニーにて、ブース展示を行った。</p> <p>②名古屋市からの後援及び国内会議補助金の助成</p> <p>③名古屋コンベンションビューロー:①に関する各種取次・手続き代行、会場及び周辺施設等に関する各種情報提供、ホームページで会場近辺の観光情報や名古屋観光に関するプロモーションビデオの発信(https://pvsec-33.com/general-Info/venue.html, https://youtu.be/TDHfAn8d3MQ)</p>
	(2) 取組による成果	<p>過去の日本開催の会議と比較してオーストラリアからの投稿がPVSEC-27(前回の日本開催、2017年)と比べると(15件→42件)と大幅に増加した。ブース展示やその際に流したプロモーションビデオの効果が得られた結果である。バンケットにおける武将隊(名古屋市からの派遣)のショーやエクスカージョンでの名古屋城観光は海外参加者に好評であった。日本に再度来日してくれるきっかけになると期待される。</p>
	(3) 課題	<p>特になし。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>次世代研究者の育成及び女性研究者の育成といったレガシー効果を創出するため、会期中にEarly Career Jobs Fair(ハイブリッド)及びNetworking lunch for women PV(ハイブリッド)を開催した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>Early Career Jobs Fairでは産業技術総合研究所イノベーションスクールをはじめ、いくつかの採用担当者が参加し、太陽光発電関連の研究開発に従事したい博士課程学生・任期付研究者と、研究・教育人材を必要とする産官学研究開発リーダー・採用担当者が直接の「出会い」を得られる機会を提供することができた。</p> <p>Networking lunch for women PVでは、11ヶ国の太陽光発電関連の研究をしている女子学生や博士研究員・教員が参加し、国内外の太陽光発電に関わる先輩女性(ロールモデル)の発表や活発なディスカッションが行われ、女性研究者のネットワーキング構築に大いに貢献することができた。</p>
	(3) 課題	<p>Early Career Jobs Fairについては新しい企画であったため、周知が不十分な点もあった。継続的に実施することで、本企画がさらに効果的に機能するようになると思われる。</p>

特徴ある部分を先で色付け 感染症：青 訪日促進：緑 リアル参加：赤 オンライン参加：オレンジ

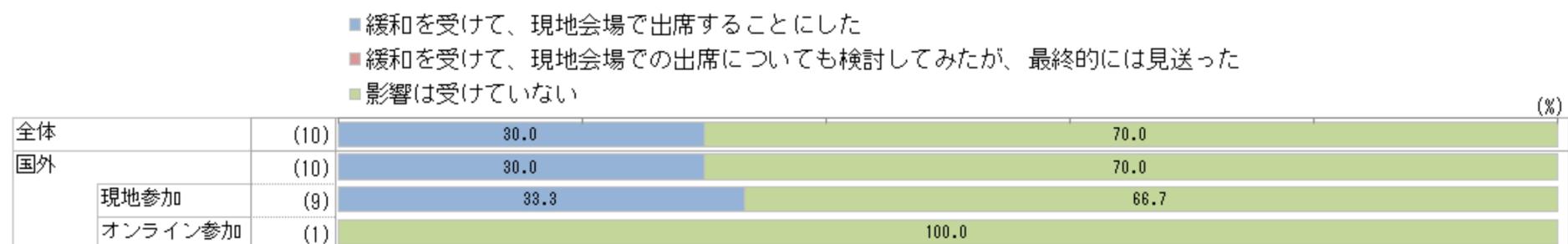
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>①次世代太陽電池、環境発電、太陽光発電システム周辺技術に関する最新の研究について議論する場を提供。</p> <p>②基調講演では、高村ゆかり教授(東大)がCOP27参加中にエジプトからご講演いただき、最新のCOP27におけるトピックスを参加者に共有。</p> <p>③国際協力を推進して持続可能なエネルギー・システムへの転換における太陽光発電の礎石としての役割を促進することを目指しているIEA PVPSのワークショップを同時に開催。</p> <p>④プログラムや抄録集は紙媒体での配布や止め、オンライン上の電子媒体として提供。</p> <p>⑤天井が高く、各会議場が広く、風通しがよい会場を選択、電車でのアクセスがよい会場を選択。</p>
	(2) 取組による成果	<p>次世代太陽電池、環境発電、太陽光発電システム周辺技術に関する最新の研究について議論を通じて、サステナビリティへの議論も深めることができた。紙資源の利用せずに電子媒体で提供したことでCO₂排出を抑えることができた。過度に空調を利用することなく快適な環境を提供し、CO₂排出を抑えることができた。車を用いない移動を推奨することで燃料排出に伴うCO₂排出を抑えることができた。</p>
	(3) 課題	<p>ハイブリッド開催は国際学会開催のサステナビリティとしても大きな意義を持っていると感じた。一方で、現地参加も促したい意図もあり、バランスを保つハンドリングが重要であると感じた。</p>

【実証事業②⑥ 第33回太陽光発電国際会議 個別アンケート】

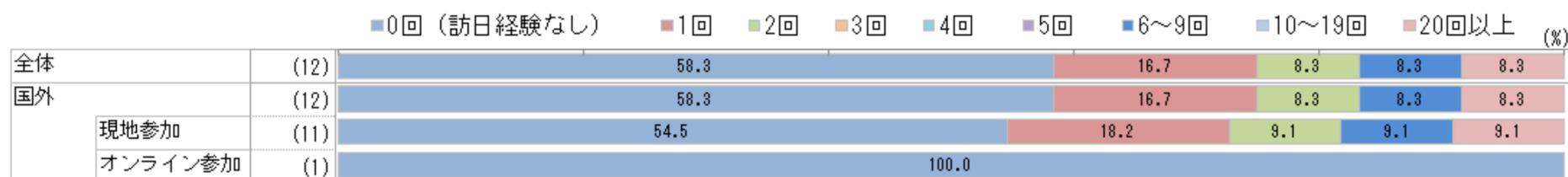
Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



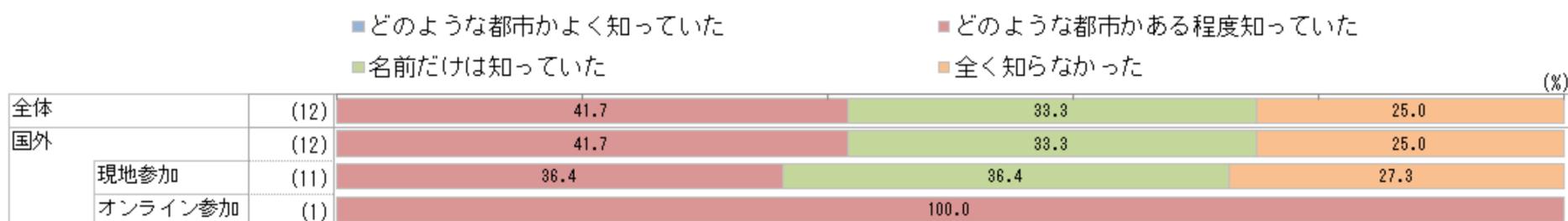
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



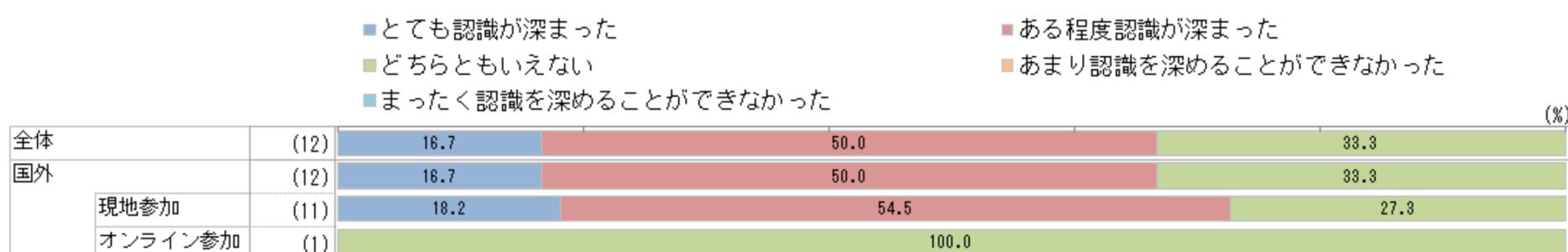
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



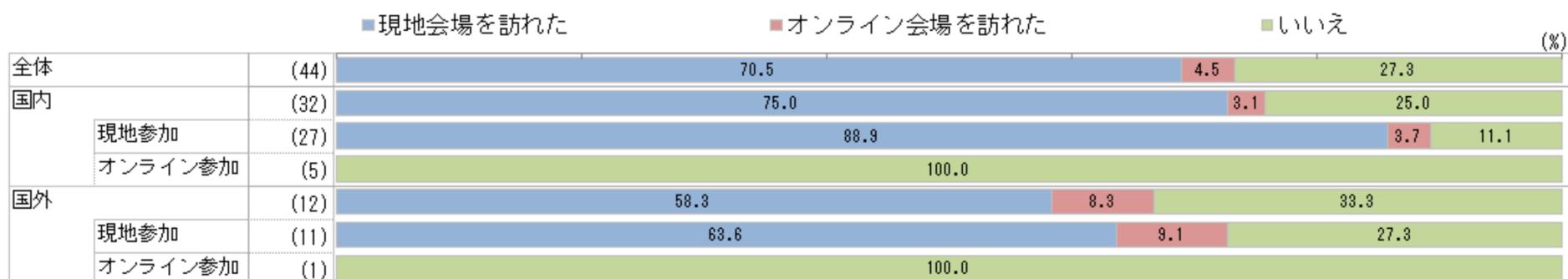
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(名古屋市)のことをどれくらい知っていましたか



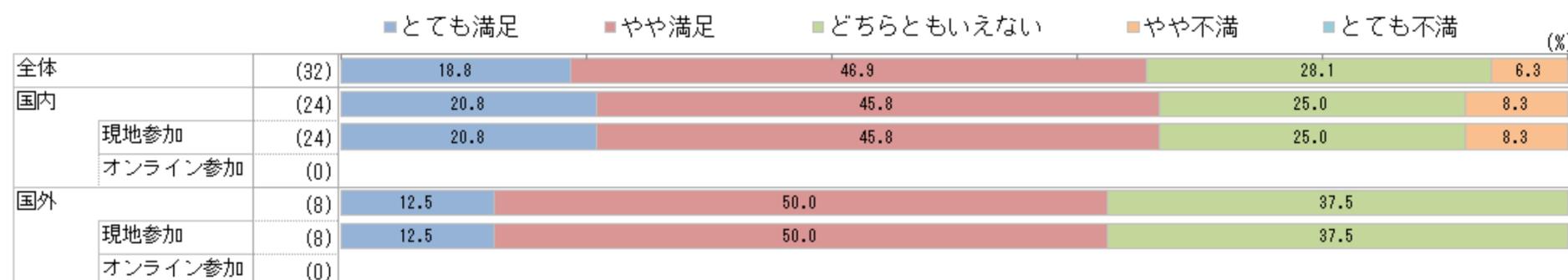
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(名古屋市)への認識が深まりましたか



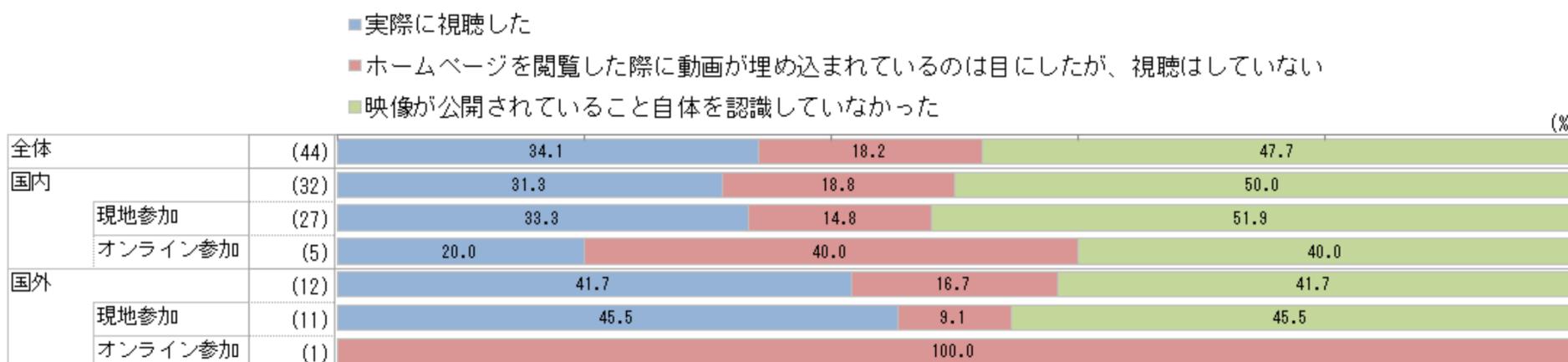
Q. あなたは展示をご覧になりましたか



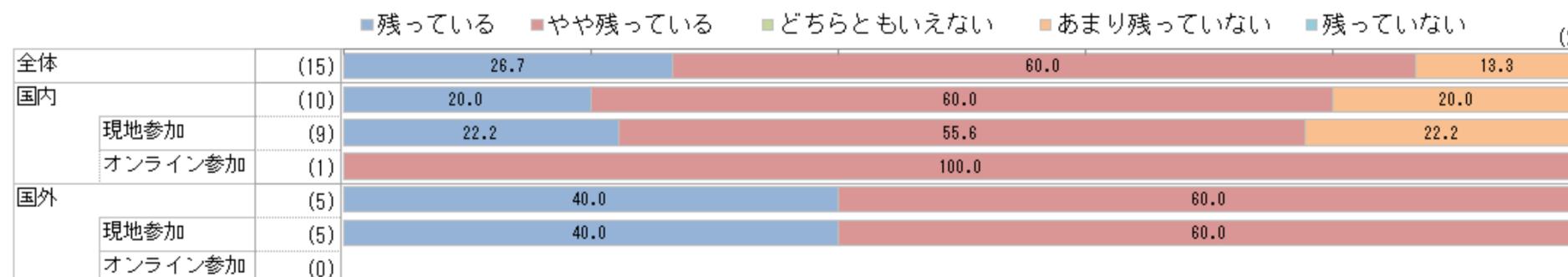
Q. 展示の満足度を選択してください



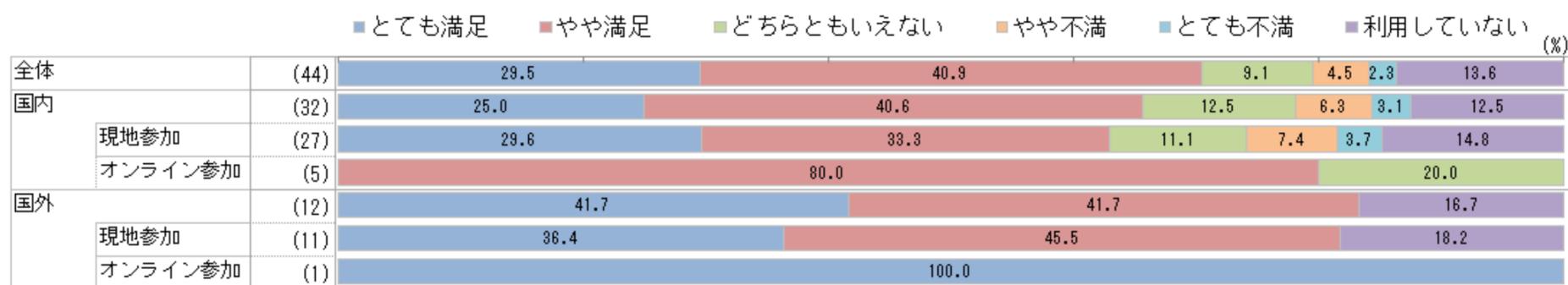
Q. 会議公式サイトトップページで公開されている映像をあなたはご覧になりましたか



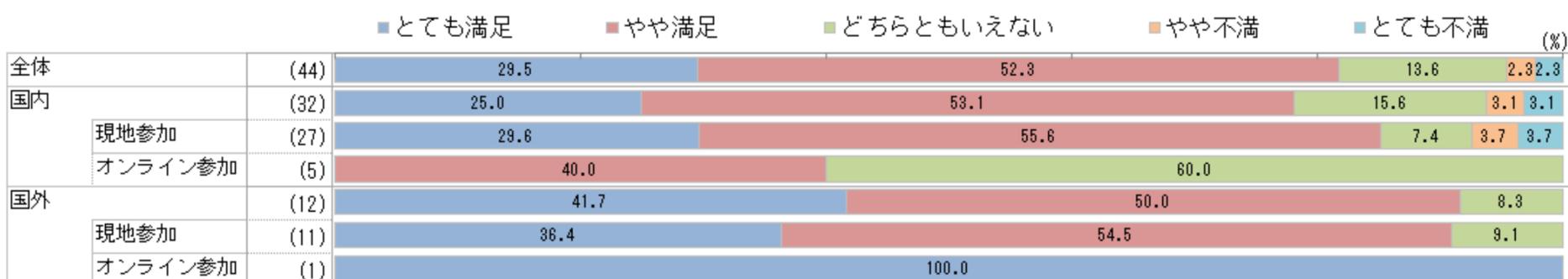
Q. その動画はどの程度、あなたの印象に残っていますか



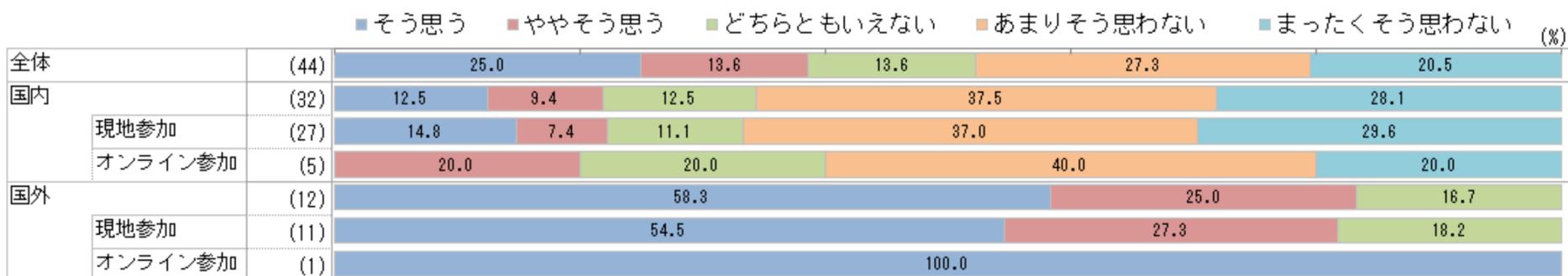
Q. 会議参加者向けアプリケーション(Confit)の満足度を選択してください



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業⑳ INTERNATIONAL YOUTH NUCLEAR CONGRESS 2022】

主催者名	一般社団法人日本電子力学会 若手連絡会		
会期	11月27日～12月2日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	福島県郡山市	主たる会場名	ホテルハマツ

1)参加者数

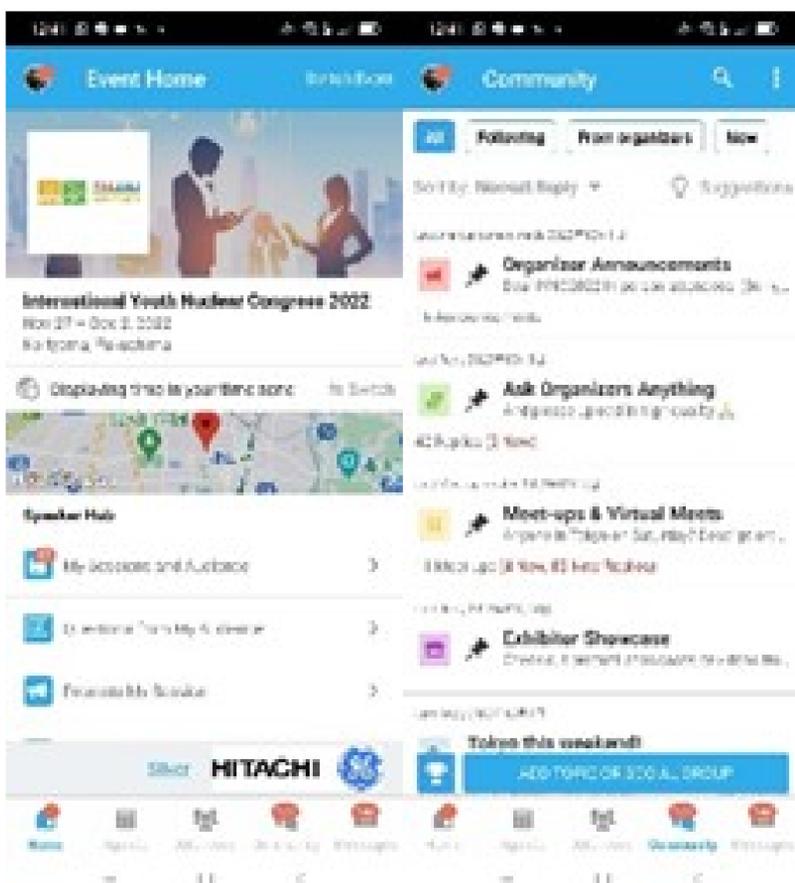
	実地	オンライン	計
日本人	105	9	114
外国人	133	53	186
計	238	62	300

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

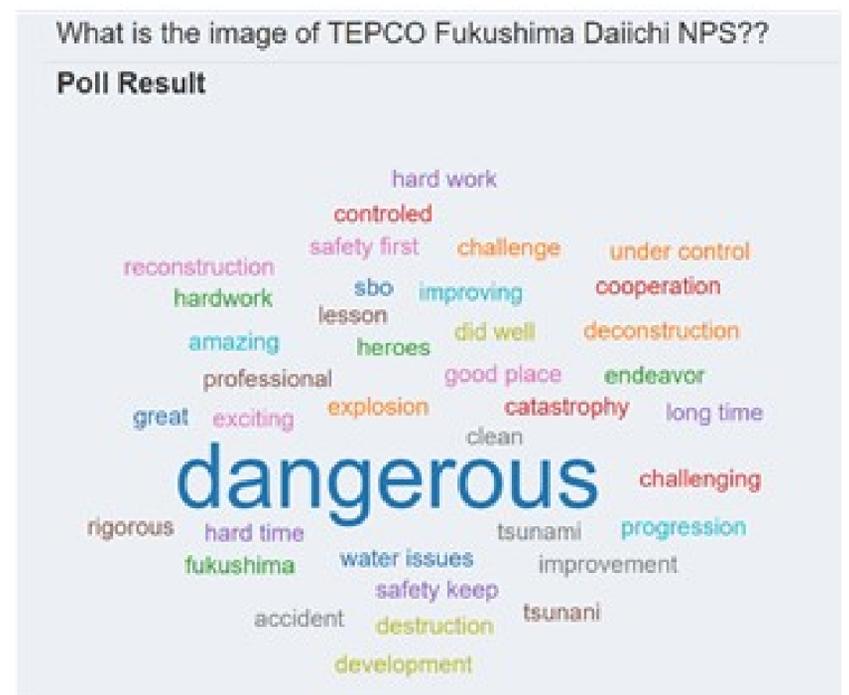
2)特筆すべき取組

①	会議アプリWhovaの導入	会議アプリWhovaを用いて、参加者同士のコミュニティを形成することにより、国際会議ならではの参加者交流を行った。合計35のコミュニティがWhova上で作られ、活発なチャットが展開され、参加者同士での交流が促進された。
②	Whova上にてPoll(投票)機能を活用	Whova上にてPoll(投票)機能を活用し、オンライン参加者、オンラインゲストスピーカー、現地参加者が同時に自身の考えをオンライン上で表すことにより、オンライン・現地参加者での一体感を醸成した。投票時点の参加者の考え・意見をビジュアル化し、国際会議としての一体感を醸成することに成功した。

①



②



特徴ある部分を先で色付け 感染症：青 訪日促進：緑 リアル参加：赤 オンライン参加：オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	<p>感染リスクを十分に抑えるため、感染リスク低減のための下記の対策を実施。 アルコール消毒、会議バッグ(参加者全員に提供)内にマスクを配布、サーマルカメラにて、毎日体温を確認、受付にて透明アクリル板の利用、登壇後の壇上マイクのアルコール消毒(講演者が変わったタイミングで消毒)特に飲食時(ランチ、ディナー)には以下の対策を実施。 ビュッフェ(ランチ及びウェルカムディナー)時にはマスク、手袋着用。 一方で、厚生労働省のマスク着用に関するガイドラインに則り、会話しないときはマスクを取る、2m以上距離を保てる場合は着用しなくても良い旨を冒頭に伝えた。 また、冒頭のオープニングセレモニーにて、コロナ対策担当者を紹介し、何かあれば、連絡するように周知した。会議アプリ(スマートフォンのアプリ)も用いて周知した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>会期中に体調不良者は確認されず。コロナ感染の報告もなかった。 さらには、マスク着用、非着用のルールを事前に周知することで、活発な雰囲気醸成することができた。</p>
	(3) 課題	<p>マスク着用を海外の方が徹底することは難しく(遵守し、徹底するものも一部いる)、ゼロコロナを目指すのではなく、陽性時の対応が重要と考えられる。</p>
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>実地参加者には施設見学ツアーが提供されているが、オンライン参加者への提供は困難であったこともあり、実地・オンライン双方に対してバーチャルツアーを実施し、福島第一原子力発電所の廃炉の進捗について紹介することで、福島の復興を実感していただいた。 また、オンラインと実地の参加者との間の隔たりを可能な限りなくすために、登壇者への質問は携帯アプリからとし、誰でも同じ媒体から質問するシステムを採用した。</p>
	(2) 取組による成果	<p>会議アプリ"Whova"を用いることにより、オンライン・実地双方の参加者がコミュニケーションを取ることができ、オンライン側も気軽に会議に参加できた。</p>
	(3) 課題	<p>オンライン側への配慮によって、ハイブリッド会議となり、会場の音響、画面共有、壇上のライブ上映など、非常に多くの煩雑な管理が必要となり、セッション開始前にトラブルが数多く発生し、トラブルシューティングに追われた。ハイブリッド会議に慣れた人材・企業の育成が重要である。</p>
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>本国際会議の誘致時点より郡山コンベンションビューローに相談し、社交行事、開催場所、宿泊場所、音響・通信業者とのやり取りを実施していただいた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>PCO(Professional Congress Organizer)を介さずすべて開催地の企業と連携し、国際会議を開催・運営することに成功した。国際会議の運営においては、通常PCOが仲介し、様々な業者をPCOの伝手(開催地以外の企業に依頼することもあり)で活用するが、今回郡山コンベンションビューローに仲介していただいたこともあり、開催地の企業にほぼすべての経費を支払うことができた。これは開催地との連携において、最も大きな成果と考える。</p>
	(3) 課題	<p>PCOを介さない国際会議の運営は比較的前例が少なく、郡山コンベンションビューローにとってもチャレンジなプロジェクトであったため、経験不足が課題ではある。ただし、今回実績ができたため、郡山コンベンションビューローにとっては大きな課題とならないと思われる。一方、主催者側においては、負荷が大きくなってしまふことから、引き続き課題となる場合が考えられる。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>レガシー効果の創出に向けた取組内容としては以下の通りである。 ①福島県産食材を利用した晩餐会の開催、②福島県内の廃炉・復興・エネルギー関連施設への施設見学を実施(福島第一原子力発電所、福島第二原子力発電所、福島水素エネルギー研究フィールド、中間貯蔵施設情報センター、東京電力廃炉資料館、JAEA櫛葉遠隔技術開発センター)、③コンベンションビューローを通じた県内企業コンソーシアムによる国際会議の実施、④郡山市内でのエクスカージョン(緑水苑にて懇親会)の実施、⑤多種多様なテクニカルプログラム(技術発表、基調講演、ワークショップ、パネルセッション、メンタープログラム、ポスターセッション)の実施、⑥郡山市長の登壇、⑦福島民報社、福島民友新聞社からの取材対応。</p>
	(2) 取組による成果	<p>上記取組内容の番号と紐づけて成果を以下に記載する。 取組①②④⑥:将来の原子力を担う国内外の若手技術者・研究者等が福島第一原子力発電所の廃炉の進展状況を学び、福島の復興状況を効果的にPRする。特に、ALPS処理水の海洋放出に向けた取組を学ぶとともに、福島を好きになる試みにより、今後風評被害が世界各国で発生しうる際に、正しい情報を当該国の母国語で参加者各自が発信することが期待できる。 取組③:福島県郡山市にて従来国際会議の実績が少なかったところ、地元企業の力による国際会議の開催の実績が得られた。これは郡山コンベンションビューローから、会議開催後に商談会などで、国際会議の実績を提示したところ、引き合いが来ていることから明らかな成果である。 取組⑤:フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ等の多くの国から参加者が集まる状況において、感染リスクを十分に抑えたうえで、対面参加者とオンライン参加者が本会議に参加し、日本との長期的かつ継続的な協力関係の素地を構築する礎となった 取組⑥⑦:郡山市民、福島県民全体に対して、原子力に関する国際会議が開催されたことを周知した。被災者の方々は様々なご意見をお持ちかと思うが、被災された方々(コンベンションビューロー、ホテルハマツ、ライトエージェンシー、ビデオメイトナカヤ、緑水苑など)と国際会議を作り上げ、事実情報を発信する学術的な場を郡山市にて開催し、それを福島県民に対して新聞の形で周知できたことは、復興を支援するとともに、魅力的な福島を発信する成果である。</p>
	(3) 課題	<p>政治経済情報誌である「政経東北」から、原子力に関する国際会議を郡山で開催することに対して、住民感情を考慮していないのでは?と疑義が投げかけられていることは課題として記載する。ただし、郡山市、福島県ともに今回の国際会議の開催は周知しており、会期中も抗議活動等はなく、対応すべき課題ではないことを注記したい。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>SDGsへの対応として、会議アプリ"Whova"の利用により、紙媒体を極力使用しなかったことがあげられる。 また、電子スクリーンを活用し、案内板や協賛企業の掲示に関する紙の節約に努めた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>紙媒体の配布はほぼ発生しておらず、会期中の参加者へのコンタクト、参加者同士の交流なども会議アプリ"Whova"上で行われた。 また、協賛企業の掲示や案内板については、電子スクリーンを利用したこともあり、適宜内容を修正でき、修正に伴う廃棄物の発生を抑えられた。</p>
	(3) 課題	<p>電子スクリーンが比較的高価であり、予算の関係上すべての掲示を電子スクリーンで実施できず、紙の利用をゼロとすることができなかった。</p>

【実証事業⑳ Global Reform BnB Forum in KYOTO】

主催者名	Global Reform BnB Forum in KYOTO 実行委員会		
会期	12月2日	分野	運輸・観光
主たる開催都市	京都市	主たる会場名	鮎鶴京都鴨川リゾート

1)参加者数

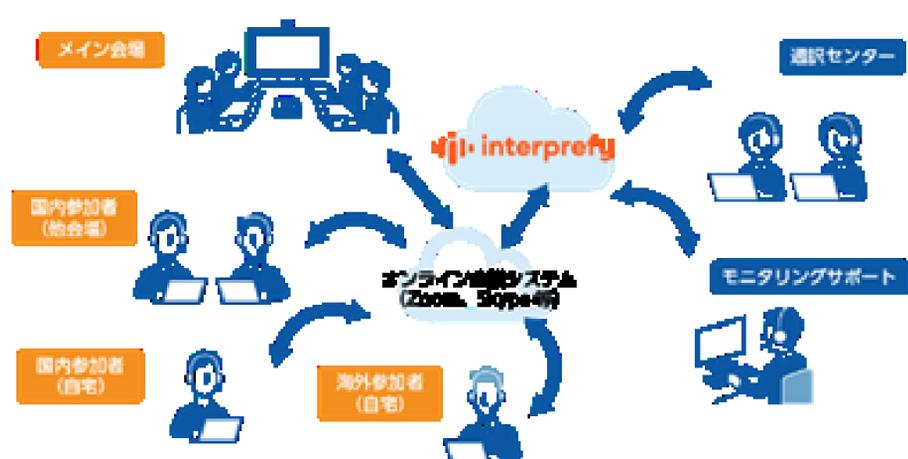
	実地	オンライン	計
日本人	200	5	205
外国人	17	33	50
計	217	38	255

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカージョンツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	オンライン同時通訳システム	オンライン会議システムに関してはウェビナー形式で実施し、カメラも登壇者と参加者が映るよう2つのカメラ準備し、会場の参加者が話しても問題なく、滞りなく運用できた。同時通訳システムは、それぞれがインストールして各々のデバイスで聞けるように準備したため、コストダウンや感染対策のみならず、オンライン参加者からの評判も高かった。
②	PR動画コンテンツの制作	会議の開催前から本会議の公式ページにて、観光促進動画を掲載し、実地参加者は会議終了後も京都へ滞在し、観光名所に訪問いただいた。

①



②



特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

感染症対策	(1) 取組内容	<p>①ワクチン接種状況を確認する事前登録システムを構築し、PCRもしくは抗原検査の実施及びワクチン接種状況を確認。ワクチン3回接種者については接種証明書、接種していない参加者に関しては会議開始72時間以内に受信した陰性証明を登録システムにアップロード。</p> <p>②当日の体温測定で体温が高い参加者については、主催側の負担で抗原検査を行い、抗原検査キットは唾液で15分で結果が出る製品を利用。</p> <p>③検査会場は距離をとって実施し、陽性者が出た場合は京都市内のPCR検査センターへご移動頂き会議へ参加しないように指導。</p> <p>④会議資料等の冊子をウェブページやメールで配信。</p> <p>⑤同時通訳システムをレシーバーを使用せず、各々のスマートフォンデバイスでアプリインストールをして利用。</p>
	(2) 取組による成果	<p>当日は、幸いにも発熱者はおらず、アップロードシステムを利用したことで円滑な受付対応ができた。今回、無料のシステムを活用したが、こういった取り組みを参加した宿泊事業者から「証明書の確認が必要な観光需要喚起施策にて活用したい」というポジティブな意見も有り、効果的な取り組みであった。会議資料のペーパーレス化は、感染対策のみならず、アーカイブされるので会議後の確認作業も円滑となり、生産性向上にも繋がった。オンライン同時通訳システムを利用し、各々のデバイスで実施したが、参加者からはとても快適に利用できたと評価が高かった。</p>
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・本実証事業提供の英語版のマスクの着用訴求掲示やスタッフの声掛けでマスクの着用を促進したが、海外のゲストはそれぞれの国の習慣があるため、なかなか強要ができないことを課題として感じた。 ・オンライン同時通訳システムにて、会場用のメインデバイスのネットワークをモバイルWi-Fiを使用した。ネットワークトラブルが起き、途中から有線ケーブルに変更した。メインPCは会議スタートから、Wi-Fiを利用せず、有線ケーブルでのネットワーク通信をするべきである。 ・会議開始後、アプリをインストールをバタバタと実施する参加者が多かったため、会議開催前からアプリインストール事前に行う案内をできれば、もっと円滑な運営ができた。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	<p>①訪日促進を目的に京都の魅力をより感じていただくPR動画(多言語対応)を制作し、Global ReformBnB Forum in KYOTO公式ページ内で公開。</p> <p>②参加者に対し、オンライン会議システムを通じて各セクションをリアルタイムで配信。</p> <p>③オンライン同時通訳システムの活用。</p> <p>④会議当日、各セクションの合間にJNTOからお借りしたPR(訪日、再訪促進)動画を投影。</p>
	(2) 取組による成果	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の開催前から本会議の公式ページにて、観光促進動画を掲載し、実地参加者は会議終了後も京都へ滞在し、観光名所に訪問していた(別途、写真添付)。 ・オンライン会議システムに関してはウェビナー形式で実施し、カメラも登壇者と参加者が映るよう2つのカメラ準備し、会場の参加者が話しても問題なく、滞りなく運用できた。 ・同時通訳システムは、それぞれがインストールして各々のデバイスで聞けるように準備したため、コストダウンや感染対策のみならず、オンライン参加者からの評判も高かった。
	(3) 課題	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた人的リソースの中で運営していたため、実施できなかったが、エクスカーションで実地参加者向けのツアーを開催すべきであった。 ・オンライン会議システムでの運用となる場合、会場内の話者は必ずマイクを利用しなければならないが、時折マイク無しでお話される方がいたので、次回以降は必ずマイクを利用するようにアナウンスするべきである。 ・オンライン同時通訳システムは、有線ケーブルのイヤホンでないと言音が途切れる現象が起きていたため、貸し出し用の有線ケーブルを事前に用意はしていたがBluetoothイヤホンでも快適に聞くことができるよう解決すべきである。
開催地との連携	(1) 取組内容	<p>①公益財団法人京都文化交流コンベンションビューローの京都市MICE開催支援助成金及び京都らしいMICE開催支援補助制度を申請。</p> <p>②会議開催に係る費用の助成のみならず、歓迎夕食会の時に、京都の地酒を中心とした数種類の日本酒を紹介するレセプションの開催と京都の地酒で鏡開きを実施。</p> <p>③お土産品で2合瓶のお酒をお持ち帰りいただく手配を行い、京都市内の英語版ガイドブックやお土産袋の提供を依頼。</p>
	(2) 取組による成果	<p>本会議は組織として設立した第1回目の会議でしたので、日本式のセレモニーとして鏡開きを体験してもらい日本文化を体験していただき、「日本で開催して本当に良かった」と海外ゲストから評価が高かった。また、2で記載の通り、実際に紹介した動画で登場した場所への訪問希望があり、訪問促進に成功した。</p>
	(3) 課題	<p>予算の都合上、お土産の品数が少し寂しかったので、京都市のおすすめのお土産リストやディスカウント等があれば、より満足度の高いものになった。</p>
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	<p>①京都市長、門川大作氏にご挨拶とスピーチを頂き、京都の観光またオーバーツーリズムについてお話頂いた。</p> <p>②京都副知事、鈴木貴典氏にご登壇頂き、住宅宿泊事業法の成立・公布から施行にかけての回想に関するお話頂いた。</p> <p>③観光庁観光産業課長、柿沼宏明氏に宿泊業界の進むべき方向性についてお話頂いた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>本会議のメインピックは民泊に関してですが、京都市長や京都副知事、観光庁観光産業課長にお越しいただき、日本及び、京都の観光事情について言及いただき、各国の事例も踏まえて参加した海外ゲストとともに議論することができた。また、今後の本会議(Global ReformBnB Forum)中で、OTA諸問題やオーバーツーリズム問題など日本が抱える様々な問題を取り上げることを今後、検討するなど、会議内容を再考する良いきっかけとなった。</p>
	(3) 課題	<p>現状は、日本では住宅宿泊事業法の施行により適正な運営がされており、諸外国と比較するとさほど問題視されていないため、今回のメインピックである日本の民泊事情をお話いただける専門家を選出することが大変困難であった。</p>
サステナビリティ	(1) 取組内容	<p>①各国の民泊問題における現状の課題共有と解決手段、及び世界共通のガイドラインを作成した。</p> <p>②日本酒を試飲するレセプションにて使用するカップを、環境に優しい植物性プラスチックカップを使用した。</p> <p>③Global ReformBnB Forumの常任メンバーとして日本の参加が決定し、今後もグローバルなパートナーシップを築き上げることができた。</p>
	(2) 取組による成果	<p>ガイドラインの作成は、第2回Global ReformBnB Forum in Barcelonaより各国の不平等を無くすために行っているが、コロナ禍における変化を取り入れたアップデートを行うことができた。また、レセプションで使用する試飲カップを環境に配慮したものを使用し、参加者から大変良い取り組みと評価された。また、日本のホテル業界を代表してGlobal ReformBnB Forum ExCom member(常任理事国)としての参加が決定し、持続可能なグローバルなパートナーシップを築き上げることに成功した。</p>
	(3) 課題	<p>英語ができるメンバーが限られているため、会議毎に通訳者が必要となるため、予算の問題を解決しなければならない。</p>

【実証事業⑳ The 4th World Congress on Endoscopic Ear Surgery】

主催者名	山形大学医学部 耳鼻咽喉・頭頸部外科		
会期	12月5日～12月8日	分野	医学
主たる開催都市	京都市	主たる会場名	ロームシアター京都/ みやこめっせ

1)参加者数

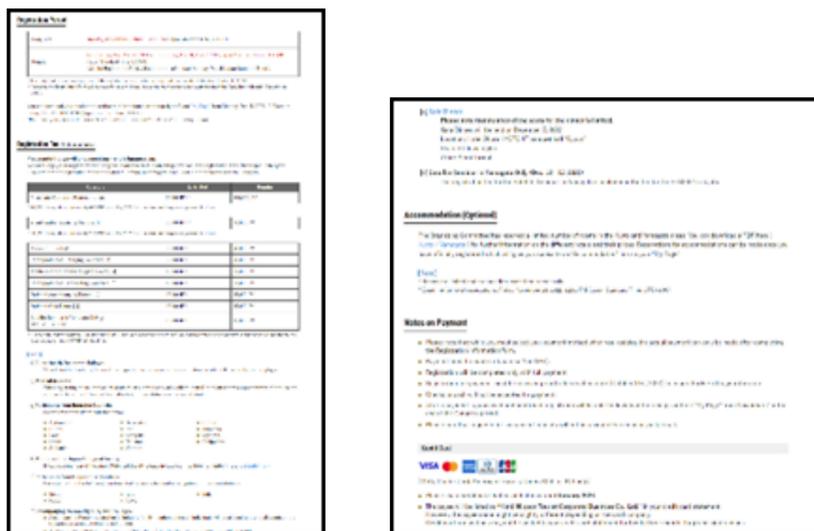
	実地	オンライン	計
日本人	244	0	244
外国人	422	3	425
計	666	3	669

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施 ●
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置 ●
③	参加登録システムの導入 ●
④	感染対策に資する物品の手配 ●
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施
②	オンラインエクスカーションツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作 ●
②	公開講座の実施

2)特筆すべき取組

①	オンラインの事前参加登録システム	オンラインの事前参加登録システムを用いて参加登録を管理した。結果、約550名からの参加登録をいただいた。
②	登録システムの導入	当日の参加者のため可能な限り接触機会を減らすため登録システムを組んだ。
③	来日促進のため動画を作成	海外からの参加者へ京都の魅力紹介と来日促進のため動画を作成して、関連学会などでも投影をした。
④	Wi-Fi環境を強化	参加者向けWi-Fi環境を強化するため専用回線を敷設し案内した。

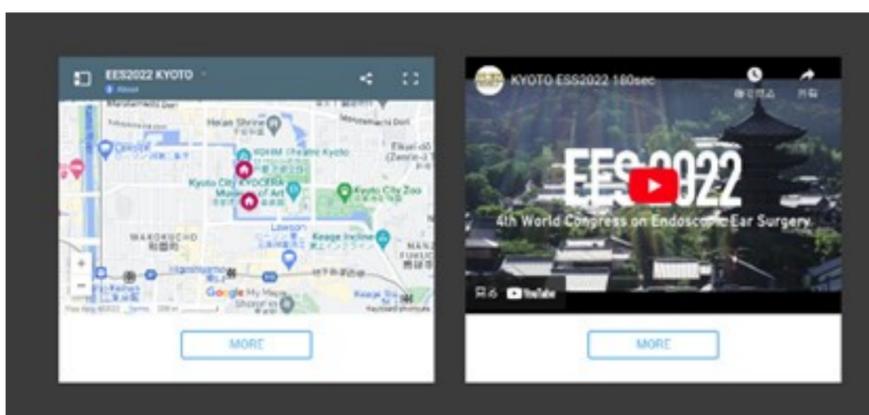
①



②



③



④

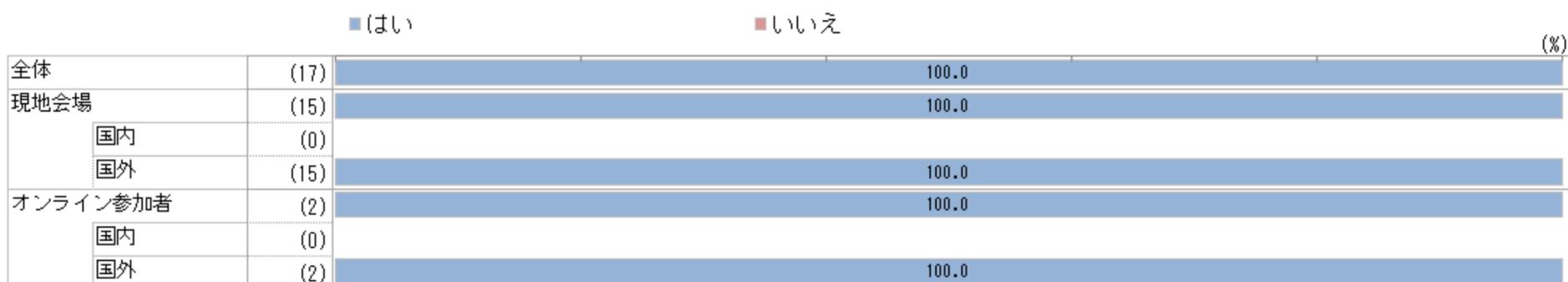


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

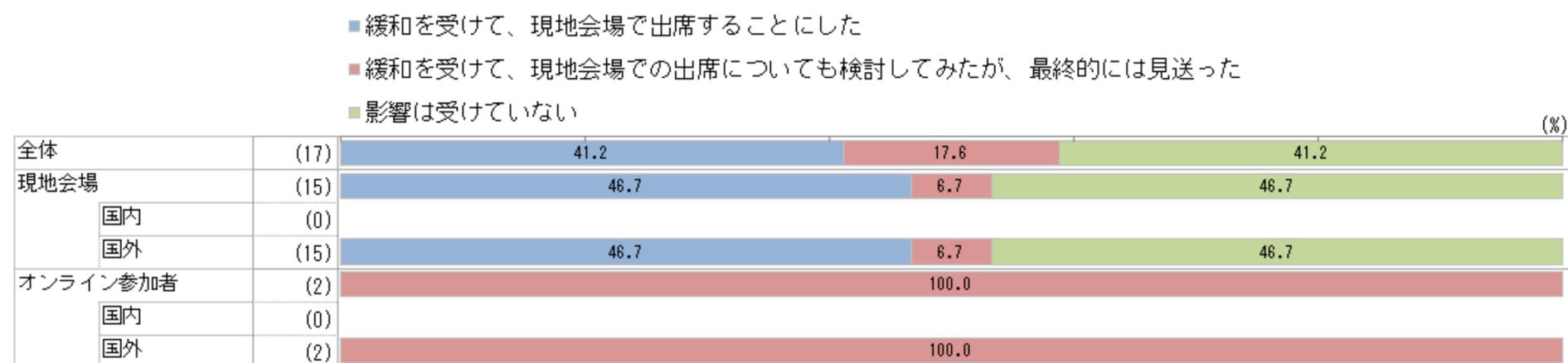
感染症対策	(1) 取組内容	飲食を伴うパーティーにおいてもアクリルパネルの設置やマスク着用を促す案内をした。
	(2) 取組による成果	学会終了後、2週間を経過した現在もスタッフからの感染陽性の報告もなく終了することができた。
	(3) 課題	海外との感染対策の格差により、特にマスク着用については再三の注意を必要とした。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	ゼロコロナ政策を実施している中国からの演者の発表機会を失わないようにポスター発表の掲示サービス及びビデオ発表による発表形式を用いた。
	(2) 取組による成果	プログラムをPDFの電子媒体に集約することによりホームページに公開してオンライン参加者にも滞りなくプログラム情報を周知することができた。
	(3) 課題	オンライン参加からの発表と現地参加者の発表の切替希望が会期直前に集中して演者管理に苦慮した。
開催地との連携	(1) 取組内容	海外の参加者の観光用に京都市の観光協会から提供いただいた観光マップをコンベンションバッグと共に参加者に配布した。
	(2) 取組による成果	観光に関する大きな問合せもなく終了することができた。
	(3) 課題	京都の公的な観光PR動画など素材が少なく自己作成する必要があるため、公的素材の拡充を希望します。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	海外からの参加者の観光促進及び観光サービスの一環として、観光ボランティアを手配してSightseeing Conciergeの窓口を設けると共に、英語の観光タクシーも会期中に貸切して、希望者に応じて利用していただいた。
	(2) 取組による成果	Sightseeing Conciergeの方々により、会場近くの観光以外にも着物の体験ができる店舗の検索をお手伝いいただき、観光タクシーを活用することによりプログラムの合間を有効的に利用して、京都近郊まで観光をしていただいた。
	(3) 課題	観光情報以外の料亭の予約の仕方など予想外の質問も多く、会場で用意すべき資料をもう少し充実すべきだった。
サステナビリティ	(1) 取組内容	上記でご報告したポスターの掲示サービスにおいて、掲示するポスターの素材として紙やプラスチックの代わりとなる新素材「LIMEX」(ライメックス)を選択肢に加えてリサイクル素材を選択できるようにした。加えて、出来る限り紙媒体の作成を減らすように抄録集のPDF版の活用を促進した。
	(2) 取組による成果	タブレットなどモバイル機器が普及した昨今では会場において紙媒体は最小限でも問題ないよう思われ、大きな混乱もなく終えることが出来た。
	(3) 課題	会場で参加者に配布するお弁当が無駄にならないよう参加者するに応じて調整するなど別の部分での配慮も必要だと実感した。

【実証事業⑨ The 4th World Congress on Endoscopic Ear Surgery 個別アンケート】

Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



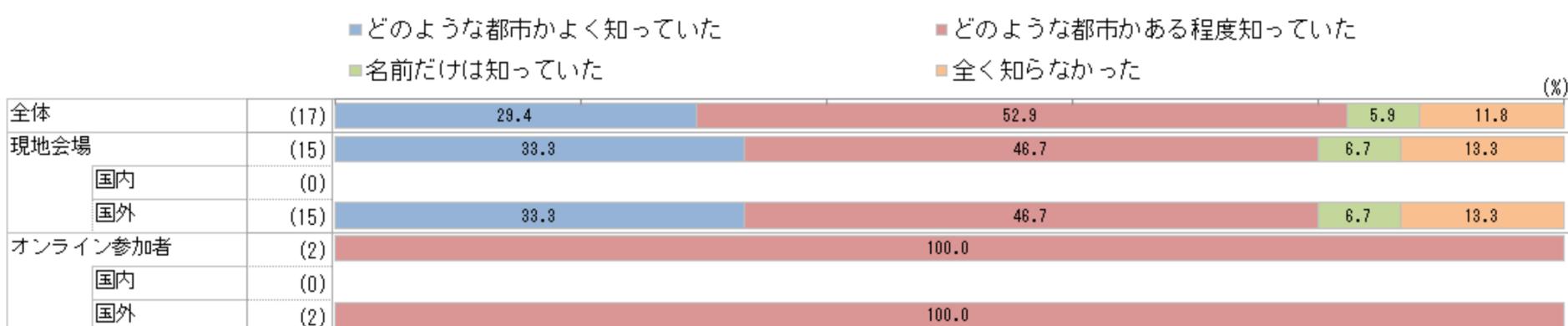
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



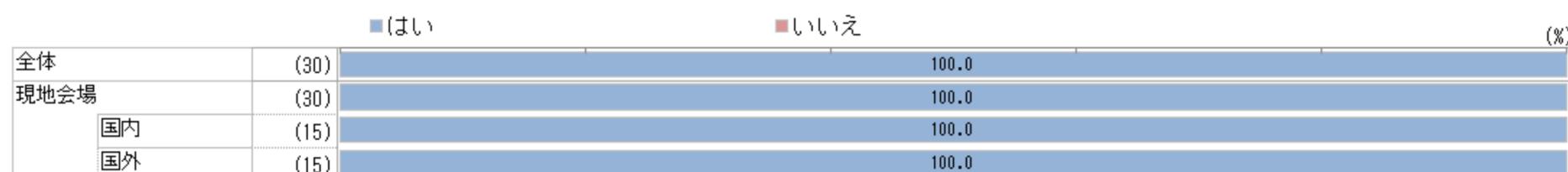
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(京都市)のことをどれくらい知っていましたか



Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(京都市)への認識が深まりましたか



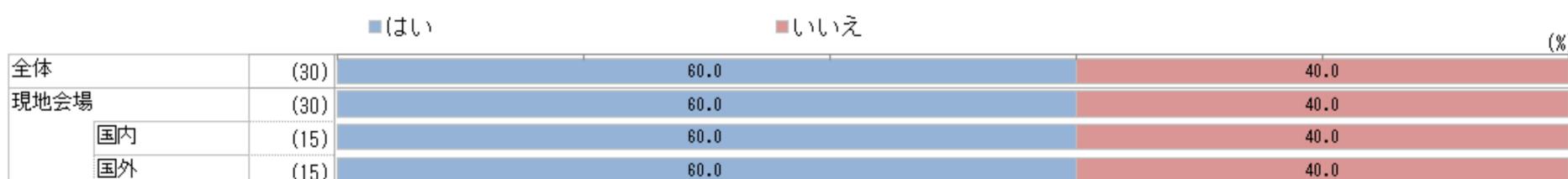
Q. あなたは展示をご覧になりましたか



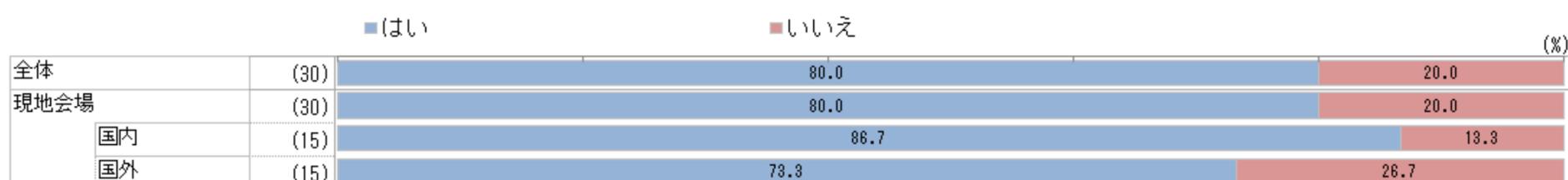
Q. 展示の満足度を選択してください



Q. あなたは以下のソーシャルプログラムに参加しましたか
<Welcome Reception>



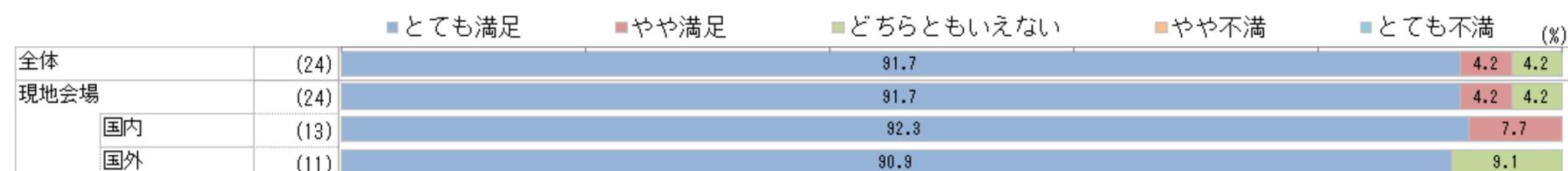
Q. あなたは以下のソーシャルプログラムに参加しましたか
<Gala Dinner>



Q. 以下のソーシャルプログラムの満足度を選択してください
<Welcome Reception>

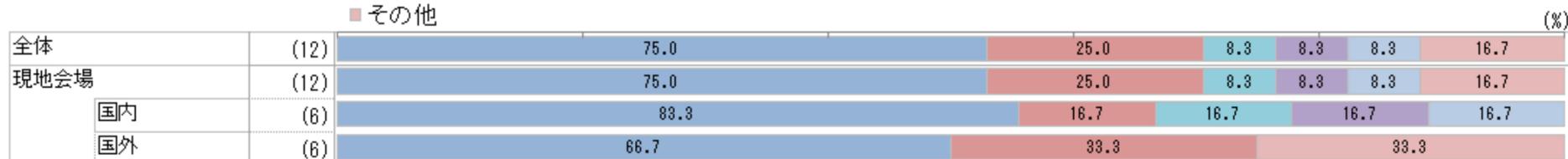


Q. 以下のソーシャルプログラムの満足度を選択してください
<Gala Dinner>



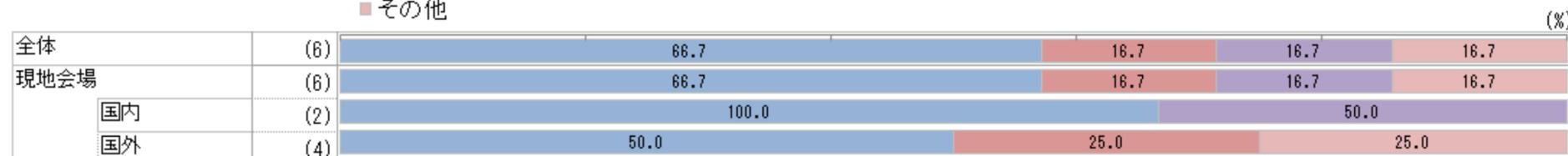
Q. あなたがウェルカムレセプションに出席しなかった理由を全て選択してください

- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた
- その他

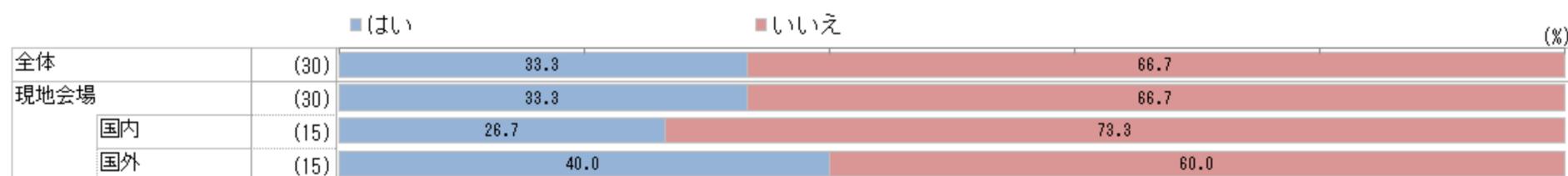


Q. あなたがガラディナーに出席しなかった理由を全て選択してください

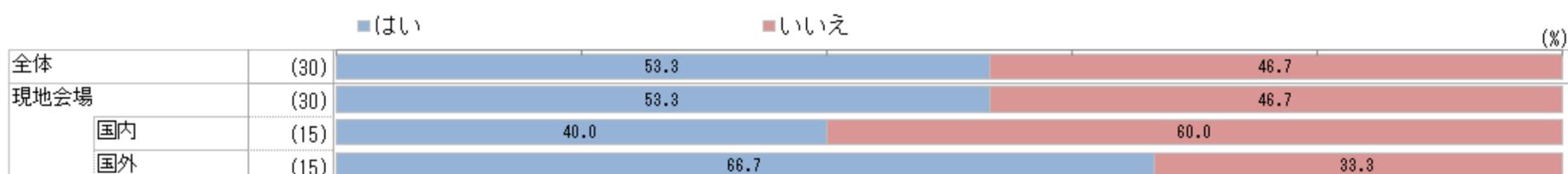
- 同じ時間帯に別の予定が入っていた
- 疲れていた
- 体調が優れなかった
- 参加者同士の交流機会としてあまり期待できなかった
- 会場にあまり魅力を感じなかった
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に懸念があった
- 会場における感染症対策に対する不安があった
- 自らが所属する機関や団体によって、コロナ禍における会食に制限が課せられていた
- その他



Q. あなたは”My Cool Kyoto” コンテストに参加しましたか



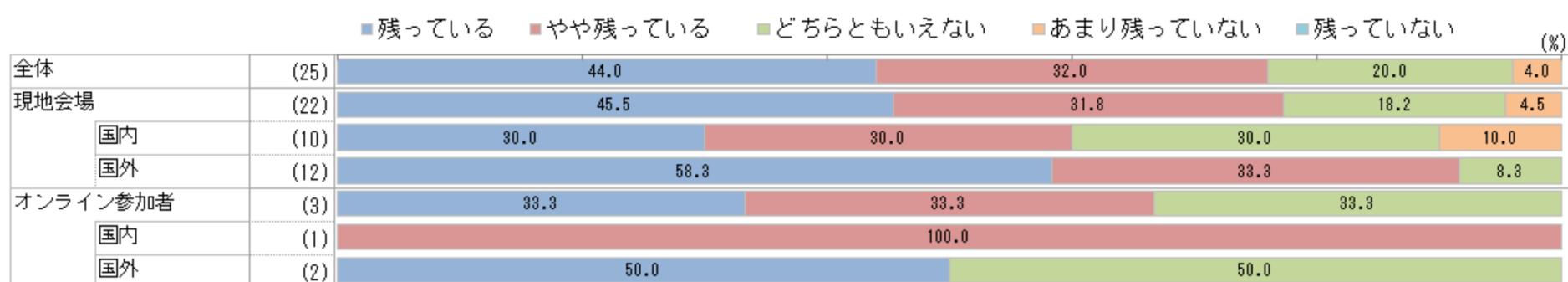
Q. あなたは”京都のラーメン文化”を楽しみましたか



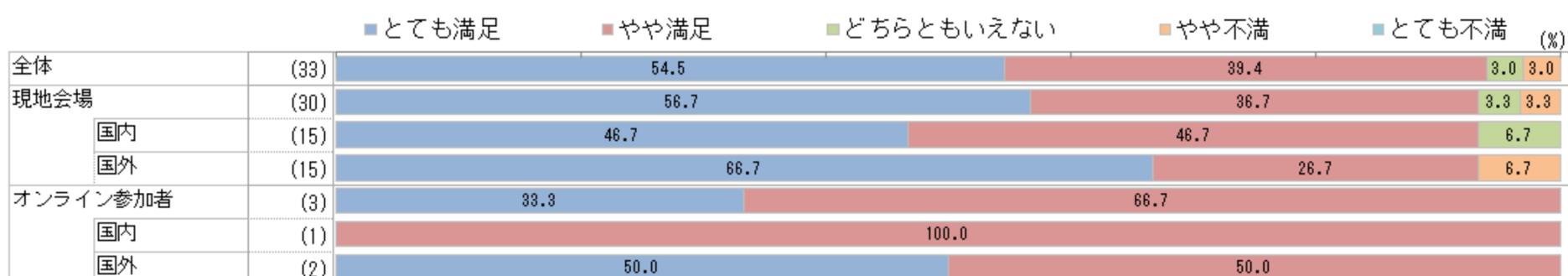
Q. 会議公式サイトで公開されている観光PR映像をあなたはご覧になりましたか



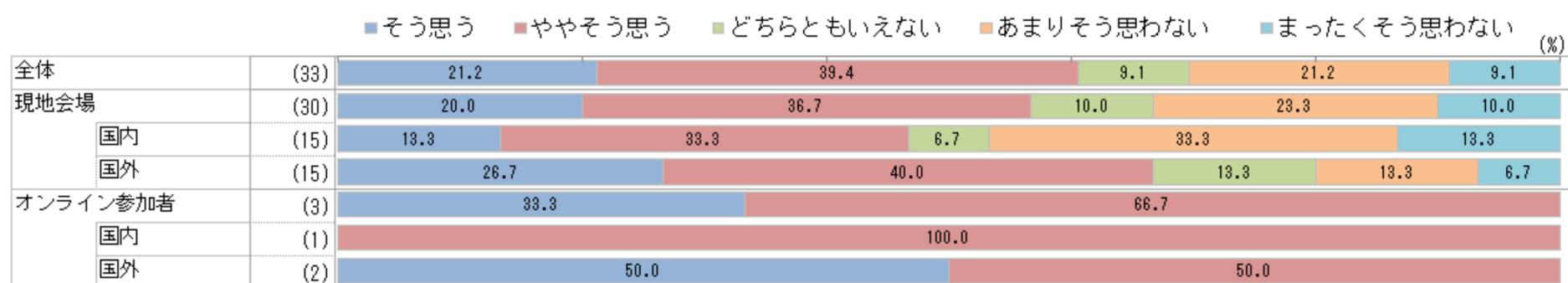
Q. その動画はどの程度、あなたの印象に残っていますか



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



【実証事業③ IEEE BIGDATA 2022】

主催者名	IEEE BIGDATA 2022 組織委員会		
会期	12月17日~12月20日	分野	科学・技術・自然
主たる開催都市	大阪市	主たる会場名	グランキューブ大阪 (大阪府立国際会議場)

1)参加者数

	実地	オンライン	計
日本人	206	28	234
外国人	518	469	987
計	724	497	1221

感染対策	
①	事前PCR検査、当日抗原検査の実施
②	検温機器、二酸化炭素濃度測定機器の設置
③	参加登録システムの導入
④	感染対策に資する物品の手配
オンライン参加者の満足度向上に係る経費	
①	ネットワーキングイベント(バンケット)の実施 ●
②	オンラインエクスカーションツアーの実施
レガシー効果の向上に資する取組	
①	開催地や会議のPR画像の制作
②	公開講座の実施

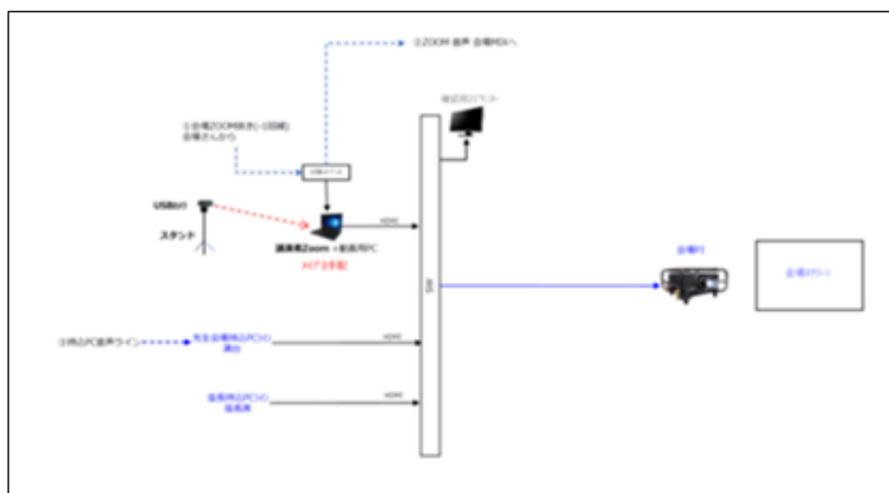
2)特筆すべき取組

①	オンライン会議プラットフォームとしてRD Mobile アプリの導入	テクニカルプログラムやプレゼンテーション動画などを共有するオンライン会議プラットフォームとして、米国本部(IEEE)指定のアプリ、RD Mobile を利用した。各会場には映像インタフェースを装備したPCを設置し、RD Mobile、Zoom、及び会場の様子をステージのスクリーンに投影。実地参加者とオンライン参加者が極力同じ情報を共有できるようにした。
②	Wi-Fi環境の充実	プレナリー会場を含む12会場で同時並行でセッションが開催できるよう、光回線の追加導入などによって通信環境を強化。とりわけ通信のボトルネックとなりやすい、実地参加者のWi-Fi環境の充実を図った。

①



②

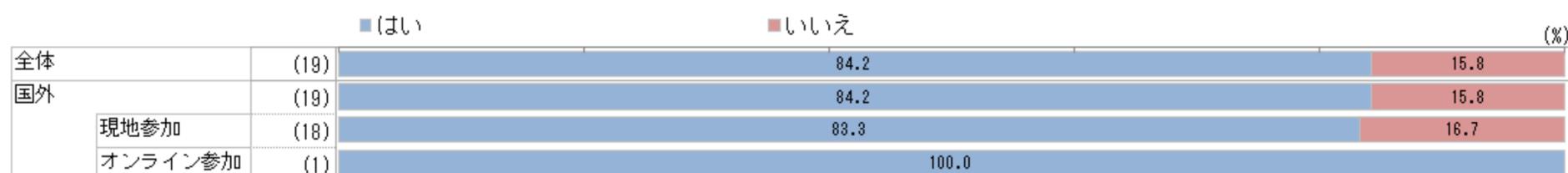


特徴ある部分を先で色付け 感染症:青 訪日促進:緑 リアル参加:赤 オンライン参加:オレンジ

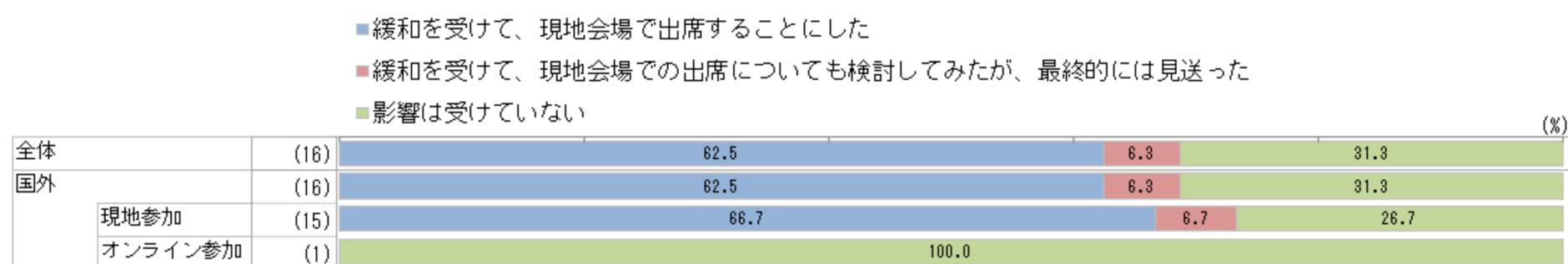
感染症対策	(1) 取組内容	飲食を伴うソーシャルプログラムとして、12月19日夕刻、大阪国際会議場に隣接するリーガロイヤルホテルの宴会場にて バンケットを開催 した。施設で定められた収容人数を超えることは許されないため、予想される参加者数を考慮しつつ施設担当者と綿密に打ち合わせ、会場を2か所に分散させる対策を採った。2会場で独立に進行するのではなく、大型モニターでメイン会場の様子をサブ会場に中継し、両会場の一体感醸成に配慮した。なお、参加者が集中すると予想された12月18日(本会議初日)のオープニングセレモニーでも同様の対策を採った。すなわち、密状態を避けるため、プレナリ一会場とは別に中継会場を用意し、一部の参加者をそちらに案内した。
	(2) 取組による成果	現地参加者の大半(約600名)がバンケットに参加すると予想し、収容人数600人(2会場合計)をそれぞれの会場で超えないよう、会場入口で入場者をカウントした。しかし終わってみればバンケットの参加者は予想の6~7割で、十分なスペースを保ちながら開催することができた。この状況を見て、当初は参加を認めていなかった学生の参加者もバンケット会場に招き入れ、広く参加者に満足いただけるプログラムとすることができた。
	(3) 課題	バンケットの参加者数は予想が難しかった。今回は慎重の上に慎重を期した結果、幸いにして予想を下回ったが、万が一これが逆に大きく上回る事態になると、大変である。バンケットを有償化(会議参加費とは別に料金を徴収する)して参加登録時に申し込むシステムにすれば、バンケットの参加者数はかなり正確に予想できる。過去の慣例を変えることは、この種の学術会議に毎年参加する多くの人の満足度に影響を与えるため慎重な判断が必要であるが、コロナ時代の会議のあり方として引き続き検討が必要であろう。
参加者の満足度向上	(1) 取組内容	まず第一に、実地参加者、オンライン参加者双方の円滑なコミュニケーションを途切れなく確保するため、映像・音響機器とネットワークシステムを増強した。また、万が一オンライン参加者の通信が断絶した場合に備えて、発表者には プレゼンテーションの録画を事前提出 していただいた。 日本(現地)に行きたいという参加者の声が開催前から多く聞かれたことから、日本についてよいイメージを持っている参加者が多かったようである。その上で、参加者の満足度向上のため、上述のバンケットでは日本舞踊のアトラクションを用意した。参加者には華やかな衣装をまとった舞踊家との記念撮影を楽しんでいただいた。また毎日提供されたランチボックスには、季節感あふれる和のテイストをふんだんに盛り込んだメニューを日替わりで用意し、海外からの参加者に楽しんでいただいた。これらの現地の様子は何枚もの写真に収め、オンライン参加者と共有した。
	(2) 取組による成果	遠隔会議のシステムは概ね円滑に運用され、会期全体を通して大きな問題は発生しなかった。プレゼンテーションの録画が活用される場面もあったが、ほとんどは通信トラブルなどではなく、発表者が予定された日時に会議システムに入室しなかったことが原因。参加者に日本を体感していただく工夫も総じて好評で、日本に対して一層よいイメージを持っていたと感じている。
	(3) 課題	今回、実地参加者(700人超)は全体の約60%を占め、多くの参加者に日本の良さを知っていただくことができた。また、オンライン参加者に現地の臨場感を伝えるという点については、現在の技術水準では最大限の成果が得られたと考える。逆に言えば、現在の技術水準では限界もある。「ジャパン」を遠隔地でも感じていただくという点では、今後の技術水準の向上に合わせてよりよいサービスが提供できるようになることを願う。
開催地との連携	(1) 取組内容	開催に向けて大阪国際会議場と緊密に連携し、会場のレイアウト及び感染症対策については頻りに連絡を取り調整を行った。
	(2) 取組による成果	感染症対策では前述したように会場を2か所に分散させるなど、直前まで柔軟な対応をいただき、一人の感染者も出さずに全日程を終えることができた。感謝申し上げます。
	(3) 課題	母体学会であるIEEE (the Institute of Electrical and Electronics Engineers)との調整で直前の変更などが発生し、国際会議場にご迷惑をおかけしたことが何度かあった。海外関係団体との円滑な連携は今後の課題である。
レガシー効果の創出	(1) 取組内容	IEEE BigDataは2013年に第1回が開催されて以来、米国開催が慣例であった(ただし2020~2021はオンライン)。米国以外の国での開催は2022が初めてである。いわゆる「ビッグデータ」に関連する技術・学術分野(情報学、計算機科学、データ科学、人工知能など)における我が国の地位の向上を目指して本イベントに取り組んだ。
	(2) 取組による成果	BigData2022が多くの参加者を集め大成功を収めたことで、当初の狙い通り、当該分野における我が国の地位は少なからず高まったといえる。また、これを機にIEEE BigDataは世界各国で開催される方向となりそうで、これまでの米国開催の流れを変えることができた。
	(3) 課題	今回の日本開催、特に誘致に関しては、BigData2022組織委員長(津本周作)とBigDataステアリング委員会との長年の関係(人脈)によるところが大きく、開催地が決まる前に日本開催は固まっていた。津本のように海外から頼られる研究者を我が国は増やさなければならない。
サステナビリティ	(1) 取組内容	「持続可能な消費と生産」を意識した会議運営を目指した。当初はバンケットに加えて初日のウェルカムレセプションなど、飲食を伴うソーシャルイベントをいくつか催す案もあったが、コロナ禍で参加者数が見通せないという事情もあり、バンケットのみに絞って開催した。
	(2) 取組による成果	飲食の機会を最低限にしたことで、食べ残しなどの無駄は抑えることができた。全体として質素な印象になることが心配されたが、バンケットは大変盛り上がり、参加者間の交流は十分に促進でき、一つに絞ったことがかえってよかったと考えている。
	(3) 課題	毎日提供されたランチボックスはゴミが大量に出る。開催前はあまり想像できていなかったが、ゴミの出ない容器を検討するなど今後の課題である。

【実証事業③ IEEE BIGDATA 2022 個別アンケート】

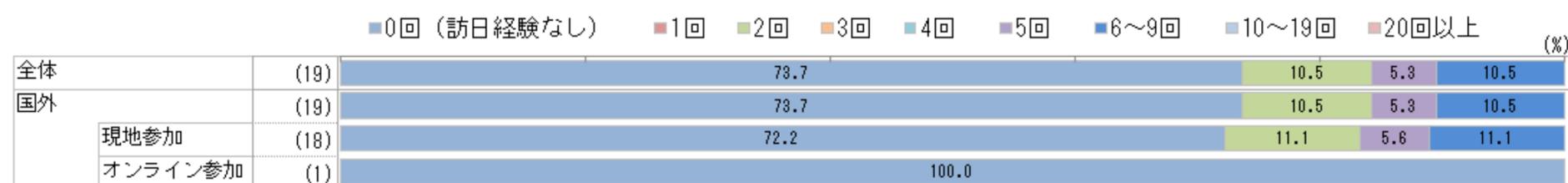
Q. 10月11日から日本入国にあたっての水際措置が大幅に緩和されたことをご存知でしたか



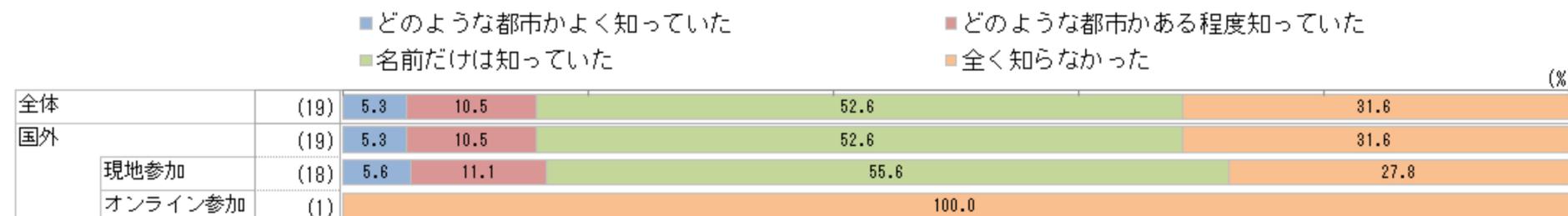
Q. 水際措置が大幅に緩和されたことは、あなた自身の出席形態に対する最終判断に影響を及ぼしましたか



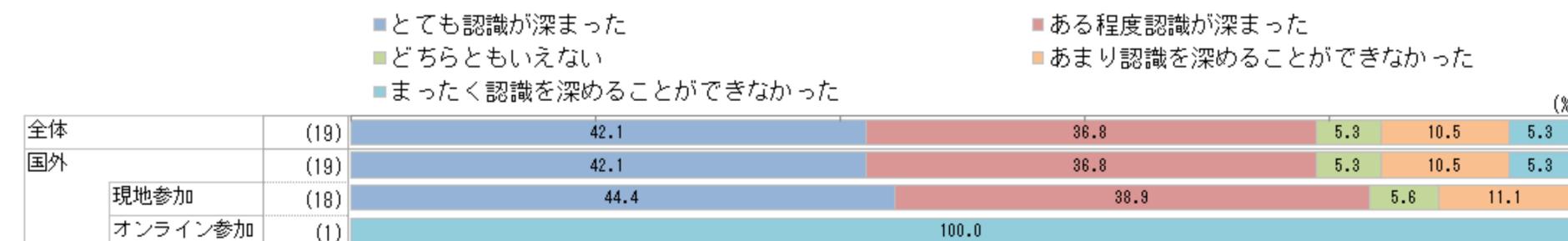
Q. あなたは過去に何度、日本を訪れたことがありますか(観光、商用、知人・親族訪問などその目的は問いません)



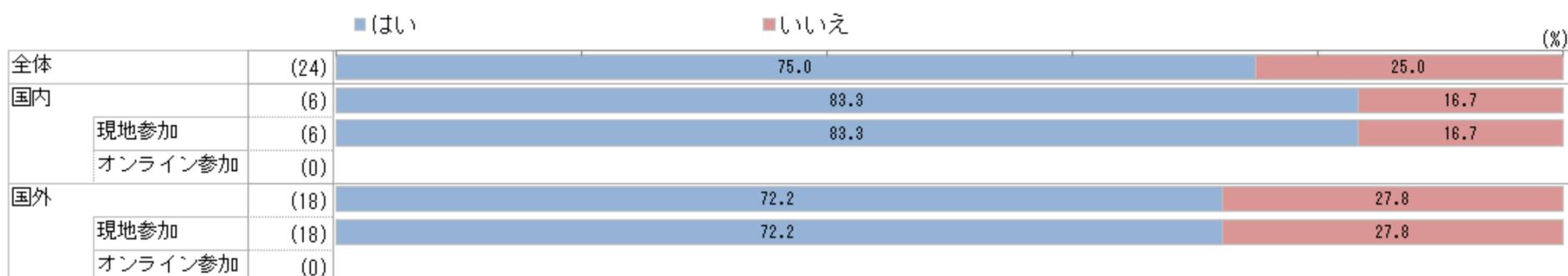
Q. 開催地決定前にこの会議とは関係なく、今回の開催都市(大阪市)のことをどれくらい知っていましたか



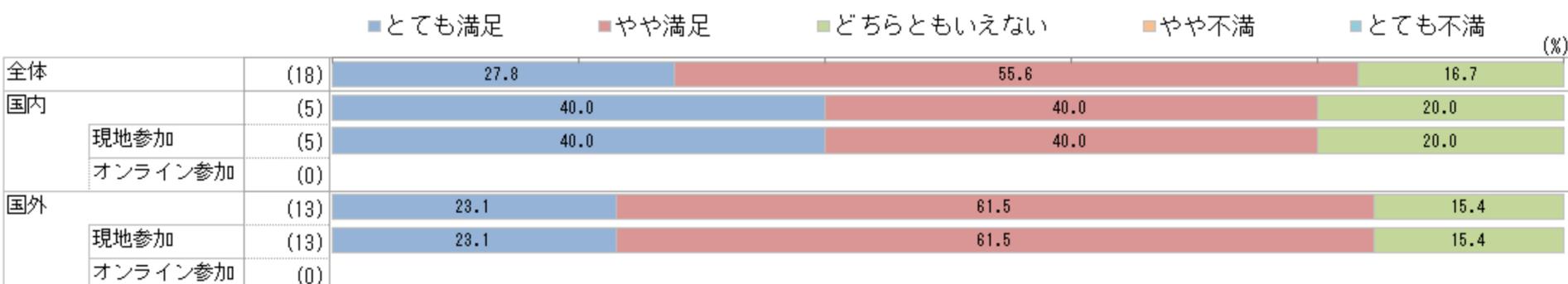
Q. この会議に参加をしてどのくらい開催都市(大阪市)への認識が深まりましたか



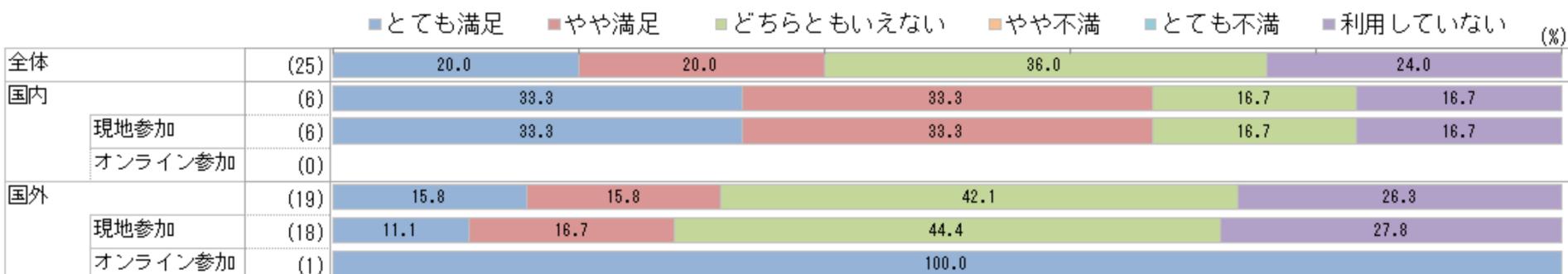
Q. あなたは展示をご覧になりましたか



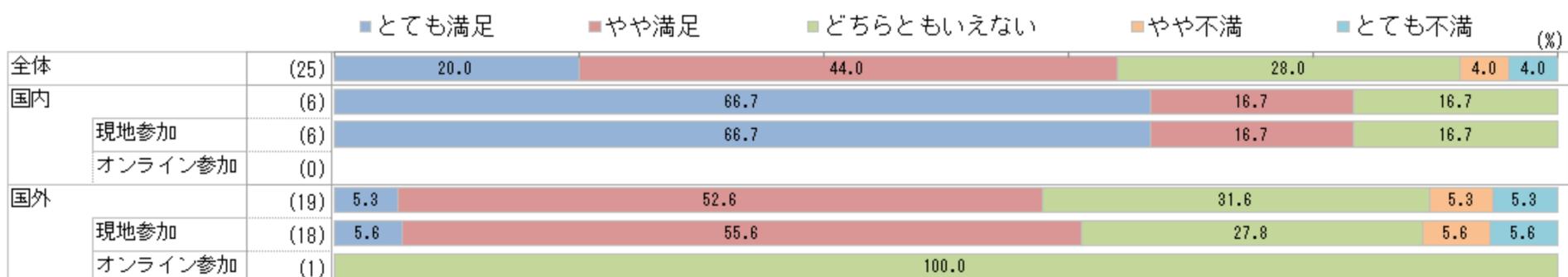
Q. 展示の満足度を選択してください



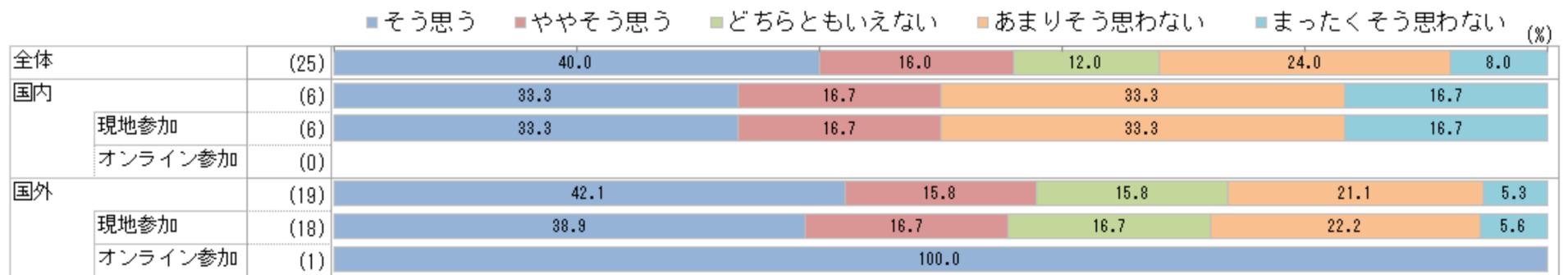
Q. 米国本社(IEEE)が指定したアプリケーション「RDモバイル」の満足度を選択してください



Q. 「ネットワーキングの機会」としてのこの国際会議の満足度を選択してください



Q. プログラムやアブストラクトが電子データで提供される場合、あなたは現地会場でも併せてそれらの冊子配付が必要と思いますか



調査概要

【開催期間】 2022年6月～12月
 【アンケート集計期間】 開催日以降～2月27日まで

【対象会議】 30件

開催形態	国内からの実地参加 予定者数 (申請時点)	外国人参加予定者数 (申請時点)	最終報告 アンケート対象 件数
ハイブリッド形態	大規模: 501名以上	2つ以上の国/地域 から50名以上 ※参加形態は 現地・オンライン いずれでも可	10件
	中規模: 201～500名		9件
	小規模: 50～200名		11件

【回答者数】 2710名

	実地参加	オンライン参加	計
国内参加者	1621名	312名	1933名
海外参加者	546名	231名	777名
計	2167名	543名	2710名

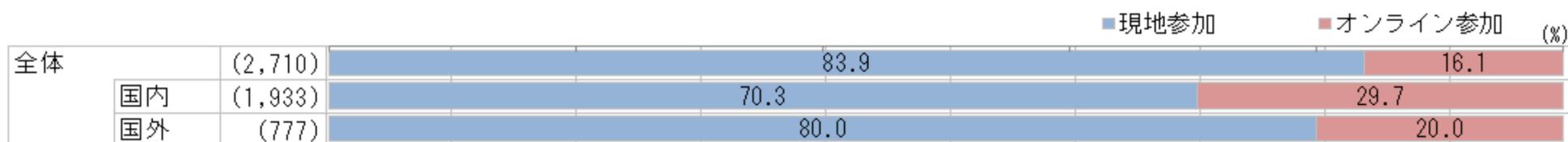
※アンケート集計の各グラフについて

- ・括弧書きの数値: n数
- ・国内: 日本国内(居住)参加者
- ・国外: 日本国外(居住)参加者

アンケート設問一覧

No	設 問
1	居住地及び参加形態
2	性別
3	年代
4	居住地域(国外)
5	この会議への参加経験
6	2020年3月以降の、国際会議への【現地】参加経験
7	2020年3月以降の、国際会議への【オンライン】参加経験
8	今回、【現地参加】を選択した理由 ※複数回答
9	今回、【オンライン参加】を選択した理由 ※複数回答
10	現地会場における感染症対策について、どのように感じたか
11	この会議の総合的な満足度
12	この会議へ出席してみて、今後、観光等の目的で今回の開催都市を訪れたいと思うか
13	この会議へ出席してみて、今後、観光等の目的で日本を訪れてみたいと思うか(国外)
14	次回以降、この会議がハイブリッド形式で開催される場合、いずれの出席形態を積極的に選択したいか
15	14で【現地会場で出席したい】と回答した理由 ※複数回答
16	14で【オンラインで出席したい】と回答した理由 ※複数回答
17	この会議への出席を通じて、【現地会場】で国際会議に出席できることの価値や意義を実感したか
18	この会議への出席を通じて、【オンライン】で国際会議に出席できることの価値や意義を実感したか
19	新型コロナウイルス感染症の収束後も、ハイブリッド形式による開催が理想的か
20	新型コロナウイルス感染症の収束後、ハイブリッド形式で開催される国際会議に現地会場での出席を積極的に選択したいか
21	現地会場に医師や看護師が常駐することに安心感を覚えるか
22	現地会場における非接触型受付システムの導入などによる、接触機会の低減に繋がる工夫の実施に安心感を覚えるか
23	新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてPCR検査・抗原検査を実施すべきだ
24	新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてマスクの着用を求めるべきだ
25	国際会議のプログラムのなかで、他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)を重視している
26	国際会議のプログラムのなかで、エクスカージョンを重視している
27	オンラインプラットフォームの導入は、オンライン参加者の満足度向上に寄与する取組である
28	開催地のPR映像の上映やオンラインツアーの実施は、参加者の満足度向上に寄与する取組である
29	今日における国際会議は、サステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだ
30	今日における国際会議は、市民向け公開講座等のプログラムを開催するなど、開催都市への貢献にも配慮すべきだ

No.1. 居住地及び参加形態



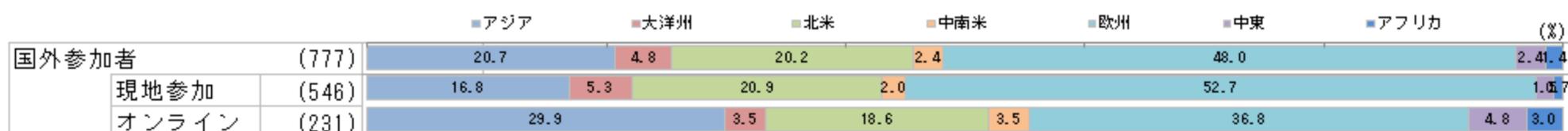
No.2 性別



No.3 年代



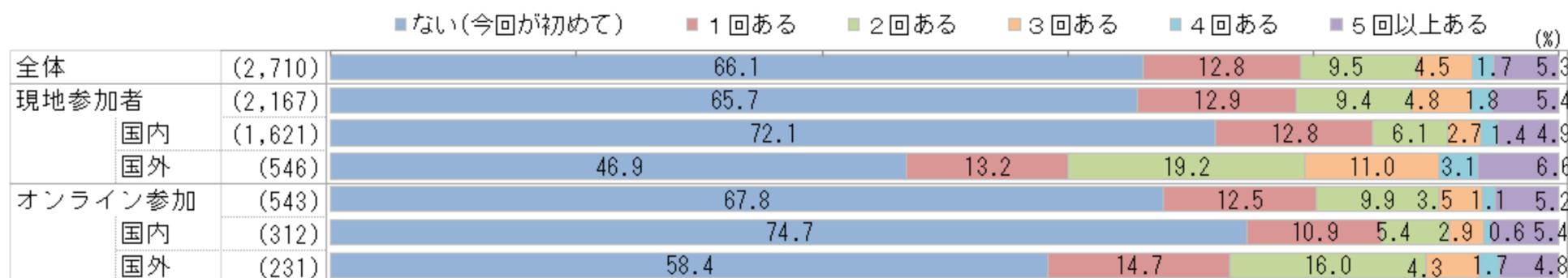
No.4 居住地域(国外)



No.5 この会議への参加経験



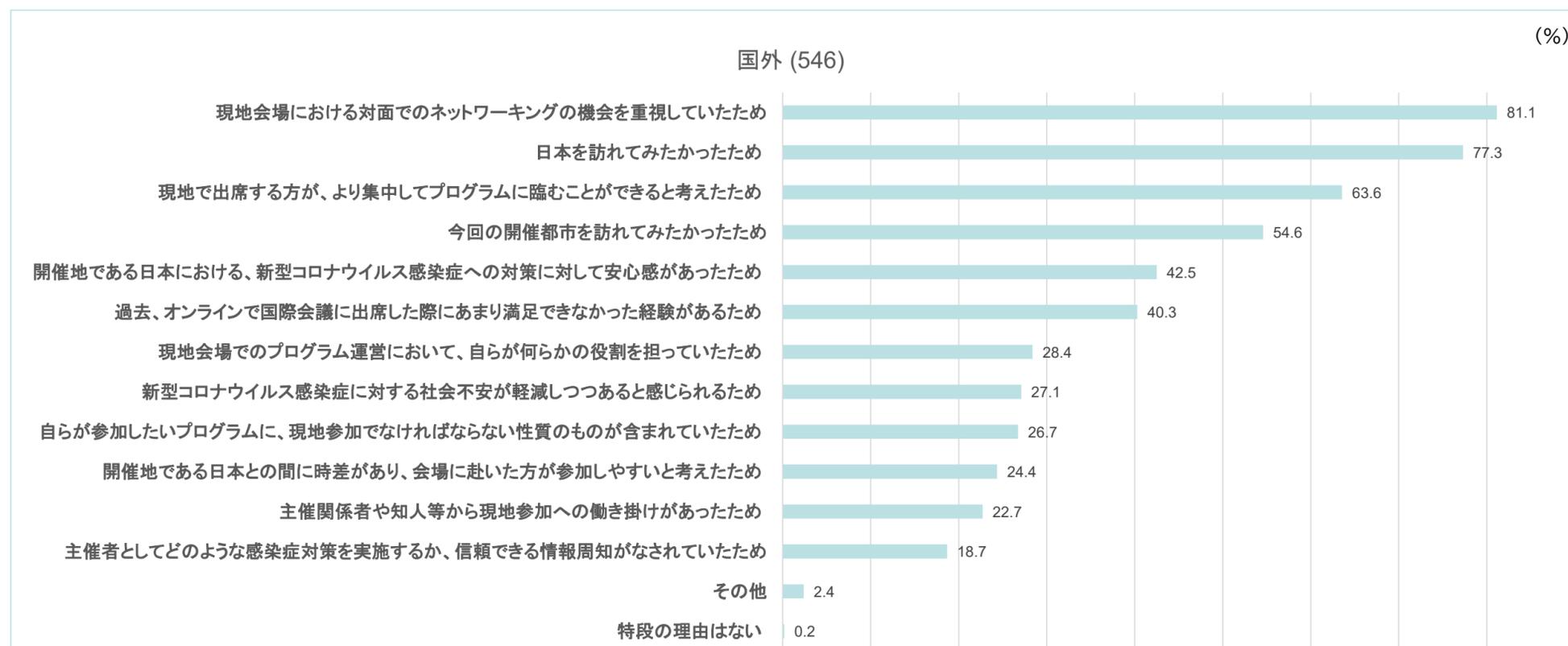
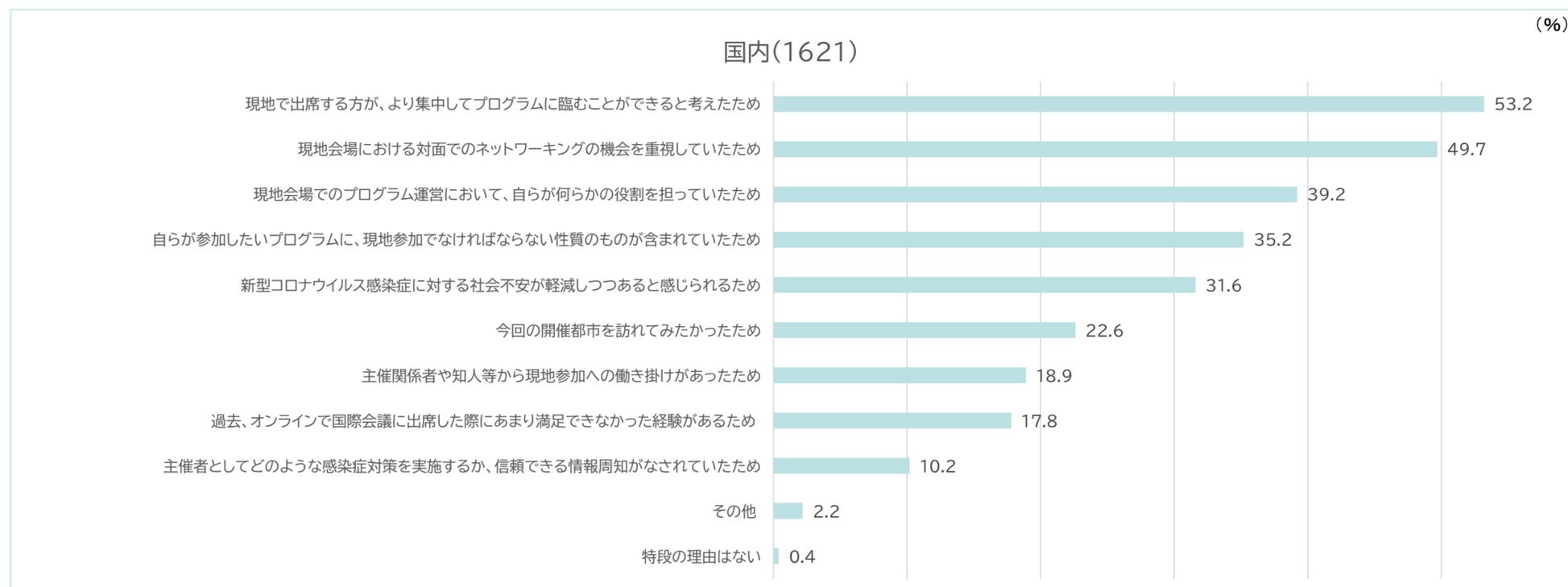
No.6 2020年3月以降の、国際会議への【現地】参加経験



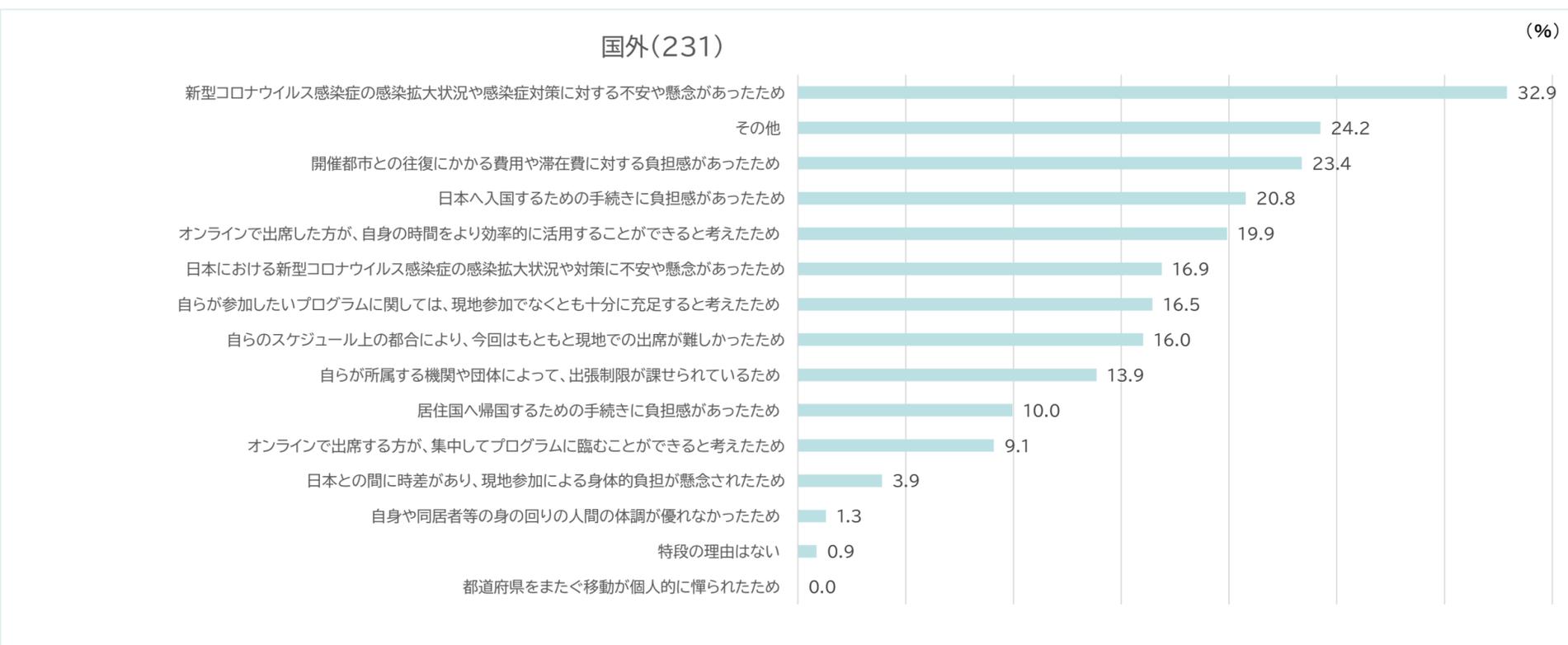
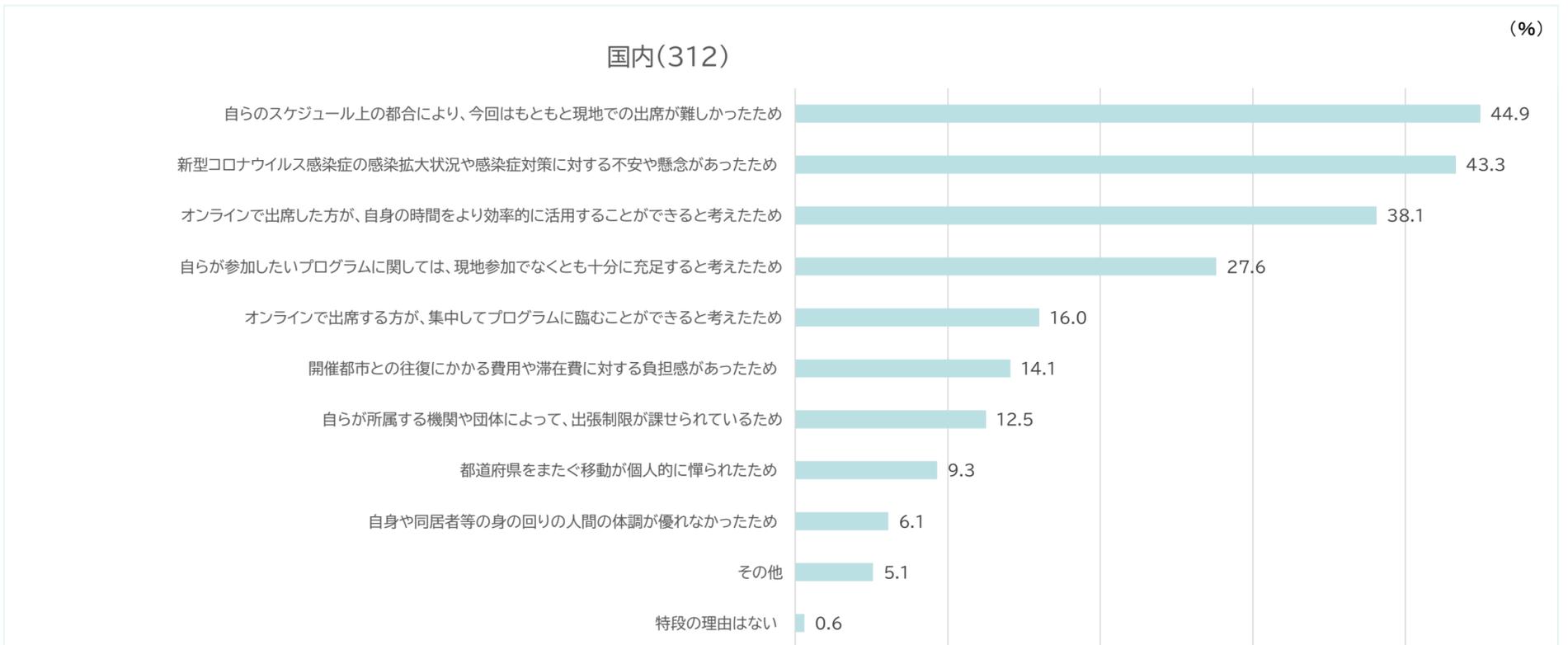
No.7 2020年3月以降の、国際会議への【オンライン】参加経験

		■ ない(今回が初めて)	■ 1回ある	■ 2回ある	■ 3回ある	■ 4回ある	■ 5回以上ある	(%)
全体	(2,710)	41.9	17.9	15.1	8.9	3.2	13.0	
現地参加者	(2,167)	40.8	19.8	14.9	8.4	3.5	12.5	
国内	(1,621)	43.2	20.8	13.9	6.5	2.9	12.7	
国外	(546)	33.7	17.0	17.8	14.3	5.3	11.9	
オンライン参加	(543)	46.4	10.3	15.8	10.5	2.0	14.9	
国内	(312)	53.5	12.5	14.1	7.7	1.3	10.9	
国外	(231)	36.8	7.4	18.2	14.3	3.0	20.3	

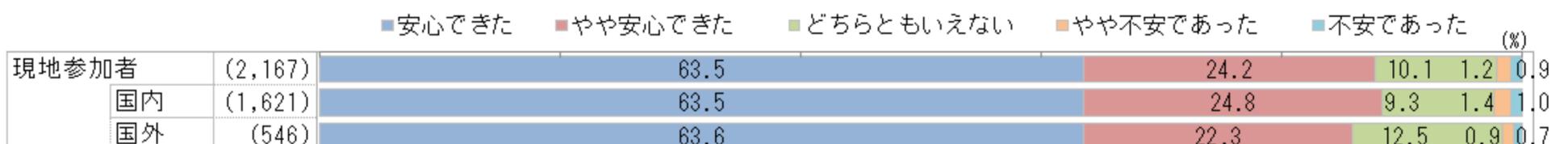
No.8 今回、【現地参加】を選択した理由 ※複数回答



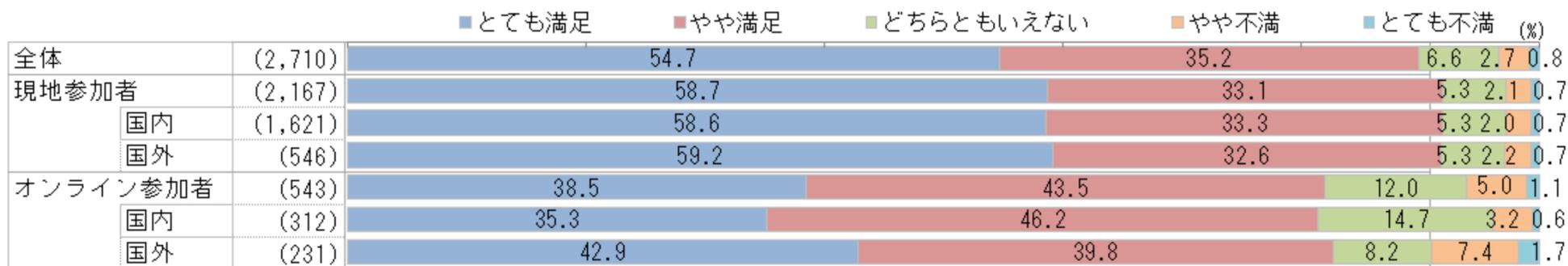
No.9 今回、【オンライン参加】を選択した理由 ※複数回答



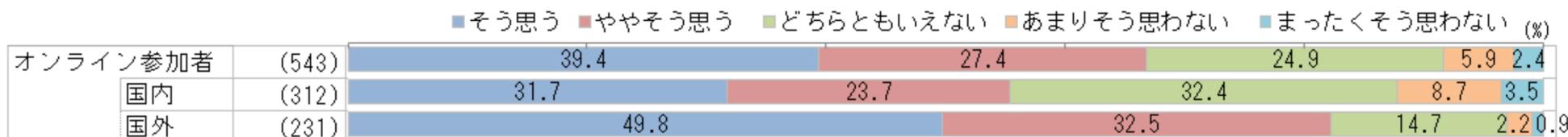
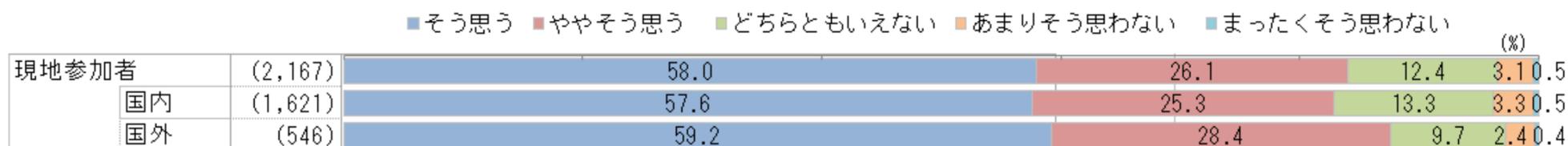
No.10 現地会場における感染症対策について、どのように感じたか



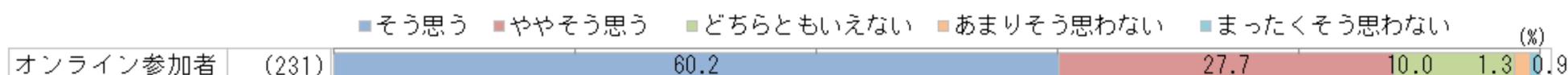
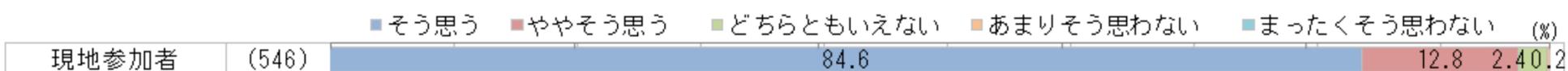
No.11 この会議の総合的な満足度



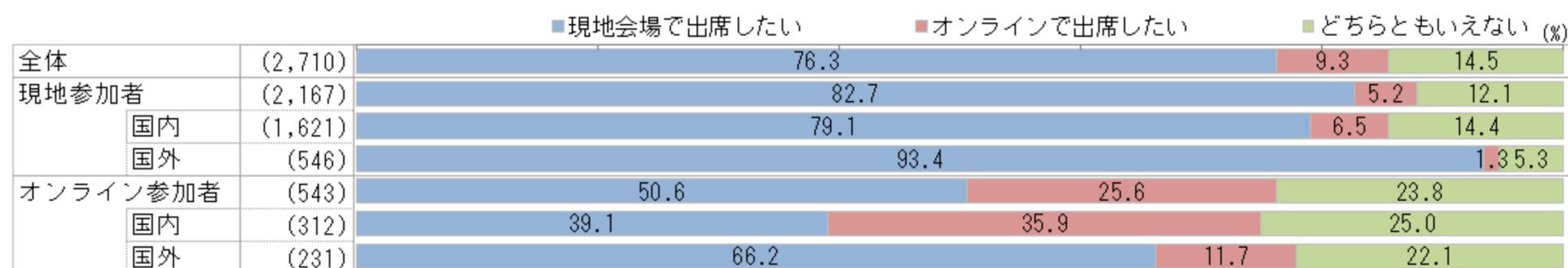
No.12 この会議へ出席してみて、今後観光等の目的で今回の開催都市を訪れたいと思うか



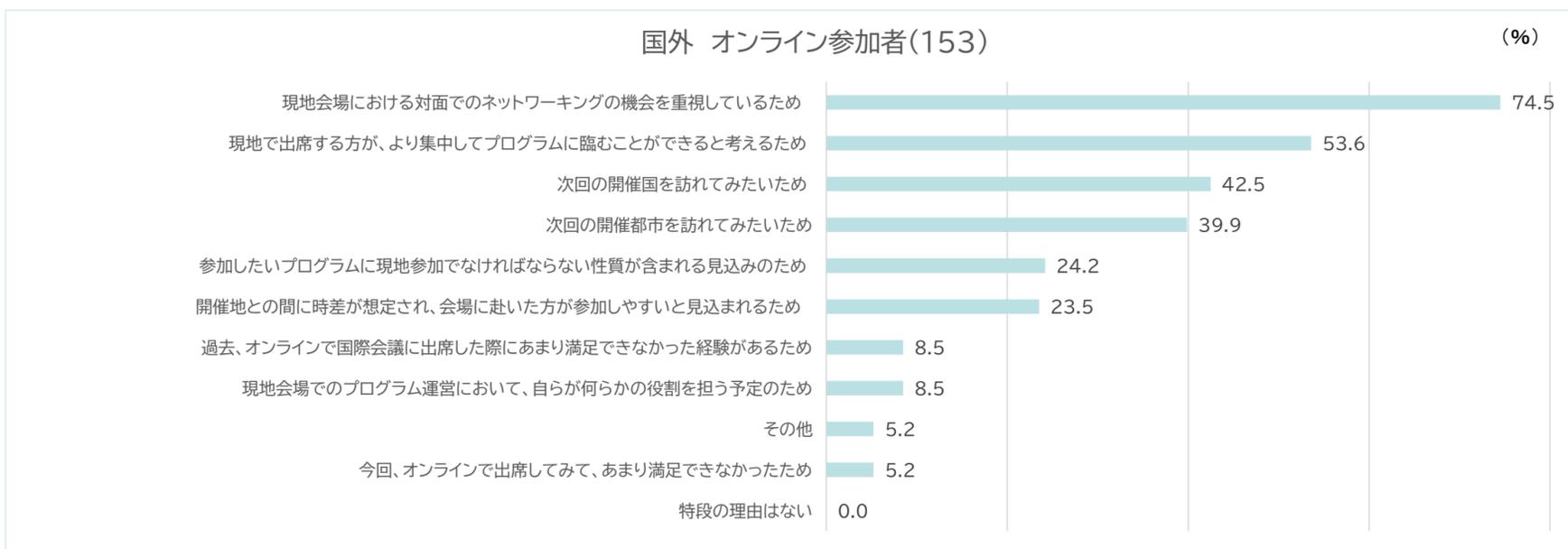
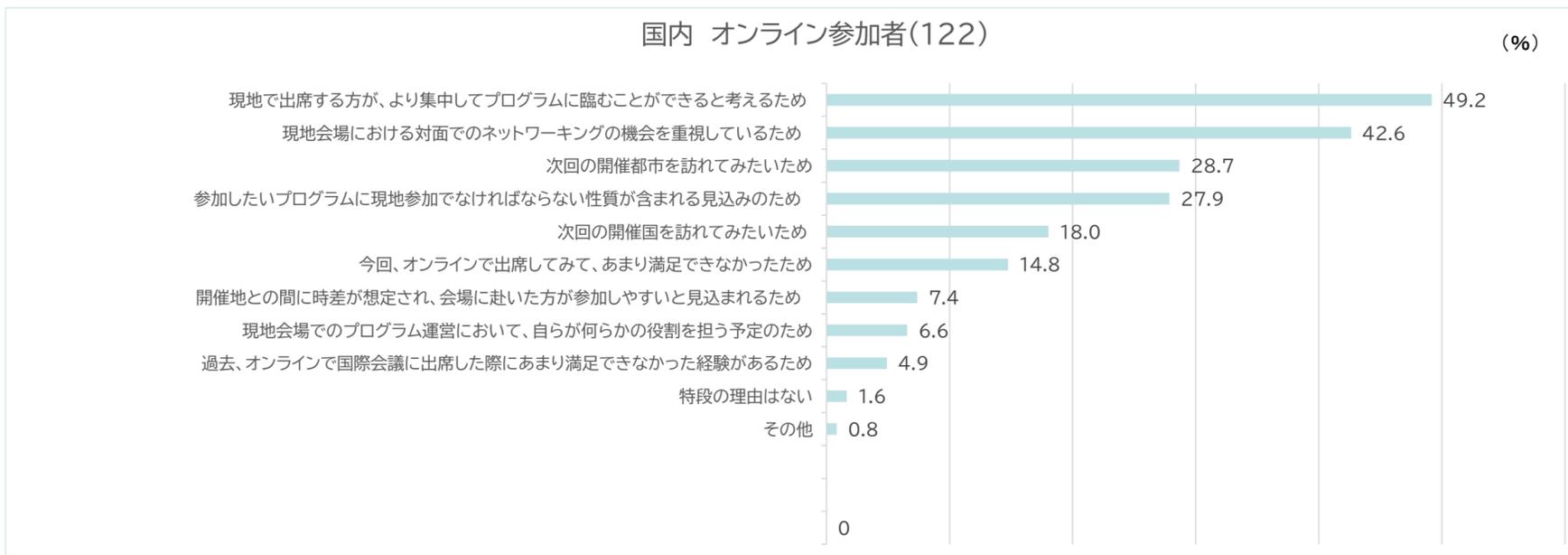
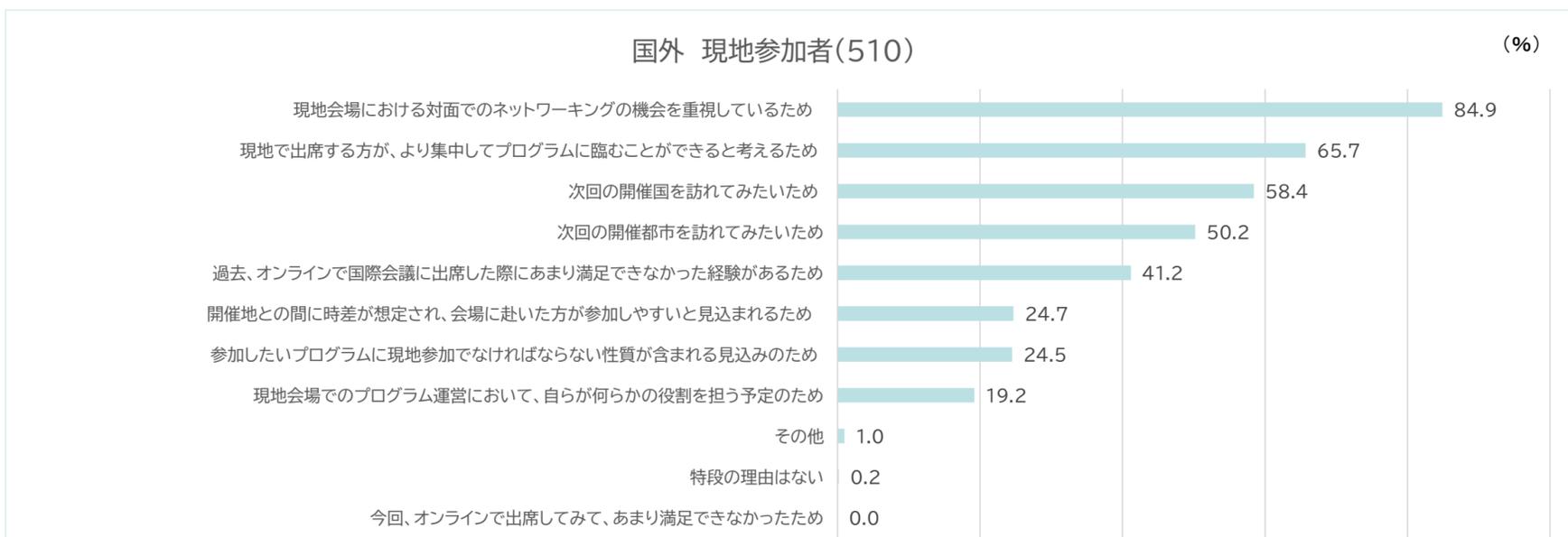
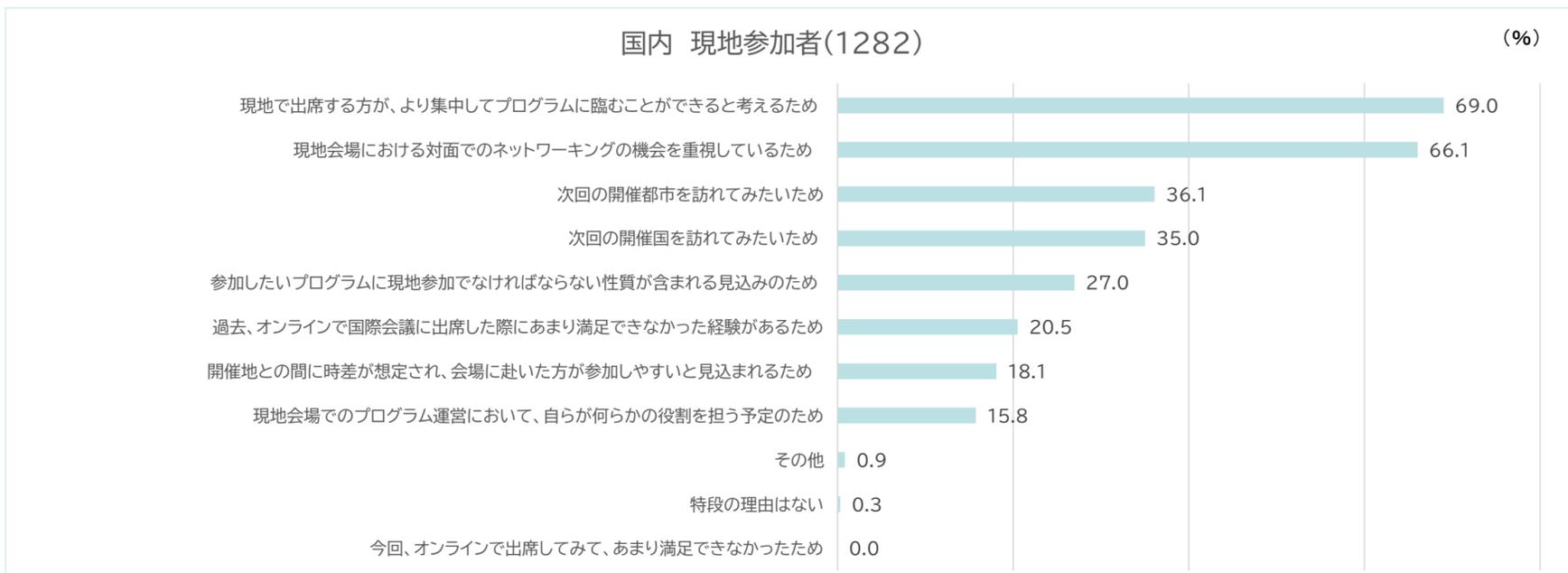
No.13 この会議へ出席してみて、今後観光等の目的で日本を訪れたいと思うか(国外)



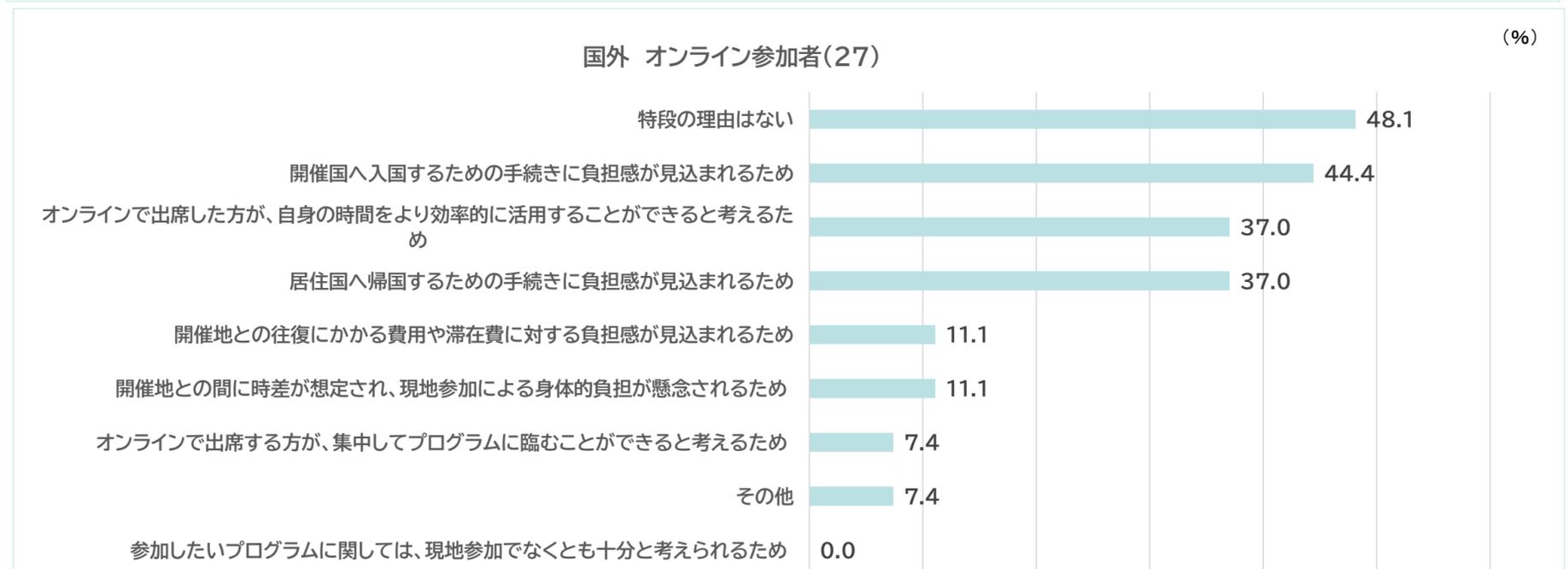
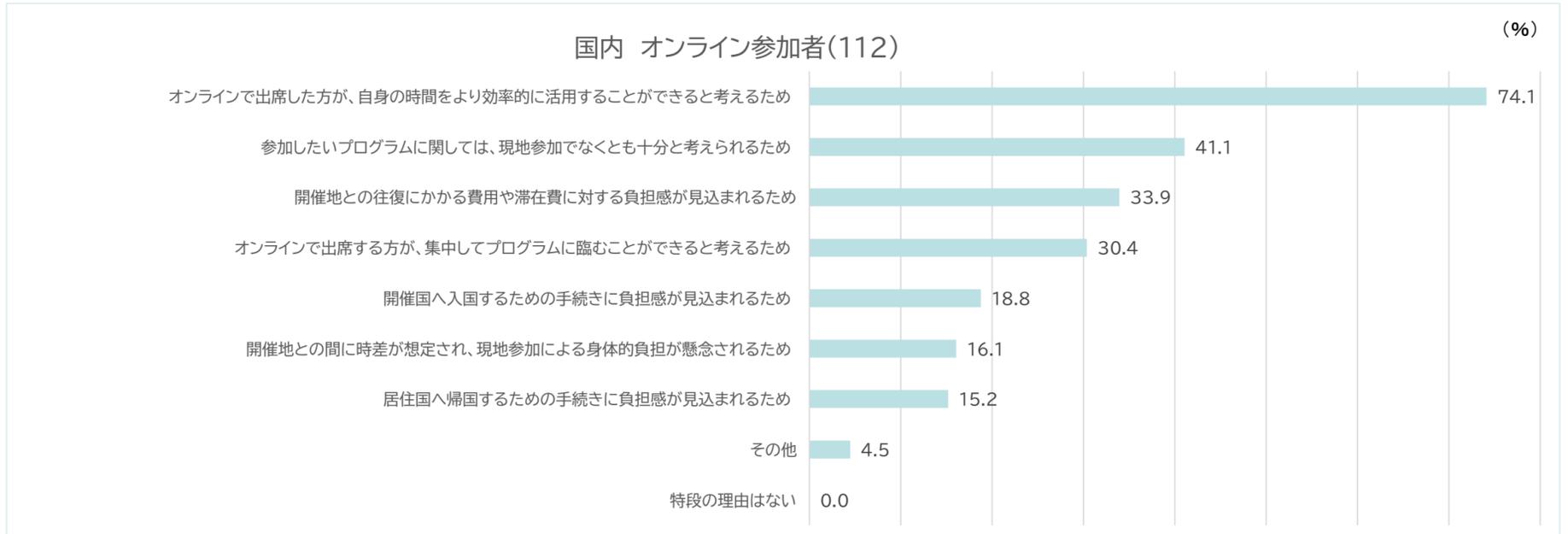
No.14 次回以降、この会議が同様にハイブリッド形式で開催されると仮定した場合、いずれの出席形態を積極的に選択したいか



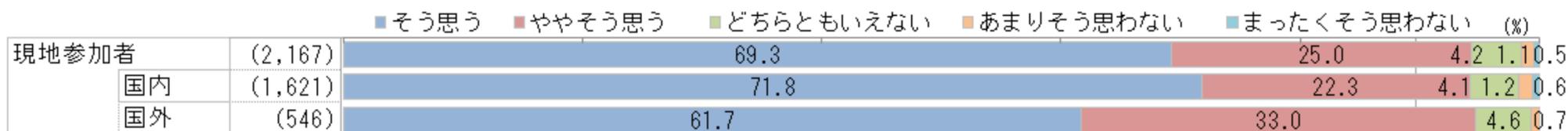
No.15 No.14で【現地会場で出席したい】と回答した理由 ※複数回答



No.16 No.14で【オンラインで出席したい】と回答した理由 ※複数回答



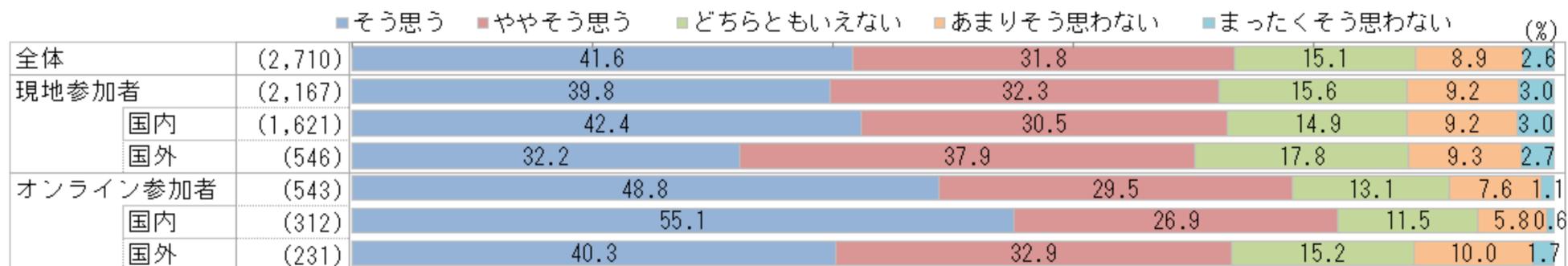
No.17 この会議への出席を通じて、【現地会場】で国際会議に参加できることの価値や意義を実感したか



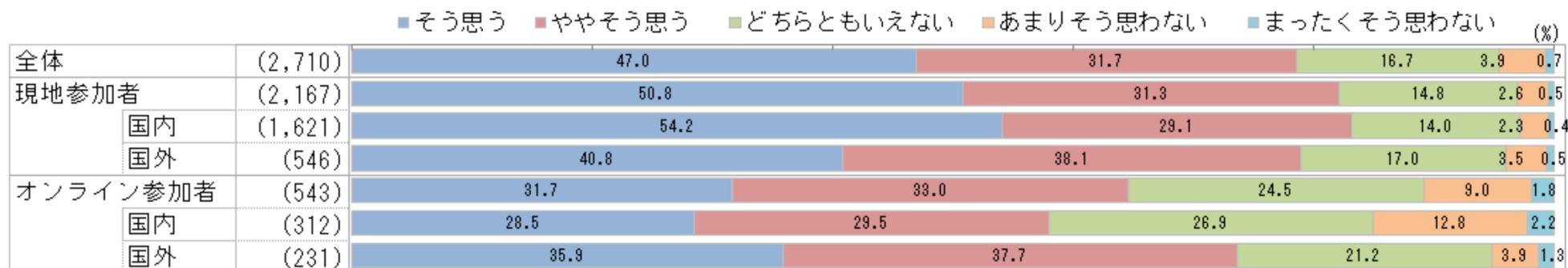
No.18 この会議への出席を通じて、【オンライン】で国際会議に参加できることの価値や意義を実感したか



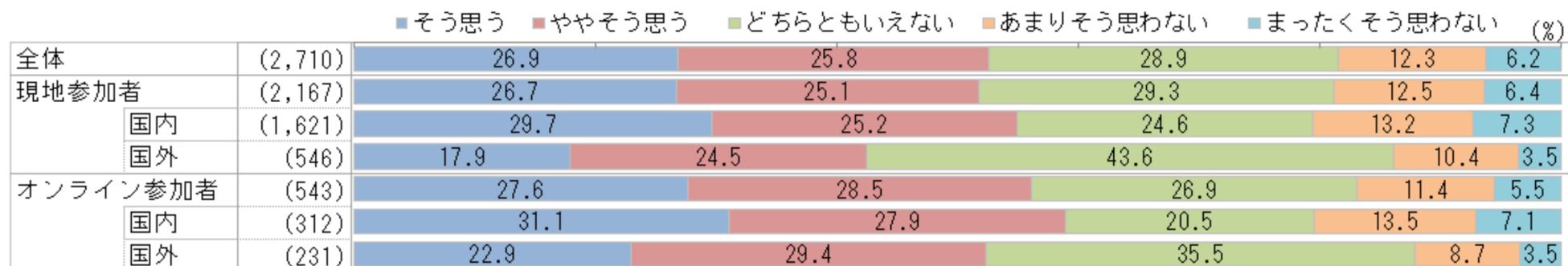
No.19 新型コロナウイルス感染症の収束後も、ハイブリッド形式による開催が理想的か



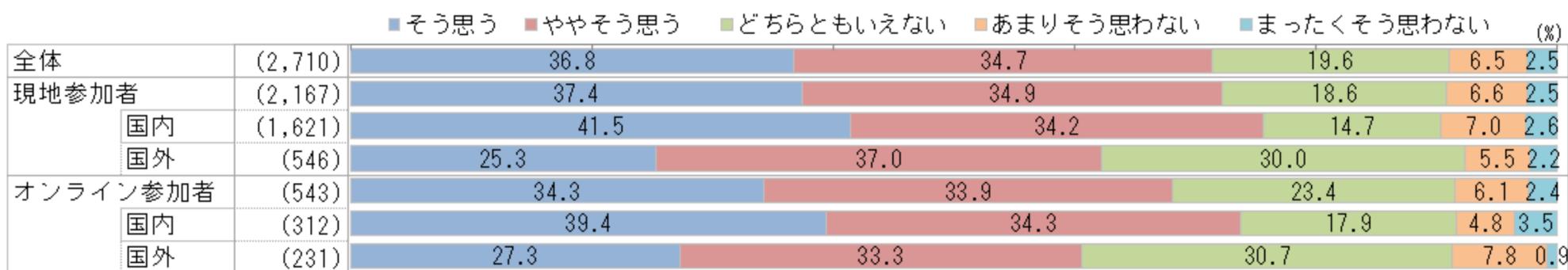
No.20 新型コロナウイルス感染症の収束後、ハイブリッド形式で開催される国際会議に現地会場での出席を積極的に選択したいか



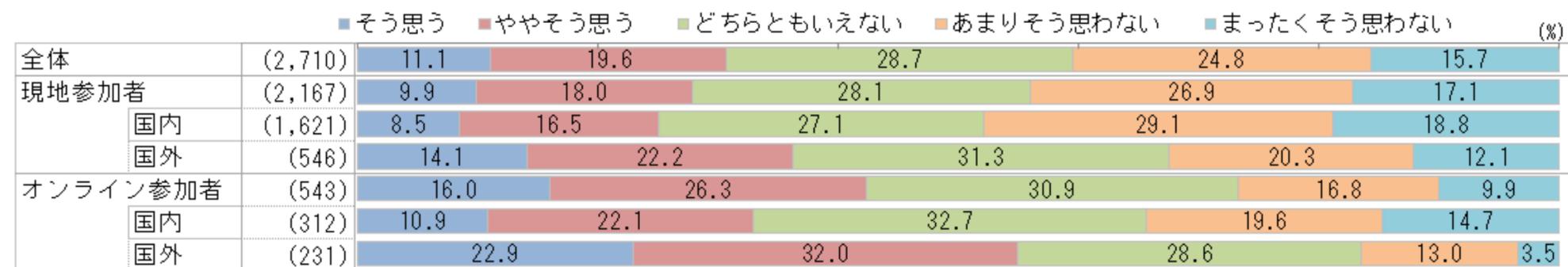
No.21 現地会場に医師や看護師が常駐することに安心感を覚えるか



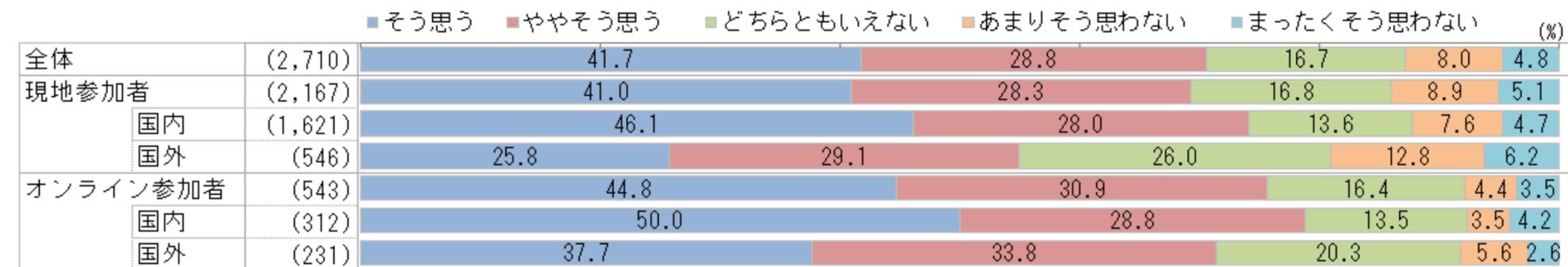
No.22 現地会場における非接触型受付システムの導入などによる、接触機会の低減に繋がる工夫の実施に安心感を覚えるか



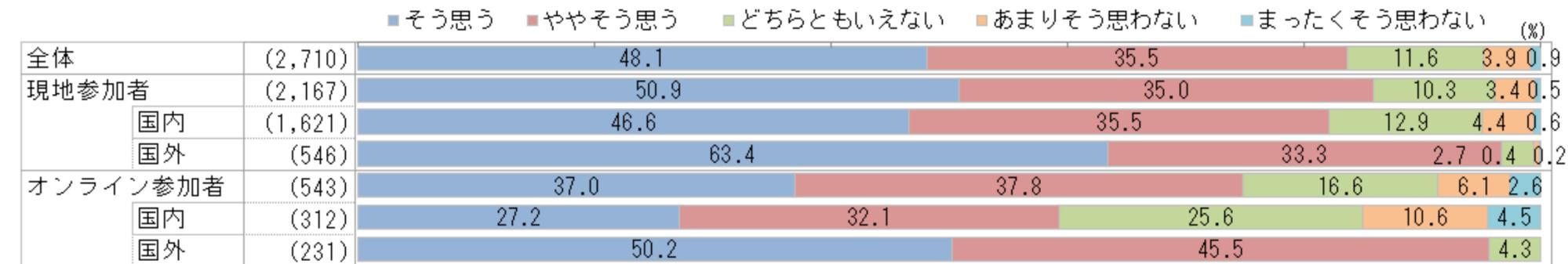
No.23 新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてPCR検査・抗原検査を実施すべきだ



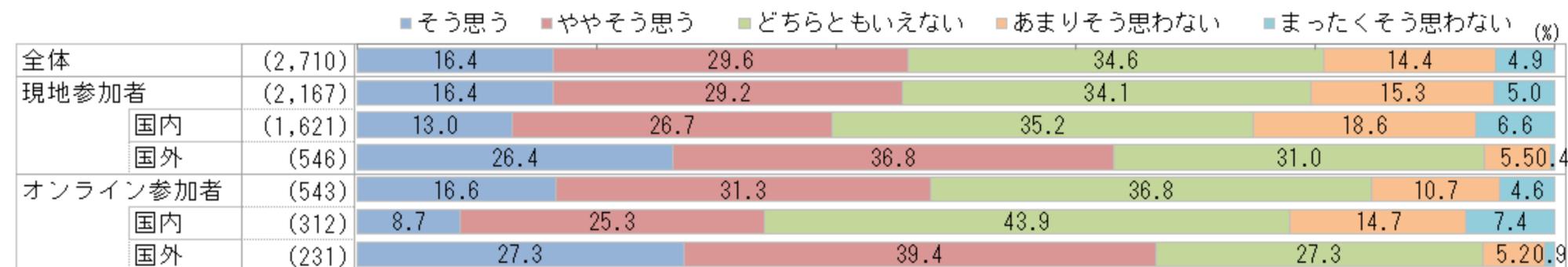
No.24 新型コロナウイルス感染症が収束するまでは、現地会場での出席条件としてマスクの着用を求めるべきだ



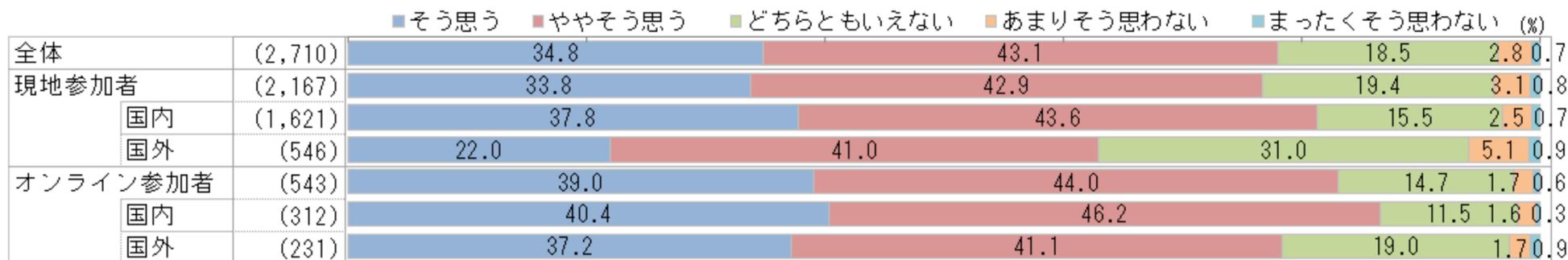
No.25 国際会議のプログラムのなかで、他の出席者との交流機会(レセプションやネットワーキング等)を重視している



No.26 国際会議のプログラムのなかで、エクスカージョンを重視している



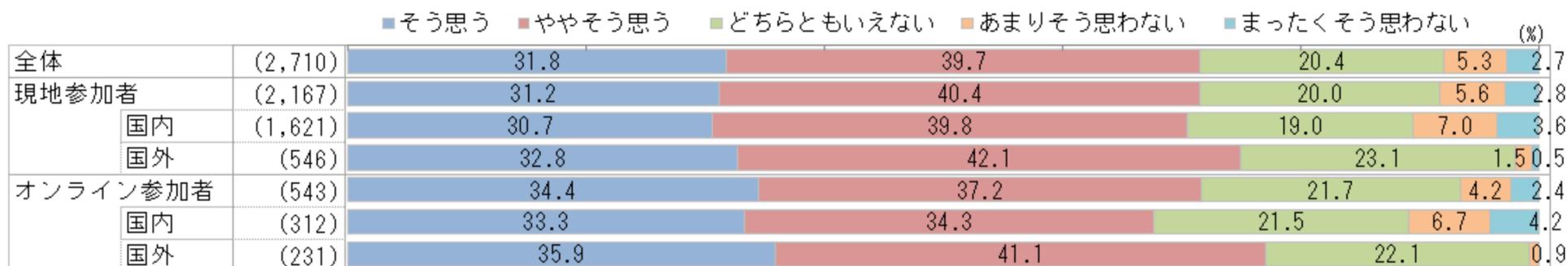
No.27 オンラインプラットフォームの導入は、オンライン参加者の満足度向上に寄与する取組である



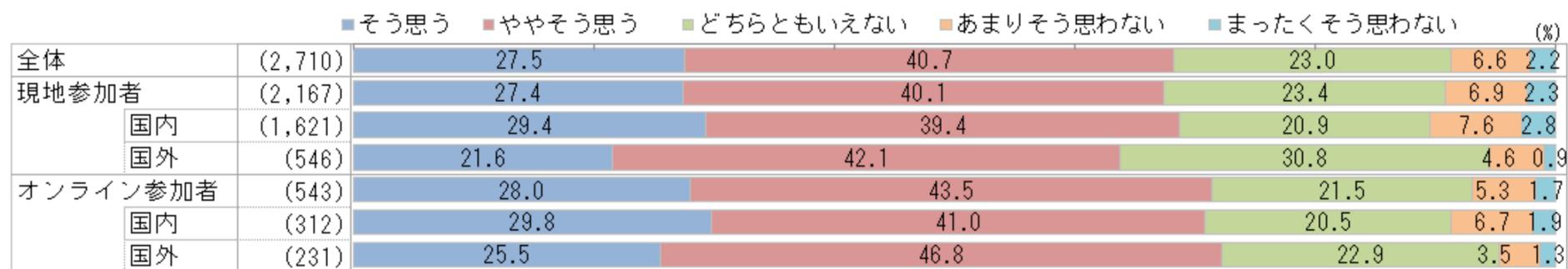
No.28 開催地のPR映像の上映やオンラインツアーの実施は、参加者の満足度向上に寄与する取組である



No.29 今日における国際会議は、サステナビリティ(持続可能性)やSDGsにも十分に配慮した運営がなされるべきだ



No.30 今日における国際会議は、市民向け公開講座等のプログラムを開催するなど、開催都市への貢献にも配慮すべきだ



2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、世界中で人の移動や集会が制限され、国際会議の開催においては、参加者が一同に集まることを控えざるを得ない状況が長く続いた。2022年には、海外では感染症対策の緩和が進み、国際会議の現地開催が再開されるようになったものの、日本は緩和が進まず後れを取る事となった。しかしながら、我が国でも現地開催を望む声が多く、主催者、各地のコンベンションビューロー及びPCO等の関係事業者の努力により、感染症対策を徹底しつつ、ハイブリッドで開催した30件の案件を採択することになった。

本実証事業を実施した結果、明らかとなった点は、主に以下の2点である。

- ① ハイブリッド開催における課題と今後のハイブリッド開催の可能性
- ② オンライン参加者の来訪意欲を高めるための仕掛けの必要性

①ハイブリッド開催における課題と今後のハイブリッド開催の可能性

ハイブリッド開催について、実証事業により明らかとなった課題として、会場における通信環境の整備や、オンライン参加者・現地参加者の双方向のコミュニケーション手段の確保が挙げられる。これらの課題に対しては、本事業では、Zoomをはじめとした様々なオンラインプラットフォームが利用されていたが、会議の規模や特性に適したツールの選択が重要である。また、事前登録システムの導入や紙媒体の電子化は、感染症対策に加え、これからの国際会議に求められるサステナビリティの観点からも活用が期待され、それらを一元化したプラットフォームの活用は、参加者の利便性をさらに高めることにも繋がると考えられる。

次回以降の国際会議への参加形態について、共通アンケートの結果から、一定数がオンライン参加を希望していることがわかる。コロナ禍におけるオンライン参加者の多くが、渡航制限の解除により、現地参加に戻ることが期待される一方、時間の効率化や移動費用の負担感を理由に、引き続き、オンラインでの参加者が一定程度残る可能性が伺える。

②オンライン参加者の来訪意欲を高めるための仕掛けの必要性

オンライン参加者が一定程度残る可能性が示唆される中においても、現地参加の魅力を高め、オンライン参加から現地参加へと導くこと、あるいは、オンライン参加者の満足度を上げるためのコンテンツを用意し、次回の現地参加を促進することが、国際会議の開催効果を高める上では重要となる。

実証案件の中には、ユニークメニューの活用など、地域への経済効果の拡大や現地参加者の満足度向上に資する取組が見られた。また、多くの案件で飲食を伴うプログラムが実施されたことやアンケートの結果から、特に海外参加者は他のプログラムに比べネットワーキングを重視していることがわかる。一方、ネットワーキングイベントへのオンライン参加者数やアンケート回答数が少ないことから、ネットワーキングのオンライン提供は現時点では十分な効果や満足が期待できないものと推測され、現地開催の意義を訴える上で、ネットワーキングの実施は有効な手段であると考えられる。

また、複数の実証案件において、エクスカーションなどのオンライン配信が実施された。開催地のPR映像を会期中に発信したケースも多くあり、アンケート結果では、これらの取組がオンライン参加者に対する開催地への訪問意欲の向上に効果的であったと読み取ることができる。したがって、開催地のコンベンションビューロー等が、オンライン参加者に対するPRを予め用意し、主催者に提供できるようにしておくことも、効果的な取組であると考えられる。

